

上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅺ

前原遺跡

丸山遺跡

2004

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅱ

まえはら 遺跡
まるやま 遺跡

2004

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

上信越自動車道は、首都圏と上越地方を結ぶ幹線道路として、群馬県藤岡インターチェンジから分岐し、群馬県・長野県を経て新潟県上越市に至る全長203kmの高速自動車道です。平成11年に開通し、関越・磐越自動車道と並び、日本海側と太平洋側を結ぶ大動脈として、沿線地域の発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

新潟県教育委員会は、昭和63年度から建設用地内の埋蔵文化財について調査を開始し、平成7年度には長野県境～中郷インターチェンジ間の発掘調査を、平成9年度には中郷インターチェンジ～上越ジャンクション間の発掘調査を終了して、県内全線の調査業務を完了しました。

本書は平成8年度に行った前原・丸山遺跡の発掘調査報告書です。前原遺跡は縄文時代中期中葉から後葉にかけての集落跡で、信州の中部高地の影響が大きな遺跡です。この時期の住居が7軒発見されましたが、中には土屋根を持った焼失家屋と考えられる住居も存在し、貴重な資料になりました。また、丸山遺跡では中世後期の遺物が多く発見され、中世村落の立地が明らかになりました。

今回の調査成果が、歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御協力と御援助を賜った中郷村教育委員会、並びに地元の方々をはじめ、日本道路公団新潟建設局（現、日本道路公団北陸支社）・同上越工事事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

新潟県教育委員会

教育長 板屋越 麟一

例 言

- 1 この報告書は、新潟県中頸城郡中郷村大字西福田新田字前原1362番地ほかに所在する前原遺跡と中郷村大字岡沢字汐下359番地ほかに所在する丸山遺跡の発掘調査記録である。
- 2 本調査は上信越自動車道建設に伴い日本道路公団（以下、公団）から新潟県が受託したものである。発掘調査は新潟県教育委員会（以下、県教委）が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が平成8年度に実施した。
- 3 整理作業及び報告書作成に係る作業は、平成15年度に埋文事業団が県教委から受託しこれに当たった。
- 4 出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料（含観察データ）は、一括して県教委が保管・管理している。データの有無や閲覧希望は、県教委に問い合わせ願いたい。
- 5 遺物の注記は前原の略「マエ」、丸山の略「丸」とし、出土地点・層位を併記した。
- 6 本書の図中で示す方位はすべて真北である。
- 7 遺物番号は種別にかかわらず通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 8 本文中の注は脚注とし、頁ごとに番号を付した。また、引用文献は著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、自然科学分析部分を除いて巻末に一括して掲載した。
- 9 自然科学分野に係る前原遺跡の分析は株式会社古環地研究所、丸山遺跡の分析はバリノ・サーヴェイ株式会社へ委託した。なお、本書には再編集したものを掲載した。
- 10 遺構図のトレース及び各種図版作成・編集に関しては、株式会社セピアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。遺物写真撮影はデジタルカメラ（ニコンD100）で撮影し、デジタル化した遺構写真と合わせて編集を行った。なお、図版作成・編集作業に係り、業者に支給した資料は以下のとおりである。

本文・挿図：テキスト形式・Excel形式のデータ、トレース原因・貼り込み版下
遺構図面図版：原図（修正済）・レイアウト図・文字データ
遺物図面図版：トレース図（個別）・拓影・レイアウト図
写真図版：デジタルデータ（CD）・レイアウト図
- 11 本文の編集は、小田由美子（埋文事業団班長）が担当した。執筆は、「第三章 3 遺物C石器、5まとめE石器について」は高橋保雄（埋文事業団班長）、そのほかは小田が担当した。
- 12 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多くの御教示・御協力を賜った。ここに記して厚くお礼申し上げる。（敬称略 五十音順）

小熊博史 勝山百合 佐藤雅一 島田哲男 清水克彦 田中耕作 田辺早苗 谷藤保彦
塚本師也 長沢展生 中村由克 野田豊文 野村忠司 早津賢二 水沢教子 綿田弘実

目 次

第 I 章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調 査	2
A 前原遺跡	2
B 丸山遺跡	2
3 整 理	3
4 調 査 体 制	3
5 整 理 作 業	3
第 II 章 遺跡の位置と環境	4
1 地 理 的 環 境	4
2 遺跡の位置と立地	4
3 歴 史 的 環 境	6
第 III 章 前原遺跡	9
1 調 査 の 概 要	9
A 遺跡の立地と微地形	9
B グリッドの設定	9
C 基本層序	11
2 遺 構	11
A 概 要	11
B 遺 構 各 説	11
3 遺 物	20
A 縄文土器	20
B 土 製 品	34
C 石 器	35
D 石 製 品	43
4 自然科学分析	44
A テフラ分析	44
B 前原遺跡出土炭化材の樹種同定	46
C 炭化材の放射性炭素年代測定	54
5 ま と め	55
A 信越国境地域の集落と住居跡	55
B 焼失住居について	58
C 集落構造について	58
D 縄文時代中期の土器について	58
E 石器について	62
F 最 後 に	65

第IV章 丸山遺跡 66

1 調査の概要	66
A 遺跡の概要	66
B グリッドの設定	66
C 基本層序	67
2 遺構	68
A 概要	68
B 遺構各説	68
3 遺物	68
4 自然科学分析 炭化材の樹種	70
A はじめに	70
B 試料	70
C 方法	71
D 結果	71
E 考察	71
5 まとめ	72
〈要約〉	73
〈引用・参考文献〉	74
〈観察表〉	77
前原遺跡遺構計測表	77
前原遺跡土器観察表	78
前原遺跡土器片円盤観察表	89
前原遺跡石器観察表	90
丸山遺跡遺構計測表	92
丸山遺跡石器観察表	92
丸山遺跡土器観察表	93

挿図目次

第1図 上信越自動車道路線図	1	第15図 唐草文系土器 (A類) の分類	26
第2図 前原遺跡一次調査トレンチ位置図	2	第16図 圧痕陸帯文系土器 (B類) の分類	28
第3図 前原・丸山遺跡の位置	4	第17図 石器出土分布図	35
第4図 妙高山の地質図	5	第18図 石鏃分類図	36
第5図 関川流域における縄文時代の遺跡	7	第19図 不定形石器分類図	38
第6図 中郷村周辺の中世遺跡	8	第20図 打製石斧分類図	39
第7図 前原遺跡 グリッド設定図・起伏図	9	第21図 磨製石斧分類図	40
第8図 前原遺跡 基本層序	10	第22図 敲磨石類分類図	41
第9図 土器の部位名称	21	第23図 砥石分類図	42
第10図 縄文土器出土分布図	23	第24図 石冠類分類図	43
第11図 早期土器出土分布図	24	第25図 テフラ組成ダイヤグラム	44
第12図 中期土器出土分布図	24	第26図 1号住居炭化材樹種	49
第13図 晩期土器出土分布図	24	第27図 前原遺跡の炭化材1	51
第14図 土器片円盤出土分布図	24	第28図 前原遺跡の炭化材2	52

第29図	前原遺跡の炭化材3	53
第30図	信越国境地域の遺跡分布	55
第31図	蛇谷遺跡竪穴住居配置図	55
第32図	各遺跡の竪穴住居	57
第33図	前原遺跡中期中葉～後葉土器編年案	59

第34図	丸山遺跡 グリッド設定図	66
第35図	丸山遺跡 基本層序	67
第36図	土器・陶磁器の出土分布図	69
第37図	炭化材	72

表 目 次

第1表	中世遺跡一覧表	8
第2表	縄文土器の時期別出土重量比	20
第3表	押型文原体長数量比	22
第4表	器種別石器・石製品出土数	35
第5表	火山ガラス比分析結果	45
第6表	重鉱物組成分析結果	45

第7表	屈折率測定結果	45
第8表	前原遺跡における樹種同定結果	50
第9表	石器・石製品器種別石材表	63
第10表	部分的に研磨のある打製石斧出土一覧	64
第11表	樹種同定結果	71

図 版 目 次

前原遺跡

【図 面】

図版1	前原遺跡 遺構全体図
図版2	前原遺跡 縄文集落部分図
図版3	前原遺跡 遺構個別図(1) 1号住居、6号集石
図版4	前原遺跡 遺構個別図(2) 1号住居・3号住居
図版5	前原遺跡 遺構個別図(3) 4号住居
図版6	前原遺跡 遺構個別図(4) 5号住居
図版7	前原遺跡 遺構個別図(5) 5号住居・6号住居
図版8	前原遺跡 遺構個別図(6) 7号住居、13号土坑
図版9	前原遺跡 遺構個別図(7) 8号住居、1号・2号炉状遺構
図版10	前原遺跡 遺構個別図(8) 1～6号フラスコ状土坑、14・15号土坑
図版11	前原遺跡 遺構個別図(9) 1～11号土坑
図版12	前原遺跡 遺構個別図(10) 12号土坑、1・2号焼土、1～3号埋費、1～3号集石
図版13	前原遺跡 遺構個別図(11) 4・5号集石、1・2号炭窯
図版14	前原遺跡 遺構個別図(12) 3～7号炭窯
図版15	前原遺跡 遺構個別図(13) 8～11号炭窯
図版16	前原遺跡 縄文土器(1) 包含層(早期)
図版17	前原遺跡 縄文土器(2) 包含層(早・前期)
図版18	前原遺跡 縄文土器(3) 1号住居

図版19	前原遺跡 縄文土器(4) 3～5号住居
図版20	前原遺跡 縄文土器(5) 5～7号住居
図版21	前原遺跡 縄文土器(6) 7号住居
図版22	前原遺跡 縄文土器(7) 8号住居、1号炉状遺構、5号フラスコ状土坑
図版23	前原遺跡 縄文土器(8) 5号フラスコ状土坑、2・3号埋費、包含層(中期)
図版24	前原遺跡 縄文土器(9) 包含層(中期)
図版25	前原遺跡 縄文土器(10) 包含層(中期)
図版26	前原遺跡 縄文土器(11) 包含層(中期)
図版27	前原遺跡 縄文土器(12) 包含層(中期)
図版28	前原遺跡 縄文土器(13) 包含層(中期)
図版29	前原遺跡 縄文土器(14) 包含層(中・後・晩期)
図版30	前原遺跡 縄文土器(15) 1号埋費、包含層(晩期)
図版31	前原遺跡 縄文土器(16) 包含層(晩期)
図版32	前原遺跡 縄文土器(17) 包含層(晩期、時期不明)、土器片円盤
図版33	前原遺跡 石器(1)
図版34	前原遺跡 石器(2)
図版35	前原遺跡 石器(3)
図版36	前原遺跡 石器(4)
図版37	前原遺跡 石器(5)
図版38	前原遺跡 石器(6)
図版39	前原遺跡 石器(7)・石製品

【写真】

- 図版40 前原遺跡 遺跡位置と周辺の景観（前原・丸山遺跡）、遺跡完掘状況
- 図版41 前原遺跡 基本土層断面、5号住居覆土、1号住居、1号炉状遺構、5号フラスコ状土坑
- 図版42 前原遺跡 縄文時代集落完掘・遺跡完掘、1号住居
- 図版43 前原遺跡 1号住居、6号集石
- 図版44 前原遺跡 3・4号住居
- 図版45 前原遺跡 4・5号住居
- 図版46 前原遺跡 5号住居、11号土坑
- 図版47 前原遺跡 6・7号住居、13号土坑
- 図版48 前原遺跡 8号住居、1号炉状遺構
- 図版49 前原遺跡 1・2号炉状遺構、1・2号フラスコ状土坑
- 図版50 前原遺跡 3～6号フラスコ状土坑、14・15号土坑
- 図版51 前原遺跡 1～8号土坑
- 図版52 前原遺跡 9・10・12号土坑、1・2号焼土、1号埋裏
- 図版53 前原遺跡 2・3号埋裏、1～5号集石、1号炭室
- 図版54 前原遺跡 1～5号炭室
- 図版55 前原遺跡 6～11号炭室
- 図版56 前原遺跡 出土土器
- 図版57 前原遺跡 出土石器、土器胎土

丸山遺跡

【図面】

- 図版77 丸山遺跡 遺構全体図
- 図版78 丸山遺跡 1～7号土坑
- 図版79 丸山遺跡 8・9号土坑、1号溝、1・2号炭室

【写真】

- 図版81 丸山遺跡 調査前の状況、遺跡近景、遺跡完掘全景、1・2号土坑
- 図版82 丸山遺跡 3～8号土坑

- 図版58 前原遺跡 縄文土器 (1) 包含層 (早期)
- 図版59 前原遺跡 縄文土器 (2) 包含層 (早・前期)、1号住居
- 図版60 前原遺跡 縄文土器 (3) 1・3・4号住居
- 図版61 前原遺跡 縄文土器 (4) 4・5号住居
- 図版62 前原遺跡 縄文土器 (5) 6・7号住居
- 図版63 前原遺跡 縄文土器 (6) 8号住居、1号炉状遺構、5号フラスコ状土坑
- 図版64 前原遺跡 縄文土器 (7) 5号フラスコ状土坑、2・3号埋裏、包含層 (中期)
- 図版65 前原遺跡 縄文土器 (8) 包含層 (中期)
- 図版66 前原遺跡 縄文土器 (9) 包含層 (中期)
- 図版67 前原遺跡 縄文土器 (10) 包含層 (中期)
- 図版68 前原遺跡 縄文土器 (11) 包含層 (中～後期)
- 図版69 前原遺跡 縄文土器 (12) 1号埋裏、包含層 (晩期)
- 図版70 前原遺跡 縄文土器 (13) 包含層 (晩期、時期不明)
- 図版71 前原遺跡 土製品・石器 (1)
- 図版72 前原遺跡 石器 (2)
- 図版73 前原遺跡 石器 (3)
- 図版74 前原遺跡 石器 (4)
- 図版75 前原遺跡 石器 (5)
- 図版76 前原遺跡 石器 (6)・石製品

- 図版80 丸山遺跡 土器・陶磁器・石器

- 図版83 丸山遺跡 9号土坑、1号溝、1・2号炭室

- 図版84 丸山遺跡 土器・陶磁器・石器

第1章 序 説

1 調査に至る経緯

上信越自動車道(旧名称は関越自動車道上越線。以下、上信越道)は、群馬県藤岡ジャンクションから新潟県上越ジャンクション間の総延長203kmにわたる高速自動車道である。この路線は、関越自動車道と北陸自動車道を結ぶ基幹輸送体系として、また、沿線地域の各種開発整備計画と関連して社会経済活動に大きな役割を果たすものである。

上信越道の新潟・長野県境から上越市までの34kmは、昭和48年11月に基本計画が決定された。前原・丸山遺跡に係る第11次施行命令区間(中頸郡中郷村～上越市)20kmは、平成元年1月に整備計画が決定され、同年3月には、建設省(現国土交通省)道路局長から公団新潟建設局(現北陸支社)に対して、調査開始指示が出された。これを受けて県教委と公団との間で、法線内の遺跡分布調査・試掘調査等に関する協議が本格化した。

県教委は公団の依頼を受け、平成2年4月に中郷村～上越市間の埋蔵文化財分布調査を実施した。これにより、この区間に周知の遺跡18か所、新発見の遺跡10か所、遺跡推定地25か所の計53か所の埋蔵文化財包蔵地が存在することを確認し、この結果を公団に通知している。

前原遺跡は、平成6年5月と8月に実施された上信越自動車道建設に伴う一次調査によって発見された遺跡である。一次調査の結果、縄文時代中期後葉の遺構・遺物が多数検出され、集落の一部と想定された。また、古代と考えられる炭窯も検出された。こうした結果から10,200㎡について二次調査が必要であることが判明した。県教委は、前原遺跡を新発見遺跡として遺跡台帳に登録した。

丸山遺跡はすでに周知化されていたが、平成6年5月に一次調査を行い、縄文時代・中世の遺物と土坑・積石塚状遺構を検出したため、950㎡について二次調査が必要であると判断した。

県教委は前原・丸山遺跡について、調査結果を公団に報告し、二次調査の工程を協議した結果、両遺跡は平成8年度に調査を実施することになった。なお、二次調査は県教委から埋文事業団が受託し、これに当たった。



第1図 上信越自動車道路線図

2 調 査

A 前原遺跡

一次調査

一次調査は、用地買収の都合から2回に分けて実施した。1回目の調査は調査区の北西側、治郎川に面した地点の調査を行った。この調査では、縄文土器213点、石器4点が出土した。2トレンチからは竪穴状の落ち込み、3トレンチからはピットなどが検出されたため、縄文時代の集落の存在が想定された。2回目の調査は、未買収地(水田部)を除き調査区の南東側を渋江川の際まで行った。この調査では、8トレンチから土坑、6・14・22トレンチから炭窯、7・11トレンチからピットなどの遺構を検出し、9トレンチから土器2点が出土した。合計2回の調査におけるトレンチの総面積は691㎡で、調査対象面積の12,300㎡に占める割合は5.6%であった。

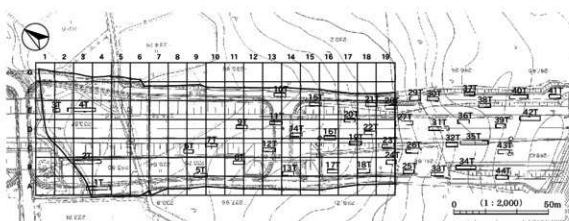
調査区の北西側、治郎川に面した地区で縄文時代の遺構が多く検出されたが、渋江川に近づくにしたがって、遺構・遺物は少なくなった。出土物から、縄文時代中期後葉の集落が北西側に存在することが確認された。このため、二次調査必要面積を10,200㎡とした。

二次調査

包含層の調査は縄文時代の遺物が多数出土する北西地区では、人力による掘削を行った。このほか遺物量の希薄な地区は重機による掘削を実施した。さらに遺物量の少ない渋江川に近い16トレンチより南東側は5本のトレンチを設定し、部分的な調査で終了させた。

B 丸山遺跡

平成6年5月13日から5月16日に一次調査が実施された。対象面積は11,400㎡で、一次調査面積は570㎡である。縄文時代・中世の遺物が出土し、遺構としては土坑や積石塚状遺構が検出された。平成8年に950㎡が二次調査された。



第2図 前原遺跡一次調査トレンチ位置図

3 整 理

水洗・注記・遺構カード作成などの基礎整理作業は調査後、直ちに行われたが、報告書の作成は、平成15年度に埋文事業団朝日分室において行われた。

4 調査体制

平成6年度〔一次調査〕

調査期間 前原遺跡 平成6年5月9日～10日・8月22日～31日

丸山遺跡 平成6年5月13日～5月16日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
（理事長 本間栄三郎）

管 理	総 括	藍原 直木（事務局長）
	管 理	渡辺 耕吉（総務課長）
調 査	庶 務	泉田 誠（総務課主事）
	調査総括	茂田井信彦（調査課長）
	調査指導	藤巻 正信（調査課調査第一係長）
	調査担当	田海 義正（調査課主任調査員）
	調査職員	橋谷田裕治（調査課主任調査員）

平成8年度〔二次調査〕

調査期間 前原遺跡 平成8年4月15日～10月25日

丸山遺跡 平成8年4月15日～6月14日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 平野 清明）

調査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
（理事長 平野 清明）

管 理	総 括	藍原 直木（事務局長）
	管 理	山上 利雄（総務課長）
調 査	庶 務	泉田 誠（総務課主事）
	調査総括	亀井 功（調査課長）
	調査指導	藤巻 正信（調査課調査第一係長）

前原遺跡

丸山遺跡

調 査	調査担当	橋谷田裕治（調査課主任調査員）
	調査職員	内山 徹（調査課主任調査員）
		加藤 学（調査課文化財調査員）
		清塚 則和（調査課嘱託員）
		江口 志麻（調査課嘱託員）

調 査	調査担当	石川 智紀（調査課文化財調査員）
	調査職員	清塚 則和（調査課嘱託員）

5 整理作業

整理期間 平成15年4月1日～平成15年11月28日

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）

整理 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 板屋越麟一）

管 理	総 括	黒井 幸一（事務局長）
	管 理	長谷川三夫（総務課長）
	庶 務	高野 正司（総務課主任）
整 理	整理総括	藤巻 正信（調査課長）
	整理指導	高橋 保（調査課整理担当課長代理）
	整理担当	小田由美子（調査課班長）
	作 業	斎藤真由美・高橋悠美・本間利子・本間智子・水島里美（以上、朝日分室嘱託員）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

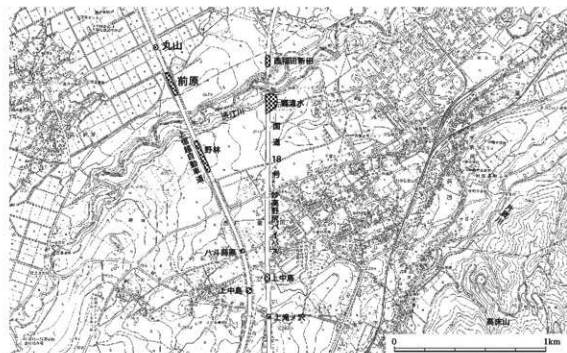
1 地理的環境

前原・丸山遺跡の所在する中頸城郡中郷村は新潟県南西部に位置し、南は中頸城郡妙高村、北は新井市、西は西頸城郡名立町と接している。長野県境まではおよそ13kmである。中郷村は日本海側と信濃を結ぶ北国街道が通り、各時代を通して長野とのつながりの強い地域である。

中郷村の南西側には妙高山（標高2,454m）、火打山（2,462m）など新第三紀層の山々が形成する西頸城山地が、東側には、魚沼山系の西端にあたる高床山（527m）、花房山（460m）などの小山塊が形成されている。村内の台地は妙高火山の噴火活動に伴う火砕流と、その後の山体の前壊による岩屑なだれや泥流によって形成され、それが片貝川・渋江川・矢代川などによって開析されている。これらの河川は、火打山・焼山の山腹に源を発する関川と合流し、穀倉地帯である頸城平野を通じて日本海に注いでいる。

2 遺跡の位置と立地

前原遺跡は妙高山の北東山麓、渋江川の左岸に位置する。周辺は妙高山近くの山を起源とした約9,000年前の矢代川岩屑なだれ堆積物に厚く覆われている。調査区内の地形は、渋江川側が最も高く標高約248mを測り、北西側とは約15mの比高差がある。遺跡の現況は、多くは山林、一部水田となっていた。調査区北西端には、かつて治郎川が流れていたが、現在は圃場整備のためにせき止められている。



第3図 前原・丸山遺跡の位置
[中郷村役場作成「中郷村全図2」平成5年修正 1:10,000原図]
[小池2002]から転載

丸山遺跡は前原遺跡から北西に約400mの距離に位置している。渋江川左岸の矢代川岩層なだれ堆積物によって形成された緩傾斜地に立地する遺跡で、標高は230m前後を測る。調査範囲は東西方向に細長い、わずか950㎡と狭い範囲で、現況は水田と畑である。遺跡を含めた周辺の地形は、昭和30年代の大規模な耕地整理や農道の付け替え工事などによってその大部分が改変されている。今回調査した丸山遺跡の範囲だけは残ったものと考えられたが、遺跡の南西半にも最大で厚さ50cmの盛土があり、本来の地形をあまり保っていないことが確認された。

3 歴史的環境

A 縄文時代

中郷村においては、時期不明の遺跡を含めて縄文時代の遺跡は114か所が確認されている。時代別に見て村内遺跡の約6割と最も多い。村内では草創期の遺跡は確認されておらず、早期から徐々に遺跡数が増加し、中期から後期がピークで、晩期になると遺跡数は減少する。しかし、晩期には籠峰遺跡のような大規模な集落が形成される点が特異である〔野村^{ほか}2001〕。

このほか、前原・丸山遺跡で多くの遺物の出土があった時期について、上越地方も含め概観する。

早 期

縄文時代前期に噴出した赤倉火砕流堆積物に覆われていない地域に多くの分布が見られる。近年、上信越自動車道・国道18号妙高野尻バイパスに伴う発掘調査によって、妙高山麓周辺で早期の多くの遺跡が発見されている。特に押型文土器が妙高山麓周辺で多い。妙高原町大堀遺跡〔土橋^{ほか}1996〕、中ノ沢遺跡〔土橋^{ほか}1997〕、間川谷内A遺跡〔小池^{ほか}1998〕、妙高村松ヶ峯遺跡群〔小島1991〕、中郷村八斗葎原遺跡〔坂上2004〕・前原遺跡などで発見されている。

中期中葉～後葉

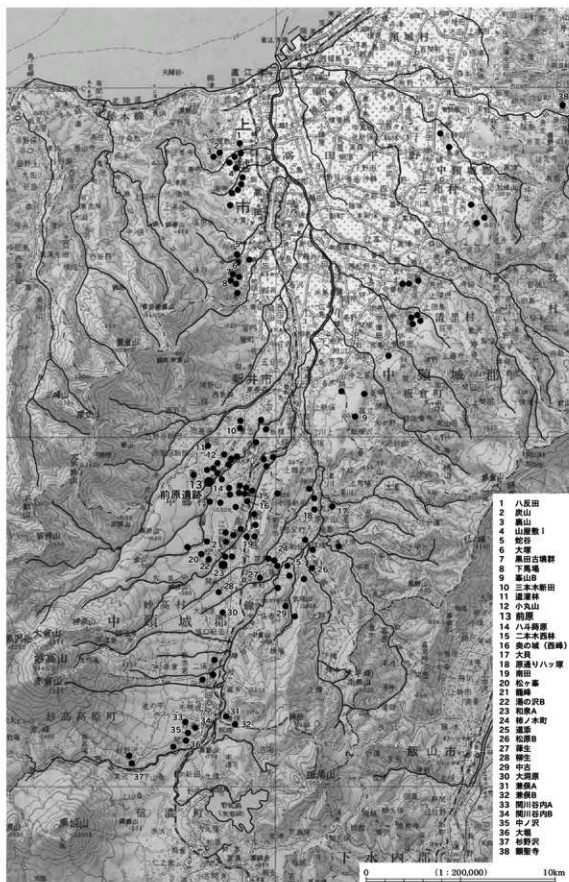
海岸部に近い上越市山屋敷I遺跡で前葉から後葉にかけての拠点的な集落が大規模に調査されている〔上越市史編さん委員会2003〕。このほかは頸城地方からはあまり発見されていなかった。近年、上信越自動車道に伴う発掘調査によって、前原遺跡とほぼ同時期と考えられる上越市蛇谷遺跡が調査されている〔星1996〕。蛇谷遺跡は沢を挟んだ2つの瘦せ尾根上に竪穴住居跡3軒が検出されている。竪穴住居は前原遺跡とほぼ同規模（直径5m2基、3.5m1基）の円形で、中央に方形の石囲炉と周溝を持っている。住居から10mほど離れた地点で埋設土器が出土している。前原遺跡と同様に中部高地系の圧痕隆帯文土器などを伴っている。このほか、中郷村和泉A遺跡〔加藤・荒川1999〕では唐草文系土器が出土している。

晩 期

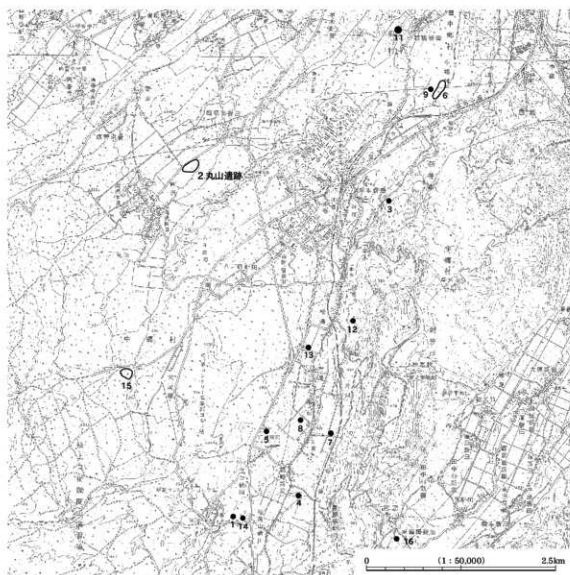
中郷村では晩期の大規模な遺跡、籠峰遺跡〔北村^{ほか}1996〕と和泉A遺跡が調査されている。籠峰遺跡は、後期中葉～晩期末葉にかけての遺跡で、石棺状配石80基を含む様々な形態の配石や掘立柱建物などの遺構と多量の遺物が検出されている。籠峰遺跡と近接する和泉A遺跡では晩期前葉の土坑跡と後葉の遺物が検出されている。

B 中 世

中世の遺跡は片貝川や北国街道沿いに位置しているものが多い。調査事例としては、中郷村大字片貝に所在する南田遺跡が知られている。南田遺跡では掘立柱建物跡60数棟が確認されている〔中郷村教育委員会1988〕。また、南田遺跡からも程近い、妙高村花房に所在する上ツ平遺跡でも20棟以上の建物が発



第5図 関川流域における縄文時代の遺跡 [国土地理院1:20,000「高田」使用] [加藤・荒川1999]から転載



第6図 中郷村周辺の中世遺跡

【国土地理院1:25,000を縮小(東倉山・関山・巖橋、平成3)(新井、平成4)】

番号	遺跡名	種類	所在地	番号	遺跡名	種類	所在地
1	龍峰	遺物包蔵地	福南山新田字龍峰622-7他	9	下九万田A	遺物包蔵地	藤沢字舟岡山440他
2	丸山	遺物包蔵地	岡沢字汐下357他	10	赤屋古路出土地	遺物包蔵地(古銭)	松崎字赤屋856(地点不明)
3	二本木石仏	石仏	二本木字大日511-2、514-1	11	田ノ久保	遺物包蔵地	飯橋新田字田ノ久保346-1
4	福南山鑛石	石造物	福南山新田字下屋18	12	下田	遺物包蔵地	片貝字下田416、417
5	小重	遺物包蔵地	市屋字鉄引乙682、713	13	小林	遺物包蔵地	松崎字小林342
6	船岡山	遺物包蔵地	藤沢字船岡山465-2他	14	磐石	遺物包蔵地	福南山新田字磐石594-1、993-7
7	南田	遺物包蔵地	片貝字南田290他	15	清原	遺物包蔵地	西ノ尾新田字清原250-1、251-1、251-5&ド
8	渡町	遺物包蔵地	市屋字上磐石214他	16	上ツ平	遺物包蔵地	妙高村大字花所

第1表 中世遺跡一覧表

出された中世後期の集落が調査されている〔妙高村教育委員会1995〕。中郷村大字市屋に所在する小重遺跡では3万枚弱の古銭が出土した埋納銭遺構が発見されている〔小池ほか2002〕。こうしたことから、中世から著名な関山神社の周辺に中世の遺跡が多い傾向も伺える。関山周辺は信濃国との交通の要衝であったことも知られている。

第三章 前原遺跡

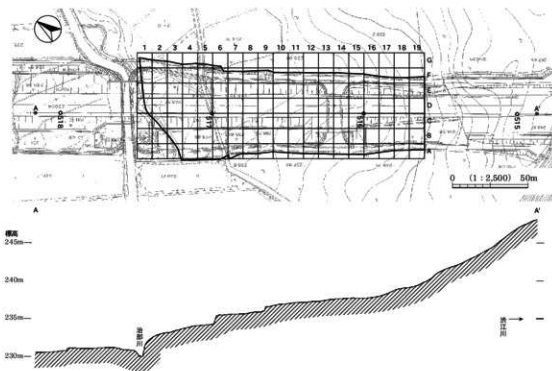
1 調査の概要

A 遺跡の立地と微地形

前原遺跡は妙高山の北東山麓、渋江川左岸の段丘に位置し、小河川の治部川が開析した沢の縁際に地形に沿って縄文時代中期の集落が存在する。段丘は渋江川側が最も標高が高く、縄文集落の存在する地点が最も標高が低い。この間のだらだらとした緩斜面には平安時代と考えられる炭窯が多く検出されたが、縄文時代の遺構・遺物はほとんど出土しなかった。集落部分は段丘の先端部にあたり、集落の先は沢になり、急激に落ち込む。沢沿いの平坦地は人々の生活に適した立地であったといえよう。このことは縄文時代中期の集落が存在する地点に縄文時代早期・晩期の遺物も集中し、人々が繰り返し活動した地点であったことが裏付けている。

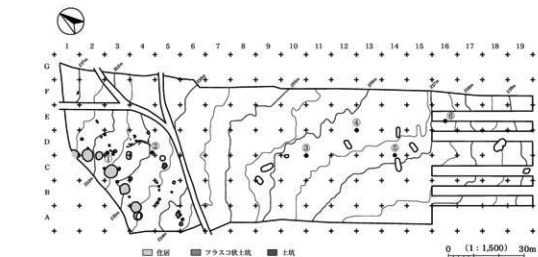
B グリッドの設定

グリッドは地形に合わせることを優先し、高速道路のセンター杭No.515 ($X=109152.449$, $Y=-25259.288$)とNo.517 ($X=109313.987$, $Y=-25377.210$)を結ぶ直線を基準とし、センター杭No.515を起点に10mの方眼を組み、これを大グリッドとした。グリッドの長軸方向は真北から36度8秒西偏している。大グリッドは長軸方向を算用数字、短軸方向をアルファベットとし、この組み合わせによって表示した。さらに大グリッドを2m四方に分割して1～25の小グリッドとし、5A～5のように表示した。



第7図 前原遺跡 グリッド設定図・起伏図

1 調査の概要



(S=1/20)

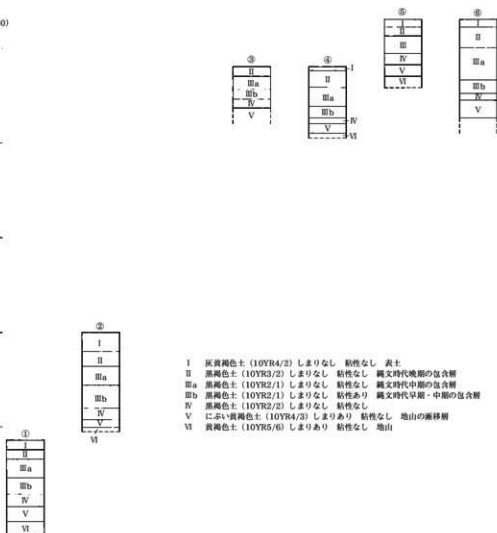
標高
237m

236m

235m

234m

233m



第8図 前原遺跡 基本層序

C 基本層序

前原遺跡の所在する地点は矢代川岩層なだれ堆積物を地山としている。基本層序は第8図中に記載した。なお、色調は『新版標準土色帳』〔農林水産省農林水産技術会議事務局1993〕を用いた。

遺物包含層はⅡ・Ⅲa・Ⅲb層である。いずれも黒褐色土で、微妙な差で分層した。Ⅱ層はⅢ層よりも明るく、Ⅲb層はⅢa層より粘性が強い。Ⅱ層から主として出土したのは縄文時代晩期の遺物で、この時期の遺物包含層と考えられる。Ⅲ層は縄文時代早期から中期後葉までの遺物が出土している。Ⅲa・Ⅲb層で分層して遺物を取り上げているが、遺物は混在している。各時代の遺物の出土分布を見てもわかるように、早期・中期・晩期の遺物は一定部分に集中している。こうした状況から、早期の遺物は中期の遺物からも出土するため、中期の段階で早期の遺物はかなり攪乱されたものと考えられる。

遺構の確認面は漸移層のV層または地山のVI層上面である。Ⅱ・Ⅲ層中の確認は困難であった。埋喪は遺物の存在によって黒褐色土中で確認できた例外的な遺構である。

地山には妙高山の噴火によって流出した大小の角閃石安山岩が多量に含まれている。また、地山のⅠ～Ⅴ層にも多量に含まれ、縄文時代中期後葉の竪穴住居にも、炉緑石や台石として利用されていた。

3Dグリッドの①部分の上層の状況は、図版41のカラー写真に示した。

2 遺 構

A 概 要

前原遺跡は、縄文時代中期中葉から後葉にかけての集落を主体とした遺跡である。渋江川左岸の段丘に位置し、治郎川が開析した沢の縁際に地形に沿って7軒の竪穴住居が弧状に連なっている。竪穴住居には切り合いがなく、出土遺物の時期・量からも縄文中期中葉から後葉にかけての比較的短期間に営まれた集落であったと考えられる。竪穴住居は直径3～5mの円形で、4～5本の主柱穴を持つ。周溝、テラスを伴うものもある。中心にある炉は石囲いの方形または隅丸方形のものである。住居内に埋喪を伴うものが2軒、床面に設置された土器を伴うものが1軒存在した。住居の入口は、沢に向かって開口している。

1号住居は床面から炭化した材が多量に出土し、その上を焼土が覆っているため、土屋根を持った焼失家屋と考えられる。5号住居もわずかながら炭化材が出土し、床面の酸化状況から同様な焼失家屋の可能性が高い。炭化材は分析による樹種同定を行った。

竪穴住居の周囲からは、取り囲むように埋喪2基、フラスコ状土坑6基や土坑12基が検出されているが、数量的には多くない。フラスコ状土坑・土坑には、焼け礫が入っているものが多く存在した。

縄文時代中期中葉～後葉以外には、縄文早期、前期、後期から晩期にかけての遺物が出土しているが、遺構は晩期の埋喪が1基検出されたのみである。

縄文時代の時期不明遺構として、このほかに集石5基が検出されている。

このほか、木炭を焼成した炭窟が遺跡全体から11基検出された。覆土中に焼山起源の火山灰の堆積が確認され、平安時代の炭窟の可能性が高い。

B 遺構各説

遺構はV層(漸移層)、VI層(地山)で確認されたものがほとんどである。黒褐色土中にも地山に達しな

い遺構は存在したと思われるが、確認することはできなかった。

竪穴住居以外の遺構についての計測値は、遺構計測表を参照していただきたい。

1) 竪穴住居

掘り込みのある竪穴状の遺構で、柱穴と炉を伴うものを竪穴住居とした。前原遺跡の竪穴住居は7軒検出されたが、大きさに大小はあるが、6号住居が楕円形に近いほかは、すべてほぼ円形である。炉の形態も石囲いの方形のものがほとんどである。炉は、掘り方を持っている。主柱穴の配置については4本と5本のものが見られる。竪穴住居については、計測表を設けず、本文中にすべて記載した。なお、2号住居は欠番である。

1号住居 (図版3・4、写真図版41～43)

位 置 3B-18・19・20・23・24・25グリッドに存在する。

平面形 ほぼ円形を呈する。

規 模 長径4m、短径3.9m、深度0.5mを測る。テラスを持ち、その内径は2.8mである。面積は13㎡である。

主軸方向 N68°W

壁 テラスを有するため、2段の壁を有する。西側半分は一次調査により残存状況は良くない。

柱 穴 ビットは11基検出した。主柱穴はP1～5の5本柱と考えられる。また、テラスが途切れる北西側に相対するほぼ同じ深さのP6・7が存在し、入り口に関連した施設の柱穴の可能性もある。このほか、テラス上に数箇所小さな落ち込みを確認できるが、柱穴とは考えにくい。

炉 住居のほぼ中央に存在する隅丸方形の石囲炉である。掘り方を持っている。炉石の石材は角閃石安山岩で、火砕流に含まれ、遺跡内に多数存在する。大小の石を組み合わせて方形に形作っている。石・底面とも被熱し、酸化している。

床 面 貼床などは特に認められなかったが、硬化した床面が存在した。

周 溝 テラス面の南側の一部に確認された。しかし、全周を覆うようなものではなく、掘り込みも浅い。

埋 葬 周溝を切って入れ子状に土器2個が埋設されていた。内側の土器は縄文施文の底部(図版18-62)、外側の土器は、唐草文系土器の口縁部から胴部で、底部を欠いている(図版18-61)。

覆 土 3層以上は黒色土の自然堆積土である。4・5層が注目され、4層は地山を基調とする土の焼土で、5層は炭化材を主体とした層である。炭化材の上を焼土が覆っていることが注目される。焼土の投げ込みの可能性もあるが、上屋の崩落状況を想起させる資料である。5層の炭化材は繊維の方向が求心的な在り方をし、上屋の構造材である可能性が考えられる。その上に焼土が覆っているということは、上屋に土が利用されていたことを示唆するものであろう。具体的にはカヤや木材で、壁を作りその上を地山土で覆うような場合が考えられる。その住居が焼け落ちればこのような堆積が起ころうである。また、4層の焼土は炉中の焼土と比して、被熱が弱いと見られる(変色の度合いが弱い)。このことは、繰り返しの被熱ではなく一過性の被熱であることを想起させる。この点も上屋に土を用いたと推定する根拠になろう。また、11・12層は焼土上面から炉の部分の掘り込んだ状況と見られ、住居焼後、掘り返されていることがわかる。

遺 物 焼土上面の2層より上層から多数の土器が出土した。住居焼後の廃棄と考えられる。

3号住居 (図版4, 写真図版44)

位置 4A-3・4・8・9・13・14グリッドに位置する。4号住居に接する。

平面形 ほぼ円形を呈する。

規模 長径3.4m、短径3.2m、深度0.2mを測る。面積は8.6㎡である。

主軸方向 N60°W

壁 掘り込みが浅く、壁の残りは良くない。

柱穴 主柱穴は5本で、ほぼ等間隔に配置されている。

炉 住居のほぼ中央、若干西側に位置する隅丸方形の石囲炉である。掘り方を持つ。平坦面を持つ比較的大きさのそろった角閃石安山岩を用いている。炉内下層にはブロック状の焼土が含まれていた。石・底面ともよく熱を受けている。炉の東側に上面が平坦な台石と考えられる角閃石安山岩が設置されている。

周溝 西側に確認された。床面から10cm程度の掘り込みを確認した。

4号住居 (図版5, 写真図版44・45)

位置 4A-4・5・9・10, 4B-1・6・11に位置する。3号住居に接する。

平面形 円形を呈する。

規模 径4.1m、深度0.2mを測る。面積は13.3㎡である。

主軸方向 不明

壁 掘り込みは浅く、壁の残りは良くない。

柱穴 ビットは13基検出された。主柱穴は5本で、P2～5、13である。ほぼ等間隔に配置され、五角形状を呈している。

炉 住居のほぼ中央に位置している。掘り方から隅丸方形の石囲炉と考えられるが、多くの石は抜かれている。石は角閃石安山岩である。炉底面だけでなく、炉西側の住居床面も熱を受け酸化している部分が見られる。

埋 葬 住居跡の南西側から大きな掘り方を持つ埋葬が出土した (図版19-78)。

5号住居 (図版6・7, 写真図版45・46)

位置 2C-22, 3C-1・2・3・4・6・7・8・9・11・12・13に位置している。

平面形 ほぼ円形を呈する。

規模 長径5.4m、短径4.9m、深度0.4～0.5mを測る。面積は21.1㎡である。集落内で最も大きな規模を持つ。

主軸方向 N66°W

壁 東側は残存状況が良好で、深さ0.4～0.5mを測る。しかし、西側は掘り込みが浅い。

柱穴 床面からの深さ50cm前後の主柱穴5本を有する。また、南西から南東側にかけて周溝が存在するが、その中にいくつかの柱穴状の落ち込みが存在する。非常に浅く、弱いものであるが、壁柱穴の可能性はある。

炉 住居の中央よりやや東側に位置し、各辺はほぼ東西南北に面する。方形を呈する石囲炉である。

炉は掘り方を持つ。一辺90cmを測る。石は角閃石安山岩である。

床 炉の西側。住居のほぼ中央に部分的に貼床を確認した。しまりが極めてよく、やや高まりを持つ。

周溝 住居の南西～南東に存在する。壁柱穴の連続が周溝のように見える可能性もある。

覆土 1～3層は自然堆積と考えられる。特に2層は火山灰と考えられたので、試料を採取し、自然科学的分析を行った。その結果、妙高大田切川テフラ（My-Ot）であることが確認された¹⁾。4a層は焼土層、4b層は炭化物の多い層である。床面直上より交互に含まれ面的に広がる。こうした状況から焼失家屋と考えられる1号住居の類例である可能性が高い。壁付近には崩落土も確認された。

出土遺物 炉の南西に床面上に設置された状況の土器が出土している（図版19-84）。底部を除去し、それを正位に床上に置いた状況で、掘り込みは見られなかった。また、住居北側に遺物がかなり集中していたが、床直上の遺物ではない。

6号住居（図版7、写真図版47）

位置 2C-20・25、2D-16・21に位置する。

平面形 楕円形を呈する。

規模 長径3.2m、短径2.7m、深度0.2mを測る。面積は6.9㎡である。面積的には、集落中最小である。調査担当者はテラス部分が削平されている可能性を指摘している。

主軸方向 S60°W

壁 確認面からの掘り込みが浅く、壁の残りは良くない。

柱穴 4本柱の主柱穴である。ほかの住居は5本または6本で、4本柱の住居はこの住居だけである。柱穴の掘り方も比較的小さい。

炉 住居のほぼ中央に位置する。約60cm×50cmのほぼ方形の石囲炉である。炉は掘り方を持つ。石は角閃石安山岩で、炉内に向いた方はよく被熱し、赤変している。炉内底面もよく熱を受けている。

覆土 下層の2層中に炭化物が多く含まれている。また、火砕流に含まれる大きな礫が多量に含まれている。

7号住居（図版8、写真図版47）

位置 2C-5・9・10・14・15、2D-1・2・6・7・11・12に位置する。

切り合い 13号土坑を切る。

平面形 ほぼ円形を呈する。

規模 長径4.8m、短径4.3m、深度0.4mを測る。面積は16.6㎡である。集落中、5号住居に次いで、2番目に大きな住居である。

主軸方向 N56°E

壁 西側は削平され、壁の残りは良くない。ほかの部分は立ち上がりを確認できるが、東側は比較的緩やかに立ち上がる。

柱穴 柱穴は2本一対か、建て替えのためか、2本の柱が近接して配置されている。炉の西側のP6・P15・P16の3本とP10・P11・P17の3本は対称的に配置されている。また、炉の周囲に三角形を描くようにP7・P18・P19が配置されている。これ以外の柱穴は2本一対の組み合わせの可能性もある。

1) 4 自然科学分析を参照。

炉 住居のほぼ中央、わずかに北寄りに位置している。約70cm×50cmの長方形を呈していたと思われる角閃石安山岩の石囲炉である。炉は掘り方を持つ。炉の南側部分以外の石はほとんど抜かれている。炉内の覆土は炭化物・焼土を含む黒色土であった。

周溝 P3とP7を結ぶ非常に狭い溝状の遺構が確認されている。

8号住居（図版9、写真図版48）

位置 1C-20・25、1D-16・17・21・22に位置する。

平面形 北側と西側は治部川の浸食によって削られているため、全容は不明であるが、ほぼ円形を呈するものと考えられる。

規模 残存部の長さは2.5m×2.2mである。深度は30～40cmである。残存部の面積は7.2㎡である。

主軸方向 不明

壁 掘り込みが浅く、壁の残りは良くない。

柱穴 住居内に4本の柱を確認したが、主柱穴の数及び配置は不明である。

炉 65cm×65cmのほぼ方形の角閃石安山岩の石囲炉である。

2) 炉状遺構

2基の単独の炉状遺構を検出した。2基とも住居群から少し距離を置いた地点に位置している。1号炉状遺構は出土した遺物から住居群と同時代の遺構と考えられる。2基とも、周囲からピットなどの遺構は検出されず、屋外炉の可能性が高い。

1号炉状遺構（図版9、写真図版41・48・49）

住居群から16m程離れた地点に位置している。径2mの円形の土坑が3分の2ほど埋まった平坦面に石囲炉を設置している。土坑覆土は下層がローム層の黄褐色土、上層は黒色土を主体としている。人為的に埋めたものと考えられる。石は角閃石安山岩である。炉内には炭化物が多く含まれ、炉石も熱を受けているため、実際に炉として使用されていたものと考えられる。この遺構の周辺からはピットなどのほかの遺構は検出されなかった。土坑は深度73cm、炉は深度35cmの所に設置されている。土坑底部には浅いピットが設けられていた。底面からは縄文土器（図版22-142）が、炉より上層で土器底部など（図版22-148～152）が出土している。覆土から多くの土器が出土しているが、上記以外の土器は出土層位を確認できなかった。

2号炉状遺構（図版9、写真図版49）

V層で確認した炉のみの遺構である。住居群から約15m程離れた地点に位置している。炉状遺構の周囲からはピットなどのほかの遺構は検出されなかった。比較的小さな石を使った石囲炉である。東側と西側の石が抜かれているため平面形は不明であるが、隅丸方形を呈する可能性が高い。炉内の覆土には焼土・炭化物が含まれている。石も被熱している。共存した遺物はなかったが、隅丸方形の平面形から時期は、中期中葉から後葉と考えたい。

3) フラスコ状土坑

住居群を取り巻くように検出されている。しかし、総数6基と数は少ない。住居群からの距離も近い所で5m、遠くなると20mになる。フラスコ状土坑といっても、断面の形状は底部付近で若干張り出す位のものが多く、上場が崩落したものは、調査時点で把握できなかったものもある。底面が平坦なものを再確認した。底径1m前後の小規模なもの(1~3号)と、底径1.5m前後のやや大きなもの(4~6号)の2種類に分類される。さらに小規模なものには覆土に焼礫を伴うもの(2・3号)がある。集石遺構と呼ばれる一群と考えられる。「集石遺構」とは人為的な熱を受けた石または礫が集積した状態のものを指している。関東西南部から中部地方にかけて主な分布がある。特に早期と中期に多いとされる。掘り込みを持つものと持たないものがある。用途は調理施設説と墓塚説が有力である〔谷口1986・小坂2001〕。3号フラスコ状土坑の礫上層は炭化物を含む粘性の強い黒色土で、調理施設の可能性も考えられよう。しかし、用途については確定できない。形状は、フラスコ状を呈するため、今回はフラスコ状土坑としておく。中期中葉から後葉の遺物を多量に伴った5号フラスコ状土坑以外には遺物の出土がなかったが、フラスコ状土坑が貯蔵穴としての性格を持っている可能性があるため、住居群に伴う時期と考えたい。

1号フラスコ状土坑 (図版10、写真図版49)

底面がわずかに張り出す断面形である。覆土は粘性の強い黒色土である。遺物、礫は含まれない。

2号フラスコ状土坑 (図版10、写真図版49)

上層の1層に十数個の焼礫が同レベルで敷き詰められていた。石は火砕流中に含まれる角閃石安山岩である。下層の2・3層は地山の黄褐色ブロックを多量に含んでいる。フラスコ状土坑を3分の2ほど埋め戻し、礫を敷き詰め再利用をはかった可能性がある。3号フラスコ状土坑も同様のものと考えられる。

3号フラスコ状土坑 (図版10、写真図版50)

2号と同様に、上層に多量の焼礫が含まれていた。石は火砕流中に含まれる5~25cm位の角閃石安山岩である。中段に敷き詰められたような状況である。中心部は若干礫が希薄である。礫の上層は炭化物を含む黒色土で、粘性が強かった。下層の状況は不明である。

4号フラスコ状土坑 (図版10、写真図版50)

底部がわずかに張り出す断面形である。覆土上層に焼土層を確認した。遺構がある程度埋まった段階で、火入れが行われたものと考えられる。底部から礫が5~6個検出されている。

5号フラスコ状土坑 (図版10、写真図版41・50)

フラスコの肩部が張った断面形態をした土坑である。覆土は黒色土で粘性が強い。覆土中から多くの遺物が出土した。中層の2層から大木8b式土器(図版22-153)、磨製石斧などが出土している。

6号フラスコ状土坑 (図版10、写真図版50)

14・15号土坑を切っている。底部が若干張り出す断面形である。土層はレンズ状の自然堆積状況を示

している。2層に火山灰の可能性のある暗褐色ブロックが認められる。5号住居で確認された妙高大田切川テフラ (My-Ot) の可能性がある。

4) 土 坑

フラスコ状土坑と同様に住居群を取り囲むように検出されている。一部、住居に近接するものも見られる。直径1m以下の比較的小規模な円形を呈する土坑が多い。自然堆積を示すものが多く、覆土に含まれる遺物は少なかったが、これも、住居群に伴う時期のものが多いと考えられる。特記事項のあるものだけ記載する。

4号土坑 (図版11、写真図版51)

非常に浅い掘り込みの集石土坑である。覆土は暗褐色土でしまりが強い。

5号土坑 (図版11、写真図版51)

ほぼ円形の断面深皿状の土坑。覆土は黒褐色土の自然堆積である。2層から敲磨石類が出土している。

6号土坑 (図版11、写真図版51)

円形の浅い土坑である。黒色土が主体の自然堆積であるが、底面に焼土面が見られる。覆土から剥片が出土している。

9号土坑 (図版11、写真図版52)

方形に近い、断面皿状の遺構である。覆土には大きな礫が含まれるが、敷き詰めたようではなく、まともに欠ける。1層から敲磨石類が出土している。

10号土坑 (図版11、写真図版52)

ほぼ円形、深い掘り込みを持つ土坑である。壁は急な傾斜を持つ。フラスコ状土坑の壁が崩落した状況の可能性ある。堆積状況は水平で、下層の3層はブロック状に地山土を多く含んでいる。

11号土坑 (図版11、写真図版46)

北側に5号住居が隣接している。非常に浅い楕円形の土坑である。覆土は黒色土の自然堆積である。

13号土坑 (図版8、写真図版47)

7号住居に切られている。

14号土坑 (図版10、写真図版50)

6号フラスコ状土坑に切られている。

15号土坑 (図版10、写真図版50)

6号フラスコ状土坑に切られている。

5) 焼土遺構

住居や土坑などの遺構に伴わず、地面が焼土化している単独の遺構である。焼土範囲を見る限り地面が焼けただけのものであり、地面を掘り込んだりした痕跡は認められない。焼土には炭化物が混じっている。遺跡内からは、2基確認され、分布は住居群からはずれた北東方向(2E・1F)にある。遺物を伴わないため、時期は確定的ではないが、検出層位がⅢ層であることと周囲から晩期の土器が多く出土していることなどから、晩期に伴う可能性を持つ。

1号焼土(図版12、写真図版52)

長径1.3m、短径35cmの長楕円形である。焼土の深さは10cmである。

2号焼土(図版12、写真図版52)

二つに分かれているが、もともと1号焼土と同様な長楕円形のものと考えられる。長径1.05m、短径28cmで1号焼土と規模が類似している。

6) 埋 壙

住居などに伴わず、単独で埋設されている土器である。遺跡内からは3基検出された。すべて黒色土のⅢ層で検出されたが、1号埋壙はⅢa層で検出され、土器形式から晩期のものと考えられる。2号・3号埋壙はⅢb層中で検出された中期中葉から後葉のものである。出土分布は、住居群の北東側に位置するが、1号は単独、2・3号は隣接している。

1号埋壙(図版12、30-290、写真図版52)

正位で埋設され、底部は同じ高さで打ち欠いた状況であった。口縁部の残りは良い。一回り大きな掘り方を持つ。土器は外面に炭化物が多くこびりつき、煮炊きに用いられていたものが転用されたものと考えられる。

2号埋壙(図版12、23-167、写真図版53)

3号埋壙と隣接して正位で埋設されていた。縄文施文の深鉢で底部と口縁部が打ち欠いてあった。

3号埋壙(図版12、23-168、写真図版53)

2号埋壙と隣接して正位で埋設されていた。底部のみで胴部以上を欠いている。底部部分は無文である。

7) 集 石

掘り込みを持たず、礫が集中的に出土した遺構で、ほぼ同一レベル面から礫が出土する。石の多くは火砕流に含まれる角閃石安山岩である。遺跡内には多数存在する石で、遺構か自然なものか迷う所もあった。遺跡内からは6基検出された。5基は住居群の北東方向(3D・4D)に集中し、1基のみ、1号住居と4号住居の間から検出されている。住居群の北東方向からは中期中葉から後葉と晩期の土器が多く出土しているため、どちらの時期に属するものか不明確なものもある。

1号集石 (図版12、写真図版53)

Ⅲb層中で検出された。2・3号埋壘に近接している。10～25cm位の礫がやや崩れているが円形を意識して配置されているようである。中期中葉から後葉の時期と考えられる。

2号集石 (図版12、写真図版53)

Ⅲb層上面で検出された。集石の周囲からは中期中葉から後葉の土器が多く出土している。

3号集石 (図版12、写真図版53)

V層上面で検出された。自然のものか人為的なものか判断が難しい。

4号集石 (図版13、写真図版53)

Ⅲa層上面で検出された。弧状を呈する配石状の集石である。40～50cmの比較的大きな礫が使われている。自然のものか、人為的なものか判断が難しい。

5号集石 (図版13、写真図版53)

礫がU字状に配されているように見える。火砕流に含まれる礫だけでなく、一部川原石も使われている。周囲からは土器などは出土しなかった。自然のものか人為的なものか判断が難しい。

6号集石 (図版3、写真図版43)

1号住居の南側から検出されている。被熱の痕跡が見られる。Ⅲb層中で検出され、中期中葉から後葉の時期と考えられる。

8) 炭 窯

いわゆる伏窯であり、平面形が隅丸長方形を呈する炭窯である。頸南地域は上信越自動車道・国道18号バイパスなどに関係して多数調査されている。この形態の炭窯は覆土中に焼山火山灰(KG-c、10世紀後半頃噴出)の認められるものがあり、平安期の遺構と推定されていた[早津1994]。その後、『関川谷内遺跡I』の報告で、炭化物の放射性炭素による年代測定が行われ、10世紀頃の年代が与えられた[小池1998]。前原遺跡の炭窯の覆土にも火山灰が含まれるものが多く、炭窯の構築年代は平安時代と位置付けられる。

頸南地域で検出される炭窯は長軸に沿った底面に溝を設け、突出部を持つものが多く見られるが、前原遺跡ではこうしたものは確認できなかった。

前原遺跡の炭窯は、平面形は楕円形、隅丸方形のものが多く、掘り込みが地山面にまで及ぶものと黒色土中で終わるものがある。土層はレンズ状を呈し、自然堆積のものが多く、覆土中に火山灰を含むものが多く見られた。下層に炭を含むものが多いが、量的には少ない。以下、特記事項のあるものだけ記載する。

1号炭窯 (図版13、写真図版53・54)

平面形は楕円形を呈する。掘り込みは確認できなかったが、底面に炭化物が残っていたため、炭窯と判

断した。地山面まで、掘り込んでいない。黒色土中に床面がある。覆土上層に火山灰層を確認した。

2号炭窯 (図版13、写真図版54)

平面形は隅丸方形。掘り込みは深く、約40cmで、壁はほぼ垂直である。床面は地山面である。レンズ状の堆積状況を示す。覆土2層に火山灰層が見られる。炭化物層もレンズ状の堆積状況を示す。

3号炭窯 (図版14、写真図版54)

平面形は楕円形を呈する。立ち上がりは比較的緩やかである。床面は地山面である。覆土中層に火山灰層が存在する。下層に炭層が存在した。

4号炭窯 (図版14、写真図版54)

平面形は隅丸長方形を呈する。立ち上がりは緩やかである。床面は地山面にある。覆土中に火山灰層が存在する。床面上に炭化した木片が残っていた。

10号炭窯 (図版15、写真図版55)

平面形は不整形を呈する。しかし、一次調査の段階で東側が削平されているため、本来の形態は不明である。下層に炭化した木片や粉炭を多く検出した。覆土中にわずかに火山灰を含む。

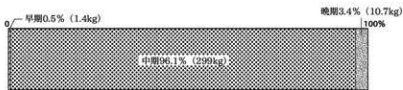
3 遺 物

A 縄文土器

1) 概 要

遺物は、浅箱換算で、119箱出土している。内訳は土器70箱、石器39箱、炭化材等10箱である。

土器は縄文時代早期・中期中葉～後葉・晩期の3つの主体となる時期がある。このほか、縄文時代前期・後期の土器が若干出土している。出土土器の総重量は311.1kgであった。時期別の土器の割合は第2表に示した。圧倒的に多いのは縄文時代中期中葉～後葉の時期で96.1% (299kg)、集落を営んでいた時期に相当する。晩期は3.4% (10.7kg)、早期は0.5% (1.4kg) で少量である。各時期の出土分布状況は第11～13図に示した。主体となる3時期は、ほとんど重なって出土している。出土層位は層序の項で説明したように、晩期の遺物は主にⅡ層から、中期・早期はⅢ層から出土している。



第2表 縄文土器の時期別出土重量比

2) 分 類

土器を時期ごとに分類し、その中で器形・文様などによって細分した。早期・前期・中期・後期・晩期の各時期と時期不明がある。

3) 観察表記入項目

No. すべて通し番号である。遺物実測図・遺物写真・観察表のNo.は対応している。

出土地点(接合関係) 住居跡内の遺物の出土地点については、ドットで取り上げてあるものもあったが、層位を重視して小グリッドと層位を記した。

法量 口径・底径・器高が、実測図で復元できたもののみ記入した。

部位 残存部位について記入した。部位名称は第9図のとおりである。

調整・施文等 施文の工具が推定できるものについては記載した。縄文の方向は施文時の方向である。

焼成・色調 肉眼観察により識別した。

混入物 胎土に混入されている鉱物等を記入した。特定できた鉱物は雲母¹⁾・石英・角閃石(角)・長石などである。砂粒等が多い場合は砂レキと記入した。特定できない混入物については、白色粒子(白)、褐色粒子(褐)などのように色調で表した。

胎土 粘土や混入物の種類によって、9種類にグルーピングした。時期によって特徴が認められたため、各時期の項で説明を加えた。特に重要なものはカラー写真で示した(図版57)。

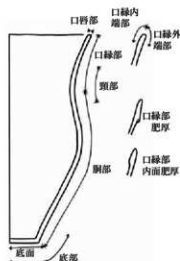
- ① 精良。粒子が細かい。
- ② 粗砂を多量に含む。
- ③ 黒鉛を含む。
- ④ 粒子が粗く、白色粒子を多量に含む。手に砂が残る感触。
- ⑤ 粒子はやや粗め、白色粒子を多量に含む。ボソボソした感じ。
- ⑥ 繊維を含む。
- ⑦ 粒子粗い。石英を多量に含む。
- ⑧ 粒子が細かく、均質。粉っぽい。
- ⑨ 石英・雲母を多量に含む。

備考 炭化物やススの付着、赤彩の有無などを明記した。なお、炭化物については帯状にまわるものについては実測図上に表した。

4) 各 説

早 期

早期は、遺構に伴って出土した土器は存在しなかった。遺構から出土したものはすべて中期の遺構からである。こうした状況と出土分布を示した第11・12図から、早期の遺跡は中期に集落が営まれた段階でかなり擾乱されていた状況が読み取れ、原位置を保っていない土器が多いと考えられる。



第9図 土器の部位名称

1) 従来金雲母と俗称していたもの。

A類 押型文土器 (1~47)

原身長 (cm)	1.25	1.4	1.5	1.6	1.65	1.7	1.9	2	2.2	2.4	2.5	2.8
数量	2	1	1	3	1	2	1	3	2	1	1	1

1種 山形文 (1~41)

第3表 押型文原身長数量比

当遺跡の押型文土器の中で最も多く

を占めるものである。帯状の山形文が横位または縦位または異方向の組み合わせによって施文されるものである。当遺跡では全体の器形を復元できるものはなかったが、口縁は平口縁である。個々の土器から推定する押型文土器の器形は口縁部がわずかに外反し、胴部はわずかに屈曲し、胴下半部が膨らみ、底部ですぼまり尖底部にいたるものである。土器の表面はナデ調整が行われている。内面にまでナデを施すものも見られるが、おおむね内面は凹凸を残しているものが多い。口唇部は平坦に整形されるものが多い。この平坦部分にも押型文が施文されるものも一定量存在する。器壁は5~6mmの薄いものと8~9mmの厚いもの2種類が見られる。文様の原体は様々である。山の高低、幅の広狭によって多くの種類に分類される。また、原体の長さも様々である。原身長は1.2cmから2.8cmまでである。それぞれの数量は第3表に示した。1.6~1.7cmと2.0~2.2cmの2つにピークが見られる。総じて原身長は短めである。外面にススやオコゲ状の炭化物の付着が認められるものが多い。

1~24・41は横位施文である。1・6・8は、横位施文の口縁部である。口唇部は平坦に整形されているが、無文である。9・10・13・18・20a・22は口唇部を平坦に整形した後、同一原体を横位施文している。18は口縁部に外面側からの穿孔がある。24は外面の山形文は密接に施されている。口縁部内面にも押型文が施されるが、口唇部には施文されない。

25~38は縦位施文である。25・26・27・33・36は縦位施文の口縁部である。口唇部は丸みをおびて整形され、無文である。縦位施文のものは、口唇部に施文されるものではなく、整形も平坦には行わない。

39・40は胴部上半が横位、下半が縦位の異方向施文構成をとるものである。39の下半は斜め方向に施文される。横位または縦位施文として分類したものの中にも、両者を組み合わせた施文構成をとるものもあると考えられる。

2種 格子目文 (42・43)

42は長方形区画の格子目文、43は菱形の格子目文である。

3種 楕円文 (ボジ) (44)

44は陽刻の楕円文である。

4種 その他 (45~47)

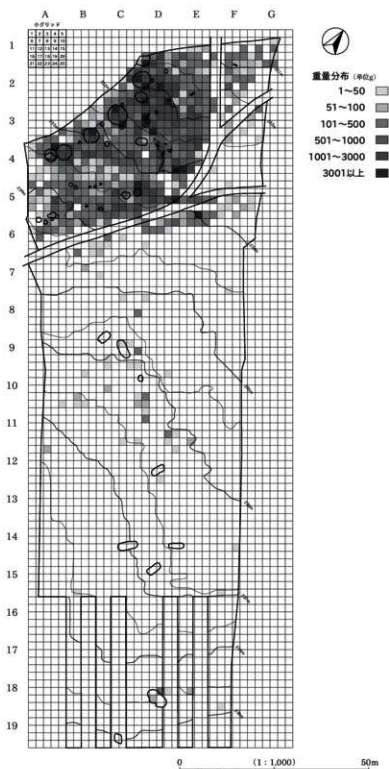
47は無文土器の口縁部であるが、胎土が押型文と同じため、押型文に共存する無文土器と考えられる。

45・46は押型文の底部と考えられる。この2点のみ出土した。45は丸みをおびた鈍角である。46は鋭角な底部である。

押型文土器の胎土は4種類に分類された。多くの土器の胎土は①がほとんどであるが、②は2点(4、21)、③は1点(31)、④は9点(19、20、22、29、34、36、38、42、46)である。白色粒子は多かれ少なかれ、ほとんどの土器に含まれている。黒鉛を含む土器は31の1点のみである。この土器は黒鉛を多量に含み(約30%)、顕微鏡観察で、飛騨地方特有の飛騨片麻岩類を含んでいるため、飛騨地方からの搬入品と考えられる¹⁾。

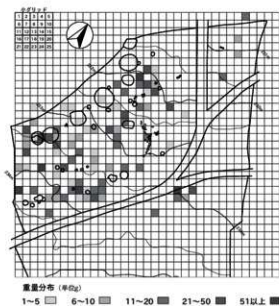
前原遺跡で主体を占める山形文の帯状施文は中部高地の桶沢式土器の段階に位置付けられている。また、

1) 野尻湖ナウマンゾウ博物館の中村由克氏から鑑定していただいた。

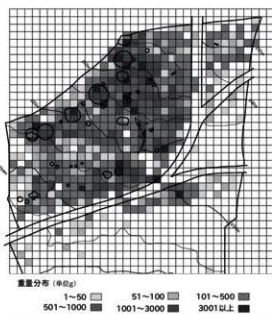


第10図 縄文土器出土分布図

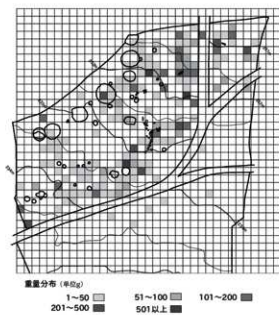
1点のみ(31)、黒鉛を胎土に含む土器があるが、これは沢式土器とされている。沢式土器は岐阜県の沢遺跡を標識遺跡とするが、文様構成は桶沢式と類似し、長野県では沢式と桶沢式は共存することが多く、同時期性の高い土器型式と捉える説もある〔会田1988〕。新潟県内では今まで確認されておらず、初例である。3種の精円文(ボジ)の密接施文は押型文の中でも新しい時期、中部高地の細久保式の段階と考



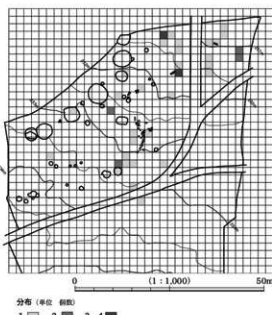
第11図 早期土器出土分布図



第12図 中期土器出土分布図



第13図 晩期土器出土分布図



第14図 土器片円盤出土分布図

えられるが、2種の格子目文は桶沢式の時期と考えられる。前原遺跡から出土した押型文は中部高地の影響を強く受けた桶沢式の時期が主体と考えられる。

B類 沈線文土器 (48)

48は関東の田戸上層式に比定される。沈線文に貝殻腹縁による擬縄文が施される。内面は非常に丁寧に磨かれている。胎土は精良で、白色粒子を含んでいる。

C類 条痕文土器 (49~52)

49の外面は条痕文の可能性が高い。繊維・雲母・石英を多量に含む特徴的な胎土⑨である。50は外面に条痕文が見られる。器壁が1.2cmと非常に厚く、胎土は⑦の大粒の石英を多量に含む粗い特徴的なものである。51は内外面に条痕文が見られ、器壁は最大9mmと薄いが、50と同じ胎土⑦である。条痕文

の土器は石英を多量に含む粗い胎土に共通点が見られる。

前期 (53～60)

縄文施文の土器である。56～58は胎土に繊維を含んでいる。58は関山式期、60は諸磯式期の土器と考えられる。

中期

当遺跡の集落は中期中葉から後葉にかけてのものである。出土した土器の多くはこの時期のもので、大木8b式から大木9a式にかけての時期のものであるが、地理的な要因から、新潟の在地的な土器が少なく、中部高地の影響が強い。上越市山屋敷1遺跡〔上越市史編さん委員会2003〕の出土土器とこの時期の様相は類似している部分がある。しかし、山屋敷1遺跡で見られた北陸地方の影響はほとんど見られない。中部高地の唐草文系土器と、この唐草文系土器から派生したとされる庄痕隆帯文系土器〔綿田1988〕が主体を占めている。このほか、大木系、加曾利EⅢ式、在地の土器などが含まれている。唐草文系土器と庄痕隆帯文系土器は出土した数量も多く、それぞれ、明確に分類することが可能であったため、文様・器形によって細分した。そのほかの土器については、型式・系統を中心に説明を加えた。

胎土については、精良で粒子の細かい①と粒子が粗めで白色粒子を多量に含む⑤の2種類がほとんどである。①にも白色粒子は多少含まれ、中期の土器には多かれ少なかれ白色粒子は混入されているようである。その中で、まれに石英・雲母が多量に含まれる胎土⑤の土器がある(105・121・250・251)。これらは、中部高地からの搬入品の可能性があろう。

分類

A類 唐草文系土器 (第15図)

中部高地の諏訪湖盆地・伊那谷・松本平・千曲川水系で主体的に出土する唐草文系土器のⅢ期に相当する土器が多く出土した。唐草文系土器は、胴部の全面に展開する大柄渦巻文を基調に、その間隙を沈線による綾杉文とその変形文で充たすことが最大の特徴の土器群でⅠ～Ⅳ期に編年されている。器形は大きく3種類がある。A：キャリバー型、B：直線的に外反して立ち上がる口縁を特徴とする器形、C：タル型、の3種類である〔三上2002〕。当遺跡で出土するのは内湾する口縁と蓋受状の口縁部を持つ、樽型の器形のみである。

器形分類

胴部上半がふくらみ、口縁部は内湾する。いわゆる樽型器形である。底部はすぼまるものが多い。口縁内端部に突帯を持つものが多い。

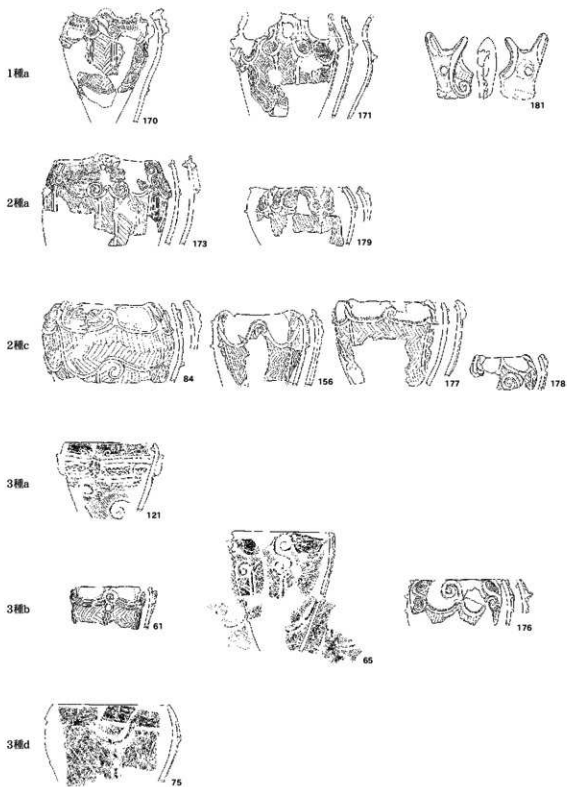
- 1種 大きな把手を持つ波状口縁。
- 2種 隆帯部でわずかに波状を呈する口縁。
- 3種 平口縁。

文様分類

a 口縁部には二つの渦巻状隆帯から立ち上がる粗紐状隆帯と渦巻状隆帯や縦S字状隆帯が施される。口縁部は隆帯により楕円区画され、区画内は斜行沈線や交互刺突文が施文される。口縁部の渦巻状隆帯から垂下する隆帯は蕨手状渦巻文などを形作る。地文には綾杉状沈線が多用される¹⁾。

1) 便宜上、綾杉状沈線と矢羽状沈線をそれぞれ縦位と横位のもの(「く」の字状)として使い分ける。

3 遺 物



第15図 唐華文系土器 (A類) の分類

- b 口縁部には渦巻状隆帯とS字状隆帯が交互に施文される。これをゆるいU字状の隆帯が連結し、口縁部に区画を作る。区画内は無文のものが多く、口縁部の隆帯から垂下する隆帯は大きなU字を描いて口縁部に戻る。地文は横位の矢羽状沈線文が施文される。
- c bとほぼ同様な文様構成であるが、S字状隆帯の代わりに組紐状隆帯が施される。
- d 渦巻が退化し、口縁部無文帯の下にY字状隆帯が付き、粗い矢羽状沈線文が施文される。

1種 a 170・171・181

2種 a 173・179

2種 c 84・156・177・178

3種 a 121

3種 b 61・65・176

3種 d 75

B類 圧痕隆帯文系土器 (第16図)

唐草文系土器の隆帯に圧痕が施されるようになり、このタイプから、圧痕隆帯文系土器が出現したとされている〔綿田1988・1999〕。

器形分類

基本的には平口縁で、渦巻部のみ小突起状を示すものがある。大きく4種類の器形がある。口縁部内面が肥厚するもの、突帯を持つものが多く見られる。

1種 口縁部は外反して立ち上がり、頸部でくびれ、胴部はやや張る。

2種 器形がほぼ直線的に外方へ開くものでバケツ状を呈する。

3種 胴部はほぼ直に立ち上がり、口縁部は外反する。

4種 胴部上半がわずかにくびれ、胴部がわずかに張る。寸胴型。

文様分類

a 口縁部に横走する圧痕隆帯が回り、渦巻・Y字状隆帯などが4対象に配される。垂下する隆帯は逆V字やU字・「コ」の字などが連結した文様区画を作り、波状沈線・縄文・条線などの組み合わせによって施文される。

b 口縁部に横走する圧痕隆帯が回り、この隆帯から口唇部に向けて巻き上げる渦巻文が4単位に施される。また、この渦巻文の直下に圧痕隆帯が垂下し、蕨手状渦巻文が施される。

c 2種とほぼ同様な文様構成をとるが、横走する圧痕隆帯は一周せず、口唇部に渦巻文を立ち上げる側と垂下する側に分かれる。

d 口縁部に横走する圧痕隆帯が一周し、口唇部に巻き上がる渦巻文が4単位施される。垂下する圧痕隆帯はない。

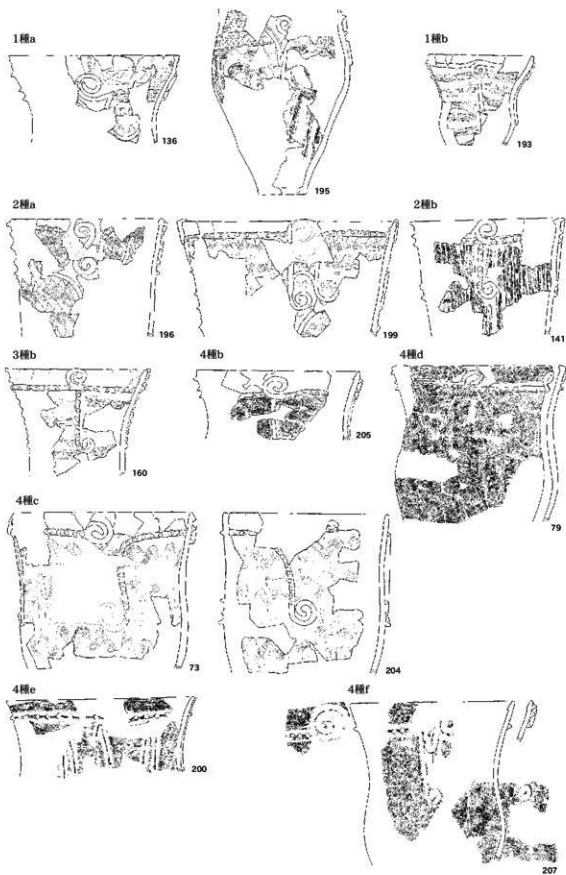
e 口縁部に横走する圧痕隆帯が一周し、逆V字状の隆帯が垂下する。口唇部に巻き上がる渦巻文の有無は不明である。

f 口縁部に横走する圧痕隆帯が一周し、4単位に縦区画の渦巻文が配置されている。

bからfの胴部文様は、櫛歯状工具による条線や帯縄文が多用される。条線も、帯状の縦位・横位のものが多く、波状を描くものもある。帯縄文にも縦位と横位のものが見られる。

1種 a 136・195

1種 b 193



第16図 庄痕隣帯文系土器 (B型) の分類

2種a 196・199

2種b 141

3種b 160

4種b 205

4種c 73・204

4種d 79

4種e 200

4種f 207

C類 大木系土器

1種 大木8b式 (153)

多くの出土はなかった。5号フラスコ状土坑から出土した153が良好な資料である。口縁部を欠いているが、器形は口縁部が内湾し、頸部がくびれ、胴部が張り出すものである。蕨手状隆帯の連結によって器面全体を区画施文し、区画内には縄文を充填している。隆帯は断面かまぼこ型のなだらかなもので、大木8b式の特徴とされる〔水沢2003〕。大木8b式でも新しい段階と考えられる。

2種 大木9a式 (104・212・213)

やはり、量的には少ない。5号住居の1層から出土した104が好資料である。大木8b式よりも縦区画を意識した蕨手状隆帯によって区画される。区画内は縄文が充填施文される。隆帯は大木8b式よりも断面三角形で鋭角である〔水沢2003〕。212・213も大木9a式で、隆帯は断面三角形で鋭角である。

3種 在地系a (208・209)

口縁部が外反し、頸部がわずかにくびれ、胴部がわずかに張り出す。半截竹管による半隆起線文により腕骨文などが描かれる。208は綾杉状沈線を地文とする。209は縄文である。208、209は信濃川中流域の柵倉Ⅱ式に対比できる在地的な土器と考えられる。208は腕骨文などから、大木8b式の新段階と考えられる。

4種 在地系b (149・210・211・214～218)

口縁部が4単位の大きな波状を呈する。口縁部は外反し、口唇部でわずかに内湾する。波頂部には渦巻文が施され、地文は縄文RLが縦方向に施文される。口唇部に沿って隆帯と沈線が巡る。渦巻文からは隆帯が垂下する。当遺跡で、多くの出土があった。上越市山屋敷Ⅰ遺跡でも類似がある〔上越市史編さん委員会2003〕。大木8b式～大木9式期の土器と考えられるが、大きな波状を描く口縁部など、かなり変容が見られ、在地化されている。

5種 在地系c (143・220・221・223)

地文に縄文をもたないが、文様パターンは4種と同じものである。

D類 加曾利E式系土器 (226・227)

227は口縁部文様帯が残るが、渦巻きは退化し、隆帯の円形区画のみとなっている。胴部の懸垂文は、単位数が多くH字状を呈する部分もある。区画内は充填縄文である。226の器形はキャリバー形である。口縁部文様帯が明確に残り、文様は蕨手状の半隆起線文と縄文が充填施文された楕円区画文である。胴部は逆U字の懸垂文が施され、区画内を充填縄文される。両者共に、加曾利EⅢ式の古い段階と考えられる。

E類 沈線文

沈線のみによって描かれた土器群である。比較的小型の土器に多く見られるようである。69・228・

230・231などである。69は渦巻文が平行沈線によって連結されるという唐草文系土器の文様モチーフが施文されている。229は渦巻きを描いているが、かなり退化している。230は小型の有孔罎付土器の口縁部である。231は綾杉文などが退化した沈線文が描かれる。口縁部が内湾し、口縁部内面に蓋受け状の突帯が付く。228～231も唐草文系土器の文様モチーフに類似している。232は沈線と列点状突帯によって文様が描かれている。中期中葉から後葉にかけての時期のものと考えられる。

F類 縄文

縄文地文の土器は、全面に縄文を施文するものは少なく、帯状に施文されるものが多い。口縁部から底部まで縦位の帯縄文が施文される135のようなものもある。圧痕降帯文系土器の胴部にもこの縄文が施文される場合(79・83)が多い。当遺跡よりも後出と考えられるが、屋代遺跡群〔水沢ほか2000〕の圧痕降帯文系土器にも縄文の帯状施文が多数見られる。また、数は少ないが、236・237のように結節縄文が施される場合もある。

1種 縦位帯縄文

135は口縁部から底部まで施文される。167は口縁部から胴部にかけて施文される。167の口縁部文様は不明であるが、圧痕降帯文系土器にはならない粗製の土器と考えられる。239のように垂下する隆帯も施され、降帯上にも縄文施文されるものもある。88のように縦位の波状の沈線を伴うものもある。これは、唐草文系土器に伴うとされている〔綿田1988〕。

2種 横位帯縄文

圧痕降帯文系土器の中に胴部上半は横位施文、胴部下半は縦位施文のものが屋代遺跡群などに多く見られる。当遺跡でも破片資料にこうしたものが散見される(68・206)。これは圧痕降帯文系土器の胴部破片と考えられる。横位帯縄文は、山屋敷1遺跡にも見られるが、県内ではほかに類例はないようである〔寺崎2003〕。

G類 条線文

櫛歯状工具の押し引きによる条線地文の土器も多く見られる。これも、圧痕降帯文系土器の地文に多用される地文様である。

1種 縦位全面施文

72・242・243・244のように口縁部を肥厚させ、無文帯を設けその下位に縦位に条線を施文する。246は口縁に肥厚部がなく、口縁外端部から条線が施文される。

2種 縦位波状全面施文

1種と同様に口縁部を肥厚させ、無文帯を設ける67のような例がある。

3種 縦位帯状施文

連続して長く押し引きするもの(247)と不連続で短く切られるもの(248)がある。

4種 異方向の帯状施文の組み合わせ

4号住居の埋甕78は、胴上半部が横位、胴下半部が縦位である。7号住居2層の134は、体部が直線的に外方に開くあまりない器形であるが、縦位に施文した後、横位に施文し、部分的に重なっている。139は短い条線を綾杉状に施文している様子が見える。

5種 条線地文上に沈線文。80

6種 渦巻状条線の連続。92

7種 その他

H類 無文

口縁部が内湾する無文土器が見られる(66・252～254)。口縁部と胴部の境界部に沈線を設けたり(252)、口縁部をわずかに肥厚させ、胴部との境に段差を設けるもの(66・253・254)などがある。唐草文系土器の樽型に類似した器形で、3種dの75に見られる口縁部と胴部の段差などから、唐草文系土器に伴う無文土器と考えられる。255は無文の深鉢である。

256は丸みを帯びた端部を持つ底部である。底径は小さいが、前原遺跡の土器は66・154・170・195に見られるように土器上半部の大きさの割合に底部の小さいものが多く、これもその一つとみなされる。

257は台付き土器の台の部分である。おそらく深鉢の台付き土器であろう。

I類 その他

249は、口縁部に渦巻状の隆帯が施文され、地文は棒状工具による雨滴状刺突文である。250は口縁部外面に横方向の列点状の刺突が施されている。251は口縁部に細い粘土紐を縦列に貼付したもので、粘土紐の下の方に圧痕が施される。地文は縄文である。

遺構出土

遺構から出土した土器について、説明を加える。なお、包含層出土の土器も含め、個々の説明は観察表を参照のこと。

1号住居(61～73)

61・62は住居の周溝覆土から入れ子状で出土した土器である。61は唐草文系土器、62は縦位の帯縄文の土器である。61・62以外は住居覆土からの出土である。下層の焼土層以下から出土した土器はほとんどない。住居焼失後、廃棄された土器が多いと考えられる。61・65・70は唐草文系土器である。61は3種bで、3本隆帯が比較的古い様相を残している。65も3種bである。70は渦巻状隆帯の下に組紐状隆帯が付き、隆帯による楕円区画上に細かなキザミが付けられ、古い様相を示している。63・64・68・71・73は圧痕隆帯文系土器である。73は4種cである。67は口縁部を肥厚させ、胴部は条線を縦位波状に施す。69は沈線文様を施すものである。

埋喪や2・3層出土の唐草文系土器は比較的古い様相、上層のⅢ・Ⅳ層出土の圧痕隆帯文系土器は新しい様相を示していると考えられる。

3号住居(74～77)

すべて2層からの出土である。75は唐草文系土器の3種dで、文様の崩れた様子から唐草文系の最終段階のものと考えられる。74は口縁部を欠き、割れ口はミガキがかかっている。胴部の矢羽状沈線文は形態化が見られ、75と同時期と考えられる。

4号住居(78～83)

78は住居に伴う埋喪である。口縁部と底部を欠いているが、胴部上半に条線が横位帯状に、胴部下半には条線が縦位帯状に施文される。この文様構成は圧痕隆帯文系の142などに見られるものである。屋代遺跡群[水沢2000]などでも多く見られる。ほかは2層からの出土である。79と83の圧痕隆帯文系土器は4種dに分類され、文様構成や地文の縦方向の帯縄文などからほぼ同時期と考えられる。

5号住居(84～112)

84は住居床面に設置された状況で出土したものである。掘り込みはなかった。ほかはすべて覆土からの出土である。85～92は4層、93～99・104・108は3層、100～103・105～107・109～112

は1層からの出土である。

84は唐草文系土器2種cで、胴部の矢羽状沈線は浅く施文される。隆帯に沿った沈線との切り合いは一樣ではない。85・86は庄痕隆帯文系土器である。85は4種eである。3層出土の93・94は唐草文系土器である。共に古い様相を示している。1層は104が大木9a式、109は在地系と考えられる。

6号住居(113～116)

すべて1層からの出土である。113の口縁部は渦巻状隆帯や内面に見られる突起などから庄痕隆帯土器、114は庄痕隆帯文系土器2種aによく見られる文様である。115の条線文様は庄痕隆帯文系1種aの195に見られる条線文様に類似している。

7号住居(117～136)

117～120は3層出土、121から134は2層出土である。119は唐草文系土器と考えられる。120は大木系である。121は唐草文系土器の3種aである。136は庄痕隆帯文系の1種aである。胴部には縦位帯縄文が多く見られる(131・132・135)。

8号住居(137～141)

137は炉内覆土から出土した。138・139は1層からの出土である。140・141はⅢb層からの出土である。141は庄痕隆帯文系2種である。胴部は縦位の条線が密接に施文される。

1号が状遺構(142～152)

142は最下層の8層から出土した庄痕隆帯文系土器4種dである。地文は胴上部が横位の条線の帯状施文、胴下部は縦位条線の帯状施文である。143から147まで出土層位不明である。148から152までは1層出土である。149は在地系の縄文地文の土器である。148は庄痕隆帯文系である。

5号フラスコ状土坑(153～166)

53～155は2層から出土している。160はⅡ・Ⅲ層出土、ほかは出土層位不明である。153は大木8b式新～大木9a式古段階である。155から159は唐草文系土器と考えられる。156は唐草文系土器2種cである。160は庄痕隆帯文系土器3種bである。161は庄痕隆帯文系土器と類似している。

2号埋甕(167)

口縁部・底部を欠いている。胴部が膨らむ器形である。縦位帯縄文が施文される。集落の時期と同じと考えられる。

3号埋甕(168)

無文の底部である。底部のつくりは端部に丸みを帯び、集落の時期と同じである。

後 期(258～266)

後期に属する土器は少量である。図示したものがほぼすべてである。前業から末業までの時期がバラバラと出土した。258は口縁部が外反し、頸部で強くくびれ、胴部が球胴型を呈する甕である。太い沈線によって曲線文様が描かれる磨消縄文である。259は曲線の沈線文によって文様が描かれる。内外面とも丁寧に磨かれ、赤彩されていた痕跡が残る。共に後期前業の堀之内式に併行するものと考えられる。260は縄文施文後沈線によって文様が描かれるものである。加曾利B2式に併行する。261は大きな波状口縁で磨消縄文によって文様が施文される。瘤付土器に併行する時期と考えられる。262は口縁内端部に突帯が付され、口縁部には無文部の下に平行沈線が描かれる。263は、球胴部で、沈線で区画された中がさらに斜行沈線文で充填されている。262・263は後期前業から中業にかけての時期と考えられる。

264～266は後期末葉から晩期初頭に比定されるものである。長野市中ノ沢遺跡で確認された陸帯土器が含まれる〔百瀬1994〕。264は小突起の波状口縁部に陸帯が貼付され、陸帯上にキザミが入る。265も波状口縁で口縁内面に突帯を持つ。266も大きな波状口縁で口唇部が肥厚している。口縁部には横位の平行沈線が引かれる。

晩 期

晩期の土器は一定量出土した。中部高地の編年に沿うと晩期の前葉から中葉にかけて、佐野Ⅰ式（大洞BC式・C式併行）を中心とする段階と、晩期後葉女鳥羽川式（大洞A式前半併行）と離山式（大洞A式後半併行）の段階の遺物が見られた。女鳥羽川式は佐野Ⅱ式の系統を母胎として東北、東海、新潟の鳥屋Ⅰ式からの影響で成立したとされている。離山式は女鳥羽川式の伝統に新潟の鳥屋Ⅱa式からの影響を強く受けているとされている〔中沢1998〕。前原遺跡で特に主体となるのは女鳥羽川式段階である。290の1号埋甕は女鳥羽川式の段階のもので、この時期には遺構を伴っていたことが確認できる。この時期には中郷村和泉A遺跡〔加藤・荒川1999〕が良好な資料を提示している。また、佐野Ⅰ式については、中郷村上中島遺跡〔土橋1999〕に一括資料がある。胎土は早期・中期の時期と同様に、白色粒子と砂礫を含む①がほとんどである。まれに雲母を多量に含むものや、大粒の石英を多量に含むものが見られた。これらは、中期と同様搬入品の可能性がある。

後期・晩期の粗製の深鉢で時期を明確にできなかったものは「後晩期時期不明」として最後にまとめた。

晩期前葉から中葉 佐野Ⅰ式段階（267～278）

佐野Ⅰ式は、変形した三叉文が多用される時期である。Ia、Ib式に細分されているが、判断がつきかねるためⅠ式とした。粗製の深鉢の口縁部には幅広いの平行沈線が多用される。

267は胴部が張り出す甕で、胴部上半に沈線によって三叉文が描かれている。上下には平行沈線と刺突による列点文が描かれる。268も「く」の字状に屈曲する甕の胴部で、胴部上半に三叉文が磨消縄文によって描かれる。三叉文の脚部は若干はねあがる。沈線は太い棒状工具で施され、三叉文の上下の列点文も同工具による押し引きである。胴部下半は雑に磨かれている。267は268より三叉文などに若干古い様相を示している。共に佐野Ⅰ式の時期のものであろう。269は沈線による工字文が描かれ、外面に赤彩の痕跡が残る。270は口唇部に沈線文が施される浅鉢と思われる。271から277は粗製の深鉢で、体部上半がわずかにくびれるもの（271・273・275）と砲弾形のもの（276・277）がある。口唇部に沈線文を持つもの（275）がある。口縁部内面に幅広い沈線が1条または数条巡るものが多い。278は壺の胴部で無文である。269～278は、おおよそ晩期の前葉から中葉にかけての時期のものと考えられる。

晩期後葉 女鳥羽川式段階（279～300・302～304）

眼鏡状の付帯文、工字文を持つものなどがある。器形は深鉢・浅鉢・壺が見られる。口縁部には数条の細い平行沈線が多用される。

279～291は深鉢で、精製のもの、口縁の内外面に数条の沈線を持つものが多い。粗製の深鉢や甕には外面に1条の沈線が見られる。粗製の深鉢の器形は肩が張るものが多くなる。290に見られる器形は東海地方の突帯文系からの影響と考えられる。279・283の胴部には変形工字文や眼鏡状付帯文が見られる。281の口唇部には三叉状の袂が入っている。292～297は精製の浅鉢である。浅鉢は292・293のように肩が張るものと、294～297のように内湾するものがある。口縁部外面には数条の平行沈線が見られ、内面には1条の沈線が施される。293は肩部に拓本ではわかりにくい、工字状の付帯文が

見られる。扶りが入り、眼鏡状に移行する段階のものである。294の内面には三叉状文が見られる。294・297のように口縁部に穿孔の見られるものもある。298から300・302から304は壺である。299は算盤玉型の器形で、口縁部が肥厚する。和泉A遺跡上層に類例が見られる。300の口縁部には眼鏡状の沈線が施される。

晩期後葉 離山式段階 (301・305～307)

浮線文が発達する時期である。305の副長の鉢は外面全体が浮線網状文によって施文される。器壁が非常に薄く、外面は赤彩されている。和泉A遺跡上層に類例が見られる。301は、外面が赤彩された大型の壺である。壺が変化してできたもので、大型の壺はこの時期に現れる。306は粗製の大型の深鉢で口縁部は外反し、肩部が張り、底部がすぼまる器形である。口縁部の内外面に1条の沈線が巡る。307は鉢の底部である。底面がわずかに上げ底状を示している。306・307は、離山式の段階に伴うものと考えられる。

後晩期時期不明 (308～313)

308・309は縄文Lが施文され、内面は擦痕が見られる。309には結節がある。粗製の鉢と考えられる。310は口縁部に無文帯を設け、胴部には縄文LRを縦走させている。富山県滑川市の本江遺跡から出土した後期後半の土器に縦走する縄文が施文される一群があり、注意したい〔小島1979〕。311～313は鉢の底部である。313の底面は細かい網代の痕跡がある。

時期不明 (314～317)

314～316は、色調が灰白色で、軽い焼き上がりの土器である。314は小突起を持つ波状口縁の鉢で、口縁部には横位平行沈線文に縦位の斜行沈線が施される。315は口縁部外面に1条の沈線が巡る鉢である。316は底部で底面には網代痕が残る。314～316はほかの土器と色調・焼成・胎土が全く異なり、搬入品と考えられる。3C・5C・4Dなどから出土しているが、中期・晩期共に遺物の出土の多い地点であり、時期も確定できなかった。317も時期・器種も不明である。

B 土製品

土器片円盤 (318～333)

遺跡からは総数44点出土している。出土分布は第14図に示したように住居のある部分よりもその周囲に多く分布する傾向にある。また、中期中葉から後葉の時期と晩期の土器分布状況にはほぼ重なっている。土器片円盤の素材となる土器片も両者の土器が見られる。出土している土器片円盤は、中期と後晩期に属するものが混在していると考えられる。

土器片円盤は、土器片を素材として加工されたものであり、実用品としてとらえられることが多くなっている〔藤巻1989〕。

土器片円盤を観察すると、次のように分類される。

- 1類 土器片の周囲を円形に打ち欠いたもの (318～323)。
- 2類 打ち欠いた部分に磨痕が見られるもの (324～328)。
- 3類 全周に磨痕が見られ、磨耗し、小型化したもの (329～333)。

これらは、1類が何らかの目的のための道具として製作されたもの、2類はこれを使い始めたもの、3類はかなり使い込んだものと考えることができよう。

C 石 器

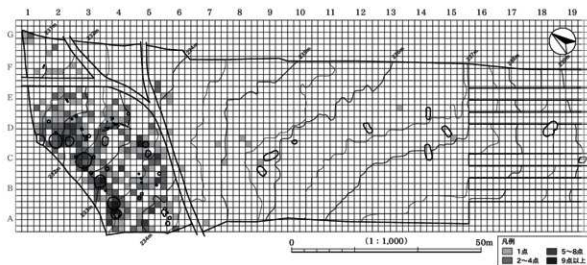
出土した石器は第4表のとおり、石器器種で11種類・259点、石織失敗品12点、剥片類294点、石核6点、総計571点である。このうち遺構内からは114点(20.0%)、遺構外457点(80.0%)の出土が圧倒的に多い。遺構内出土のものは住居跡からのものがほとんどで、覆土から出土している。調査区内における石器の出土分布は、遺構や土器の分布とほぼ一致し、調査区北西部の1~6・A~Gグリッドの範囲にほぼ収まる。この範囲内では2~4・A~Dグリッドの住居跡が南北方向に分布する範囲に集中する。

遺構・土器の時期は中期中葉~後葉が主体であるものの、早期前葉(押型土器期)、後期、晩期前葉~後葉も認められ、多時期にわたる。したがって、器種も多器種にわたる。これらの中で敲磨石類、不定形石器、磨製石斧、打製石斧の出土数が多く、石織、砥石、両極剥離痕のある石器が一定量認められる。石錐、石匙、石皿などは極めて少ない。

以下、器種ごとに特徴的な事柄について説明する。

	石織	石錐	石匙	両極剥離痕のある石器	不定形石器	打製石斧	局部磨製石斧	磨製石斧	敲磨石類	石皿	砥石	小計	石織失敗品	剥片類	石核	石聯合計	石冠類	玉	石製品合計
遺構内出土	3			2	12	11	1	14	13		3	59	2	51	2	114	1		1
遺構外出土	18	4	1	11	39	27		33	53	2	12	200	10	243	4	457	4	1	5
合計(点)	21	4	1	13	51	38	1	47	66	2	15	259	12	294	6	571	5	1	6
百分率(%)	8.1	1.5	0.4	5.0	19.7	14.7	0.4	18.1	25.5	0.8	5.8	100.0	-	-	-	-	-	-	-

第4表 器種別石器・石製品出土数



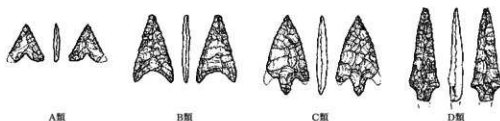
第17図 石器出土分布図

1) 石 織 (334~344)

尖頭状の狩猟具の一つで尖頭部・側縁部・基部(脚部)が作り出され、左右ほぼ対称形のもの石織とした。21点出土している。

分類 出土土器が多時期にわたることから、様々な形状を示す。細分類は基部形態(茎の有無)[鈴木1981]を基準とし、側縁部の形状を加味して行った。

A類(334~336) 無茎織で、側縁部が大きく開くものである。したがって、尖頭部先端と脚端部を



第18図 石鏃分類図

結んだ平面形は正三角形に近くなる。脚部は幅広で、端部は尖らない。比較的深く・大きな抉りは、押型文土器期に伴う鏃形鏃に近似する。図示していないものも含め、薄手で丁寧な作りである。

B類 (337～339) 無茎鏃で、側縁部の開きが小さいものである。したがって、尖頭部先端と脚端部を結んだ平面形は二等辺三角形に近くなる。脚部は漸次すぼまり、尖る。脚部の抉りは、弧状を呈する。337にはアスファルトが付着する。

C類 (340～342) 有茎鏃で、側縁部が比較的大きく開くものである。茎部を除いた平面形は側縁部の開く大きさにより正三角形、ないしは二等辺三角形になる。

D類 (343・344) 有茎鏃で、側縁部の開きは弱く、長さが長いものである。茎部を除いた平面形は鋭角な二等辺三角形になる。344にはアスファルトが付着する。

21点のうち、A類8点、B類5点、C類5点、D類2点、分類不可1点である。

分 布 遺構・土器の分布と同じく調査区北西部の2～5・A～Dグリッドに分布するものの、A類はA・B列に多く押型文土器の分布と一致する。

法 量 様々な形状のものが存在するが、おおむね次のことが言える。A類は長さが短く、厚さは薄い。B類は長さが長く、厚さは比較的薄い。C類は長さが様々であり、厚さは厚い。D類は長さが長く、厚さが厚い。したがって、A類が最も軽く、次いでB類であり、C・D類は重いものが多い。

石 材 黒曜石10点、黒色緻密安山岩5点、頁岩3点、チャート・メノウ・流紋岩各1点である。地元石材の黒色緻密安山岩、長野県からの搬入石材の黒曜石を多用している。

その他 各分類の帰属時期については、A類は形状・分布から早期前葉の押型文土器期に属する。当地における有茎鏃の一般化は後期中葉以降 [鈴木1981] と推定されることから、B類の無茎鏃は中期中葉～後葉、C・D類の有茎鏃は後期中葉以降と推定でき、遺物量を勘案すれば晩期中葉～後葉と考えられる。

2) 石鏃失敗品 (345～349)

従来、石鏃未成品と呼称されていたものである。小型の剥片に主に押圧剥離の二次調整が施され、定形石器でないものを石鏃失敗品とした。不定形石器とは大きさ、厚さ、二次調整、使用痕の有無などで、ある程度区別される。また、石鏃完成品と見比べた場合、素材、大きさ、二次調整などから、将来的に石鏃を意図して製作されたと推定されるが、何らかの理由で製作を断念 (失敗) [阿部2000] したと考えられるものである。12点抽出した。

図示したものはいずれも二次調整が周縁の半周以上に及び、ある程度完成品の形状が推定できる。345～347・349は有茎鏃、348は無茎鏃の失敗品と考えられる。

分 布 遺構、土器、ほかの石器の分布とほぼ同じく、2～5・A～Eグリッドの範囲に取まる。

法 量 長さ・幅・厚さ・重さの平均値は、いずれにおいても石鏃に比べやや大きい。

石 材 黒曜石8点、頁岩3点、黒色緻密安山岩1点で、石織の石材選択とはほぼ同じ傾向といえる。

3) 石 錐 (350～352)

剥片の一部または全面に二次調整を加え、錐部を作り出している石器である。4点出土している。350は錐部先端は欠損するが、丁寧な二次調整が施され、明瞭なつまみ部が作り出されている。351・352は小型でやや厚手の素材を用い、錐部を中心に二次調整が加えられている。いずれも錐部は使用のため磨耗している。石材は黒曜石2点、黒色緻密安山岩1点、頁岩1点である。

4) 石 匙 (353)

柄のあるつまみと刃部を有する剥片石器である。1点のみの出土である。353は横長剥片の打面側の一部に二次調整を加え、つまみ部を作り出している。底縁を刃部とするが、素材の形状を生かして二次調整は多くない。刃部の片端部は欠損するが、遺存する一方はやや尖頭気味に仕上げられている。黒色緻密安山岩製。

5) 両極剥離痕のある石器 (354～356)

13点出土している。2個1対の作業部を持つもの10点(354・355)、4個2対の作業部を持つもの3点(356)である。出土数が少なく分布は散漫であるものの、調査区南西部(3～5・A～Bグリッド)にやや集中する。石材は黒曜石9点、黒色緻密安山岩2点、チャート・凝灰岩各1点である。黒曜石をはじめ、いずれも小型の剥片・削片である。

6) 不定形石器 (357～375)

剥片を素材とし、刃部と思われる部分に二次調整や使用痕が認められる不定形な石器である。51点出土している。器種石器の中では敲磨石類に次いで出土数が多い。

分類 刃部形状の違いにより細分類した。刃部が2か所以上あり、それぞれの刃部形状が異なる場合は、より主要と思われる刃部を優先した。

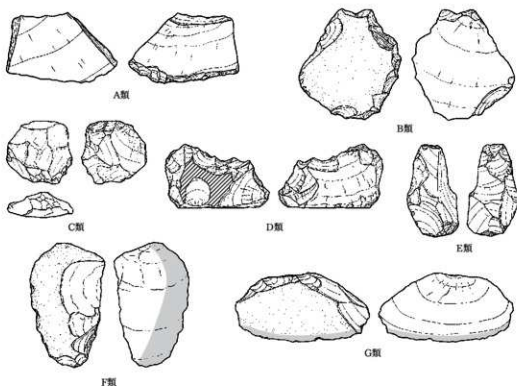
A類 (357) 連続的な押圧剥離による滑らかな長い刃部ラインを持つもの。片面調整のため、刃部断面形は片刃となる。従来からスクレイパー、搔・削器などと呼ばれていたものに相当する。

B類 (358・359) 連続または連続状の剥離により鋸歯状の刃部を持つもの。片面・半両面調整のため、刃部断面形は片刃が主体となる。従来から鋸歯状石器・デンティキュレイトと呼ばれていたものに相当する。

C類 (360～362) 両面から連続または連続状の剥離のあるもの。両面調整のため両刃が主体となり、側面観もジグザグ状を呈するものが多い。両面の調整には、①交互剥離のほか、②片面の連続剥離後に一方の片面に連続剥離するものがある。②はA類の刃部再生の可能性も指摘できるが、明確に区別できないためC類に含めた。

D類 (363・364) 袂入状の刃部を持つもの。従来から袂入石器、ノッチと呼ばれていたものに相当する。片面・両面のいずれの調整も存在する。

E類 (365) 素材の端部に連続または連続状の剥離による刃部を持つもの。従来からエンドスクレイパー・搔器と呼ばれていたものを含む。A類の刃部が側縁から端部まで長いのに対し、E類の刃部は端



第19図 不定形石器分類図

部に限られ短い点で区別される。

F類 (366～371) 不連続な剥離の刃部を持つもの。

G類 (372～375) 刃部に二次調整がないものの、使用の結果と思われる剥離・微細剥離・磨耗・光沢などの使用痕が認められるもの。

51点の内、A類1点、B類2点、C類7点、D類4点、E類1点、F類20点、G類10点、分類不可6点である。丁寧な剥離を持つ刃部は極めて少なく、粗雑な不連続剥離の刃部、無加工の刃部を持つ石器が多い。

分 布 調査区北西部の2～5・A～Dグリッドの範囲に多く分布する。中でも1号住からの8点を含め、3Bグリッドから13点と多いのが特筆される。

石 材 黒色緻密安山岩・凝灰岩各15点、頁岩7点、黒曜石5点、砂岩4点、角閃石安山岩・流紋岩各2点、メノウ1点である。在地石材の黒色緻密安山岩・凝灰岩が極めて多く使用され、頁岩、黒曜石、砂岩も一定量使用されている。

なお、黒曜石は石鏃、石錐、両極剥離痕のある石器など小型の剥片石器に多用されるが、不定形石器、石匙などの中型～大型の剥片石器では使用が少なくなる。

7) 打製石斧 (376～390)

比較的大型の扁平礫や剥片を素材とし、両面調整により斧状に仕上げた石器である。38点出土している。

分 類 打製石斧は通常、直接打撃の剥離によって製作されるが、本遺跡では剥離調整後に研磨や敲打調整が行われているものが一定量認められた。したがって、製作方法により細分した。

A類 (376～384) 側縁の「つぶし」を除き、剥離調整のみで製作しているもの。



第20図 打製石斧分類図

B類 (385～389) 剥離調整後、正裏面や側縁に研磨調整を行い製作しているもの。

C類 (390) 剥離調整後、側縁の「つぶし」を除いた正裏面に敲打調整を行い製作しているもの。

B・C類は打製石斧や磨製石斧の定義と比較すると、研磨や敲打が行われていることから磨製石斧や同未成品に近くなる。しかし、本遺跡で出土する磨製石斧の石材とはまったく異なること、研磨・敲打が部分的で磨製石斧のそれとは大いに異なること、打製石斧A類とは石材・剥離調整、また刃部や基部の使用痕(擦痕・磨耗痕)がまったく共通することから打製石斧とした。

38点のうち、A類16点、B類11点、C類5点、分類不可6点である。

分布 遺構、土器、ほかの石器の分布とほぼ同じく、調査区北西部の2～5・A～Eグリッドの範囲にはほぼ分布する。

石材 凝灰岩18点、砂岩10点、頁岩4点、粘板岩3点、流紋岩2点、蛇紋岩1点であり、在地の堆積岩を多用している。

その他 側縁の稜線をつぶしているいわゆる「つぶし」調整が28点(74%)も認められた。研磨や敲打のある石斧とともに、側縁の「つぶし」の多さは本遺跡の打製石斧の特徴として指摘できる。

8) 局部磨製石斧 (391)

1点のみの出土である。刃部破片であり、ほぼ全面敲打後、刃部の一部が研磨されている。平面形円刃、断面形弱強片刃【佐原1977】で、刃部先端は使用のためか刃こぼれしている。蛇紋岩製。本遺跡では早期前葉(押型文土器期)に伴うものと考えている。

9) 磨製石斧 (392～406)

47点出土している。すべて定角式磨製石斧で小型品から大型品まで様々である。なお、破損後、再加工されたものや敲石に転用されたものも認められるが、磨製石斧として器種分類した。

分類 完成品は平面形状、大きさにより細分類した。なお、破損後、再加工されたものや敲石に転用したものは別分類とした。

A類 (392～406) 刃部と基部の幅に大きな差がないもの。平面形は短冊状を呈する。本遺跡で出土している磨製石斧のほとんどがA類に属する。したがって、A類はさらに大きさ(長さ・幅)により細分類した。

A1類 (392～394) 長さ9.5cm以上、幅5.0cm以上のもの。いわゆる大型品である。

A2類 (395～397) 長さ5.0cm以上9.5cm未満のもの。幅2.5cm以上5.0cm未満のもの。いわゆる中型品である。

A3類 (398・399) 長さ5.0cm未満、幅2.5cm未満のもの。いわゆる小型品である。2点のみの出土である。

A4類 (400) 破損後、再製作されたため上記の分類基準に合わないもの。1点のみの出土である。400はもともとはA2類と推定できるが、破損後再加工され長さ4.6cm、幅3.4cmという長さの極めて短い石斧になっている。

B類 (401・402) 刃部と基部の幅に大きな差があるもの。平面形はバチ型を呈する。2点のみの出土である。

C類 (403・404) 破損後、再製作されているが完成していないもの。したがって、再製作の途中、何らかの理由で再製作を断念(失敗)したものである。

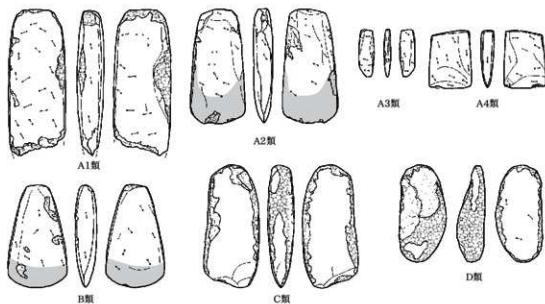
D類 (405・406) 破損後、他器種に転用されたもの。すべて巖石に転用されている。

47点の内、A類26点(A1類7点・A2類15点・A3類2点・A4類2点)、B類2点、C類7点、D類6点、分類不可6点である。平面形が短冊状を呈するA類が主体を占める。なお、分類不可の6点は破片であるものの、石材や研磨状況から磨製石斧と判断できるものである。

分 布 遺構、土器、ほかの石器の分布とほぼ同じく、調査区北西部の2～5・A～Eグリッドの範囲にほぼ分布する。中でも住居跡が列状に検出された2D～4Aグリッドの住居跡内外から多く出土した。

石 材 47点の内、蛇紋岩41点、凝灰岩3点、輝緑岩2点、ひん岩1点である。本遺跡から約30kmと比較的近い距離にある糸魚川地方に産する蛇紋岩でほぼ占められる。また、すべて完成品・使用品で出土し、素材・未成品などが見られないことから成品として搬入されたものと推定できる。

その他 B類はバチ型を呈するが、石斧の平面形として中期から晩期にかけて短冊状からバチ型への変化が指摘されている〔阿部1987〕ことから晩期に属し、このほかの多くは定角式の短冊状を呈することから、土器が主体的に出土した中期中葉～後葉期に多くが属するものと考えている。



第21図 磨製石斧分類図

10) 敲磨石類 (407～423)

片手ないしは両手を揃えて把持できる大きさの礫の表面に調整や使用の結果と推定される敲打痕や磨痕が認められる石器である。凹痕は敲打痕の集中として理解し、敲打痕に含めた。66点出土し、器種石器の中では最も多い。

分類 早期中葉～後葉に多出し、いわゆる「特殊磨石」と呼称されている石器〔八木1976〕と縄文時代の各期に一般的に認められる磨石類に分け、さらに使用痕の状況により細分した。なお、特殊磨石と一般的な磨石との区別は〔八木前掲・神村1999〕にしたがった。

A類 (407・408) いわゆる「特殊磨石」と呼称されているものである。長さ10～20cm前後の楕円柱・角柱状の転石の側縁部に磨痕・敲打痕により面をなすもの（以後、「磨・敲打面」とする）である。B～D類に比べやや長さが長い。断面形状は一般的に楕円形・方形・三角形を呈する。側縁部の磨・敲打面とほかの面には明瞭な稜をなし、稜付近に細かな剝離痕が見られる。408のように側縁部の磨・敲打面のほか、端部に敲打痕が認められるものもある。

B類 (409・410) 正裏面や側縁のいずれかに磨面が認められるものである。409・410は正裏面に磨痕が認められる。

C類 (411～417) 正裏面や側縁・端部のいずれかに敲打痕が認められるものである。411は側縁部、412・413は正裏面と側縁部、414・416は正裏面と端部、415は正裏面、417は端部に敲打痕が認められる。

D類 (418～423) 正裏面や側縁・端部のいずれかに磨痕と敲打痕の両方が認められるものである。使用痕の種類と残存部位により様々な組み合わせになる。

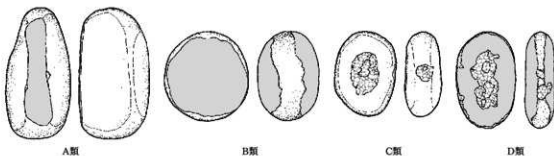
66点のうち、A類6点、B類4点、C類28点、D類28点である。磨痕と敲打痕が組み合わせられたもの、凹痕を含んだ敲打痕が認められるものではほぼ占められる。

分布 遺構、土器、ほかの石器の分布とほぼ同じく、調査区北西部の2～5・A～Eグリッドの範囲にほぼ分布する。分類別の分布の片寄りは認められない。

石材 66点の内、安山岩25点、砂岩14点、角閃石安山岩12点、輝緑岩5点、凝灰岩3点、流紋岩・ひん岩各2点、溶岩・花崗岩・溶結凝灰岩各1点である。粒子の粗い火成岩や堆積岩の石材が多く使用されている。

11) 石 皿 (424・425)

扁平な大型の円・楕円形礫の正面または正裏面に、使用の結果と推定される磨面や敲打痕が認められる



第22図 敲磨石類分類図

もの。使用面が磨面の場合、滑らかな平面または緩やかな曲面をなす。また、使用面の滑らかさはほぼ均質、または中心部の滑らかさが強く、周辺は漸次弱くなる。これらの諸特徴から砥石とはほぼ区別される。2点出土している。424は破片であるものの、全面加工された石皿である。使用面は良く使われており、周縁に縁が明瞭に形成されている。溶岩製。425は無加工の小型石皿である。使用面の中央部は緩く窪む。砂岩製。

12) 砥 石 (426～431)

主に砂岩などの粒子構造を持つ礫の表面に使用の結果残された磨面（砥面）が認められる石器である。石皿に近似するものもあるが、次の相違点により区別される。

石皿に比べ形が不整形なものも多く、砥面も正裏面だけに限らず、側縁部・端部など一定していない。砥面は石皿ほど広くなく、また滑らかさも均質でない。帯状・筋状の砥面が見られるなどである。

分 類 大きさにより細分した。

A類 (426～429) 広い砥面を持つ大型品であり、置き砥石と推定できる。砥面は正裏面や側面に認められる。428は裏面に敲打痕や凹痕の荒れ面が認められることから、台石としての機能も考えられる。

B類 (430・431) 小型の手持ち砥石である。図示した砥石はいずれも側縁が砥面として使用されていることから、玉作り遺跡で多出する内磨き砥石と推定される。

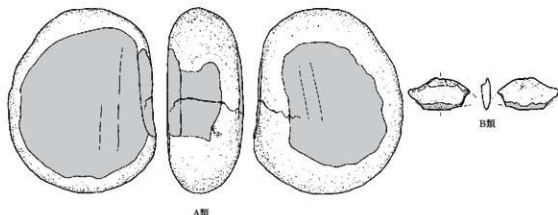
15点のうち、A類9点、B類6点である。

分 布 遺構、土器、ほかの石器の分布とほぼ同じく、調査区北西部の2～5・A～Dグリッドの範囲にほぼ分布する。分類別の分布の片寄りは認められない。

石 材 15点のうち、砂岩13点で極めて多く、ほかは安山岩・千枚岩各1点である。粒子構造を持つ石材が使用されている。

13) 石 核 (432・433)

剥片剥離作業中に何らかの理由により剥離作業を断念した残核、剥片剥離作業終了後の残核である。6点出土している。いずれも素材は荒削礫・剥片であり、剥離作業の前段階となる打面調整などは見出せない。432は黒曜石の石核で正裏の2面に剥離作業が行われている。正面は90°転移の剥離作業、裏面は同方向の剥離作業が認められる。433は同一打面の周縁に打点を移動させながら、同方向の剥離作業が



第23図 砥石分類図

行われている。黒色緻密安山岩製。いずれも得られる剥片は横長剥片と推定できる。このほかの石核の石材は黒曜石・頁岩・凝灰岩・チャート各1点で、出土点数は少ないが石材は多様である。

D 石製品

石製品は2種類・6点(第4表)で少数である。6点のうち、遺構内が1点、遺構外が5点である。その出土分布は2～4Cグリッドにまとまる傾向にある。

以下、種類ごとに特徴的な事柄について説明する。

1) 石冠類(434～438)

いわゆる「石鋸」とされるもの、三角柱状の石製品、スタンプ状の石製品など出土数は少ないものの、多様な石製品を一括し「石冠類」とした。5点出土している。

分類 当地域で最も出土数の多い『龍峰遺跡』の石冠類分類[小池2000]を参考に細分した。

A類(434・435) 縦断面形が凸字状、正面形が横長の楕円形を呈する石製品で、「石鋸」とも呼称される。2点出土している。435は434の安山岩に比べ、軟質な角閃石安山岩が用いられるため各部の凹凸、稜線は明確に仕上げられている。

B類(436) スタンプ状の石製品で、上方から見た形が三重楕円を呈するもの。1点のみの出土である。

C類(437・438) 三角柱状の石製品で「三角壘形石製品」とも呼称されているもの。2点出土している。

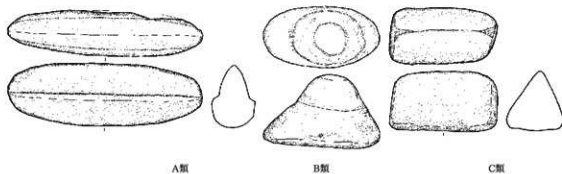
分布 出土数は少ないが、2C・3C・5CグリッドのC列から4点出土している。

石材 安山岩3点、角閃石安山岩2点である。比較的加工の容易と思われるやや軟質な在地石材を使用している。

その他 所属時期は龍峰遺跡[小池前掲]の存続時期からすれば後～晩期であるが、本遺跡の出土土器を鑑みれば晩期に所属するものと考えている。

2) 玉(439)

1点のみの出土である。刻みのある垂玉、または刻みのある勾玉である。正面から裏面に向け穿孔されている。蛇紋岩製。



第24図 石冠類分類図

4 自然科学分析

A テフラ分析

1) はじめに

新潟県上越地方とその周辺には、妙高火山や焼山火山のほか、御岳火山さらに中国地方や九州地方に位置する火山から噴出したテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を追跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代などを知ることができるようになっている。

そこで、中郷村前原遺跡においても、調査担当者により採取された試料を対象に、テフラ組成分析と屈折率測定を行って、指標テフラの検出同定を行うことになった。調査分析の対象となった試料は、5号住居の2層である。

2) テフラ組成分析

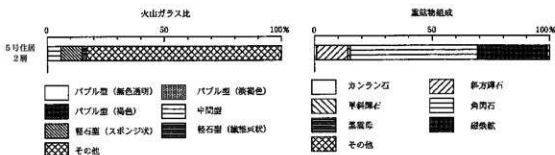
a 分析試料と分析方法

テフラ層の基本的な特徴を明らかにするために、火山ガラス比分析と重鉱物組成を合わせたテフラ組成分析〔早田1999など〕を行った。テフラ組成分析の手順は、次の通りである。

- ① 試料 15g を秤量。
- ② 超音波洗浄により泥分を除去。
- ③ 80°C で恒温乾燥。
- ④ 分析篩により、1/4—1/8mm の粒子を篩別。
- ⑤ 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの色調・形態別組成を求める（火山ガラス比分析）。
- ⑥ 偏光顕微鏡下で重鉱物250粒子を観察し、重鉱物組成を求める（重鉱物組成分析）。

b 分析結果

テフラ組成分析の結果をダイアグラムにして第25図に、火山ガラス比と重鉱物組成の内訳を第5表と第6表に示す。試料に含まれる火山ガラスは、量が多い順に、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス（8.8%）、分厚い中間型ガラス（6.0%）、繊維束状に発泡した軽石型ガラス（1.6%）である。スポンジ状に発泡した軽石型ガラスには、microliteが含まれる特徴がある。重鉱物としては、量が多い順に、角閃石（54.4%）、磁鉄鉱（30.0%）、斜方輝石（13.2%）、単斜輝石（0.4%）、カンラン石（0.4%）である。



第25図 テフラ組成ダイアグラム

試料	bw (cl)	bw (pb)	bw (br)	md	pm (sp)	pm (fb)	その他	合計
5号住居2層	0	0	0	15	22	4	209	250

数字は粒子数。bw : バブル型。md : 中間型。pm : 軽石型。cl : 透明。pb : 淡褐色。
br : 褐色。sp : スポンジ状。fb : 繊維束状。

第5表 火山ガラス比分析結果

試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
5号住居2層	1	33	1	136	0	0	4	250

数字は粒子数。ol : カンラン石。opx : 斜方輝石。早割輝石 : cpx。
ho : 普通角閃石。bi : 黒雲母。mt : 磁鉄鉱。

第6表 重鉱物組成分析結果

3) 屈折率測定

a 測定試料と測定方法

日本列島とその周辺のテフラ・カタログ [町田・新井1992] の作成にも利用された温度一定型屈折率測定法 [新井1972・1993] により、5号住居2層に含まれるテフラ粒子の屈折率測定を行った。

b 測定結果

屈折率測定の結果を第7表に示す。5号住居2層に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、1.498-1.500である。また斜方輝石 (γ) と角閃石 (n2) の屈折率は、各々1.713-1.717と1.680-1.685である。

試料	火山ガラス (n)	斜方輝石 (γ)	角閃石 (n2)
5号住居2層	1.498-1.500	1.713-1.717	1.680-1.685

屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法 [新井1972・1993] による。

第7表 屈折率測定結果

4) 考察—指標テフラとの同定

5号住居2層に含まれるテフラ粒子については、火山ガラスの屈折率、重鉱物の組み合わせ、斜方輝石や角閃石の屈折率などから、約5,500～6,000年前¹⁾に妙高火山から噴出した妙高赤倉テフラ [(My-A) 早津・新井1980、早津1985] または約4,000～4,500年前¹⁾に妙高火山から噴出した妙高大田切川テフラ [(My-Ot) 早津・新井1980、早津1985] に由来する可能性が高いと考えられる。とくに角閃石の比率が斜方輝石のそれより大きいことから、後者の可能性がより高いように思われる。

なお、火山灰編年学においては、テフラの一次堆積層を利用することが基本である。その認定には現地におけるテフラ研究者による層相の観察が不可欠である。調査の際に、このような作業が行われることが望まれる。とくに妙高火山起源のテフラについては、関東地方北西部にかけて広く分布している可能性もあることから、テフラ研究者との共同作業を期待したい。

5) 小 結

前原遺跡において採取された試料 (5号住居2層) を対象にテフラ組成分析と屈折率測定を行った。その結果、妙高大田切川テフラ (My-Ot、約4,000～4,500年前¹⁾) に由来すると思われるテフラ粒子を検出することができた。

1) 放射性炭素 (¹⁴C) 年代、暦年代とは異なることに注意。

引用文献

- 新井房夫 1972 「斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究」『第四紀研究』11 p.254-269.
- 1993 「温度一定型屈折率測定法」『第四紀試料分析法—研究対象別分析法』日本第四紀学会編 p.138-148.
- 早津賢二 1985 『妙高火山群—その地質と活動史』第一法規 344p.
- 早津賢二・新井房夫 1980 「妙高火山群テフラ地域の第四紀テフラ層—示標テフラ層の記載及び火山活動との関係」『地質学雑誌』86 p.243-263.
- 町田 洋・新井房夫 1992 『火山灰アトラス』東京大学出版会 p.276
- 早田 勉 1999 「テフロクロノロジー—火山灰で過去の時間と空間をさぐる方法—」『考古学のための年代測定学入門』古今書院 p.113-134.

B 前原遺跡出土炭化材の樹種同定

1) はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴からおおむね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2) 試料

試料は、前原遺跡の縄文時代中期の集落である1号住居より出土した炭化材57点、4号炭窯より出土した炭化材83点、5号住居より出土した炭化材6点の合計146点である。

3) 方法

試料を割折して、木材の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（年目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本的三断面を製作し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質及び現生標本の対比によって行った。

4) 結果

結果を第8表に、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

クルミ属 *Juglans* クルミ科 第27図—1

横断面：大型で丸い道管が、単独あるいは2～数個放射方向に複合してまばらに散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は徐々に減少する。軸方向柔細胞が多少波打ちながら、短接線状に1列に並び、網状柔組織をつくる傾向がある。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織はほとんどすべて平伏細胞からなるが、ときおり上下の縁辺にいくぶん大きい方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、1～4細胞幅である。

以上の形質よりクルミ属に同定される。クルミ属にはオニグルミ、ヒメグルミがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15～30m、径70～90cmである。材は耐朽性、保存性は低い、狂いが少なく靱性に富んでいて、建築、器具、彫刻など広く用いられる。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 第27図-2

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmくらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

ブナ属 *Fagus* ブナ科 第27図-3

横断面：小型でやや角張った道管が、単独あるいは2～3個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔及び階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織はまれに上下端のみ方形細胞が見られるがほとんどが同性放射組織型で、単列のもの、2～数列のもの、大型の広放射組織のものがある。

以上の形質よりブナ属に同定される。ブナ属には、ブナ、イヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmくらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材は堅硬、緻密、韌性あり、保存性は低い。容器などに用いられる。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 第28図-4

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～2列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmくらいに達する。材は強韌で弾力に富み、建築材などに用いられる。

ヤマグワ *Morus australis* Poir. クワ科 第28図-5

横断面：年輪のはじめに中型から大型の丸い道管が、単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。孔部外の小道管は複合して円形の小塊をなす。道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部の1～3細胞くらいは直立細胞である。

接線断面：放射組織は上下の縁辺部が直立細胞からなる異性放射組織型で、1～6細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりヤマグワに同定される。ヤマグワは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ10～15m、径30～40cmである。材は堅硬、韌性に富み、建築などに用いられる。

キハダ属 *Phellodendron* ミカン科 第28図-6

横断面：年輪のはじめに大型の丸い道管が、単独あるいは2個複合して2～3列配列する環孔材である。

晩材部では薄壁で方形の小道管が、多数集合して斜め方向及び接線方向に帯状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は多列の同性放射組織型で、紡錘形を呈する。幅は1～5細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりキハダ属に同定される。キハダ属には、キハダ、ヒロハノキハダなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ25m、径1mに達する。

ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメドキ科 第29図-7

横断面：大型の丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向に複合して年輪界にそって1～2列並ぶ環孔材である。晩材部では小型で厚壁の道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合してまばらに散在する。道管の径は早材から晩材にかけて徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。木部柔組織は周囲状から連合翼状である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～4細胞幅である。

以上の形質よりケンボナシ属に同定される。ケンボナシ属には、ケンボナシ、ケケンボナシがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉高木、まれに低木である。材は建築、家具、楽器、器具などに広く用いられる。

トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 第29図-8

横断面：年輪のはじめに、大型で厚壁の丸い道管が、ほぼ単独で1～3列配列する環孔材である。孔圍部外では、小型でまれに厚壁の道管が、単独あるいは放射方向に2～3個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。内部にはチロースが著しい。木部柔組織は早材部で周囲状、晩材部では翼状から連合翼状である。放射組織は同性である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の形質よりトネリコ属に同定される。トネリコ属にはヤチダモ、トネリコ、アオダモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の高木である。材は建築、家具、運搬具、器具、旋作、薪炭など広く用いられる。

タケ亜科 *Bambusoideae* イネ科 第29図-9

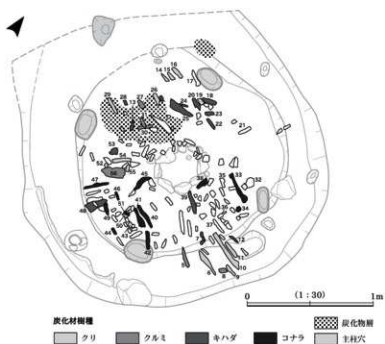
横断面：基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は木部と節部からなり、その周囲に維管束鞘が存在する。

放射断面及び接線断面：柔細胞及び維管束、維管束鞘が桿軸方向に配列している。

以上の形質よりタケ亜科に同定される。

5) 所 見

前原遺跡の1号住居より出土した炭化材は、クルミ属7点、クリ19点、コナラ属コナラ節12点、ヤマグワ1点、キハダ属16点、ケンボナン属1点、トネリコ属1点であった。4号炭窯より出土した炭化材は、ブナ属80点、タケ亜科3点、5号住居より出土した炭化材は、クルミ属1点、クリ4点、キハダ属1点であった。1号住居では、クルミ属、クリ、コナラ属コナラ節、



第26図 1号住居炭化材樹種

キハダ属が多いが、いずれも高木になる落葉樹である。クルミ属、キハダ属は沢溜りなどの肥沃地に生育するのに対し、クリ、コナラ属コナラ節はやや乾燥したところに生育し、二次林要素にもなる樹木である。5号住居は、点数が少なく明らかな傾向は不明であるが、1号住居に類似するとみられる。

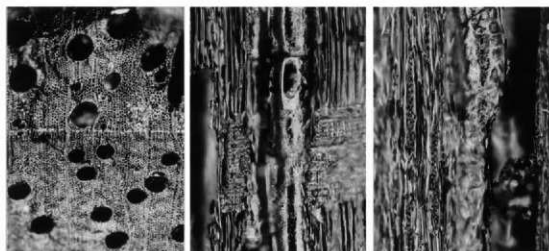
4号炭窯の炭化材は、ブナ属がほとんどであり、選択的に選材された可能性が高い。ブナ属は自然度の高い、やや湿潤な環境に生育する。

参考文献

- 佐伯 浩・原田 浩 1985 「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 p.20-48。
 1985 「広葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 p.49-100。
 島地 謙・伊東隆夫 1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣 p.296
 山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」『植生史研究』特別第1号 植生史研究会 p.242

試料		結果(学名/和名)		点数	
1号住居	5	<i>Juglans</i>	クルミ属	1	
	6	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1	
	7	<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1	
	8	<i>Juglans</i>	クルミ属	1	
	9	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1	
	10	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1	
	11	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1	
	12	<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1	
	13	<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1	
	14	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1	
	15	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1	
	16	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1	
	17	<i>Juglans</i>	クルミ属	1	
			<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1
	18	<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1	
	19	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1	
	20	<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1	
	21	<i>Hovenia</i>	ケンボナンシ属	1	
	22	<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1	
	23	<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1	
	24	<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1	
	25	<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1	
	26	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1	
			<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1
	27	<i>Juglans</i>	クルミ属	1	
	28	<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1	
	29	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1	
	30	<i>Juglans</i>	クルミ属	1	
	31	<i>Juglans</i>	クルミ属	1	
	32	<i>Morus australis</i> Poir.	ヤマゴウ	1	
	33	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節	1	
	34	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節	1	
	35	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1	
			<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1
	36	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1	
			<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1
	37	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1	
	38	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節	1	
	39	<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1	
	40	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節	1	
	41	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節	1	
	42	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節	1	
	43	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1	
			<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	1
	44	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節	1	
	45	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節	1	
	46	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節	1	
	47	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節	1	
	48	<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1	
	49	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節	1	
	50	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1	
	51	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節	1	
	52	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1	
	53	<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1	
	54	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1	
	55	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1	
56	<i>Juglans</i>	クルミ属	1		
4号炭窟		<i>Fagus</i>	ブナ属	80	
		Bambusoideae	タケ類	3	
5号住居	サンプル(炭化物)	炉内	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1
			<i>Juglans</i>	クルミ属	1
	2	㊸	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1
	3	㊸	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1
	炭	㊸	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1
	サンプル(木)	日ベルト㊸-㊸	<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1

第8表 前原遺跡における樹種同定結果

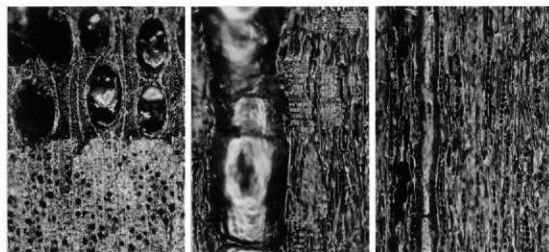


横断面 ————— : 0.4mm

放射断面 ————— : 0.2mm

接線断面 ————— : 0.2mm

1. クルミ属

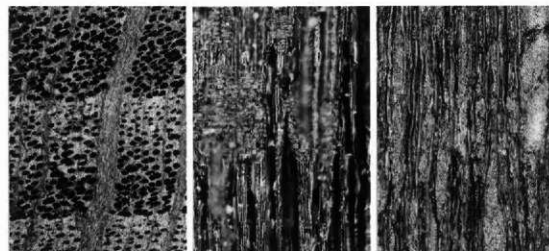


横断面 ————— : 0.4mm

放射断面 ————— : 0.2mm

接線断面 ————— : 0.2mm

2. クリ



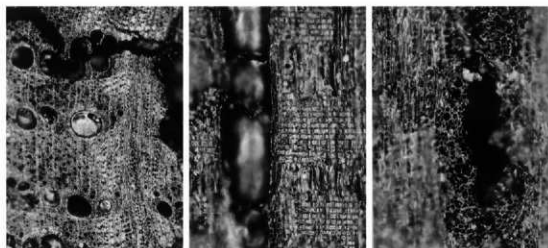
横断面 ————— : 0.4mm

放射断面 ————— : 0.2mm

接線断面 ————— : 0.4mm

3. ブナ属

第27図 前原遺跡の炭化材1

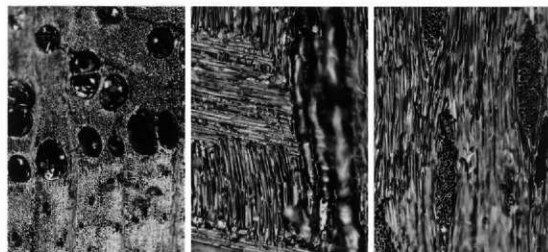


横断面 : 0.4mm

放射断面 : 0.2mm

接線断面 : 0.2mm

4.コナラ属コナラ節

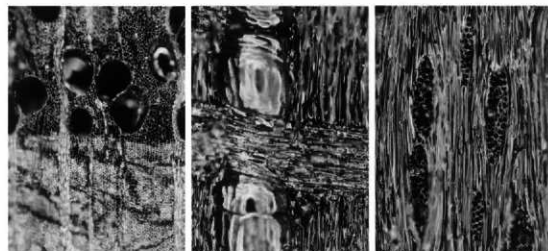


横断面 : 0.4mm

放射断面 : 0.2mm

接線断面 : 0.2mm

5.ヤマグワ



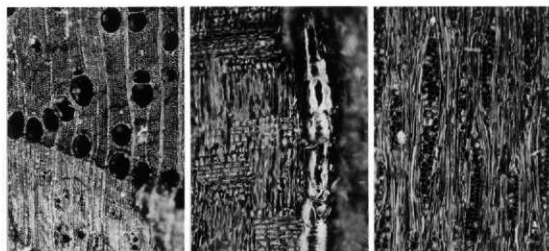
横断面 : 0.4mm

放射断面 : 0.2mm

接線断面 : 0.2mm

6.キハダ属

第28図 前原遺跡の炭化材2



横断面 : 0.4mm

放射断面 : 0.2mm

接線断面 : 0.2mm

7.ケンボナシ属

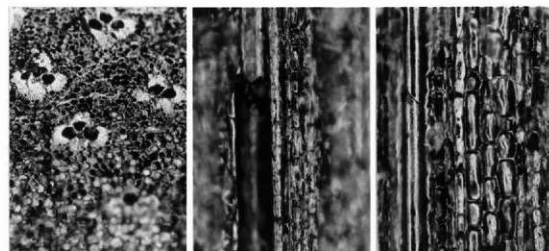


横断面 : 0.4mm

放射断面 : 0.2mm

接線断面 : 0.2mm

8.トネリコ属



横断面 : 0.4mm

放射断面 : 0.2mm

接線断面 : 0.2mm

9.タケ亜科

第29図 前原遺跡の炭化材3

C 炭化材の放射性炭素年代測定

1) 試料と方法

試料	採取地点	種類	前処理	測定法
No.1	1号住居3B-19	炭化物	酸-アルカリ-燃洗淨	加速器質量分析 (AMS) 法
No.2	5号住居3C-7	炭化物	酸-アルカリ-燃洗淨	加速器質量分析 (AMS) 法

2) 測定結果

試料	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	測定No. (Data)
No.1	4180 ± 40	-24.7	4180 ± 40	交点cal BC 2870, 2820, 2770 1 σ cal BC 2880 to 2850, cal BC 2820 to 2890 2 σ cal BC 2890 to 2820	180282
No.2	4200 ± 40	-25.7	4190 ± 40	交点cal BC 2870 1 σ cal BC 2880 to 2860, cal BC 2810 to 2890 2 σ cal BC 2890 to 2830	180283

a ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際慣例にしたがって5,568年を用いた。

b $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

c 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えて算出した年代。

d 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより算出した年代(西暦)。補正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、及びサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al. 1998, Radiocarbon 40 (3))により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68%確率)・2 σ (95%確率)は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

概近く存在するようであるが、『上越市史』では、住居について一部が紹介されている。15号住居跡は、平面形は円形で、直径は約4.2m、主柱穴は6本で、ほぼ中央に方形の石囲炉があり、内部に埋壘を伴っている。東西にテラスを持つ〔上越市史編さん委員会2003〕。

青海町寺地遺跡 1号住居は、北陸の中期後葉古串田新式の土器を主体としているが、草堂文系土器や大木8b式土器の搬入も見られる。住居は硬玉工房跡で径約5mのほぼ円形プランを呈している。壁に沿って幅50～70cmのテラスがある。炉は長方形の石囲炉である。炉に掘り方は見られなかった。テラスの切れた部分に埋壘が設けられていた。竪穴住居への入り口部分にあたると考えられる。3号住居は中期後葉を主体とする（特に古い方）。長径4m、短径3.1mの小判型のプランを呈する。床面は貼床である。炉は方形の石囲炉である。1号住居と3号住居は隣接している〔関はか1987〕。

長野県小川村茂遺跡 中期後葉の馬蹄形集落で、竪穴住居跡が10軒検出されている。8号住居跡は径約3.5mのほぼ円形を呈する。中心より西側に偏って石囲炉が設けられている。東と西の炉縁石が抜かれている。柱は壁際近くに、4本主柱穴である。時期は曾川Ⅱ期に比定されている。このほか、検出された住居跡は楕円形や隅丸方形のものもある〔千曲川水系古代文化研究所1991〕。

長野県御代田町滝沢遺跡 J-13号住居址 直径ほぼ4mの円形プランを呈する。周溝を持つ。柱穴は周溝内に8本確認された。壁柱穴と考えられる。炉の構築はまず床面を大きく掘り切った後、黒色土を軽く埋め戻してから縁石を据え付けている。炉内には埋壘が据えられる〔小山はか1997〕。

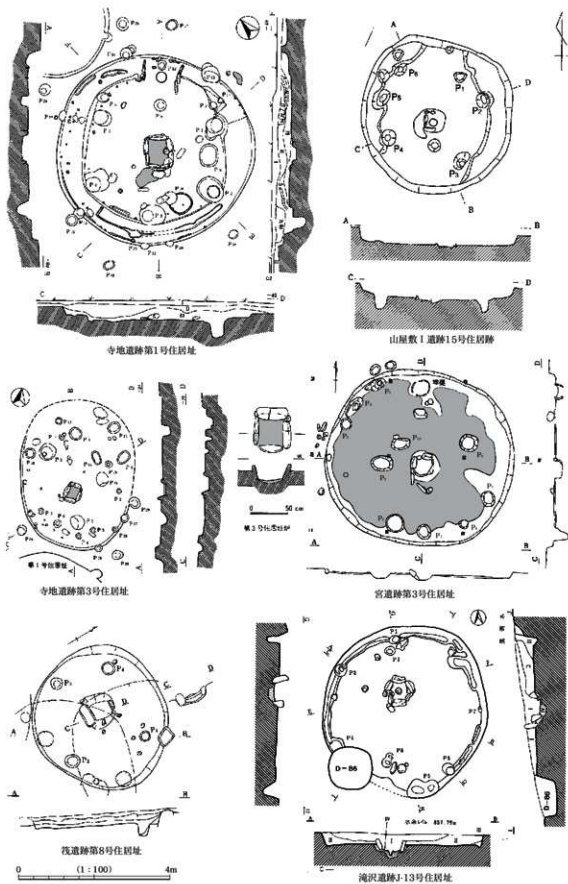
長野県中条村宮遺跡 3号住居址 径約5mの円形プランを呈し、中央に方0.5mの石囲炉が設けられていた。炉縁石は抜かれているものが多かった。柱穴は壁際と炉周辺に見られた。埋壘が1基出土しているが、正眞隆帯文系土器で、中期後葉の時期である〔千曲川水系古代文化研究所1993〕。

この時期の竪穴住居に見られる共通項

- 円形（直径5m前後）、小判型も若干含まれる
- 周溝
- テラスを持つものもある
- 4～6本主柱穴
- 方形の石囲炉（掘り方を持つ場合がある）、炉内に埋壘を伴うものもある
- 埋壘または設置土器

上記のことから、蛇谷遺跡の3基の竪穴住居、山屋敷Ⅰ遺跡15号住居、寺地遺跡1・3号住居は、前原遺跡とよく類似している。上越地方におけるこの時期の一般的な住居形態を表しているものと考えられる。長野県では上記以外にも、戸倉町円光房遺跡〔森嶋はか1990〕・岡谷市花上寺遺跡〔高林はか1996〕・屋代遺跡群〔水沢はか2000〕の住居形態も同様であり、草堂文系の土器様式に伴う中部高地的な住居形態を示していると思われる。石囲炉の中に埋壘を伴うものもあるが、石と土器の間に空間のあることを特徴とし、この時期の中部高地には一般的な炉形態である〔三上1995〕。しかし、上越地方では石囲炉のみのものと、埋壘を伴うものの両者が見られる。

この時期、複式炉を伴う卵型の竪穴住居が出現する信濃川上中流域とは全く異なる様相を示している。中部高地では、その後、加曾利EⅢ～EⅣ式土器が大量に出土する時期になると、住居形態は変化し、柄鏡形を示すものや敷石を伴うものが現れてくる。上越地方では敷石住居は妙高村湯の沢遺跡の住居が可能性的である〔室岡1966〕。



第32図 各遺跡の竪穴住居

B 焼失住居について

1号住居は床面に多量の炭化材が検出され、焼失住居跡であると考えられる。炭化材の上層にローム土が堆積し、かつ被熱によって酸化している。このことはこの住居が土葺き屋根であった可能性を示している。こうした例は、県内でも城之腰遺跡35号住居（中期後葉）〔藤巻ほか1991〕、津南町堂平遺跡59号住居跡や塩沢町原遺跡17号住居跡（後期前葉）〔魚沼先史文化研究会1998・阿部2000〕などに見られる。また、県外でも福島市宮畑遺跡で多くの事例が確認されている。宮畑遺跡では、縄文時代中期後半の集落で、調査された47棟の竪穴住居跡のうち、21棟の焼失住居跡が検出されている。焼失家屋には重複が見られ、一時期の火災によるものではなく、長期間にわたって家を焼く習慣があったことが明らかになっている。住居の屋根は土葺きと想定され、内部から意図的に燃やされている可能性が高いとされている〔斎藤2003〕。屋代遺跡群の後期後葉住居にも焼失住居、火入れ行為の跡が確認されている住居がある〔水沢ほか2000〕。中期後半から後期にかけての住居に多く見られるようである。今後、この時期の住居跡の調査については注意が必要であろう。

C 集落構造について

縄文時代中期の集落については、大規模な環状集落のイメージが強く感じられる所である。しかし、当前原遺跡は、治郎川という小河川によって開析された沢の縁にほとんど重複しない7軒の竪穴住居が検出されたのみである。土器型式から多少の時間幅が感じられるが、2代から3代位の世代の変遷が妥当ではないかと思われる。7軒の竪穴住居は最終的な結果で、同時期に存在したのは1～2軒ではなかったかと考えられる。関東地方の縄文中期の大规模集落の詳細な分析を行った研究によると、1時期に同時存在した住居は数軒の場合が多いのではないかとされている〔縄文中期集落研究グループほか1995〕。前原遺跡の場合も、こうした状況にあったと考えられる。

前原遺跡は沢の縁に7軒の住居が列状に連なり、中心に広場などを持たないようである。住居の入り口は沢に向かって、開口している。発掘調査時点では環状の集落が治郎川によって削平された結果、列状をなしているのではないかという見解もあったが、治郎川による侵食が及んでいると考えるよりも、水場である治郎川に沿った集落と考えたい。集落の周囲にはフラスコ状土坑や土坑がとりまいていて、これも数は少ない。フラスコ状土坑は6基、土坑に分類した10号土坑も、フラスコ状土坑に加えると7基で、住居の数とほぼ等しくなる。フラスコ状土坑を貯蔵穴と考えれば、1住居に1基の貯蔵穴が備えられていたと考えることもできる。また、はっきりした廃棄場は調査範囲内では確認されていない。治郎川の傾斜などには廃棄されなかったようである。やはり、最も遺物量が多いのは住居からで、これは住居として使用されていた段階の遺物ではなく、住居廃絶後、または焼失後廃棄されたものがほとんどであった。床面に接して出土した遺物はほとんどないことがこれを裏付けている。第12図で見ると、遺物の出土量が多かったのは6・7・8号住居周辺の2D・3Dグリッドから4Eグリッドで、集落のある一時期、廃棄場とされていたと考えられよう。

D 縄文時代中期の土器について

住居など遺構の切り合いがほとんどないため、土器型式の変化を層位的に確認することは非常に難しくかった。遺物量が多かった中部高地系の唐草文系土器と丘痕跡帯文系土器について若干、変遷を追ってみた。

遺構	大木系土器	唐草文系土器	庄痕跡帯文系土器	加曾利E式土器
前原1期	大木8b式新 (右地系a) 			
前原2期	1号住居 (埋没) 	唐草文系土器田原期 3種b 61 (1号住居埋没) 3種a 121 2種a 173 1種a 170 1種a 171 2種a 179	庄痕跡帯文系土器1群 1種b 193 1種a 195 1種a 136 (カタラン)	
前原3期	5号住居 (設置土器) 5号 フラスコ状 土坑 	大木8b式新～ 大木9a式古 在地系b 210 211	唐草文系土器田原～IV古期 3種b 178 2種c 166 3種b 176 2種c 177 3種b 65 2種c 64 (5号住居設置土器)	庄痕跡帯文系土器1群 3種b 160 2種 161 2種a 196 2種b 141 4種b 205 2種a 199
前原4期	大木9a式古 在地系b 104 212 213 216 214 215		庄痕跡帯文系土器1群 4種c 204 4種c 73	加曾利E田式古 226 227
前原5期	3号住居	唐草文系土器IV期 74 (3号住居) 75 (3号住居)		

第33図 前原遺跡中期中葉～後葉土器編年表

◆印は5号フラスコ状土坑一坑遺物

集落から共伴した大木系土器・加曾利EⅢ式土器などを考慮したが、報告者の力量不足によって誤解などが多々あるかもしれない。

前原遺跡中期中葉から後葉の出土土器を第33図のように1期から5期に分類した。基準資料は5号フラスコ状土坑出土土器である。5号フラスコ状土坑の遺物は153～155までは中層の2層から出土したことが確認できるが、これ以外は層位が不明である。160はこの土坑と周囲の包含層に遺物が散在していたため、覆土の中でも上層の1層に含まれていたものと考えられる。しかし、このフラスコ状土坑の堆積状況は、水平でそれほど時間的経過が感じられず、同時に廃棄された一括性の高い土器群ではないかと判断した。153の大木系土器、156の唐草文系土器、160・161の圧痕隆帯文系土器をほぼ同時期のものと考えた。前原遺跡からは多くの圧痕隆帯文系土器が出土した。圧痕隆帯文系土器は坪井類型とも呼称され、唐草文系土器の圧痕を伴う隆帯から出自すると考えられていた。Ⅰ群～Ⅲ群に大きく分類され、Ⅰ・Ⅱ群は以下のように定義された〔綿田1988・1999〕。

Ⅰ群：寸胴の胴部から口縁部がわずかに外反し、4単位の緩い波状口縁部を呈する深鉢である。口縁部内面には粘土が貼付けられている。口縁部、胴部の2帯の文様構成をとる。波頂下に一回転半ほどのよく巻き込んだ渦文を配し、そこから隆帯が垂下し、胴部で文様を描く。渦文は横走する隆帯によってつながる。地文は単節斜縄文、条線文が認められる。

Ⅱ群：胴部から口頸部まで緩く開き、口縁部が内傾する平縁の深鉢である。口縁部内面の貼付はみられない。口縁部に横走する隆帯が一端が渦文となり、もう一端はかぎの手に折れて垂下する。この懸垂帯は1本になり、枝分れて文様を描かない。このことは、Ⅰ群の口縁部渦文を口頸部に引き下げて隆帯間にとり込んだ形である。これに伴い、隆帯は縦横の区画帯としての性格を強める。この隆帯上の圧痕には指頭圧痕状のほか、刻目も見られる。縄文は単節斜縄文が一般的であるが、無節が比較的に目立つようになる。

Ⅰ群が古く、Ⅱ群が新しいとされた。前原遺跡で出土したものはⅠ群・Ⅱ群の時期のものである。Ⅱ群については、屋代遺跡群の報告〔水沢ほか2000〕の中で遺構の切り合い関係から細かい時間軸が作られた中に組み込まれていたため、この基準に沿ったが、若干変更を加えた部分もある¹⁾。この2点を軸として、型式学的に変遷を追い、以下のように分類を行った。竪穴住居跡の変遷は、埋裏や設置土器を基準に覆土から出土した土器も勘案して決めたものである。あくまで案としておきたい。

前原1期（大木8b式新）：この時期は大木8b式新段階の208・209が出土している。

前原2期（唐草文系土器Ⅲ期・圧痕隆帯文系土器Ⅰ群古）：唐草文系土器Ⅲ期が主体となる時期である。中部高地の唐草文系土器Ⅲ期の影響が強い土器が見られる。61の1号住居埋裏はⅢ期でも古手のものである。121は雲母などを多量に含み、文様・施文方法からも中部高地からの搬入土器と考えられる。この時期の唐草文系土器は樽型の器形、隆帯で区画される楕円区画と交互刺突文、胴部の縁杉状沈線などが特徴である。文様分類ではa類がほとんどである。大きな把手を持つものと平口縁、隆帯部でわずかに波状を呈する口縁のものがある。

この時期に圧痕隆帯文系土器が伴うかどうか明確ではないが、前原3期の5号フラスコ状土坑の一括土器との兼ね合いと唐草文系土器に類似した器形の存在からこの時期に圧痕隆帯文系土器のⅠ群が現れると考えた。

前原3期（大木8b式新～9a式古・唐草文系土器Ⅲ期新～Ⅳ期古・圧痕隆帯文系土器Ⅰ群）：前原遺跡の最も主体

1) 唐草文系土器について、本報告ではⅣ期編年〔三上2002〕を用いたが、屋代遺跡群報告では、Ⅲ期編年〔三上1988〕を用いており相違がある。

となる時期と考えられる。5号フラスコ状土坑一括土器を基準とする。大木系土器の153、唐草文系土器の166、圧痕降帯文系土器の160・161が共存している。これをもとに以下のように考えた。大木系土器の153は、大木8b式の新しい方と9a式の古い方の境界位の段階に相当すると考えられる。唐草文系土器は文様構成が崩れ、在地的な変化をしたものが主体となる。器形は樽型で、文様分類ではb・c類のものである。一本降帯が基本で、交互刺突文が見られなくなる。口縁部の懸垂降帯で区画される部分は無文になる。地文は矢羽状沈線（「く」の字状）である。大きな把手を持つものは見られなくなる。圧痕降帯文系土器は2種のバケツ型の器形、3種の胴部が直に立ち上がり口縁部が外反する器形が主になる。文様はa類とb類の大きく二つに分かれる。b類は口縁部の渦巻文と横走する降帯は密着して、降帯が垂下する。これが、圧痕降帯文系土器のI群である。前原2期の193は横走する降帯から下向きの渦巻きが延び、この渦巻きからさらに垂下する降帯が延びている。これが、141・160のような文様bに変遷すると考えられる。さらに文様分類aのような唐草文系土器を母体としたような圧痕降帯をもつ土器群も存在する。北信では見られない圧痕降帯文系土器の祖形ともいえる可能性がある。

前原4期（大木9a式古・圧痕降帯文系土器II群・加曾利E3式古）：大木式系の土器は相変わらず少量であるが、縄文を地文にもつ大きな波状口縁の大木式土器と唐草文系土器を融合したような土器群が多く出土している（C類4種）。圧痕降帯文系土器はII群にあたる。器形は胴部上半が少しくびれ、胴部がわずかに張る4種になり、文様は口縁部の降帯文が渦巻文と接しないc類が主となる。唐草文系土器は共存関係が確認できないため、不明である。3期に含めたものの中にも4期まで下るものがあるのかもしれない。この後、北信に大量に入ってくると言われる加曾利EⅢ式土器がわずかに見られる（226・227）。

前原5期（唐草文系土器Ⅳ期）：この時期には、活動は下火になってきているようである。唐草文系土器が矢羽状沈線を粗いヘラ描きで施すなど形態化した形で残っている（3号住居74・75）。圧痕降帯文系土器は層代遺跡群【水沢ほか2000】によれば、II群が多く出土する段階と考えられるが、前原では崩れた感じのものは見られず、II群の変遷が追えない。この時期に相当するものはないとした。

E 石器について

1) 石器組成

前原遺跡から出土した石器は、第4表のとおり総数571点である。このうち器種石器の失敗品、剥片類、石核を除いた、いわゆる器種石器は259点である。これらの石器は伴出土器から早期前葉、中期中葉～後葉、後期、晩期前葉～後葉のいずれかの時期にほとんどが所属する。土器量を詳細に見れば重量別では、中期中葉96.1%（299kg）、晩期3.4%（10.7kg）、早期0.5%（1.4kg）となることから、第4表は広範囲な時期の石器を含みつつも、中期中葉～後葉の石器組成をほぼ反映しているといえよう。

それによれば、敲磨石類（25.5%）、不定形石器（19.7%）、磨製石斧（18.1%）、打製石斧（14.7%）が多い。敲磨石類には早期中葉に属する特殊磨石（6点）があるものの、これを除いても石器組成の比率を大きく下げるものでない。次いで石鏃（8.1%）、両極刺離痕のある石器（5.0%）、砥石（5.8%）が一定量認められる。石鏃はA類が早期前葉、C・D類が後期中葉以降の所産と考えられることから、これを差し引くと5点（1.9%）になる。また、砥石B類も時期的に新しくなるものと考えられることから石器組成の比率は若干下がる。石錐（1.5%）、石匙（0.4%）、石皿（0.8%）は極めて少ない出土である。

一般的に敲磨石類、不定形石器は縄文時代各時期を通して多い傾向にあることから、前原遺跡の石器組成は磨製石斧、打製石斧の多さと、石鏃、石錐、石匙、石皿の少なさに特徴が認められる。このような特

石材 器種	黒曜石	黒色緻密安山岩	頁岩	チャート	メノウ	流紋岩	凝灰岩	砂岩	角閃石安山岩	粘板岩	蛇紋岩	輝緑岩	ひん岩	安山岩	滑石	花崗岩	滑結凝灰岩	千枚岩	合計
石鏃	10	5	3	1	1	1													21
石鏃失敗品	8	1	3																12
石鏃	2	1	1																4
石鏃		1																	1
両極剥離痕のある石鏃	9	2		1			1												13
不定形石鏃	5	15	7		1	2	15	4	2										51
打製石斧			4			2	18	10		3	1								38
局部磨製石斧										1									1
磨製石斧							3				41	2	1						47
最磨石類						2	3	14	12			5	2	25	1	1	1	1	66
石鏃								1								1			2
砥石								13						1					15
石核	2	1	1	1			1												6
石冠類									2					3					5
玉											1								1
合計(点)	36	26	19	3	2	7	41	42	16	3	44	7	3	29	2	1	1	1	283

*削片数除く

第9表 石器・石製品器種別石材表

徴を周辺遺跡に求めると、同じく中郷村南田遺跡(中期前葉)[中郷村教委1988]、妙高高原町兼保遺跡(中期後葉~後期前葉)[妙高高原町教委1976]がある。また、新井市大貝遺跡(中期後葉)[立教大学考古学研究会1967]、中郷村和泉A遺跡[加藤・荒川1999]は石皿がやや多いものの、本遺跡と同傾向である。磨製石斧の多さはその石材が蛇紋岩でほぼ占められる。西頸城地方の磨製石斧生産地に近いからである。打製石斧の多さは中越地方を中心とする山間・丘陵部の傾向ほどではないが近似する。このように西頸城地方と中越地方の山間・丘陵部の影響は、本遺跡を含む新井・頸南地域が「地理的要因からも両者の折衷的な地域」[鈴木1999]だからである。

なお、石冠類、玉などの石製品は、同石製品が多出する後期後葉以降であり、本遺跡では晩期中葉~後葉の所産と考えている。

2) 器種と石材選択

器種別の石器・石製品の石材選択は第9表のとおりである。これによれば石材選択において次のような特徴が指摘ができる。

① 石鏃・石鏃失敗品・石鏃・両極剥離痕のある石器は小型の剥片石器で、黒曜石、黒色緻密安山岩が多用されている。

② 不定形石器は前者に比べ、やや大型になり中型の剥片石器と言える。黒曜石の使用が減り、黒色緻密安山岩、凝灰岩、頁岩が多用される。

③ 打製石斧は大型剥片石器であり、凝灰岩、砂岩、頁岩、粘板岩の堆積岩が多用されている。

石器の大きさによる石材選択の違いは、石材から得られる素材の大きさによるものであり、搬入の際の黒曜石は小型剥片石器に、黒色緻密安山岩は小型~中型剥片石器に、大きな剥片が得やすい堆積岩は打製石斧に使用されている。

④ 磨製石斧はほぼ蛇紋岩で占められている。

既述のように磨製石斧の石材に最も適している蛇紋岩製磨製石斧の生産地に近いためである。

⑤ 最磨石類は安山岩、砂岩、角閃石安山岩などの多孔質や粒子構造を持つ転石が使用されている。

- ⑥ 砥石はほぼ砂岩で占められ、粒子構造を持つ石材である。

磨石類は叩き潰す・磨り潰すという粉化、砥石は研磨という用途に応じた石材選択である。

- ⑦ 石冠類は角閃石安山岩、安山岩、加工の石皿は溶岩を使用している。

敲打により加工されている石器・石製品であり、比較的軟質で加工しやすい在地産の火成岩を用いている。

主な使用石材のうち、搬入品の黒曜石・蛇紋岩を除き、在地の石材を使用している。

3) 部分的に研磨のある石斧について

本遺跡では剥離調整のみで製作された通常の打製石斧（A類）のほかに、B・C類のように剥離調整後に研磨や敲打が行われたものが出土している。特に研磨調整の加えられた打製石斧（B類）は、打製石斧全体の中で一定の比率（28.9%）を占めている。これを「部分的に研磨のある石斧」と仮称し、若干述べてみたい。

第10表は県内出土の部分的研磨のある打製石斧の出土一覧である。出土点数は少ないが、7遺跡から類例が認められた。打製石斧か磨製石斧かという点については、研磨を重視すれば磨製（半磨製）石斧、石材・使用痕を重視すれば打製石斧、どちらにも含めずに「部分的に研磨のある石斧」[高橋1990]とし、報告者によりまちまちである。しかし、研磨という特異な特徴があるため、報文ではほかの打製石斧や磨製石斧に比べやや詳細に記述している。

分 布 本遺跡を含めた中郷村で4例、上越市で1例、魚沼地方で2例の2地域で認められる。それぞれの遺跡で打製石斧全体での比率は本遺跡28.9%、道灌林遺跡40%で、魚沼地方の清水上遺跡0.3%、城之腰遺跡2.6%に比べ高率である。

時 期 本遺跡、道灌林遺跡、蛇谷遺跡、清水上遺跡、城之腰遺跡の主な時期から時期幅が広いものの、中期前葉～後期前葉の範囲に収まるものと推定される。

石 材 和泉A遺跡の安山岩を除き、各遺跡とも粘板岩・頁岩の堆積岩系で占められる。清水上遺跡の結晶片岩は粘板岩の変成である。打製石斧の石材と同様な石材を用いている。

使用痕 実見した限りで使用痕は、刃部から基部にかけての擦痕や磨耗痕であり、打製石斧の使用痕と同じである。打製石斧と同様な使われ方をしたものと推定できる。

部分的に研磨のある石斧は、類例や出土点数も少ないため、これまで注目されなかった。初めて集成を試み7例の遺跡を認めることができた。断片的なことしか述べられなかったが、本遺跡を含めた妙高山麓周辺の遺跡では、部分的研磨のある石斧が時期的・地域的な特徴を持つ石器の一つになる可能性があるように思う。今後、類例が増えることを期待したい。

No.	遺跡名	所在地	主体となる時期	出土数(点)	総数(点)	主な石材	備 考	文献
1	前原	中郷村	B3～B4	11	38	凝灰岩、頁岩	本遺跡。打製石斧として処理	2004 附行予定
2	道灌林	中郷村	B2	4	10	頁岩	現在整理中。打製石斧として処理	2004 附行予定
3	和泉A	中郷村	B1～B2	1	96	安山岩	使用痕は打製石斧と同じ。打製石斧として処理	加藤1999
4	小重	中郷村	A4	1	5	頁岩	使用痕は打製石斧と同じ。磨製石斧として処理	小池2002
5	蛇谷	上越市	B4	2	7	砂岩	未整理	
6	清水上	堀之内町	B2～B3	2	696	粘板岩、結晶片岩	部分的に研磨のある石斧として処理	高橋1990
7	城之腰	小千谷市	B4～C2	10	383	粘板岩、頁岩	磨製(半磨製)石斧として処理	藤巻1991

★時期：A（前葉）、B（中葉）、C（後葉）、D（晩葉）、1（初期）、2（前葉）、3（中葉）、4（後葉）、5（未葉）

第10表 部分的に研磨のある打製石斧出土一覧

F 最後 に

集落と土器・石器を中心にまとめてきたが、上越地方の中期中葉から後葉にかけての様相がわずかながらでも明らかになっただろうか。中部高地から上越地方へのこの時期の文化の波及は、「松本平を経由して日本海沿岸への伝播は、住居形態・炉形態・埋葬習俗・曾利式土器の搬入などの諸要素が一体となって伝播した可能性が推測される」という見解がある〔佐藤2000〕。前原遺跡で見られる状況もこれらの諸要素が一体となっており、これを裏付けている。また、上越市山屋敷Ⅰ遺跡の唐草文系土器は前原遺跡とよく類似している。しかし、山屋敷Ⅰ遺跡には見られる北陸の古串田新式などは前原には見られない。上越地方は中部高地や北陸と密接な関係を持ちながら変遷していると考えられるが、比較的近接する遺跡間でさえ、異なった様相が伺える。こうした様相から、上越地方の縄文中期の解明までには、まだ、今後の資料の蓄積を待ちたいと思う。

第IV章 丸山遺跡

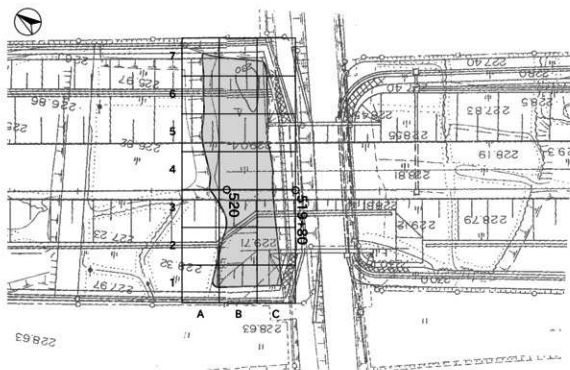
1 調査の概要

A 遺跡の概要

耕地整理などによって土地の改変が行われているため、遺構・遺物はこの影響を受けたと考えられ、ともに希薄な遺跡であった。遺物は縄文時代前期から中期前葉・後期・晩期、古墳時代、中世、近世のものがわずかず出土している。少ない中でも中心となるのは中世と考えられる。土師器皿、青磁、天目茶碗、瀬戸美濃焼、珠洲焼、茶白などが出土し、15世紀代の遺物がまとまって出土している。この場所付近にこの時期の集落が存在したものと考えられる。遺構は、土坑・溝・ピット・炭窯が検出されている。遺物を伴わないため、時代は不明である。

B グリッドの設定

高速道路のセンター杭STANo.519+80 ($X=109540.139$, $Y=-25542.301$)とSTANo.520+20 ($X=109572.447$, $Y=-25565.886$)が直線部分であったため、ここを基準とした。10mの方眼を組み、これを大グリッドとした。真北と磁北の偏差は西偏6度50分、真北とグリッドの偏差は53度52分である。大グリッドは長軸方向を算用数字、短軸方向をアルファベットとし、この組み合わせによって表示した。さらに大グリッドを2m四方に分割して1~25の小グリッドとし、5B-5のように表示した(図版77参照)。



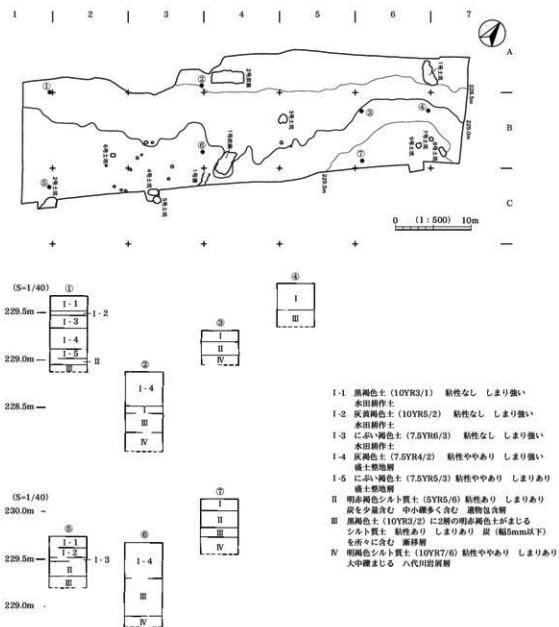
第34図 丸山遺跡 グリッド設定図

C 基本層序

遺跡を含めた周辺の地形は、昭和30年代の大規模な耕地整理によってその大部分が改変されている。丸山遺跡の範囲は残ったものと考えていたが、遺跡の南西半にも最大で厚さ50cmの盛土があり、本来の地形をあまり保っていないことが確認された。

基本層序は図中に記載した。なお、色調は『新版標準土色帳』〔農林水産省農林水産技術会議事務局1993〕を用いた。

I層は水田耕作土、または盛土整地層である。中世の遺物はI層から多く出土している。中世を主体とした遺跡の本体は当地かこの付近に存在したと思われるが、多くは破壊されたものと考えられる。II層からは縄文時代の遺物が出土し、縄文時代の遺物包含層と考えられる。しかし、遺物量は希薄である。地山



第35図 丸山遺跡 基本層序

は矢代川岩屑なだれ堆積物で、大小の角閃石安山岩を含んでいる。この面で遺構を確認した。

2 遺 構

A 概 要

遺跡からは縄文時代、古代、中世、近世などの遺物が出土しているが、主体となる時期は中世と考えられる。遺構については、遺物を伴うものが少なく、時期を確定できるものが少ない。しかし、1号・2号土坑の覆土から検出されている特徴的な灰白色の火山灰は焼山起源の火山灰とされ、平安時代か、中世とされている〔早津1994〕。1・2号土坑はこれ以前の遺構と考えられる。検出された遺構は土坑が9基、溝が1条、炭窟が2基である。西端の4～6号土坑の周囲からは、ピットが多く検出されている（図版77、遺構全体図参照）。しかし、建物などに伴うものとは確認できなかった。

B 遺構各説

特記事項のあるもののみ記載する。そのほかのものは遺構計測表を参照のこと。

土 坑（図版78・79、写真図版81～83）

円形や楕円形または不定形の土坑が検出されている。覆土は単層を示すものが多い。東西に長い遺跡内では東端と西端に多い傾向が見られる。

1号土坑 不整形の土坑である。上層の1・2層から灰白色の火山灰が確認されている。1・2層の間によく分布する。

2号土坑 南側が調査区外に延びているため、全体は不明である。1号土坑と同様に1・2層から灰白色の火山灰が確認されている。

3号土坑 不整形の単層の土坑である。底面付近に礫を多く含む。

4号土坑 検出面に集石を確認、底面にピット状の落ち込みが存在した。

溝（図版79、写真図版83）

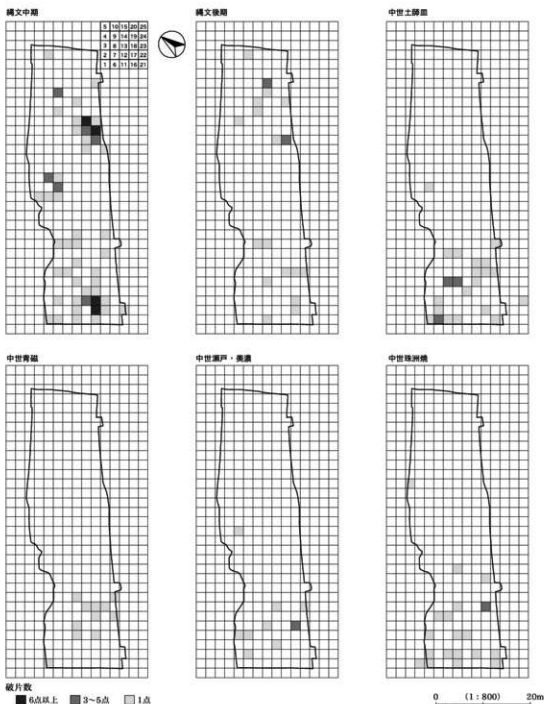
1号溝 遺跡のほぼ中央3C・4Cグリッドに1基のみ存在した。南北方向の主軸である。覆土は暗褐色土の単層である。

炭 窟（図版79、写真図版83）

遺跡の中央部から2基検出された。長方形の伏窟である。2基ともに掘り込みが非常に浅い。下層に炭化物の層が見られる。平安時代の炭窟によく見られる覆土中の焼山起源の火山灰層は検出されなかった。時代の異なる炭窟か、上層の火山灰層が削平されているかのどちらかであろう。底面に排水溝などの施設は設置されていない。

3 遺 物（図版80、写真図版84）

遺物の全体量は浅箱に2箱ほどと非常に少ないが、出土分布にはある傾向が見られた。第36図に土器・陶磁器の出土分布を示した。縄文時代の遺物は特に集中して検出される地点はなく、全体的に散布している状況であった。中世の遺物は遺跡の南西側に集中する傾向があり、遺跡の中心は南西側に存在したと考えられる。遺物の出土点数は次のとおりである（点数は破片数）。縄文時代は前期1点、中期193点、



第36図 土器・陶磁器の出土分布図

後晩期26点である。中世は貿易陶磁器16点(青磁15点、天目茶碗1点)、国産陶磁器77点(土器器皿38点、瀬戸美濃焼13点、珠洲焼26点)である。ほかに近世の陶磁器が若干見られた。

1～18は縄文時代の土器である。1は深鉢の口縁部で、斜行する沈線文様が付けられている。胎土に繊維が混入されている。縄文時代前期と考えられる。2は深鉢の胴部で横位の隆帯と一本描きの3条の波状沈線が施文されている。3は隆帯による幅狭の楕円区画文で区画内に一本描きの波状文が施されている。4は半截竹管による半隆起線文と爪形文の連続刺突を施す隆帯によって施文される。5～7は同一個体で

ある。深鉢の胴部で、細い沈線と半截竹管文によって縦方向に施文される。8・9は指頭丘痕文と垂下する陸帯文を持つ同一個体である。2～9は中期前葉の土器で、3は長野の東信地域の後沖式土器に類似する。8・9は阿玉台式の影響を受けた指頭丘痕文土器である。10・11は縄文施文の土器である。12はRLの縄文施文後、横位の磨り消しが入る。13は、口縁部に刻みが入る無文の土器で、内面には幅広の沈線が一条巡る。14はLRの縄文が施文され、内面には太い二本の沈線が巡る。13・14は晩期の土器である。15～18は無文の土器である。18は口縁部が肥厚している。

19・20は土器である。19は直立する口縁部で、壺などの口縁部の可能性がある。20は内面が磨かれている。19・20は古墳時代の可能性がある。

21～35は中世の土器・陶磁器である。21～24は土師器皿で、すべてロクロ成形である。23・24の底部は回転糸切りである。23の胎土は精良で、白っぽい色調を示す。ほかに粗砂を多く含み淡橙色を示す。22は口縁部にタールの付着が見られ、灯明皿として用いられたものと考えられる。25～29は青磁である。25～27は碗で、26は直縁の碗である。28は盤、29は碗または盤の底部と考えられる。30・31は天目茶碗である。30は瀬戸美濃焼、31は中国製の胎土と考えられる。32・33は瀬戸美濃焼で32は大窯I期の端反皿である〔藤澤2001〕。33は茶壺で、肩部に横耳が付き、胴部上半まで茶褐色の軸がかかる。33・34は珠洲焼の甕の口縁部で、吉岡編年のV期に相当すると考えられる〔吉岡1994〕。中世の遺物は15世紀代を中心としている。

36～38は近世の土器・陶磁器である。36は越中瀬戸の壺の底部である。37は土師質で、火鉢などの類と考えられる。38は瀬戸の褐釉の壺または瓶類の胴部と考えられる。

39～41は縄文時代の石器である。39は黒曜石製の無茎石鎌で、片方の脚部を欠いている。42は蛇紋岩製の磨製石斧の刃部の破片である。41は粘板岩の剥片である。42・43は中世の石製品である。42は安山岩製の茶臼の下臼である。43は凝灰岩製の砥石である。

4 自然科学分析 炭化材の樹種

A はじめに

本遺跡の発掘調査では、土坑や炭窯、溝、柱穴などの遺構や縄文時代の土器や珠洲焼、土師質土器などの遺物が確認されている。これら遺構は遺物が伴わないため、ほとんどが年代観は不明である。ただし、覆土中に焼山起源の火山灰と考えられるブロックが認められる土坑については、既知の分析例や文献などからその降灰年代が明らかにされており〔早津1994〕、平安、あるいは中世といった年代観が想定されている。

本報告では、本遺跡から検出された炭窯のうち、2号炭窯より出土した炭化材について樹種同定を実施し、燃料材の選択を検証するとともに、遺跡周辺の植生に関する検討を行う。

B 試料

試料は、2号炭窯から出土した炭化材（炭サンプル2）である。炭化材は、ビニール2袋に一括して保管されていたことから各袋に1、2の通し番号を付し、肉眼観察を行った後、各袋より5点、計10点を抽出した。これら抽出した炭化材には炭1～10の通し番号を付し、それぞれについて炭化材同定を実施した。

C 方 法

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を複製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

D 結 果

結果を第11表に示す。各袋より抽出した炭化材はすべて広葉樹のブナ属に同定された。以下に、主な解剖学的特徴を記す。

ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2~3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状~階段状に配列する。放射組織は同性~異性Ⅲ型、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

E 考 察

2号炭窟は、長軸約440cm、短軸約150cm、深さ約10cmで長方形を呈している。ただし、当遺構は上部がすでに破壊されており、今回検出されたのは炭窟底面部分のみである。

分析を実施した炭化材は、焼土を多量に含む覆土、あるいは底面から採取された炭化材である。いずれも焼成された木炭の一部の可

能性があり、肉眼観察ではこれらは黒色を呈することから、いわゆる黒炭が焼成されていたと推測される。抽出された炭化材はすべてブナ属に同定された。ブナ属の木材は、緻密でやや重硬な材質を有しており、薪炭材としての用途が知られている [平井1979]。また、木炭の樹種としては比較的良質な部類に入り、焼成すると軟質の炭となる [岸本・杉浦1980]。したがって、これら炭化材がいずれも単一の樹種に由来することを考慮すると、ブナ属を選択的に利用していたことが伺われる。

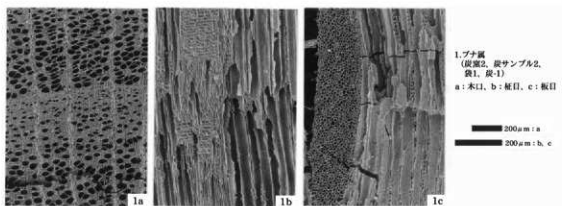
本遺跡の立地する日本海側山間部の多雪地域における潜在的な植生は、ブナを主体とした森林であり、その林床にはチシマザサが発達するとされる [宮脇1985]。ただし、現在では、後背山地はスギなどの植林や、里山林などの二次林がほとんどを占め、自然度の高い地域におわずかにブナ林が残っている [宮脇1985]。したがって、本遺跡の炭窟から出土した炭化材は、本地域周辺に見られたと考えられるブナを中心とした森林から採取、利用した可能性がある。

なお、本遺跡周辺では、八斗時原遺跡の平安時代(あるいは古代)の所産とされる炭窟から出土した炭化材はすべてブナ属であることが確認されており、本遺跡の炭窟で認められた樹種構成と類似する。一方、関川谷内遺跡で検出された平安時代の炭窟から出土した炭化材は、全点がコナラ属に同定されており、本遺跡や八斗時原遺跡の炭窟における樹種の種類構成と異なる傾向も認められている [バリノ・サーヴェイ株式会社1998]。木炭の材質は樹種によって異なることから、各炭窟から出土した炭化材の樹種構成は、木炭の用途を反映している可能性がある。例えば、群馬県内で実施した炭窟と生産遺構から出土した炭化材の分析調査の結果、平安時代の製鉄燃料材としてコナラ亜属クスギ節の木炭を選択的に利用していた可

遺構	時代	試料名	番号	形状	樹種	
2号炭窟	平安時代 /中世	炭サンプル 2	袋1	炭-1	薪材	ブナ属
				炭-2	薪材	ブナ属
				炭-3	薪材	ブナ属
				炭-4	薪材	ブナ属
				炭-5	丸材 (径2cm)	ブナ属
			袋2	炭-6	薪材	ブナ属
				炭-7	炭片	ブナ属
				炭-8	薪材	ブナ属
				炭-9	薪材	ブナ属
				炭-10	薪材	ブナ属

第11表 樹種同定結果

能性が指摘されている [高橋・鶴原 1994]。本地域では、生産遺構から出土した炭化材の分析調査例が少なく、各用途別の種類構成などについては現段階では不明な点が多い。そのため、今後は、さらに炭窯や生産遺構から出土する炭化材の分析調査を行い、木炭の樹種と用途に関する検証が必要である。



第37図 炭化材

引用文献

- 平井信二 1979 『木の事典』第2巻 かなえ書房
 岸本定吉・杉浦銀治 1980 『日曜炭やき師入門』250p 総合科学出版
 宮脇 昭編著 1985 『日本植生誌』中部 604p 至文堂
 バリノ・サーヴェイ株式会社 1998 「関川谷内遺跡における自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第90集 関川谷内遺跡Ⅰ』p.55-59 新潟県教育委員会 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
 高橋 敦・鶴原 明 1994 「乙西尾引遺跡における製鉄燃料材について」『大胡西北部遺跡群発掘調査報告書第1集』, p.41-49 大胡町教育委員会

5 ま と め

丸山遺跡は、遺物の出土状況から調査地点の南西側に中心を持った中世（15世紀代）の遺跡と考えられる。茶臼・茶壺・天目茶碗などが出土していることから、ややランクの高い集落が存在した可能性がある。中郷村の中世遺跡は片貝川の流域に多く分布し、渋江川流域には丸山遺跡と清原遺跡が確認されているのみである（第Ⅱ章参照）。文献もないことから、どのような集落であったのかは不明であるが、この時期、越後では遺跡数が増加し、水田近くに立地するようになる [坂井 1997]。こうした新田開発に伴う集落とも考えられよう。

炭窯の樹種同定

当遺跡の炭窯は2基検出されたが、妙高山麓で平安時代のメルクマルとされている焼山火山灰が覆土中に検出されなかった。しかし、樹種同定の結果、焼山火山灰を確認した八斗時原遺跡・前原遺跡と同様にブナ属が卓越した結果を示している。これは、当時の植生が似通っていることを示していると思われる。丸山遺跡の炭窯も平安時代の可能性があるといえよう。また、自然科学分析の考察にも述べられているが、木炭の用途を反映して樹種は選択されている可能性があり、近接する八斗時原遺跡・前原遺跡と関連する可能性もある。

要 約

前原遺跡

- 1 前原遺跡は新潟県中頸城郡中郷村大字西福田新田字前原1362番地ほかに所在する。遺跡は妙高山の北東山麓、淡江川左岸の段丘上に小河川の治部川が開析した小規模な沢の縁際に位置している。遺跡の中心の標高は232～235mである。
- 2 遺跡の調査は上信越自動車道建設に伴い、平成8年に県教委が実施した。
- 3 調査の結果、縄文時代中期中葉から後葉にかけての集落が検出された。このほか、縄文時代早期・前期・後期・晩期の遺物が出土した。また、時代は下るが、平安時代の所産と考えられる炭炭が11基出土している。
- 4 全体を調査することができた縄文時代中期中葉から後葉にかけての集落は、治部川が開析した小規模な沢の縁際に地形に沿って弧状に7軒の竪穴住居が連なって構成されている。竪穴住居の入り口は沢に向かって開口している。竪穴住居群の外側にフラスコ状土坑や土坑・集石遺構・炉状遺構などが配される。
- 5 竪穴住居の構造は、直径3～5mの円形や楕円形で、方形の石囲炉を持つものである。周溝やテラスを持つものもある。4～6本の主柱穴で、埋裏を伴うものもある。こうした構造は中部高地の唐草文系土器様式の範囲内に多く見られるものである。
- 6 1号住居は焼失住居で、床面の炭化材の上層にローム層の堆積が見られ、屋根が土葺きであった可能性を示した。炭化材は樹種同定し、クリ・コナラ・クルミなどが多く使われていたことを明らかにした。
- 7 中期中葉から後葉の土器群は中部高地的な土器が多く、唐草文系土器と圧痕隆帯文系土器を伴った大木系・加曽利E式系土器との関係で分類し、この時期を5段階に区分した。
- 8 縄文早期前葉の押型文土器が多数出土した。遺構は伴わなかったが、中部高地の樋沢式土器が主体である。1点ではあるが、岐阜の沢式土器が出土した。沢式は胎土に黒鉛を含むことが特徴で、県内では初例である。
- 9 縄文晩期前葉から後葉にかけての土器が多数出土した。やはり、中部高地系のものが主体で、前葉から中葉にかけての佐野I式、後葉の女島羽川式・離山式が出土した。主体的な時期は女島羽川式の段階で、埋裏を1基伴っていたが、このほかの遺構は検出できなかった。
- 10 石器は多時期にわたるものの、その多くは中期中葉から後葉に属する。石器組成では磨製石斧・打製石斧の多さ、石鏃・石錐・石匙・石皿の少なさに特徴があり、同時期の周辺遺跡と同傾向である。打製石斧の中に部分的に研磨のある石斧が一定量存在し、周辺遺跡では5遺跡に類例が認められた。今後、時期的・地域的な特徴を持つ石器の一つになる可能性がある。

丸山遺跡

- 1 丸山遺跡は新潟県中頸城郡中郷村大字岡沢字汐下359番地ほかに所在する。遺跡は妙高山の北東山麓、淡江川左岸の矢代川岩層なだれ堆積物によって形成された緩傾斜地に立地する遺跡で、標高は230m前後を測る。

- 2 遺跡の調査は上信越自動車道建設に伴い、平成8年に県教委が実施した。
- 3 遺跡は耕地整理などによってかなり影響を受け、遺構・遺物が希薄であった。
- 4 調査の結果、縄文時代・古墳時代?・中世・近世の遺物が少量出土した。中心となる時代は中世である。
- 5 遺構は土坑・溝・ピット・炭窯が検出されたが、遺物を伴わないため、時代は不明である。しかし、土坑は、覆土に焼山火山灰を伴うため、平安時代か中世と考えられる。
- 6 中世は土師器皿・青磁・天目茶碗・瀬戸美濃焼・茶白など15世紀代の遺物がまとまって出土した。遺物は、調査範囲の南西側に集中しているため、この付近に集落などが存在したのと考えられる。

引用・参考文献

- 会田 進 1988 「中部山岳地方 押型文化の様相—長野県を中心に—」『縄文早期を考える—押型文化の諸問題—』帝塚山考古学研究所
- 2000 『縄文遺跡』長野県岡谷市教育委員会・長野県塩尻市教育委員会
- 阿部昭典 1998 「研究ノート 縄文時代の卵形住居跡—信濃川上流域を中心として—」『新潟考古学談話会報』第19号
- 2000 「研究ノート 縄文集落遺跡研究の一試論—信濃川流域の中期環状集落を中心として—」『新潟考古』第11号 新潟県考古学会
- 2001 「縄文時代中期末葉の集落構造の変容—信濃川上・中流域を中心として—」『新潟考古』第12号 新潟県考古学会
- 阿部朝衛 1987 「磨製石斧生産の様相」『史跡寺地遺跡』新潟県青海町
- 2000 「先史時代の失敗と練習」『考古学雑誌』第86巻第1号 日本考古学会
- 石川智紀 1996 「丸山遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成8年度』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 魚沼先史文化研究会 1998 「研究報告 原遺跡の研究」『新潟考古』第9号 新潟県考古学会
- 1999 「研究報告 原遺跡の研究（2）」『新潟考古』第10号 新潟県考古学会
- 江坂輝彌・渡辺誠as 1997 「津南町報告書文化財調査 No.12 沖ノ原遺跡発掘調査報告書」新潟県津南町教育委員会
- 加藤学・荒川隆史 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 和泉A遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 神村 透 1999 「特殊磨石・折損特殊磨石—視点 文献考古学的—」『信濃』第51巻第10号 信濃史学会
- 川崎 保as 2001 「長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 55 駒込遺跡」長野県埋蔵文化財センター
- 北村 亮as 1996 『龍峰遺跡発掘調査報告書Ⅰ遺構編』新潟県中郷村教育委員会
- 小池義人as 1998 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第90集 関川谷内遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小池義人 2000 「石製品」『龍峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ 遺物編』新潟県中郷村教育委員会
- 小池義人as 2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第108集 小重遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小阪隆司 2001 「集石遺構」『山梨県考古学協会誌 第12号 中部日本の縄文時代前編』山梨県考古学協会
- 小島俊彰 1979 「第3章 遺跡・遺物解説 本江遺跡」『滑川市史 考古資料編』富山県滑川市
- 小島正巳 1991 「妙高山麓採集の押型文土器—松ヶ峯No.202・208遺跡ほか（17遺跡）—」『新潟考古学談話会報』第7号 新潟考古学談話会
- 小山岳夫as 1997 『滝沢遺跡』長野県御代田町教育委員会
- 斎藤義弘 2003 「宮畑遺跡」『発掘調査成果報告会 考古学が解き明かすふくしまの歴史』福島県立博物館
- 坂井秀弥 1997 「第5節 中世集落の展開と城館の動向」『北陸中世土器研究会編 中・近世の北陸 考古学が語る社会史』桂書房

- 坂上有紀 2004 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第129集 八斗碓原遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 桜井秀雄・宇賀神誠司¹⁾ 2000 『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 52 三子塚遺跡群 三原遺跡群 岩下遺跡 石神遺跡群 郷土遺跡 東丸山遺跡 西丸山遺跡 深沢遺跡群』長野県埋蔵文化財センター
- 佐藤雅一 2000 「研究ノート 魚沼地方における埋蔵の様相 ー第1次予備検討内容の覚え書きー」『新潟考古』第11号 新潟県考古学会
- 2003 「沖ノ原式土器について」『第16回 縄文セミナー 中期後半の再検討』縄文セミナーの会
- 佐原 真 1977 「石斧論ー横斧から縦斧へー」『考古論集ー慶祝松崎寿和先生六十三歳記念論文集』
- 上越市史編さん委員会 2003 『上越市史 資料編2 考古』新潟県上越市
- 縄文集落研究グループ 1998 『シンポジウム 縄文集落研究の新天地2 発表要旨』
- 縄文セミナーの会 2003 『第16回 縄文セミナー 中期後半の再検討ー記録集ー』
- 縄文中期集落研究グループ 1995 『シンポジウム 縄文中期集落研究の新天地 (発表要旨・資料)』宇津木台地区考古学研究会
- 鈴木俊成 1999 「早期から晩期の石器組成」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 鈴木道之助 1981 『図録石器の基礎知識 III』柏書房
- 関雅之・藤田富士夫²⁾ 1987 『史跡寺地遺跡』新潟県青海町
- 高橋保雄 1990 「石器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第55集 清水上遺跡』新潟県教育委員会
- 2003 「石器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第119集 北野遺跡I(下層)』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高林重水³⁾ 1996 『花上寺遺跡』長野県岡谷市教育委員会
- 谷口康浩 1986 「縄文時代「集石遺構」に関する試論ー関東・中部地方における早・前・中期の焼礫集積遺構を中心としてー」『東京考古』4 東京考古談話会
- 千曲川水系古代文化研究所 1991 『茂遺跡』長野県小川村教育委員会
- 1993 『宮遺跡』長野県上水内郡中条村教育委員会
- 寺崎裕助 2003 「新潟県における串田新式土器」『第16回 縄文セミナー 中期後半の再検討』縄文セミナーの会
- 土橋由理子⁴⁾ 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第75集 大塚遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 1997 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第84集 中ノ沢遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第94集 西福田新田遺跡・郷清水遺跡・上中島遺跡・上滝ノ沢遺跡・中の原D遺跡・窪畑B遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 戸沢充則・会田道⁵⁾ 1987 『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』長野県岡谷市教育委員会
- 中郷村教育委員会 1988 『図録 南田遺跡』
- 中沢道彦 1998 「第一編 原始・第二章 縄文時代・第七節 縄文文化の終焉ー晩期」『御代田町誌 歴史編上』長野県御代田町誌刊行会
- 永峯光一⁶⁾ 1967 『長野県考古学会研究報告書3 佐野』長野県考古学会
- 中村由克 2001 『市道遺跡 発掘調査報告書』長野県信濃町教育委員会
- 農林水産省農林水産技術会事務局 1993 『新版標準土色帳』
- 野村忠司⁷⁾ 2001 『中郷村遺跡詳細分布調査報告書』新潟県中郷村教育委員会
- 橋谷田裕治 1996 「前原遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成8年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 長谷川豊 1995 「縄文時代中期における竪穴住居址の一類型」『古代文化』(財)古代学協会
- 早津賢二 1985 『妙高火山ーその地質と活動史ー』第一法規出版株式会社
- 1994 「新潟焼山火山の活動と年代ー歴史時代のマグマ噴火を中心としてー」『地学雑誌』vol.103 No.2 (社)東京地学協会
- 藤澤良祐 2001 「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通 ー研究の現状と課題ー」『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品』(財)愛知県瀬戸市埋蔵文化財センター

- 藤巻正信 1989 「土器片円盤について」『新潟考古学談話会会報』第3号 新潟考古学談話会
- 藤巻正信ほか 1991 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第29集 城之越遺跡』新潟県教育委員会
- 星奈津子 1996 「蛇谷遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成8年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 三上徹也 1988 「唐草文系土器様式」『縄文土器大観』3 小学館
- 1995 「土器利用炉の分類とその意義—縄文時代における吊す文化と据える文化—」『研究紀要』第1号 長野県立歴史館
- 2002 「所謂「唐草文土器」の構造・変遷と型式名に関する考察」『長野県考古学会誌』98 長野県考古学会
- 水沢教子ほか 2000 『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 51 更埴条遺跡・屋代遺跡群(含む大境遺跡・窪河原遺跡)—縄文時代編—』長野県埋蔵文化財センター
- 水沢教子 2003 「中期後葉の渦巻き文を有する土器とその周辺」『第16回 縄文セミナー 中期後半の再検討』縄文セミナーの会
- 妙高高原町教育委員会 1976 『兼保遺跡』
- 妙高村教育委員会 1995 『因縁上ツ平遺跡』
- 室岡 博 1966 「松ヶ峯並に湯の沢遺跡について」『新潟県文化財年報第六頭南—中頸城市群南部学術総合調査報告書—』新潟県教育委員会
- 綿田弘実 1988 「研究ノート 北信濃における縄文中期後葉土器群の概観」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2
- 1999 「千曲川水系における縄文中期末葉土器群—仮称「圧痕隆帯土器」の再検討—」『縄文土器セミナー論集』
- 2003 「長野県千曲川流域の縄文中期後葉土器群」『第16回 縄文セミナー 中期後半の再検討』縄文セミナーの会
- 百瀬長秀 1994 「中ノ沢式土器の再検討」『長野県考古学会誌』89 長野県考古学会
- 森嶋 稔ほか 1990 『円光房遺跡』長野県戸倉町教育委員会
- 八木光則 1976 「いわゆる「特殊磨石」について—中部地方における縄文早期の石器群研究への問題提起—」『信濃』第28巻 第4号 信濃史学会
- 矢口忠良 1988 『長野市の埋蔵文化財 第28集 崎崎遺跡』長野市教育委員会・長野市埋蔵文化財センター
- 山本幸俊ほか 1991 『新潟県歴史の道調査報告書 第二集 北国街道Ⅰ』新潟県教育委員会
- 立教大学考古学研究会 1967 「大貝遺跡の調査」『新潟県新井市における考古学的調査』
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 渡邊明和 2000 「Ⅱ章 縄文時代の遺物 土器 晩期」『龍峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ 遺物編』新潟県中郷村教育委員会

前原遺跡遺構計測表

伊状遺構

遺構名	四面図取	写真図取	位置	平面形	規模 (cm)			断面形	覆土	出土遺物	時期	備考
					長径	短径	深さ					
1号伊状遺構	9	48	5C9-10-15	円形	200	200	伊まで35 底面72	右側伊、隅丸方形 (45×35)	箱状	水平	142～152	中期中室 土坑を2/3まで埋め戻し、 伊を構築している
2号伊状遺構	9	49	5B20	—	—	—	右側伊、隅丸方形 ?(65×53?)	箱状	単層			中期中室 伊単独で検出、石の多くは 掻かれている

フラスコ状土坑

遺構名	四面図取	写真図取	位置	平面形	規模 (cm)			断面形	覆土	出土遺物	時期	備考
					長径	短径	深さ					
1号	10	49	5B1	円形	80	75	50	段状	レンズ状		中期中室～後室	
2号	10	49	4D20	円形	100	90	40	箱形	水平		中期中室～後室	1層に焼物を多量に含む
3号	10	50	2D4	円形	110	100	40	段状	レンズ状		中期中室～後室	敷きつめられた焼物あり
4号	10	50	5A22, 6A2	円形	120	115	70	箱形	レンズ状		中期中室～後室	土層に焼物あり。最下層に埋集中
5号	10	50	3D6-7-11-12	円形	150	130	65	段状	水平	153～166	中期中室～後室	中層に遺物が多い
6号	10	50	5A23-24	円形	115	115	87	段状	レンズ状		中期中室～後室	

土坑

遺構名	四面図取	写真図取	位置	平面形	規模 (cm)			断面形	覆土	出土遺物	時期	備考
					長径	短径	深さ					
1号	11	51	5A3	円形	105	100	30	段状	レンズ状			
2号	11	51	5B4	円形	58	52	45	箱状	レンズ状			底部に幅10cm、深さ10cmの小円あり
3号	11	51	5B4	楕円形	72	58	28	わん曲状	レンズ状			
4号	11	51	5B18	円形	60	55	13	直状	不明			碑を多量に含む
5号	11	51	5B2-7	円形	85	80	25	直状	レンズ状			
6号	11	51	2C23	円形	78	75	13	直状	レンズ状			覆土に碑を含む。底面に横けら面あり
7号	11	51	3D6	円形	90	90	28	直状	レンズ状			
8号	11	51	2D25, 3D5	円形	95	80	37	わん曲状	水平			
9号	11	52	3B15	方形	90	85	20	直状	レンズ状			覆土に碑を含む
10号	11	52	3C21, 4C1	楕円形	132	110	85	箱形	水平		中期中室～後室	フラスコ状土坑の可能性あり
11号	11	52	3C13-18	楕円形	120	85	20	直状	レンズ状			
12号	12	52	5C8-9-13-14	楕円形	210	175	40	直状	レンズ状			
13号	8	47	2D7	楕円形	(87)	70	10	箱形	(水平?)			南側に7号住居に切られる
14号	10	50	5A24-25	本楕円形	105	90	37	わん曲状	レンズ状			6号フラスコ状土坑に切られる
15号	10	50	5A24, 6A4	楕円形	(64)	58	不明	直状	不明			6号フラスコ状土坑に切られる

焼土

遺構名	四面図取	写真図取	位置	確認層位	規模 (cm)			時期	備考
					長径	短径	深さ		
1号	12	52	2E17	田上層	130	35	10	焼層か?	
2号	12	52	1F23	田上層	105	28	8	焼層か?	

埋篋

遺構名	四面図取	写真図取	位置	確認層位	規模 (cm)			埋篋型位	出土土器	時期	備考
					長径	短径	深さ				
1号	12	52	2D24	田上層	60	55	36	正位	290	晩期後室	胴下部を欠く
2号	12	53	3D6	田上層	42	40	18	正位	167	中期中室～後室	胴下部を欠く
3号	12	53	3D6	田上層	23	20	13	正位	168	中期中室～後室	胴下部を欠く

集石

遺構名	四面図取	写真図取	位置	確認層位	規模 (cm)		備考	
					長径	短径		
1号	12	53	3D1-2-6-7			60	55	
2号	12	53	4D8			80	65	
3号	12	53	3D2-3-7-8	田上層上層		100	90	
4号	13	53	3D22-23, 4D2-3-8-13-18		葎長1050	直線許差	950	160
5号	13	53	4D4-5-9-10	田上層上層		120	110	
6号	3	—	3B23			80	72	

炭層

遺構名	四面図取	写真図取	位置	確認層位	規模 (cm)			覆土	時期	備考	
					長径	短径	深さ				
1号	13	53-54	4A8-9-13-14	楕円形	(275)	182	12			平安時代	
2号	13	54	3C-25, 4C5, 3D21, 4D1	隅丸方形	300	190	40	レンズ状		平安時代	
3号	14	54	8C21, 9C1-6, 9B5-10	楕円形	350	200	25	レンズ状		平安時代	
4号	14	54	9C7-8-12-13-14-18-19	隅丸長方形	500	220	45	レンズ状		平安時代	
5号	14	54	12D12-13-17-18	隅丸長方形	380	165	18	レンズ状		平安時代	
6号	14	55	14D14-15-19-20, 14E11-16	長楕円形	400	140	15	レンズ状		平安時代	
7号	14	55	15D1-2-3-6-7-8	隅丸長方形	395	175	20	レンズ状		平安時代	
8号	15	55	14C13-14-15-18-19-20	長楕円形	525	210	15	レンズ状		平安時代	
9号	15	55	15D11-12-13-16-17-18-19-22-23-24	隅丸長方形	573	240	55	レンズ状		平安時代	床面に炭が残る
10号	15	55	19C17-18-22-23	本楕方形	225	185	15			平安時代	床面に炭が残る
11号	15	55	10C5-10, 10D1-6	楕円形	165	125	23	レンズ状		平安時代	

前原遺跡土器登録表(1)

No.	遺跡	出土位置(埋藏層別)	層位	時期	形式系統	分類	形状	寸法(cm)	保存部位	製作技法	表面処理	色	重量	備考
1	5A4	0B14+16-22	II, IIIb, Ⅱ, カク	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	口縁部	帯状模文、横位山形文、胴体長径2.0cm、口縁部外部取、外面直コナナ	明色、外面黒褐色、内面黒色	白、向少量	0		
2	5A4		IIIb	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	胴部	帯状模文、横位山形文、胴体長径2.5cm、外面直コナナ	明色	白、向少量	0		
3	5D14	17-22-23A, 2C-2B	II-IIIa-IIIb, IIIb下	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	胴部	帯状模文、横位山形文、胴体長径2.0cm、外面直コナナ	茶褐色	白、向、石炭少量	0		
4	4C5		IIIa	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	胴部	帯状模文、横位山形文、胴体長径1.25cm	茶褐色	石炭、長石、雲母少量	0		
5	2D17		IIIa	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	胴部	横位山形文、口唇部平直	明色	白、向、石炭少量	0		
6	4A9		IIIa	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	口縁部	横位山形文、内面黒褐色の溝	明色、外面黒色	白、向少量	0		
7	5B21		II	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	胴部	帯状模文、横位山形文、口唇部平直、外面直コナナ	明色	白、向少量	0		
8	447内溝	4A10, 4B6		早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	口縁部	横位山形文、口唇部に山形文、外面直コナナ	明色	白、向少量	0		
9	4B16		IIIa	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	口縁部	横位山形文、口唇部に山形文、外面直コナナ	明色	白、向少量	0		
10	5B23		IIIa	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	口縁部	横位山形文、口唇部に山形文、外面直コナナ	茶褐色	白、向、石炭少量	0		
11	3E11		IIIa	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	胴部	帯状模文、横位山形文、胴体長径2.2cm	明色	白、向、石炭少量	0		
12	6D9		IIIa	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	胴部	帯状模文、横位山形文、胴体長径2.2cm	茶褐色	白、向少量	0		
13	4B10, 6A0		IIIa, IIIb	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	口縁部~胴部	帯状模文、横位山形文、胴体長径3.0cm、口唇部に山形文、外面直コナナ	明色	白、雲母、砂粒少量	0	外面灰化物	
14	4A2		カクラン	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	胴部	帯状模文、横位山形文、外面直コナナ	明色	白、向、石炭少量	0	外面灰化物	
15	2D13, 2B7		IIIa, IIIb下	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	胴部	帯状模文、横位山形文	灰白色	白、向、石炭、砂粒少量	0		
16	5A1, 4A17		II, IIIa	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	胴部	帯状模文、横位山形文、外面直コナナ	外面黒色、内面黒褐色	白、向少量	0		
17	6A10		IIIa	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	胴部	茶褐色又か、横位山形文、外面直コナナ	外面黒色、内面黒褐色	白、向少量	0		
18	4A10		IIIb	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	口縁部	口唇部に山形文、外面直コナナ、(体高から)	明色	白、向、石炭、雲母少量	0		
19	4A2		カクラン	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	胴部	帯状模文、横位山形文	茶褐色、黒炭不具	白、向少量	0		
20	313内溝	4A9		早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	口縁部~胴部	帯状模文、横位山形文、胴体長径2.0cm、外面直コナナ	茶褐色、黒炭不具	白、向少量	0		
21	表棟		-	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	胴部	帯状模文、横位山形文、胴体長径1.5cm、外面直コナナ	明色	白、向少量	0		
22	5B19		IIIa	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	胴部	横位山形文、口唇部に山形文、内外面直コナナ	外面赤茶褐色、内面黒色	白、向少量	0		
23	5C10		IV	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	口縁部	横位山形文、口唇部に山形文、外面直コナナ	明色	白、向少量	0		
24	5C12		IV	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	口縁部	横位山形文、口唇部に山形文、外面直コナナ	明色	白、向少量	0		
25	5C21		IIIa	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	口縁部	帯状模文、横位山形文、外面直コナナ	外面赤褐色、内面黒褐色	白、向少量	0	口唇部~胴部	
26	5C21		IIIa	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	口縁部	帯状模文、横位山形文、外面直コナナ	外面赤褐色、内面黒色	白、向少量	0	口唇部~胴部	
27	5C21		IIIa	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	口縁部	帯状模文、横位山形文、口唇部に山形文、外面直コナナ	外面赤褐色、内面黒色	白、向、石炭少量	0	口唇部~胴部	
28	5B22		III	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	口縁部	帯状模文、横位山形文、外面直コナナ	明色	白、向少量	0		
29	5B19		IIIa	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	胴部	帯状模文、横位山形文、胴体長径1.6cm、外面直コナナ	明色	白、向少量	0		
30	1G11		IIIa	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	胴部	帯状模文、横位山形文	外面黒色、内面黒褐色	石炭少量	0		
31	5B2		IV	早期前葉	押型文(凹式)	深鉢	深鉢	胴部	帯状模文、横位山形文、胴体長径1.4cm、外面直コナナ	外面赤茶褐色、内面黒褐色(黒炭少し含む)	白、向少量	0		
32	5A10		II	早期前葉	押型文	深鉢	深鉢	胴部	横位山形文	外面黒色、内面黒褐色	白、向少量	0		

※器土については埋蔵層が3, A, 3) 埋蔵層記号目の数字の記載と対応している。

前庭溝跡・土器線装表 (2)

※前土については調査号は、A、3) 観察記録記入欄の欄上の記載と対応している。

№	遺構	所在(地区)	調査区画	層位	時期	形式	分層	距離	位置 (cm)	形状	高	厚	調査方法等	調査結果	遺入物	備考
33	557区画	2017-58、3C3、3D4、4B1 I、5A16、5B6、5C12、6D14	Ⅱ、Ⅲa、Ⅲa下、Ⅲ中	Ⅲb	早期前装	神型文	深鉢	深鉢	口縁部	即杖縁文、肩位山形文、胴体長径3.7cm	白色	白、褐、石灰、角少量	①			
34	481 I	5B18	Ⅱ	早期前装	神型文	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	即杖縁文、肩位山形文、外面縦方向のノズ	白色	白、褐、角少量	①			
35	5018	5B18	Ⅱ	早期前装	神型文	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	即杖縁文、肩位山形文、外面縦方向のノズ	白色	白、褐、角少量	①			
36	5A4	5A18	Ⅱ	早期前装	神型文	深鉢	深鉢	深鉢	口縁部	即杖縁文、肩位山形文	白色	白、褐、石灰、葉付少量	①			
37	5A18	5B19	Ⅱ	早期前装	神型文	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	即杖縁文、肩位山形文	白色	白、褐、石灰、葉付少量	①			
38	584	5B19	Ⅱ	早期前装	神型文	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	即杖縁文、肩位山形文、胴体長径2.4cm	白色	白、角、砂少量	①			
39	5E17	5C5	Ⅲa	早期前装	神型文	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	即杖縁文、肩位+肩位山形文、胴体長径1.6cm、外面でいびつなノズ	白色	白、褐、角、石灰や角多	①			
40	2017、3B12、3D4、4B1、5B2-E、5C18	Ⅲa、Ⅲb、Ⅲc、Ⅲ、Ⅲb、Ⅲc、Ⅲd、Ⅲe、Ⅲf、Ⅲg、Ⅲh、Ⅲi、Ⅲj、Ⅲk、Ⅲl、Ⅲm、Ⅲn、Ⅲo、Ⅲp、Ⅲq、Ⅲr、Ⅲs、Ⅲt、Ⅲu、Ⅲv、Ⅲw、Ⅲx、Ⅲy、Ⅲz	Ⅲa、Ⅲb、Ⅲc、Ⅲd、Ⅲe、Ⅲf、Ⅲg、Ⅲh、Ⅲi、Ⅲj、Ⅲk、Ⅲl、Ⅲm、Ⅲn、Ⅲo、Ⅲp、Ⅲq、Ⅲr、Ⅲs、Ⅲt、Ⅲu、Ⅲv、Ⅲw、Ⅲx、Ⅲy、Ⅲz	Ⅲa	早期前装	神型文	深鉢	深鉢	胴部	即杖縁文、肩位+肩位山形文、胴体長径1.8cm、外面でいびつなノズ	白色	白、褐、角少量	①			
41	489	5A18	Ⅱ	早期前装	神型文	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	即杖縁文、肩位+肩位山形文	白色	白、褐、角、肩付少量	①			
42	5A18	5B18	Ⅱ	早期前装	神型文	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	即杖縁文、肩位+肩位山形文	白色	白、褐、角、肩付少量	①			
43	5A18	5B18	Ⅱ	早期前装	神型文	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	即杖縁文、肩位+肩位山形文	白色	白、褐、角、肩付少量	①			
44	3C5	5B18	Ⅱ	早期前装	神型文	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	ボツガイな縦付文	白色	白、褐、石灰、砂少量	①			
45	2F18	5B18	Ⅱ	早期前装	神型文	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	大底(内角)	白色	白、褐、角少量	①			
46	557区画	2C24	Ⅰ	早期前装	神型文	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	大底(内角)、外面ヨコ字	白色	白、砂少量	①			
47	4C9	5B18	Ⅱ	早期前装	神型文	深鉢	深鉢	深鉢	口縁部	大底(内角)、外面ヨコ字、口縁部の調査が中心の神型文に伴うと見られる	白色	白、砂少量	①			
48	3C20	5B18	Ⅱ	早期前装	深鉢文、田ノ上脚式	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	深鉢文、肩位縁線文(縦筋文)、内面筋線	白色	白、砂少量	①			
49	2F18、1G21	5B18	Ⅱ	早期前装	条状文	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	外面筋線文?	白色	白、砂少量	①			
50	2F12-18	5B18	Ⅱ	早期前装	条状文	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	外面筋線文?	白色	白、砂少量	①			
51	2D12	5B18	Ⅱ	早期前装	条状文	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	外面筋線文、外面筋線文	白色	白、砂少量	①			
52	2F19	5B18	Ⅱ	早期前装	条状文	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	外面筋線文	白色	白、砂少量	①			
53	2F19	5B18	Ⅱ	早期前装	条状文	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	外面筋線文	白色	白、砂少量	①			
54	1F25	5B18	Ⅱ	早期前装	条状文	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	外面筋線文	白色	白、砂少量	①			
55	557区画	1F17-18-20-22-23	Ⅱ、Ⅲa、Ⅲb	Ⅲb	前期	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	縦文+内筋線文	白色	白、褐、砂少量	①			
56	557区画	3C2	Ⅲa	前期	深鉢	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	縦文+内筋線文	白色	白、褐、石灰、砂少量	①			
57	2D18	5B18	Ⅱ	前期	深鉢	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	縦文+内筋線文	白色	白、砂少量	①			
58	2F19	5B18	Ⅱ	前期	深鉢	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	縦文+内筋線文	白色	白、砂少量	①			
59	2F18	5B18	Ⅱ	前期	深鉢	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	縦文+内筋線文	白色	白、砂少量	①			
60	5D11	5B18	Ⅱ	前期	深鉢	深鉢	深鉢	深鉢	胴部	縦文+内筋線文	白色	白、砂少量	①			
61	157区画	3B18-23	Ⅲa	中期中装~後装	A類	深鉢	深鉢	深鉢	口縁部~胴部全周	口縁部14.0	白色	白、砂少量	①			
62	157区画	3B18-23	Ⅲa	中期中装~後装	B類	深鉢	深鉢	深鉢	口縁部14.0	口縁部14.0	白色	白、砂少量	①			
63	157区画	3B18-23	Ⅲa	中期中装~後装	B類	深鉢	深鉢	深鉢	口縁部14.0	口縁部14.0	白色	白、砂少量	①			
64	157区画	3B18-23	Ⅲa	中期中装~後装	B類	深鉢	深鉢	深鉢	口縁部14.0	口縁部14.0	白色	白、砂少量	①			

前原遺跡土器総表(表3)

No.	遺跡	出土位置(採出層別)	層位	時期	形式系統	分器	器鉢	器鉢 直径 (cm)	高付部分	器鉢 高さ (cm)	高付部分 高さ (cm)	器鉢 形状	器鉢 重量 (g)	器鉢 色澤	器鉢 用途	備考
64	1号住居	3B19	2	中期中葉～後葉	BⅢ		深鉢						外周黒褐色、内周黄褐色	白ややや多量	①	
65	1号住居	3B24	2	中期中葉～後葉	AⅢ	3種B	深鉢	口径22.4	口縁部～胴部 1/2残存	口縁部 1/2残存	口縁部	3種B	深鉢	外周黒褐色、内周黄褐色 黒褐色	白多量	⑤ 内周段状物
66	1号住居	3B18・19・23・24・25 3D10・17・3E9 4B1・2・6、4D13 4E13・16、6B13	II, IIIa, IIIb IV, V	中期中葉～後葉	HⅢ		深鉢	口径25.6 口径19.3 高さ51.5	口縁部～胴部 1/4残存	口縁部 1/4残存	口縁部	2種	深鉢	黒褐色 黒褐色	黒多量、白少量	①
67	1号住居	3B18・19	IV	中期中葉～後葉	GⅢ	2種	深鉢	口径14.0	口縁部～胴部 ほぼ完整	口縁部 ほぼ完整	口縁部	2種	深鉢	外周赤褐色、内周黄褐色 外周黒褐色、内周黄褐色	白多量、白少量	⑤
68	1号住居	3B18	IV	中期中葉～後葉	FⅢ	2種	深鉢	口径16.0 口径15.2 高さ7.2	口縁部～胴部 ほぼ完整	口縁部 ほぼ完整	口縁部	2種	深鉢	外周赤褐色、内周黄褐色 外周黒褐色、内周黄褐色	白多量、白少量	⑤
69	1号住居			中期中葉～後葉	EⅢ		小笠原鉢	口径15.0 口径15.2 高さ7.2	口縁部～胴部 ほぼ完整	口縁部 ほぼ完整	口縁部	2種	深鉢	外周赤褐色、内周黄褐色 外周黒褐色、内周黄褐色	白多量、白少量	⑤
70	1号住居	3B24		中期中葉～後葉	AⅢ		深鉢		口縁部	口縁部	口縁部		深鉢	黒褐色、黒赤小片	白多量、白少量	⑤
71	1号住居	3B23, 4B5・10, 4C1・6・18		中期中葉～後葉	BⅢ	2種B	深鉢		口縁部	口縁部	口縁部		深鉢	黒褐色、黒赤小片	白多量、白少量	⑤
72	1号住居	4B10, 4C01, 4E3, 6B13・20, 5C7・11・12・16・17		中期中葉～後葉	GⅢ	1種	深鉢	口径30.5	口縁部～胴部	口縁部	口縁部		深鉢	黒褐色、黒赤小片	白多量、白少量	⑤
73	1号住居	4A4		中期中葉～後葉	BⅢ	4種c	深鉢	口径38.0	口縁部～胴部 1/2残存	口縁部 1/2残存	口縁部		深鉢	黒褐色、黒赤小片	白多量	⑤
74	3号住居	4A3	2	中期中葉～後葉	BⅢ		小笠原鉢	口径8.1	口縁部～胴部 ほぼ完整	口縁部 ほぼ完整	口縁部		深鉢	黒褐色、黒赤小片	白多量	⑤
75	3号住居	4A8	2	中期中葉～後葉	BⅢ	3種d	深鉢	口径18.9	口縁部～胴部 ほぼ完整	口縁部 ほぼ完整	口縁部		深鉢	黒褐色、黒赤小片	白多量	⑤
76	3号住居	4A8	2	中期中葉～後葉	BⅢ		深鉢		口縁部	口縁部	口縁部		深鉢	黒褐色、黒赤小片	白多量	⑤
77	3号住居	4A4	2	中期中葉～後葉	GⅢ		深鉢		口縁部	口縁部	口縁部		深鉢	黒褐色、黒赤小片	白多量	⑤
78	4号住居 埋蔵	4A4・9		中期中葉～後葉	GⅢ	4種	深鉢	器部最大径 21.4	口縁部～胴部 ほぼ完整	口縁部 ほぼ完整	口縁部		深鉢	黒褐色、黒赤小片	白多量	⑤
79	4号住居	4A8・10・15, 4B1・ 6・9・20	2	中期中葉～後葉	BⅢ	4種d	深鉢	口径34.0	口縁部～胴部 ほぼ完整	口縁部 ほぼ完整	口縁部		深鉢	黒褐色、黒赤小片	白多量	⑤
80	4号住居	4A10	2	中期中葉～後葉	GⅢ	5種	深鉢		口縁部	口縁部	口縁部		深鉢	黒褐色、黒赤小片	白多量	⑤
81	4号住居	4A4	2	中期中葉～後葉	GⅢ	2種	深鉢		口縁部	口縁部	口縁部		深鉢	黒褐色、黒赤小片	白多量	⑤
82	4号住居	4A10	2	中期中葉～後葉	FⅢ	1種	深鉢		口縁部	口縁部	口縁部		深鉢	黒褐色、黒赤小片	白多量	⑤
83	4号住居	4A4・6・10 3D7, 4A1, 4B8	IIa, IIIa, IIIb, IIIc	中期中葉～後葉	HⅢ	4種d	深鉢	口径40.0	口縁部～胴部 ほぼ完整	口縁部 ほぼ完整	口縁部		深鉢	黒褐色、黒赤小片	白多量	⑤
84	22号1土器	3C8・13		中期中葉～後葉	HⅢ	2種c	深鉢	口径22.3	口縁部～胴部 ほぼ完整	口縁部 ほぼ完整	口縁部		深鉢	黒褐色、黒赤小片	白多量	⑤
85	5号住居	3C13	4	中期中葉～後葉	HⅢ	4種c	深鉢		口縁部	口縁部	口縁部		深鉢	黒褐色、黒赤小片	白多量	⑤
86	5号住居	3C7	4	中期中葉～後葉	HⅢ		深鉢		口縁部	口縁部	口縁部		深鉢	黒褐色、黒赤小片	白多量	⑤

器鉢上については重量は、A・3) 観察記録入通の器鉢上の記載と対応している。

前庭溝跡・土器観察表 (4)

前庭溝跡	土器番号	層 位	部 位	分 類	形状	寸法 (cm)	発見部位	土器群	土器名	土質	備考
87	5519在	4	中庭中層～後葉	A組	深鉢	37	無取	無取	褐色土質	白多量、赤少量	①
88	5519在	4	中庭中層～後葉	B組	深鉢	37	無取	無取	褐色土質	白多量、赤少量	①
89	5519在	4	中庭中層～後葉	F組	1種		無取	無取	褐色土質	白、赤少量、黄少量	①
90	5519在	3	中庭中層～後葉	B組	1種		無取	無取	褐色土質	白、赤少量	①
91	5519在	3-4	中庭中層～後葉	G組	深鉢		無取	無取	褐色土質	黄少量、白、赤少量	①
92	5519在	3	中庭中層～後葉	G組	6種		無取	無取	褐色土質	白、黄、赤少量、黄少量	①
93	5519在	3	中庭中層～後葉	A組	深鉢		口縁部～胴部	無取	褐色土質	赤少量	①
94	5519在	3C18, 357, 4022	II, Ⅲa	中庭中層～後葉	A組	深鉢	胴部	無取	褐色土質	白、黄少量、赤、黄母	①
95	5519在	3E2	Ⅲa, Ⅲb	中庭中層～後葉	A組	深鉢	口縁部	無取	褐色土質	白、赤少量	①
96	5519在	3E7	3	中庭中層～後葉	A組?	深鉢	胴部	無取	褐色土質	白、赤少量	①
97	5519在	3E8	3	中庭中層～後葉	F組	1種	胴部	無取	褐色土質	白、赤少量	①
98	5519在	3E7	3	中庭中層～後葉	G組	深鉢	胴部	無取	褐色土質	白、赤少量	①
99	5519在	3E7	3	中庭中層～後葉	G組	深鉢	胴部	無取	褐色土質	白、赤少量	①
100	5519在	3E3	1	中庭中層～後葉	A組?	深鉢	胴部	無取	褐色土質	白、赤少量	①
101	5519在	2E23	1	中庭中層～後葉	A組?	深鉢	胴部	無取	褐色土質	白多量	①
102	5519在	3E13	1	中庭中層～後葉	A組?	深鉢	口縁部	無取	褐色土質	白、黄少量、赤少量	①
103	5519在	2E23	3	中庭中層～後葉	B組?	深鉢	胴部	無取	褐色土質	白多量、赤少量	①
104	5519在	3E13	II	中庭中層～後葉	C組	3種	口縁部～胴部	無取	褐色土質	白、赤少量	①
105	5519在	3E8	1	中庭中層～後葉	G組	3種	胴部～底部	1/4残存	褐色土質	白、赤少量	①
106	5519在	2E23	1	中庭中層～後葉	C組	3種	胴部	無取	褐色土質	白多量、黄、赤少量	①
107	5519在	2E23	1	中庭中層～後葉	F組	1種	胴部	無取	褐色土質	白多量	①
108	5519在	2E23	1	中庭中層～後葉	C組	3種	胴部	無取	褐色土質	白、赤少量	①
109	5519在	3E13	1	中庭中層～後葉	C組	3種	胴部	無取	褐色土質	白、赤少量	①
110	5519在	3E8	1	中庭中層～後葉	B組	深鉢	口縁部	無取	褐色土質	白多量、赤少量	①
111	5519在	3E12	1	中庭中層～後葉	?	深鉢	胴部	無取	褐色土質	白多量、黄、赤少量	①
112	5519在	3E23	1	中庭中層～後葉	G組	3種	胴部	無取	褐色土質	外周部赤褐色、内周部白色	①
113	5519在	2E26	1	中庭中層～後葉	B組	深鉢	胴部	無取	褐色土質	白多量、黄、赤少量	①
114	5519在	2D16	1	中庭中層～後葉	B組	深鉢	胴部	無取	褐色土質	白多量	①
115	5519在	2D21	1	中庭中層～後葉	G組	小型深鉢	胴部～底部	無取	褐色土質	白少量	①
116	5519在	2D21	1	中庭中層～後葉	G組	深鉢	胴部	無取	褐色土質	白、黄少量	①
117	5519在	2D6-11	3	中庭中層～後葉	?	深鉢	胴部	無取	褐色土質	白、黄少量	①
118	5519在	2D7	3	中庭中層～後葉	?	深鉢	胴部	無取	褐色土質	外周部赤褐色、内周部白色	①
119	5519在	2E10	3	中庭中層～後葉	A組	深鉢	胴部	無取	褐色土質	白多量	①

注：①については断面表、A、3) 観察所記入項目の欄上の記載と対応している。

前原遺跡土器観覧表(5)

No.	遺跡	出土位置(採集層様)	層位	時期	形式系統	分類	形状	直径(cm)	高径(cm)	底径(cm)	底径形状	蓋形状	蓋径(cm)	蓋高(cm)	蓋形状	備考
120	79号住居	2011	3	中期中葉～後葉	CⅡ	1種	深鉢				胴部					裏面褐色、外周赤褐色、内周赤褐色 白多量、砂礫少量
121	79号住居	2C10	2	中期中葉～後葉	AⅢ	3種a	深鉢	口径14.0			胴部 口縁部～胴部 1/4残存					外周赤褐色、内周赤褐色 黒質、石灰多量、白少量
122	79号住居	2C10、2D6	2	中期中葉～後葉	AⅢ	深鉢	口径14.0				胴部					外周赤褐色、内周赤褐色 黒質、石灰多量、白少量
123	79号住居	2D6	2	中期中葉～後葉?	?	深鉢					口縁部起手					赤褐色 白多量、砂礫少量
124	79号住居	2C10	2	中期中葉～後葉	AⅢ	深鉢					胴部					赤褐色 白多量、砂礫少量
125	79号住居	2C10	2	中期中葉～後葉	AⅢ	深鉢					胴部					赤褐色 白多量、砂礫少量
126	79号住居	2C10	2	中期中葉～後葉	AⅢ	深鉢					胴部					赤褐色 白多量、砂礫少量
127	79号住居	2C10	2	中期中葉～後葉	AⅢ	深鉢					胴部					赤褐色 白多量、砂礫少量
128	79号住居	2C7	2	中期中葉～後葉	BⅢ	深鉢					口縁部					赤褐色 白多量、砂礫少量
129	79号住居	2C7	2	中期中葉～後葉?	?	深鉢					口縁部起手					赤褐色 白多量、砂礫少量
130	79号住居	2C10	2	中期中葉～後葉	AⅢ	深鉢					胴部					赤褐色 白多量、砂礫少量
131	79号住居	2D6	2	中期中葉～後葉	FⅡ	1種	深鉢				胴部					赤褐色 白多量、砂礫少量
132	79号住居	2D6	2	中期中葉～後葉	FⅡ	1種	深鉢	底径10.0			胴部					赤褐色 白多量、砂礫少量
133	79号住居	2D6	2	中期中葉～後葉	GⅡ	1種	深鉢				胴部					赤褐色 白多量、砂礫少量
134	79号住居	2D7	2	中期中葉～後葉	GⅡ	4種	深鉢				胴部					赤褐色 白多量、砂礫少量
135	79号住居	2C10	2	中期中葉～後葉	FⅡ	1種	深鉢	口径38.8 底径13.2	3.4残存		口縁部～胴部 1/4残存					赤褐色 白多量、砂礫少量
136	79号住居	2D16、3E17、4B2-11	2	中期中葉～後葉	BⅢ	1種a	深鉢	口径36.0			胴部					赤褐色 白多量、砂礫少量
137	89号住居	2D1	1	中期中葉～後葉	FⅡ	1種	深鉢				胴部					赤褐色 白多量、砂礫少量
138	89号住居	1D25	1	中期中葉～後葉	AⅢ	1種	深鉢				口縁部					赤褐色 白多量、砂礫少量
139	89号住居	1D25	1	中期中葉～後葉	GⅡ	1種	深鉢				胴部					赤褐色 白多量、砂礫少量
140	89号住居	1D21	1	中期中葉～後葉	GⅡ	1種	深鉢				胴部					赤褐色 白多量、砂礫少量
141	89号住居	1D21、2C4-10	1	中期中葉～後葉	BⅢ	2種b	深鉢	口径32.8			胴部					赤褐色 白多量、砂礫少量
142	94号遺構	5C10	8	中期中葉～後葉	BⅢ	1種	深鉢				胴部					赤褐色 白多量、砂礫少量
143	113号遺構	5C10	13	中期中葉～後葉	AⅢ?	1種	深鉢				胴部					赤褐色 白多量、砂礫少量
144	94号遺構	5C10	13	中期中葉～後葉	AⅢ?	1種	深鉢				胴部					赤褐色 白多量、砂礫少量
145	94号遺構	5C	13	中期中葉～後葉	FⅡ	1種	深鉢				胴部					赤褐色 白多量、砂礫少量
146	94号遺構	5C10	13	中期中葉～後葉	GⅡ	1種	深鉢				胴部					赤褐色 白多量、砂礫少量

注：土上については断面図A、A-3) 観察記録入項目の欄上の記載と対応している。

前原遺跡土器線絵表(7)

No.	遺物	出土位置(採出層様)	層位	時期	形式系統	分器	形状	直径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	底面形状	底面位置	遺入層	備考
171	5C23, 3D15	Ⅱa, 風割木	中期中葉~後葉	AⅡ	1種a	深鉢	口径21.0	口縁部~胴部 1/3残存	底径19.0	口縁部~胴部 1/3残存	底面形状不明	赤褐色	白多量	①
172	3D11	Ⅱa, Ⅱb	中期中葉~後葉	AⅡ	深鉢	口縁部		口縁部		口縁部	底面形状不明	赤褐色	白多量	①
173	4D10-14+15-20	Ⅱ, Ⅱa, Ⅱa上	中期中葉~後葉	AⅡ	2種a	深鉢	口径21.0	口縁部~胴部 1/3残存	底径22.0	口縁部~胴部 1/3残存	底面形状不明	赤褐色	白多量	①
174	5E10-17-18	Ⅱ, Ⅱa	中期中葉~後葉	AⅡ	(2種b)	深鉢	口縁部	口縁部		口縁部	底面形状不明	赤褐色	白多量	①
175	6D1	クツクツ	中期中葉~後葉	AⅡ	3種b	深鉢	口径21.2	口縁部~胴部 3/4残存	底径19.0	口縁部~胴部 3/4残存	底面形状不明	赤褐色	白多量	①
176	3E7, 4D8	Ⅱa, Ⅱb	中期中葉~後葉	AⅡ	3種b	深鉢	口径21.2	口縁部~胴部 3/4残存	底径19.0	口縁部~胴部 3/4残存	底面形状不明	赤褐色	白多量	①
177	2C20-25, 2D21	Ⅱ, Ⅱa	中期中葉~後葉	AⅡ	2種c	深鉢	口径22.0	口縁部~胴部 1/2残存	底径22.0	口縁部~胴部 1/2残存	底面形状不明	赤褐色	白多量	①
178	5D7	Ⅱa	中期中葉~後葉	AⅡ	2種c	深鉢	口径12.0	口縁部~胴部 1/2残存	底径12.0	口縁部~胴部 1/2残存	底面形状不明	赤褐色	白多量	①
179	4E16-21	Ⅱ, Ⅱa上, Ⅱ下	中期中葉~後葉	AⅡ	2種a	深鉢	口径19.0	口縁部~胴部 1/2残存	底径19.0	口縁部~胴部 1/2残存	底面形状不明	赤褐色	白, 陶少量	①
180	4A13	Ⅱ	中期中葉~後葉	AⅡ	深鉢	口縁部		口縁部		口縁部	底面形状不明	赤褐色	白多量, 砂礫少量	①
181	3E23	Ⅱa下	中期中葉~後葉	AⅡ	1種a	深鉢		口縁部		口縁部	底面形状不明	赤褐色	白多量, 砂礫少量	①
182	3D10	Ⅱb上	中期中葉~後葉	AⅡ	深鉢	口縁部		口縁部		口縁部	底面形状不明	赤褐色	白, 陶少量	①
183	2C20	Ⅱ	中期中葉~後葉	AⅡ	深鉢	胴部		胴部		胴部	底面形状不明	赤褐色	白多量	①
184	3D10	Ⅱa下	中期中葉~後葉	AⅡ	深鉢	胴部		胴部		胴部	底面形状不明	赤褐色	白多量	①
185	5D8+12+13	Ⅱa, Ⅱa下	中期中葉~後葉	AⅡ	深鉢	口縁部~胴部		口縁部~胴部		口縁部~胴部	底面形状不明	赤褐色	白多量	①
186	5D8+12+13		中期中葉~後葉	AⅡ	深鉢	胴部		胴部		胴部	底面形状不明	赤褐色	①	
187	5A1.4	風割木	中期中葉~後葉	AⅡ	深鉢	口縁部		口縁部		口縁部	底面形状不明	赤褐色	白, 砂礫少量	①
188	2D1+8+13+16+18+19	Ⅱ, Ⅱa, Ⅱb, Ⅱ	中期中葉~後葉	AⅡ	深鉢	口縁部		口縁部		口縁部	底面形状不明	赤褐色	白, 砂礫少量	①
189	3C9	Ⅱb	中期中葉~後葉	AⅡ	深鉢	胴部		胴部		胴部	底面形状不明	赤褐色	白, 陶, 砂礫少量	①
190	4E12	Ⅱa	中期中葉~後葉	AⅡ	深鉢	胴部		胴部		胴部	底面形状不明	赤褐色	白多量	①
191	4D19-20	Ⅱa	中期中葉~後葉	AⅡ	深鉢	胴部		胴部		胴部	底面形状不明	赤褐色	白多量	①
192	1D21	Ⅱ, Ⅱb	中期中葉~後葉	AⅡ	深鉢	胴部		胴部		胴部	底面形状不明	赤褐色	白多量	①
193	4D16+20+25, 4E11	Ⅱ, Ⅱa	中期中葉~後葉	BⅡ	1種b	深鉢	口径22.0	口縁部~胴部		口縁部~胴部	底面形状不明	赤褐色	白多量	①

前南道路工路線表(8)

No.	測程	西土地区画番号	積算	時 間	形式系統	分層	距離	距離 (cm)	高低部型	溝形状等	断面位置	進入路	出口
194		2D13	IIa	中程中盤～後盤	B型		深鉢		口縁部	平口縁、口縁内面凹部等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白、砂礫少量	①
195		4E12、5C2、7-11、12、20、22-23、5D15	II、 IIIa、 IIIa (中)	中程中盤～後盤	B型	1種a	深鉢	口径10.0	胴部～底部	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白や中少量	②
196		5E15、20、22-23、6D5	II、 III、 IIIa	中程中盤～後盤	B型	2種a	深鉢	口径31.6	口縁部～胴部	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白少量	①
197		5E20	IIIa	中程中盤～後盤	B型	2種a	深鉢		口縁部	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	粗砂多量、白、礫少量	①
198		5C10	IIIa	中程中盤～後盤	B型	2種a	深鉢		口縁部	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白、砂礫少量	①
199	6号在留	1025、2D16、2D16-21、22-23、24、25、26、27、28、29、30、31、32、33、34、35、36、37、38、39、40、41、42、43、44、45、46、47、48、49、50、51、52、53、54、55、56、57、58、59、60、61、62、63、64、65、66、67、68、69、70、71、72、73、74、75	Ⅱ、 IIIa、 IIIa (中)、 IIIa、 IIIa (下)、 IIIb	中程中盤～後盤	B型	2種a	深鉢	口径45.7	口縁部～胴部	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白少量	②
200		5D14、15	II、 IIIa、 IIIb、 IV	中程中盤～後盤	B型	4種c	深鉢	口径40.0	口縁部～胴部	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白や中少量、砂礫少量	②
201		4E12	II	中程中盤～後盤	B型		深鉢		口縁部	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白、砂礫多量	②
202		2E19	IIIa	中程中盤～後盤	B型		深鉢		口縁部	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白、砂礫多量	②
203		2D7-11、12	II	中程中盤～後盤	B型		深鉢		胴部	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白、礫、砂礫少量	②
204		3C15、3E14、20、4C2-9、12-13	II、 IIIa、 IIIb	中程中盤～後盤	B型	4種c	深鉢	口径34.5	口縁部～胴部	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白、砂礫中少量	②
205		5D14、15	II、 IIIa、 IIIb	中程中盤～後盤	B型	4種b	深鉢	口径34.0	口縁部1/4径存	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白、砂礫多量	②
206		3D3、12	II、 IIIa	中程中盤～後盤	B型		深鉢		口縁部	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白、砂礫少量	②
207		1021、2C21、2D1、3D8、5C5、10-16、21、5D6、11-14、15	II、 IIIa、 IIIb、 IIIb、 IIIb、 IIIb	中程中盤～後盤	B型		深鉢	口径35.0	口縁部～胴部	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白少量	②
208		2D9-10	II	中程中盤～後盤	C型	3種	深鉢	口径14.2	口縁部1/4径存	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白少量	①
209		11D19	III	中程中盤～後盤	C型	4種	深鉢		胴部	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白や中少量	②
210		5B12	II	中程中盤～後盤	C型	4種	深鉢		口縁部	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白多量、砂礫少量	②
211		2D7-8、12-13	II、 IIIa	中程中盤～後盤	C型	4種	深鉢	口径23.7	口縁部～胴部	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白多量、砂礫少量	②
212		5B2	IIIa	中程中盤～後盤	C型	2種	深鉢		口縁部	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白多量、砂礫少量	②
213		5B14	IIIa	中程中盤～後盤	C型	2種	深鉢		口縁部	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白、礫、角少量	①
214		2019	IIIa	中程中盤～後盤	C型	4種	深鉢		口縁部	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白、角少量	①
215		5D8、12-13	IIIa	中程中盤～後盤	C型	4種	深鉢		口縁部	平口縁、口縁内面凹部、圧頂状等、縁等(溝巻、V字)、重工部は縁状工具による単位高状、縁下部は縁状工具による単位高状	深褐色	白、砂礫少量	①

注：①については断面表、A、3) 観察記入項目の欄上の記載と対応している。

前所漬跡・土器観察表 (10)

No.	遺跡	所在(五国三郡)	層位	時 期	形式系統	分層	形状	寸法 (cm)	成形技法	装飾技法等	面化粧	遺入物	備 考
242	3C3-9	II, IIIa, IIIb	中期中葉～後葉	G型	5種	深鉢	口縁部		平口縁、口縁部外縁部、口縁部内部空部	地陶色	白多量	①	
243	2D14	II	中期中葉～後葉	G型	1種	深鉢	口縁部		平口縁、口縁内外部空部等、外部空部	茶褐色	II, 砂礫少量	①	
244	3D1	II	中期中葉～後葉	G型	1種	深鉢	口縁部		平口縁、口縁内外部空部等、外部空部	茶褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色	II, 砂礫少量	① 外周スス	
245	4B17	IIIa	中期中葉～後葉	G型	5種	深鉢	口縁部		平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色	II, 砂礫少量	①	
246	3B17-22	II, IIIa	中期中葉～後葉	G型	1種	小型深鉢	口縁10.4 底径9.0		平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色	II, 砂礫少量	①	
247	5C2-17	II, IIIa	中期中葉～後葉	G型	3種	深鉢	口縁部		平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色	II, 砂礫少量	①	
248	2D13-14-15	II, IIIa	中期中葉～後葉	G型	3種	深鉢	口縁部		平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色	II, 砂礫少量	①	
249	4A20, 4B13-15-20, 4C7-8-11-19	II, IIIa, IIIb	中期中葉～後葉	I型	1種	深鉢	口縁部		平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色	II, 砂礫少量	①	
250	2D15	II	中期中葉～後葉	I型	1種	深鉢	口縁部		平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色	II, 砂礫少量	①	
251	5B2	IIIa	中期中葉～後葉	I型	1種	深鉢	口縁部		平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色	II, 砂礫少量	①	
252	2D16	II	中期中葉～後葉	I型	1種	深鉢	口縁部		平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色	II, 砂礫少量	①	
253	4C1-4-19	II	中期中葉～後葉	I型	1種	深鉢	口縁18.6 底径14.8		平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色	II, 砂礫少量	①	
254	4A5-10	II	中期中葉～後葉	I型	1種	深鉢	口縁部		平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色	II, 砂礫少量	①	
255	3E2-23	II, IIIa	中期中葉～後葉	I型	1種	深鉢	口縁29.5, 底径10.0, 口縁部外縁部 1.2残存		平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色	II, 砂礫少量	①	
256	2D23	IIIa	中期中葉～後葉	I型	1種	深鉢	口縁部		平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色	II, 砂礫少量	①	
257	5C20	IIIa	中期中葉～後葉	I型	1種	白鉢	口縁部		平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色、赤褐色	II, 砂礫少量	①	
258	1E20-24	II	後期前葉	地外付1式 器付1式	壺	口縁14.4, 底径6.0, 口縁部外縁部 残3.14.1			平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色	II, 砂礫少量	①	
259	5B7, 5C20	IIIa	後期前葉	地外付1式 器付1式	壺	口縁部			平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色	II, 砂礫少量	①	
260	5B14	IIIa	後期中葉	加形付1式 器付1式	深鉢	口縁部			平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色	II, 砂礫少量	①	
261	1E18-23	II	後期後葉	加形上蓋部 器付1式	深鉢	口縁部			平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色	II, 砂礫少量	①	
262	5A5	IIIb	後葉	加形上蓋部 器付1式	深鉢	口縁部			平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色	II, 砂礫少量	①	
263	5B25	IIIa	後葉	加形上蓋部 器付1式	深鉢	口縁部			平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色	II, 砂礫少量	①	
264	3E0	IIIa	後葉	加形上蓋部 器付1式	深鉢	口縁部			平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色	II, 砂礫少量	①	
265	4A2	IIIa	後葉	加形上蓋部 器付1式	深鉢	口縁部			平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色	II, 砂礫少量	①	
266	4D4	IIIa	後葉	加形上蓋部 器付1式	深鉢	口縁部			平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色	II, 砂礫少量	①	
267	2E12	II	後期前葉～中葉	地外付1式 器付1式	壺	口縁部			平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色	II, 砂礫少量	①	
268	6A7	II	後期前葉～中葉	地外付1式 器付1式	壺	口縁部			平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色	II, 砂礫少量	①	
269	2D8	II	後期前葉～中葉	地外付1式 器付1式	壺	口縁部			平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色	II, 砂礫少量	①	
270	2D13	IIIa	後期前葉～中葉	地外付1式 器付1式	壺	口縁部			平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色	II, 砂礫少量	①	
271	2E23	II	後期前葉～中葉	地外付1式 器付1式	壺	口縁部			平口縁、口縁部空部、口縁部外縁部による凹凸、口縁部外縁部による凹凸	赤褐色	II, 砂礫少量	①	

注：①については第Ⅲ巻A, 3) 観察記録入通の欄上の記載と対応している。

前原遺跡土器線表 (11)

№	遺物	出土位置 (掘出層)	層位	時 期	形状・装束	分器	形状	寸法 (cm)	発見部位	産地・産地等	産地色	加工	備考
272	18D13	II	晩前期Ⅱ-中期	佐野1式 併行	深鉢	口縁部	口縁部	平口縁、内面に幅広い浅い凹線、腹に凹線	黒赤褐色	砂焼多量	①		
273	1F17-23, 5A18, 5D6, 6A6	II, IIIa	晩前期Ⅱ-中期	佐野1式 併行	深鉢	口縁部	口縁部	平口縁、無文、幅広い凹線、腹部底縁に凹線	黒褐色	白、焼少量	①	① ①7と同一	
274	1F17-23, 5A18, 5D6, 6A6	II, IIIa	晩前期Ⅱ-中期	佐野1式 併行	深鉢	胴部	胴部	無文、幅広い凹線、腹部底縁に凹線	黒褐色	白、焼少量	①	① ①7と同一	
275	18D13	II	晩前期Ⅱ-中期	佐野1式 併行	深鉢	口縁部-胴部	口縁部-胴部	平口縁、外周縁文、内面幅広い凹線の凹線、腹に幅広い凹線	黒褐色	白、砂焼少量	①		
276	2E18-19-24	II	晩前期Ⅱ-中期	佐野1式 併行	深鉢	口縁33.1	口縁部-胴部	平口縁、外周縁文、内面幅広い凹線の凹線、腹に幅広い凹線	黒赤褐色、内面赤褐色	砂焼多量、石灰少量	①		
277	2D18	IIIa	晩前期Ⅱ-中期	佐野1式 併行	深鉢	口縁部-胴部	口縁部-胴部	平口縁、外周縁文、内面幅広い凹線の凹線、腹に幅広い凹線	外周赤褐色、内面赤褐色	白、砂焼中量	①	① ①7と同一	
278	5D7	IIIa	晩前期Ⅱ-中期	佐野1式 併行	壺	胴部底穴径12.1	胴部	無文、内面幅広い凹線	黒褐色	白、砂焼多量	①		
279	4A10-20-24, 4B11-21, 4D19	II	晩前期Ⅱ	女高田式 併行	深鉢	口縁部-胴部	口縁部-胴部	深衣口縁、突起した付帯文、穿孔口、胴部底穴径約4.5cm、底部平出	黒赤褐色	白、砂焼少量	①	外周赤褐色	
280	5C3	IIIa	晩前期Ⅱ	女高田式 併行	深鉢	胴部	胴部	乳線文	黒褐色	白、少量	①		
281	2D2, 2E8	II	晩前期Ⅱ	女高田式 併行	深鉢	口縁部	口縁部	平口縁、口縁部底縁、外周2条状線、内面2条状線	黒褐色	白、少量	①	内外周赤褐色	
282	2F2	IIIa	晩前期Ⅱ	女高田式 併行	深鉢	口縁部	口縁部	山形小突起、深衣口縁、外周1条状線、内面1条状線	黒赤褐色	白、少量	①		
283	1E20, 1F19	II, IIIb	晩前期Ⅱ	女高田式 併行	深鉢	口縁部-胴部	口縁部-胴部	平口縁、口縁部底縁、外周2条状線、内面2条状線	黒褐色	白、少量	①		
284	5D3	IIIa	晩前期Ⅱ	女高田式 併行	深鉢	口縁部	口縁部	平口縁、外周3条状線、内面突帯	黒褐色	白、少量	①		
285	2D19	II	晩前期Ⅱ	女高田式 併行	深鉢	口縁部	口縁部	平口縁、外周2条状線、内面突帯	黒褐色	白、少量	①	内外周赤褐色	
286	1E20	IIIb	晩前期Ⅱ	女高田式 併行	深鉢	口縁部-胴部	口縁部-胴部	平口縁、外周1条状線	黒褐色	白、焼、石灰少量	①		
287	2E17-19-23	II, IIIa	晩前期Ⅱ	女高田式 併行	深鉢	胴部	胴部	平行乳線、乳点文	赤褐色、内面赤褐色	石灰多量	①		
288	5C24-25	II	晩前期Ⅱ	女高田式 併行	深鉢	口縁部	口縁部	平口縁、外周1条状線	赤褐色、内面赤褐色	①	石灰中量		
289	1E16, 1F22	IIIa	晩前期Ⅱ	女高田式 併行	深鉢	口縁37.0	口縁部-胴部	平口縁、外周1条状線	褐色	白、少量	①		
290	1D3, 1D4	II	晩前期Ⅱ	女高田式 併行	深鉢	口縁28.4	口縁部-胴部	平口縁、外周幅広い1条状線	赤赤褐色	白、多量	①	内外周赤褐色	
291	2E7-9	II	晩前期Ⅱ	女高田式 併行	深鉢	口縁28.0	口縁部-胴部	平口縁、口縁部外周凹線	赤褐色	白、砂焼少量	①		
292	2E14	II	晩前期Ⅱ	女高田式 併行	浅鉢	口縁20.0	口縁部-胴部	山形小突起、深衣口縁、外周2条状線	黒褐色、帯赤褐色	①	少量、穿孔、石灰中量		
293	4D5	IIIa	晩前期Ⅱ	女高田式 併行	浅鉢	口縁20.5	口縁部-胴部	平口縁、外周1条状線、内面1条状線、付帯文、内周1条状線	赤褐色	①	砂焼少量		
294	6D16	敷土	晩前期Ⅱ	女高田式 併行	浅鉢	口縁20.5	口縁部-胴部	深衣口縁、乳点文、外周1条状線、内面2条状線、外周底縁	赤褐色、内面赤褐色	①	外周赤褐色		
295	1G22	IIIa	晩前期Ⅱ	女高田式 併行	浅鉢	口縁部	口縁部	平口縁、口縁外周1条状線、内面突帯	赤褐色、内面赤褐色	①	石灰少量		
296	3C25	II	晩前期Ⅱ	女高田式 併行	浅鉢	口縁部	口縁部	平口縁、口縁外周1条状線、穿孔孔あり	赤赤褐色、内面赤褐色	①	石灰少量	① ①7と同一	
297	6C13	カクラン	晩前期Ⅱ	女高田式 併行	浅鉢	口縁部	口縁部	平口縁、口縁外周3条状線、内面突帯、穿孔孔あり	赤褐色、内面赤褐色	①	石灰少量	① ①7と同一	
298	1F14	IIIa	晩前期Ⅱ	女高田式 併行	壺	胴部底穴径7.1	胴部	浅網、くびれ状の突、胴下部1条	赤褐色	①	石灰中量		

前河原跡土器観察表 (12)

※器土については番号がA、B、31。観察記入通行人の器土の記載と対応している。

No.	遺物	出土地層 (層名層積)	層位	時期	形状・系統・分類	直径 (cm)	高さ (cm)	厚さ	重量 (g)	支 持	底底質	記入人	器土
299	SF12		II, IIa	晩周後葉	女島形印式 併行								
300	IE16, 4E2		II, IIa	晩周後葉	女島形印式 併行								外面黒褐色、内面黒褐色 白、砂礫少量、石灰、赤 ① 外面赤部 少量
301	IE21, 2D15, 17-20, 2E7, 5A1		II, IIa	晩周後葉	女島形印式 併行								外面黒褐色、内面黒褐色 白、雲母少量 ① 外面赤部 白、砂礫少量
302	4A15-20, 4B11- 16-21, 表裡		II	晩周後葉	女島形印式 併行								内外面赤褐色、断面黒褐色 白、砂礫少量 ①
303	3G7		IIIa	晩周後葉	女島形印式 併行								短区褐色 粗砂、砂礫少量 ①
304	3C24		IIIa	晩周後葉	女島形印式 併行								短区褐色、断面赤褐色 雲母、石灰少量 ②
305	1F10, 3A24, 5B16-22, 6B2-3		II, IIIb, 風腐木	晩周後葉	壺山式併行								外面赤部、内面赤褐色 砂礫少量 ① 外面黒い 器物多い
306	4C25, 4D19-13-18, 4E6, 5C3-4-5-10, 風腐木		II, IIIa, IIIb, W, 風腐木	晩周後葉	壺山式併行								褐色 外面黒褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②
307	4E3		IIIa	晩周後葉	壺山式併行								褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量、白少量 ②
308	1E14-23-24		II	晩周後葉	壺山式併行								褐色 褐色 ① 内面赤部、外 面赤部
309	1E20		IIIb	晩周後葉	壺山式併行								外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量、白少量 ②
310	2D5		IIIa	晩周後葉	壺山式併行								褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量、白少量 ②
311	5C20		IIIa	晩周	壺山式併行								褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②
312	4E2		II	晩周	壺山式併行								褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量、白少量 ②
313	5C5		IIIa	晩周	壺山式併行								褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②
314	4D4, 4E2		II, IIIb	?	壺山式併行								灰白色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②
315	3C7		IIIa, IIIb	?	壺山式併行								内外面赤褐色、断面黒褐色 長石、砂礫少量 ②
316	5C5		IIIa	?	壺山式併行								灰白色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②
317	1F22		IIIa	?	壺山式併行								外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②

前河原跡土器片層観察表

※器土については番号がA、B、31。観察記入通行人の器土の記載と対応している。

No.	遺物	出土地層 (層名層積)	層位	時期	形状・系統・分類	直径 (cm)	長さ (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	支 持	底底質	記入人	器土
318	3C18		IIIa	晩周	深鉢	1.00	3.8	3.6	0.9	15.2	無文		褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②
319	2E18		IIIa	晩周	深鉢	1.00	3.4	3.7	0.5	8.3	無文		褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②
320	2K13		IIIa	晩周	深鉢	1.00	4.4	4.6	0.9	19.3	無文		褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②
321	5D4		IIIa	晩周	深鉢	1.00	4.1	4.9	0.8	17.0	無文		褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②
322	2F17		IIIa	晩周	深鉢	1.00	3.7	6.2	0.8	24.1	無文		褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②
323	2E18		IIIa	晩周	深鉢	1.00	3.8	3.6	1.0	16.6	無文		褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②
324	2E18		IIIa	晩周	深鉢	1.00	3.8	3.6	1.0	16.6	無文		褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②
325	3D3		IIIa	晩周	深鉢	1.00	3.8	4.1	1.0	19.8	無文		褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②
326	3F7		IIIb	晩周	深鉢	2.00	4.4	4.4	0.9	21.0	無文		褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②
327	5D1		IIIa	晩周	深鉢	2.00	4.9	4.0	0.7	20.1	不明		褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②
328	1E16		IIIa	晩周	深鉢	3.00	3.0	2.8	0.9	6.2	無文		褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②
329	1E16		IIIa	晩周	深鉢	3.00	2.8	2.7	0.8	7.0	無文		褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②
330	5C5		IIIa	晩周	深鉢	3.00	3.5	3.4	0.9	14.0	無文		褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②
331	5C5		IIIa	晩周	深鉢	3.00	3.6	3.5	0.9	14.0	無文		褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②
332	1E22		IIIa	晩周	深鉢	3.00	3.6	3.2	0.9	12.4	無文		褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量 ②
333	4D12		III	晩周	深鉢	3.00	4.3	4.0	1.0	18.5	無文		褐色 外面赤褐色、内面赤褐色 粗砂、砂礫少量、石灰赤 ②

前原遺跡石器観察表(1)

石鏃観察表

番号	遺物名・グリッド	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	素材	遺存状態	備考
334	5A2	Ⅱ	A	1.5	1.4	0.2	0.3	黒色緻密安山岩	不明	片断欠	
335	1号住居-3B19	Ⅱ	A	1.2	1.3	0.3	0.3	黒曜石	不明	完形	
336	3B25	Ⅱ	A	1.8	1.4	0.2	0.5	黒曜石	不明	完形	
337	13E16	Ⅱ	B	2.4	1.3	0.4	0.8	黒色緻密安山岩	不明	完形	アスファルト付着
338	地点不明	Ⅱ	B	2.7	1.6	0.3	0.9	チャート	不明	完形	
339	2E23	Ⅱ	B	2.3	1.4	0.2	0.6	黒曜石	不明	完形	
340	4B22	Ⅱ	C	2.5	1.7	0.5	1.6	頁岩	不明	片断欠	
341	3C10	Ⅱ	C	2.0	1.6	0.4	0.9	黒色緻密安山岩	不明	片断欠	
342	2D	Ⅱ	C	3.2	1.7	0.4	1.7	メノウ	不明	片断欠	
343	2E6	Ⅱ	C	2.8	2.2	0.5	2.0	頁岩	不明	基部欠	
344	5C10	Ⅱ	D	3.1	1.0	0.4	1.0	頁岩	不明	基部欠	アスファルト付着

石鏃失敗品観察表

番号	遺物名・グリッド	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	素材	遺存状態	備考
345	不明		3.7	1.2	0.6	1.7	頁岩	縦長		
346	2E23	V	3.1	1.9	0.5	3.2	頁岩	縦長		
347	5B1	Ⅱ	2.8	1.7	0.4	1.7	黒曜石	縦長		
348	2C15	Ⅱ	2.2	1.7	0.5	1.8	黒曜石	不明	2C%5、基熱	
349	4B14		2.1	1.6	0.4	2.1	黒曜石	縦長	風割木	

石鏃観察表

番号	遺物名・グリッド	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	素材	遺存状態	備考
350	2E6	Ⅱ	2.8	2.2	0.5	2	頁岩	不明	基部欠	
351	2F5	Ⅱ	3.4	1.4	0.8	2.7	黒色緻密安山岩	不明	使用痕(磨耗)あり	
352	2C25	Ⅱ	2.5	1.4	0.6	1.4	黒曜石	横長	使用痕(磨耗)あり	

石匙観察表

番号	遺物名・グリッド	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	素材	遺存状態	備考
353	1G12	Ⅱ	3.6	5.7	1.6	92.5	黒色緻密安山岩	横長	基部一部欠、機型石匙	

両極別離値のある石器観察表

番号	スグリッド	層位	作業部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	素材	遺存状態	備考
354	1号住居-4B10	Ⅱ	2割1射	4.0	1.7	1.5	9.1	黒色緻密安山岩	横長	下縁	有
355	3B23	Ⅱ	2割1射	2.3	2.2	0.7	2.5	黒炭岩	不明	片断欠	無
356	3C22	Ⅱ	4割2射	1.6	2.5	0.8	2.9	黒曜石	不明	片断欠	無

不定形石器観察表

番号	遺物名・グリッド	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	素材	二次調整面	表面	備考
357	5E18	Ⅱ	A	3.8	5.8	1.2	31.0	黒色緻密安山岩	横長	下縁	有	
358	3C13	Ⅱ	B	6.0	5.5	1.5	51.0	凝灰岩	不明	片断縁へ下縁	無	基熱?
359	2D23	Ⅱ	B	11.4	5.4	3.3	234.5	安山岩	横長?	片断縁	無	風化強い
360	7号住居-2C2	C	C	7.0	4.6	1.3	45.7	頁岩	縦長	片断縁	無	
361	5号住居-3C7	4	C	3.8	3.0	1.5	20.4	黒色緻密安山岩	不明	全面	無	
362	5B9	Ⅱ	C	6.8	5.1	2.0	65.4	黒色緻密安山岩	縦長	片断縁へ下縁	無	
363	2D18	Ⅱ	a中D	3.7	5.7	1.0	23.8	頁岩	横長	上縁	無	
364	2D13	Ⅱ	D	3.8	5.3	1.3	29.0	黒色緻密安山岩	縦長?	上縁	無	
365	3B14	Ⅱ	E	5.5	3.0	1.3	18.5	黒色緻密安山岩	不明	下縁	無	
366	1号住居-3B19	Ⅱ	F	10.4	8.4	1.3	132.7	砂岩	縦長	片断縁	無	
367	3C18	Ⅱ	F	6.7	4.0	1.1	28.6	砂岩	縦長	片断縁	無	
368	4D8	Ⅱ	F	3.8	6.0	1.9	30.3	黒色緻密安山岩	縦長	下縁	無	
369	5E20	Ⅱ	a	6.4	5.9	1.7	59.1	黒色緻密安山岩	縦長	下縁	無	
370	5B24	Ⅱ	F	4.6	5.4	0.9	20.0	凝灰岩	縦長	下縁	無	
371	不明		表探	4.1	3.6	0.9	14.0	成紋岩	縦長	片断縁へ下縁	無	
372	1号住居-3B18	Ⅱ	G	6.4	8.4	2.0	126.7	凝灰岩	横長	上縁	無	
373	5C3	Ⅱ	G	4.6	2.1	6.4	7.4	メノウ	縦長	無	無	
374	4号住居-4A10	Ⅱ	a上	6.4	13.0	2.0	174.0	凝灰岩	横長	無	4B1と接合	
375	3D15	Ⅱ	B	3.7	7.3	0.9	25.1	凝灰岩	横長	上縁	無	

打製石斧観察表

番号	遺物名・グリッド	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	素材	刃部断面	遺存状態	備考
376	2D%9	Ⅱ	A	12.8	5.7	2.3	155.5	凝灰岩	不明	片刃	ほぼ完形	側縁のつぶしあり
377	5C	A	A	12.4	4.7	1.6	114.5	凝灰岩	横長	両刃	完形	
378	2D6	Ⅱ	A	12.4	4.7	1.9	137.0	凝灰岩	横長	両刃	接合完形	3C18目と接合、側縁のつぶしあり
379	4B20	Ⅱ	a	11.3	4.8	2.1	58.1	凝灰岩	不明	両刃	完形	側縁のつぶしあり
380	4号住居-4A10	A	A	9.4	4.3	1.4	66.0	粘板岩	横長	片刃	完形	側縁のつぶしあり
381	5号住居-3C4	A	A	9.5	4.6	1.6	82.0	凝灰岩	横長	両刃	完形	側縁のつぶしあり
382	4E16	Ⅱ	a下	8.5	3.8	1.4	55.6	粘板岩	横長	両刃	完形	側縁のつぶしあり
383	1号住居-4B5	A	A	10.4	3.7	2.0	106.6	砂岩	不明	両刃	完形	側縁のつぶしあり
384	2D	Ⅱ	A	7.7	4.8	1.1	169.8	凝灰岩	不明	両刃	基部欠	側縁のつぶしあり
385	7号住居-2C5	2	B	11.4	4.2	2.1	141.9	凝灰岩	不明	片刃	完形	側縁のつぶしあり
386	4B13	Ⅱ	B	11.3	4.5	2.4	169.2	凝灰岩	不明	両刃	完形	側縁のつぶしあり
387	3D3	Ⅱ	a中B	11.1	5.6	2.4	169.0	頁岩	不明	両刃	完形	側縁のつぶしあり
388	2D8	Ⅱ	a	10.6	4.4	1.9	94.0	凝灰岩	不明	両刃	接合完形	4E11目と接合、側縁の研ぎあり
389	1D22	Ⅱ	B	13.7	5.8	2.1	207.8	凝灰岩	不明	両刃	接合完形	3C9と接合、側縁のつぶしあり
390	7号住居-2C15	2	C	13.9	5.6	2.1	205.0	砂岩	横長	両刃	接合完形	5号住居-3C2-3層と接合、側縁のつぶしあり

前原遺跡石器観察表(2)

局部磨製石斧観察表

番号	遺構名・グリッド	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	表面	刃部断面	遺存状態	備考
391	5号住居-3C2			7.2	4.1	3.0	108.8	凝灰岩	不明	片刃	刃部破片	

磨製石斧観察表

番号	遺構名・グリッド	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	表面	刃部断面	遺存状態	基部磨打	備考
392	4B	Ⅱa上	A1	11.7	4.6	2.3	226.5	凝灰岩	不明	刃部欠	有		
393	4B	Ⅱ	A1	9.9	5.1	1.9	183.4	凝灰岩	両刃	完形	無		
394	4B	Ⅱ	A1	12.4	5.4	2.4	328.2	凝灰岩	両刃	完形	無		
395	1号住居-3B23	2or5	A2	9.3	4.4	1.6	125.1	凝灰岩	両刃	完形	無		
396	2D13	Ⅱa	A2	7.5	2.9	1.0	42.6	凝灰岩	両刃	完形	無		
397	3B23	Ⅱ	A2	7.4	3.4	1.3	58.7	凝灰岩	両刃	ほぼ完形	無		
398	不明	Ⅱ	A3	4.5	2.0	0.7	11.8	凝灰岩	両刃	ほぼ完形	無		
399	3D2	Ⅱ	A3	3.8	1.2	0.6	5.0	凝灰岩	両刃	ほぼ完形	無		
400	2E1	Ⅱ	A4	4.6	3.4	1.1	35.7	凝灰岩	両刃	完形	無		
401	5号住居-3C3	4	B	9.1	4.3	2.1	115.1	凝灰岩	両刃	完形	無		
402	不明	Ⅱ	B	8.3	4.6	1.8	104.5	凝灰岩	両刃	完形	有		
403	2C15	Ⅱ	C	5.2	2.3	1.0	24.2	凝灰岩					
404	5D9	Ⅱa下	C	9.9	4.3	2.1	170.2	凝灰岩					
405	2D18	Ⅱa中	D	7.1	4.5	1.9	127.7	凝灰岩					
406	4A5	Ⅱa	D	7.9	3.8	2.4	106.2	凝灰岩					

敲磨石類観察表

番号	遺構名・グリッド	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	表面	基部	遺存状態	備考
									磨	磨		
407	15D11	Ⅱ	A	14.2	8.1	6.8	1,098.6	流紋岩	×	×	×	完形
408	3D3	Ⅱb	A	19.5	6.4	6.6	1,307.9	滑石	×	×	×	完形
409	1号住居-3B24	2or5	B	9.5	9.1	6.8	782.2	砂岩	◎	×	×	完形
410	4B11	Ⅱa	B	9.5	8.9	6.5	770.2	角閃石-安山岩	◎	×	×	完形
411	4D13	Ⅱa	C	9.7	4.3	2.6	138.1	凝灰岩	×	×	×	完形
412	5C12	Ⅱa	C	9.5	7.4	4.5	388.2	角閃石-安山岩	×	◎	×	完形
413	4C11	V	C	8.9	6.7	3.9	280.6	安山岩	×	◎	×	完形
414	1F17	Ⅱa	C	13.5	5.5	4.9	474.0	凝灰岩	×	◎	×	完形
415	5A20	Ⅱa	C	9.0	6.2	4.1	264.6	安山岩	×	◎	×	完形
416	2D22	Ⅱ	C	11.6	4.5	3.3	255.6	砂岩	×	◎	×	完形
417	3C17	Ⅱ	C	9.9	6.6	3.3	279.8	安山岩	×	×	×	完形
418	2C24	Ⅱa	D	12.0	8.0	4.4	640.1	砂岩	◎	×	×	完形
419	3C6	V	D	10.0	7.5	3.8	430.3	花崗岩	◎	◎	×	完形
420	2D16	Ⅱa	D	8.4	7.9	5.7	499.4	砂岩	◎	×	×	完形
421	2D19	Ⅱa中	D	10.2	6.3	3.1	301.7	安山岩	◎	×	×	完形
422	5号住居-3C13	4	D	10.6	8.9	6.6	883.7	砂岩	◎	×	×	完形
423	2D17	Ⅱb	D	10.6	8.7	5.7	724.5	砂岩	◎	×	×	完形

石皿観察表

番号	遺構名・グリッド	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	遺存状態	備考
424	4B2	Ⅱa	A	14.6	11.9	8.4	2,068.4	滑石	破片	加熱
425	5F17	Ⅱa	B	16.3	12.0	4.1	1,200.3	砂岩	完形	小型石皿

砥石観察表

番号	遺構名・グリッド	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	遺存状態	備考
426	5A2	Ⅱa	A	19.7	15.2	8.3	3100	砂岩	完形	
427	2D18	Ⅱ	A	40.6	21.8	5.4	7600	砂岩	完形	3D14Ⅱaと整合
428	2D18	Ⅱa中	A	16.7	17.3	8.2	3500	砂岩	1/2	
429	1号住居-3B17	2?	A	28.0	17.6	12.1	8000	砂岩	整合は破片完形	3B18-1在S-60 V、3B22-1在S-25、S-2Ⅱ、3B23 1在S-2、S-3、S-64 (5)、S-66 (5)、S-65 (5)、S-67 (5)、S-69 (5)、3B24 1在S-70 (5)と整合、加熱
430	6A4	Ⅱa	B	8.6	4.1	1.4	72.6	砂岩	ほぼ完形	
431	2D22	Ⅱ	B	6.5	3.4	0.8	20.7	砂岩	ほぼ完形	

石核観察表

番号	遺構名・グリッド	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
432	4A11	Ⅱa	7.0	4.3	1.9	46.5	黒曜石	
433	3D22	Ⅱa	10.1	9.1	5.9	592.6	黒色輝石-安山岩	

石冠観察表

番号	遺構名・グリッド	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	遺存状態	備考
434	3C	Ⅱa	A	12.9	7.0	6.4	694.5	安山岩	完形	
435	2C22	Ⅱ	A	19.7	6.3	4.5	433.1	角閃石-安山岩	完形	
436	不明	Ⅱ	B	11.2	6.3	7.2	514.9	安山岩	完形	
437	2C23	Ⅱa	C	10.7	5.9	3.5	479.5	安山岩	完形	
438	1号住居遺構-5C10	Ⅱ	C	4.0	5.6	4.6	197.2	角閃石-安山岩	1/3	

玉観察表

番号	遺構名・グリッド	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	遺存状態	備考
439	2D16	Ⅱ	2.0	1.2	0.6	2.3	凝灰岩	完形	柄みあり

丸山道跡

丸山道跡遺構計測表

土坑

遺構名	四面図版	写真図版	位置	平面形	規模 (cm)			断面形	覆土	備考
					長径	短径	深さ			
1号	78	81	6A20-25, 7A16-21	不整形	350	150	40	皿状	レンズ状	
2号	78	81	2C6-11, 1C15	(長楕円形)	(250)	(165)	37	皿状	レンズ状	前面が調査区外に延びている
3号	78	82	4B10, 5B6	不整形	120	100	55	階段状	単層	
4号	78	82	3C7	楕円形	135	80	28	箱状	水平	検出面に集石、底面にPit (35 × 28 × 20)
5号	78	82	3C7-8-12-13	円形	95	93	30	皿状	レンズ状	
6号	78	82	2B19-20-24-25	楕丸長方形	60	40	10	皿状	単層	
7号	78	82	6B16-20, 7B11-16	円形	58	50	10	皿状	単層	
8号	79	82	7B16-21	楕円形	126	65	22	皿状	単層	
9号	79	83	7B20	不整形	70	65	20	皿状	不明	覆土に埋め込まれる

溝

遺構名	四面図版	写真図版	位置	規模 (cm)		断面形	覆土	備考
				幅	深さ			
1号	79	83	3C5, 4C1	72	15	皿状	単層	

灰窯

遺構名	四面図版	写真図版	位置	平面形	規模 (cm)			覆土	備考
					長径	短径	深さ		
1号	79	83	4B17-21-22-23, 4C1-2	長方形	325	180	23	レンズ状	
2号	79	83	4A16-17-18-21-22-23	長方形	430	160	20	レンズ状	

丸山道跡石器観察表

No.	大ブリード	小ブリード	遺構名	層位	素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	遺存状態	備考
39	1B	14		1-2	石	2.4	1.2	0.4	1.1	黒曜石	片脚欠	
40	5A	16			磨製石片	2.1	3.0	0.9	6.9	凝灰岩	刃部破片	
41	5B	16	Pit19		石片	4.0	3.2	0.7	10.3	凝灰岩	完形	
42	2B	11		1-3	赤白	11.0	7.9	2.6	252.1	安山岩	破片	
43	3C	3	Pit		砥石	7.2	2.5	2.2	63.3	凝灰岩	1/2	

丸山遺跡土器観察表

※欄上については数回計測の誤差±A、3) 観察器具は通目の指輪上の目盛りと対応している。

№	遺物	出土位置(後台埋跡)	層位	時期	形式・系統	分類	形状	直径 (cm)	高さ(部位)	素材・加工	内外面彩色、断面彩色	重量・目録	備考
1	0854	Ⅰ	縄文前期		深鉢	胴部	深鉢		胴部	灰青、灰緑、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
2	0850	Ⅰ	縄文中期前葉		深鉢	胴部	深鉢		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
3	0830	Ⅱ	縄文中期前葉		深鉢	胴部	深鉢		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
4	3C1	Ⅱ	縄文中期前葉		深鉢	胴部	深鉢		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
5	4A22	Ⅰ-4	縄文中期前葉		深鉢	胴部	深鉢		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
6	4B2	Ⅰ-4	縄文中期前葉		深鉢	胴部	深鉢		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
7	4B3	Ⅰ-4	縄文中期前葉		深鉢	胴部	深鉢		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
8	0819	Ⅱ	縄文中期前葉		深鉢	胴部	深鉢		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
9	0814	Ⅱ	縄文中期前葉		深鉢	胴部	深鉢		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
10	0814-15-20-23-24	Ⅱ	縄文中期前葉		深鉢	胴部	深鉢		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
11	0823	Ⅱ	縄文中期前葉		深鉢	胴部	深鉢		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
12	307-12	Ⅰ	縄文後葉期?		深鉢	胴部	深鉢		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
13	0834	Ⅱ	縄文後葉期		深鉢	胴部	深鉢		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
14	0823	Ⅱ	縄文後葉期		深鉢	胴部	深鉢		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
15	2C4	Ⅱ	縄文後葉期		深鉢	胴部	深鉢		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
16	0855	Ⅱ	縄文?		深鉢	胴部	深鉢		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
17	0824	Ⅱ	縄文中期		深鉢	胴部	深鉢		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
18	1015-25, 201-11,	Ⅰ-0	縄文中期		深鉢	胴部	深鉢		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
19	0813	Ⅱ	古墳?		深鉢	胴部	深鉢		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
20	7821	Ⅱ	古墳?		深鉢	胴部	深鉢		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
21	2188	Ⅱ	中世		皿	胴部	皿		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
22	2825	Ⅰ	中世		皿	胴部	皿		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
23	288-25	Ⅰ-0	中世		皿	胴部	皿		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
24	SK10	3C7	中世		皿	胴部	皿		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
25	2C5	Ⅰ	中世		皿	胴部	皿		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
26	2824	Ⅰ	中世		皿	胴部	皿		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
27	31C	Ⅱ	中世		皿	胴部	皿		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
28	31B3	Ⅱ	中世		皿	胴部	皿		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
29	2817	Ⅰ	中世		皿	胴部	皿		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
30	2C9	Ⅰ	中世		皿	胴部	皿		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
31	2C10	Ⅰ	中世		皿	胴部	皿		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
32	4A	Ⅰ	中世		皿	胴部	皿		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
33	282-13-20	Ⅰ	中世		皿	胴部	皿		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
34	2817	Ⅰ	中世		皿	胴部	皿		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
35	2817	Ⅰ	中世		皿	胴部	皿		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
36	2A23	Ⅰ	中世		皿	胴部	皿		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
37	3A24	Ⅰ	中世		皿	胴部	皿		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ
38	4A20	3A7-0	中世		皿	胴部	皿		胴部	灰青による滑平区画、轉土工具による炭状沈積物	内外面彩色、断面彩色	約15g	Ⅰ

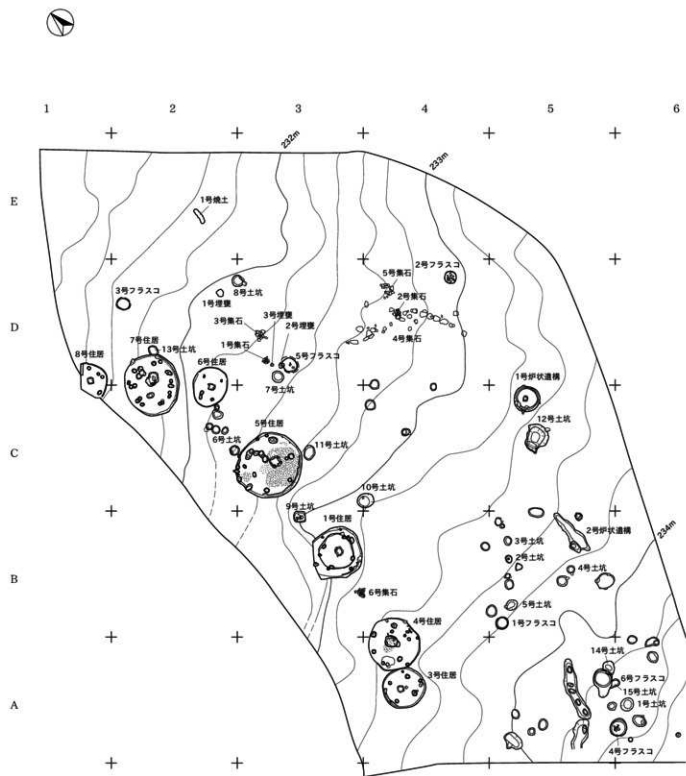
図 版

凡 例

1～76 前原遺跡

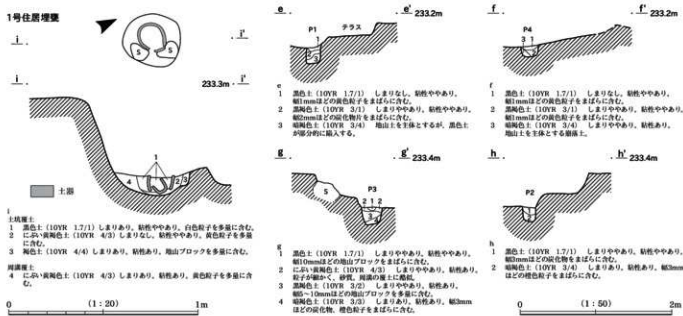
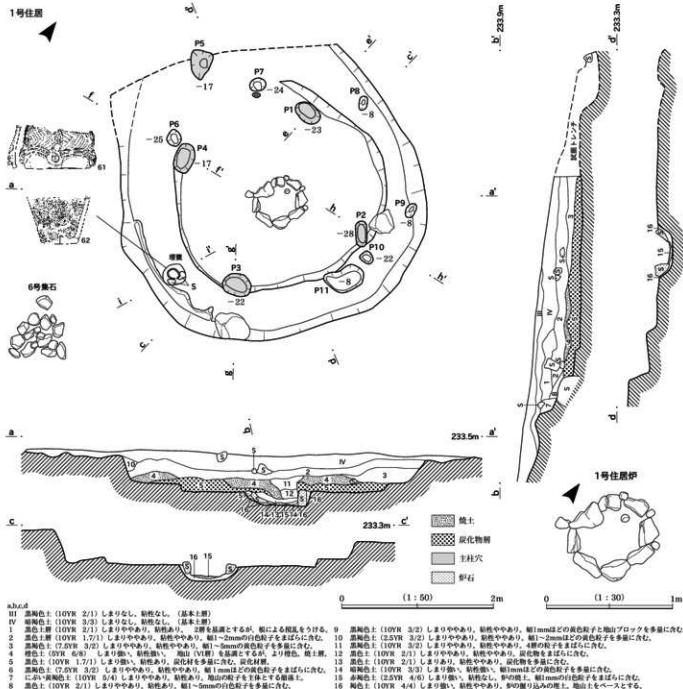
77～84 丸山遺跡

遺物写真のスケールは実測図に対応

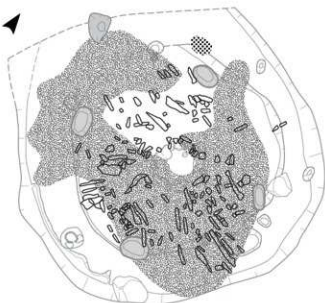


小グリッド

5	10	15	20	25
4	9	14	19	24
3	8	13	18	23
2	7	12	17	22
1	6	11	16	21

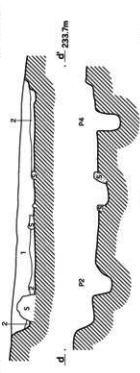
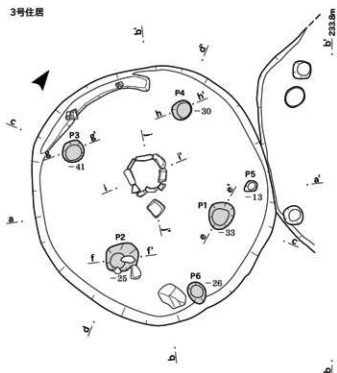


1号住居炭化材出土状況

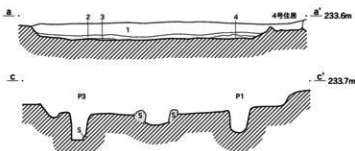


- 焼土
- 炭化物群
- 土柱穴
- 卵石

3号住居



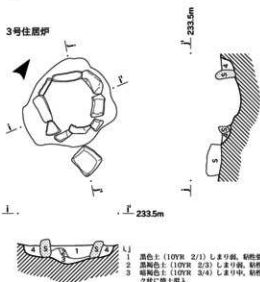
- e. P1 e' 235.5m f. P2 f' 235.5m
- g. 1 黒色土 (10YR 2/1) しまり泥、粘性强。
2 黒褐色土 (10YR 3/2) しまり泥、粘性强。
3 黒褐色土 (10YR 3/4) しまり泥、粘性强。
基本土層IV層とV層のまじり。
- f. 1 黒色土 (10YR 2/1) しまり泥、粘性强。
2 黒褐色土 (10YR 3/2) しまり泥、粘性强。
- g. P3 h. P4 h' 235.5m
- i. 1 黒色土 (10YR 2/1) しまり泥、粘性强。
2 黒褐色土 (10YR 2/2) しまり泥、粘性强。
- h. 1 黒色土 (10YR 2/1) しまり泥、粘性强。
2 黒褐色土 (10YR 3/2) しまり泥、粘性强。
3 褐色土 (10YR 4/6) しまり中、粘性强。



- a, b
- 1 黒色土 (10YR 2/1) しまりや中泥、粘性强。2~3mm粒子多。
 - 2 黒色土 (10YR 2/1) しまりや中泥、粘性强。1よりやや粗みあり。
 - 3 黒褐色土 (10YR 5/2) しまり泥 (硬化)、粘性强し。
 - 4 黒褐色土 (10YR 2/2) しまり泥、粘性强。

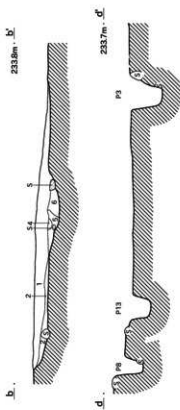
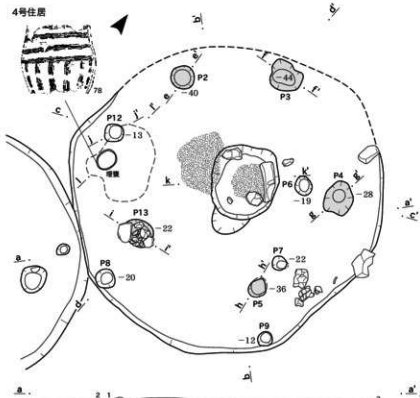
0 (1:50) 2m

3号住居脚



- j. 1 黒色土 (10YR 2/1) しまり泥、粘性强。粗みあり。
2 黒褐色土 (10YR 2/2) しまり泥、粘性强。
3 黒褐色土 (10YR 3/4) しまり中、粘性强。プロット状に粗み混入。
4 黒色土に黒褐色土が混じる、裏り方層土。

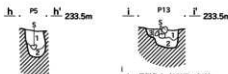
0 (1:30) 1m



- ab
- 1 黒色土 (10YR 2/1) しまり中～弱, 粘性强, 2~3mmの砂子多。
 - 2 黒色土 (10YR 2/1) しまり中～弱, 粘性强, 1よりやや中硬気あり。
 - 3 褐色土 (10YR 4/3) しまり中, 粘気なし, 1が混じっている。
 - 4 黒色土 (10YR 2/1) しまり中～弱, 粘性强, 1より硬気あり。
 - 5 濃褐色土 (10YR 2/3) しまり中, 粘性强, 褐色土とプロック混入。
 - 6 黒色土 (10YR 2/1) しまり中 (1よりやや硬い), 粘性强。



- e f
- 1 黒色土 (10YR 2/1) しまり強, 粘性强。
 - 2 濃褐色土 (10YR 2/2) しまり強, 粘性强。
 - 3 濃褐色土 (10YR 2/2) しまり強, 粘性强。

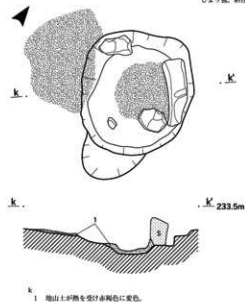


- h i
- 1 濃褐色土 (10YR 2/2) しまり強, 粘性强。
 - 2 濃褐色土 (10YR 2/2) しまり中, 粘性强。
 - 3 褐色土 (10YR 4/6) しまり中, 粘性强。



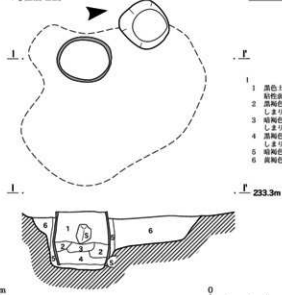
- j k
- 1 黒色土 (10YR 2/1) しまり弱, 粘性强。
 - 2 濃褐色土 (10YR 2/2) しまり中, 粘性强。
 - 3 褐色土 (10YR 4/6) しまり中, 粘性强。

4号住居壁



k 焼土が熱を受けて赤褐色に変色。

4号住居埋壁



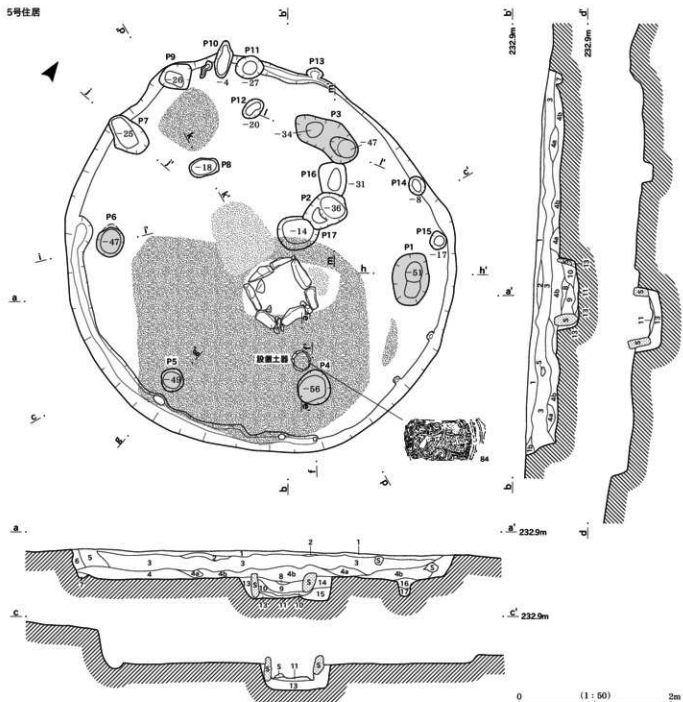
- l
- 1 黒色土 (10YR 2/1) 炭化物含む, しまり強, 粘性强。
 - 2 濃褐色土 (10YR 2/2) 炭化物・褐色砂子含む, しまり中～弱, 粘性强。
 - 3 褐色土 (10YR 3/3) 褐色土とプロック混入, しまり中～弱, 粘性强。
 - 4 濃褐色土 (10YR 2/2) 炭化物・褐色砂子含む, しまり中, 粘強中～あり (1~3より強い)。
 - 5 濃褐色土 (10YR 2/3) しまり中, 粘強中。
 - 6 濃褐色土と褐色土が混ざる, 硬り層上。



0 (1:30) 1m

0 (1:20) 1m

5号住居

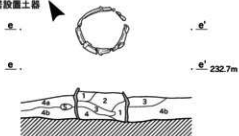


skch.d

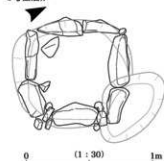
- 1a 黒色土 (10YR 1.7/1) しまりや中あり, 粘性や中あり, 縦1mmほどの黄褐色粒子をまばらに含む。
- 1b 黒褐色土 (10YR 2/1) しまりや中あり, 粘性あり, 地山の崩壊土を含む。
- 2 にかい黄褐色土 (10YR 7/2) しまりや中あり, 粘性や中あり, 縦10mmほどの細かな粒子によるシラ状層様, 火山灰層。
- 3 黒色土 (10YR 1.7/1) しまりや中あり, 粘性や中あり, 縦1~10mmほどの黄褐色粒子を多量に含む。
- 4a 明黄褐色土 (5YR 6/6) しまりや中あり, 粘性や中あり, 基底的に混入する黒土 (火山灰層の崩壊土)。
- 4b 黒色土 (10YR 1.7/1) しまりや中あり, 粘性や中あり, 縦1~10mmほどの黄褐色粒子や炭化物を多量に含む。
- 5 黒褐色土 (10YR 2/1) しまりや中あり, 粘性や中あり, 縦1mmほどの黄褐色粒子を多量に含む, しまりは上下より更に強い。
- 6 にかい黄褐色土 (10YR 5/3) しまりや中あり, 粘性あり, 地山の崩壊土を主体とする。
- 7 にかい黄褐色土 (10YR 5/4) しまりや中あり, 粘性あり, 自然に形成するが崩壊ブロックを含まない。(河原の層上)。
- 8 黒褐色土 (10YR 3/1) しまりや中あり, 粘性や中あり, 縦10mmほどの焼土粒をまばらに含む。
- 9 黒色土 (10YR 2/1) しまりや中あり, 粘性や中あり, 炭化物を多量に含む。
- 10 暗褐色土 (10YR 3/3) しまりや中あり, 粘性あり, 縦10mmほどの焼土粒をまばらに, 縦1mmほどの白色粒子をまばらに含む。
- 11 赤褐色土 (2.5YR 4/6) しまり強い, 粘性なし, 極めて硬状している。平面的にみると粒面構造 (10YR3/2) で褐色や白色の粒を多量に含む。縦り床。
- 12 灰黄褐色土 (10YR 4/2) しまり強い, 粘性なし, 極めて硬状している。平面的にみると粒面構造 (10YR3/2) で褐色や白色の粒を多量に含む。縦り床。
- 13 赤褐色土 (5YR 3/3) しまり強い, 粘性強い, 砂の混り互, 地山をベースとしているが礫物により赤化。
- 14 にかい黄褐色土 (10YR 4/2) しまりや中あり, 粘性や中あり, 縦10mmほどの黄褐色粒子をまばらに含む。
- 15 黒色土 (10YR 1.7/1) しまりや中あり, 粘性や中あり, 縦2~5mmの黄褐色粒子をまばらに含む。
- 16 黒褐色土 (7.5YR 3/1) しまりや中あり, 粘性や中あり, 縦2~5mmの黄褐色粒子を多量に含む。
- 17 黒褐色土 (10YR 3/2) しまりや中あり, 粘性や中あり, 縦2~5mmの黄褐色粒子をまばらに含む。

5号住居設置土器

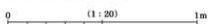
- 焼土
- 柱穴
- 陥床
- 砂石
- 土器

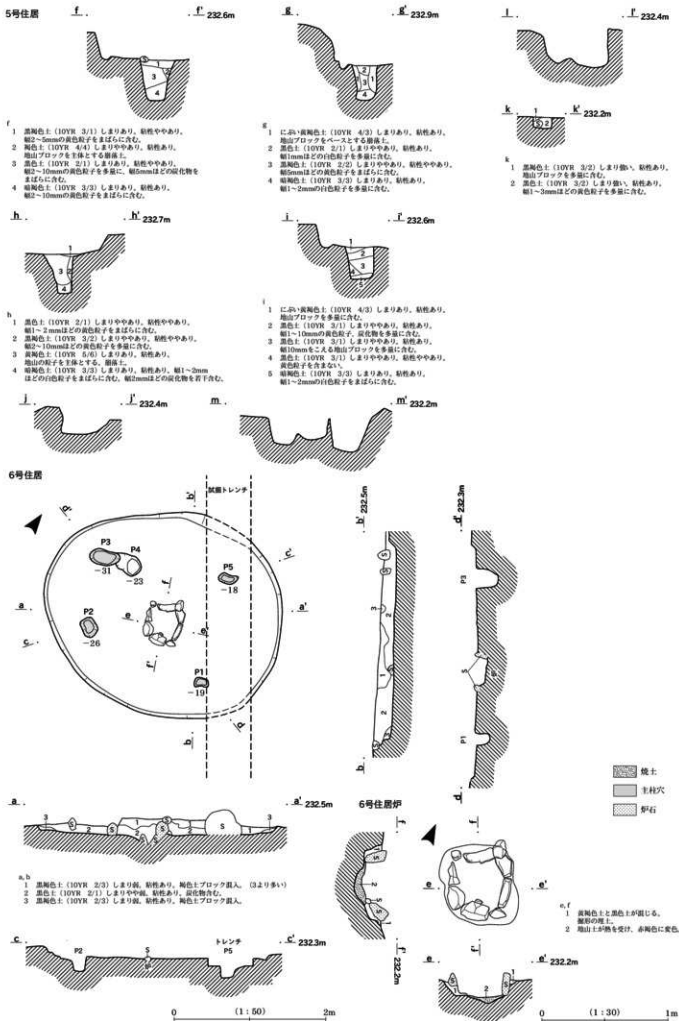


5号住居土器

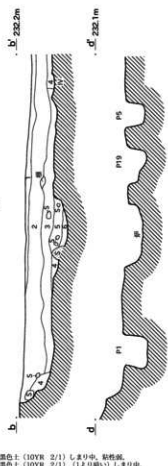
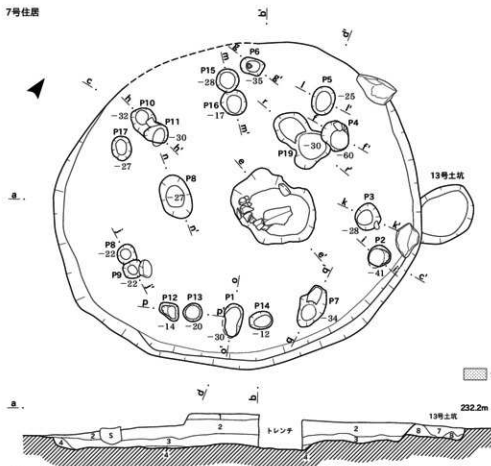


- 1 黒色土 (10YR 1.7/1) しまりや中あり, 粘性や中あり, 縦1~10mmほどの黄褐色粒子や炭化物を多量に含む。(4b層由来)
- 2 黒色土 (10YR 2/1) しまりや中あり, 粘性あり, 縦1~10mmほどの黄褐色粒子を多量に含む。(3b層由来)
- 3 暗褐色土 (5YR 3/3) しまりや中あり, 粘性や中あり, 炭化物を多量に含む。(基本層様と一致しない層)
- 4 黒褐色土 (10YR 2/2) しまりや中あり, 粘性や中あり, 炭化物を多量に含む。(基本層様と一致しない層)
- 5 3, 4a, 4b層145号住居埋藏層中に同じ。



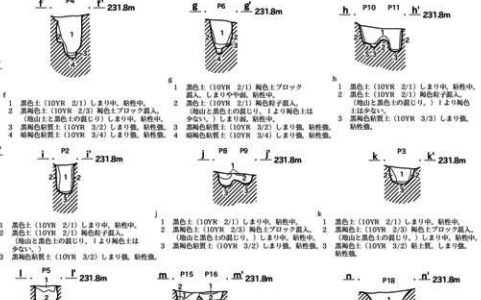
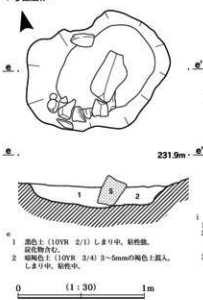


7号住居



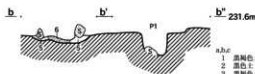
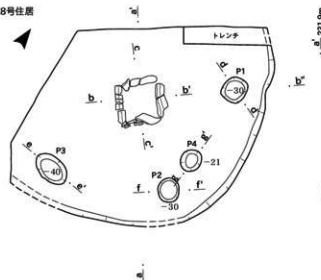
- 1 黒色土 (10YR 2/1) しまり中, 粘性强。
- 2 黒色土 (10YR 2/1) (1より粘い) しまり中, 粘性强中。
- 3 黒色土 (10YR 2/1) しまりやや中強, 粘性强。
- 4 黒褐色土 (10YR 2/2) しまり中, 粘性强, 褐色アブロック混入。
- 5 黒色土 (10YR 2/1) しまり中, 粘性强, 褐色粘土混入。
- 6 黒色土 (10YR 2/1) (5よりやや粘い) しまり中, 粘性强, 粘土混入。
- 7 黒色土 (10YR 2/1) しまり中, 粘性强中。
- 8 黒褐色土 (10YR 2/2) しまり中, 粘性强, 褐色アブロック混入。(SK13層上)

7号住居坪



0 (1:50) 2m

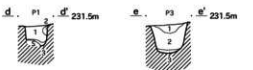
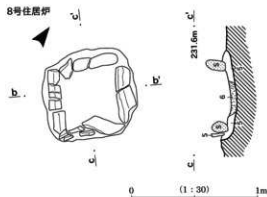
8号住居



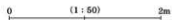
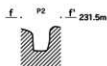
- a-hc
- 1 黒褐色土 (10YR 2/2) しまりや中強、粘性强。
 - 2 黒色土 (10YR 2/1) しまりや中強、粘性强。
 - 3 黒褐色土 (10YR 2/3) しまり強、粘性强、褐色粒子含む。
 - 4 黒色土 (10YR 2/1) しまり強、粘性强。
 - 5 黄褐色土に黒色土が混じる。
 - 6 土層が断を呈し、赤褐色に変化。



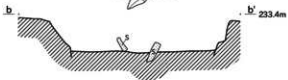
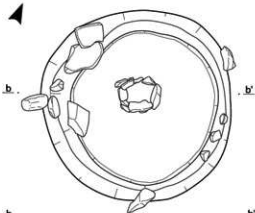
8号住居炉



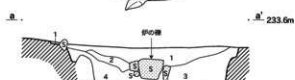
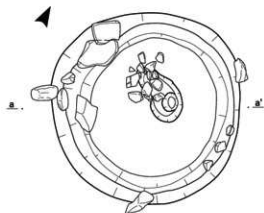
- d-e
- 1 黒色土 (10YR 2/1) しまりや中強、粘性强。
 - 2 黒褐色土 (10YR 2/3) 褐色粒子混入。
(d)より褐色粒子が厚く、3/3強褐色土に近い。
 - 3 黒褐色土 (10YR 3/4) しまり強、粘性强。



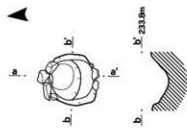
1号炉状遺構 炉状出状況



完備状況

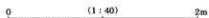


2号炉状遺構

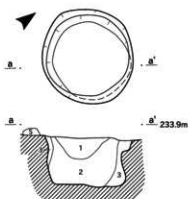


- 1 黒色としまり強、粘性强、炭化物、焼土を含む。

- 1 黒色土 (10YR 2/1) しまり強、粘性强、炭化物含む、褐色粒子2~3mm混入少。
- 2 黒色土中に褐色ブロック混入。
- 3 黒色土 (10YR 2/1) しまり中、粘性强。
- 4 黒色土中に褐色ブロック混入。
- 5 黒色土 (10YR 2/1) しまりや中強、粘性强、褐色粒子 (2~3mm) 混入少。
- 6 黒褐色土 (10YR 3/4) しまり中、粘性强。
- 7 褐色土 (10YR 4/6) しまり中、粘性强。
- 8 黒褐色土 (10YR 2/2) 粘土質、しまり強、粘性强、炭灰含む。
- 9 黒色土中に褐色ブロック混入。
- 10 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり強、粘性强、褐色土ブロック混入。
- 11 黒色土 (10YR 2/1) しまり強、粘性强、褐色粒子 (2~3mm) 混入少。

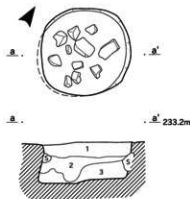


1号プラスチック状土坑



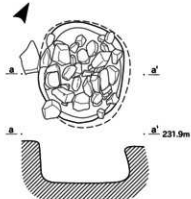
- 1 黒色土 (10YR 2/1) しまり面, 粘性强。
- 2 黒色土 (10YR 2/1) (1層よりやや明かいろ) しまり中, 粘性强, 3~5mmの砂子多。
- 3 黒褐色土 (10YR 2/3) しまり強, 粘性强。

2号プラスチック状土坑



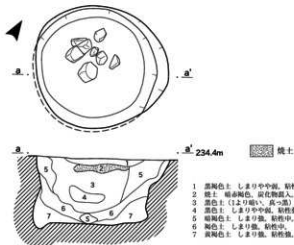
- 1 黒色土 (10YR 2/1) 炭灰を含む, 炭化物を含む, しまりやや中強, 粘性强, 層を多量に含む。
- 2 黒色土 (10YR 2/1) 褐色ブロック混入, しまり中, 粘性强, 炭化物を含む。
- 3 暗褐色土 (10YR 3/4) しまり強, 粘性强。

3号プラスチック状土坑



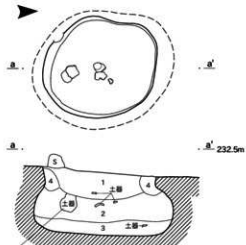
- 黒色土 炭化物混入, しまり弱, 粘性强, 炭灰を含む, (ベトベトする) 数きつめられた塊層あり。

4号プラスチック状土坑



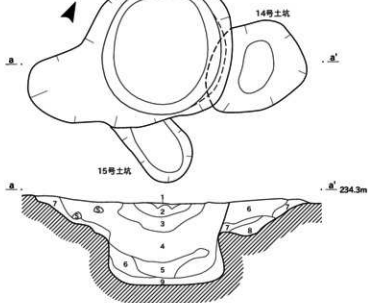
- 1 黒褐色土 しまりやや中強, 粘性强。
- 2 焼土 暗赤褐色, 炭化物混入, しまりやや中強, 粘性强。
- 3 黒色土 (1しまり弱, 真一強) しまり弱, 粘性强。
- 4 黒色土 しまりやや中強, 粘性强。
- 5 暗褐色土 しまり強, 粘性强中。
- 6 褐色土 しまり弱, 粘性强中。
- 7 暗褐色土 しまり強, 粘性强, 焼土質, 暗褐色ブロック混入。

5号プラスチック状土坑

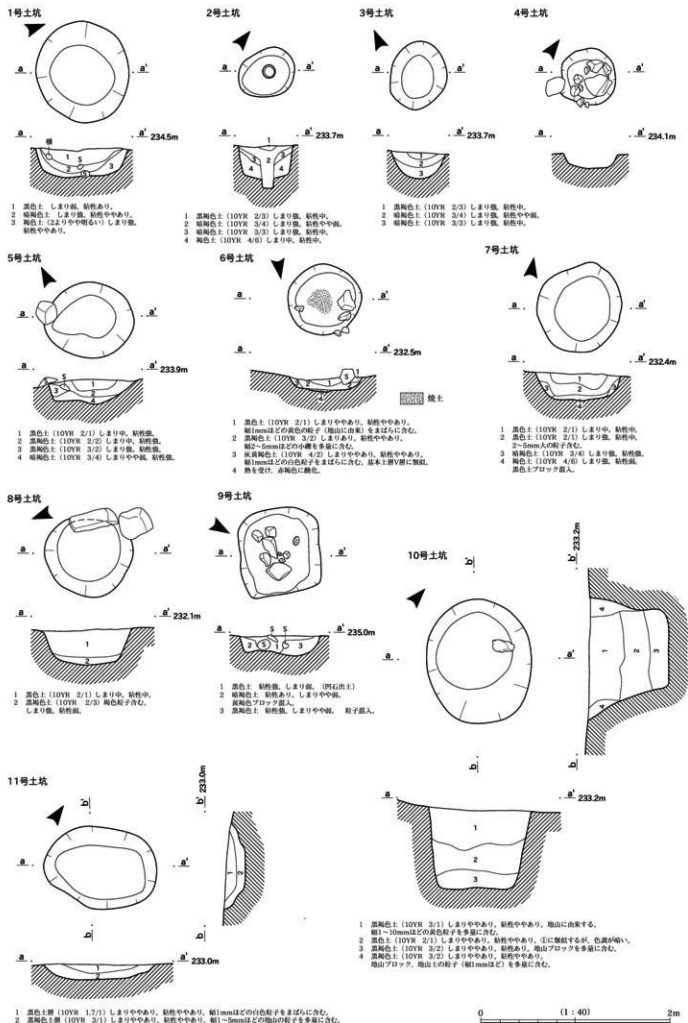


- 1 黒色土 (10YR 2/1) しまりやや中強, 粘性强, 炭化物を含む。
- 2 黒色土 (10YR 2/1) しまり面, 粘性强, 炭灰を含む。
- 3 黒色土 (10YR 2/1) しまり中, 粘性强, 炭灰を含む。
- 4 黒色土 (10YR 2/1) 1層に褐色土粒子 (燧山) 混入。

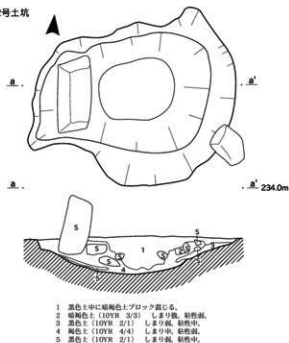
6号プラスチック状土坑



- 1 黒色土 (10YR 2/1) しまり面, 粘性强中。
- 2 暗褐色土 (10YR 2/2) (暗褐色ブロック混入, 焼土) しまり強, 粘性强なし。
- 3 黒色土 (10YR 2/1) しまり強, 粘性强あり。
- 4 暗褐色土 (10YR 3/2) 2~5層 砂子混入多, しまり強, 粘性强あり, 土層出土。
- 5 黒色土 (10YR 2/1) しまり面, 粘性强, 炭灰を含む, (ベトベトする)。
- 6 暗褐色土 (10YR 2/2) しまり強, 粘性强あり, (4.2層位)。
- 7 褐色土 (10YR 4/4) しまり強, 粘性强。
- 8 暗赤褐色土 (5YR 3/6) しまりやや中強, 粘性强中。
- 9 暗褐色土 (10YR 2/4) しまりやや中強, 粘性强あり, 暗褐色土ブロック混入。
- 10 暗褐色土 (10YR 3/4) しまり強, 粘性强。

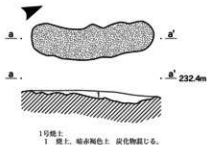


12号土坑



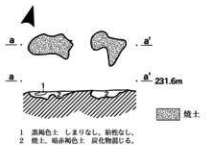
- 1 黒色土中に暗褐色土・ブロック散じる。
- 2 暗褐色土 (10YR 3/3) しまり強、粘性弱。
- 3 黒色土 (10YR 2/1) しまり強、粘性強。
- 4 褐色土 (10YR 4/4) しまり中、粘性弱。
- 5 黒色土 (10YR 2/1) しまり弱、粘性中。

1号焼土



- 1号焼土
I 黒土、暗赤褐色土、炭化物散じる。

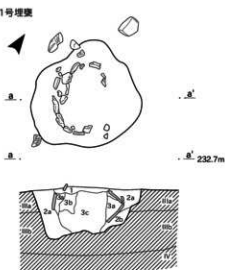
2号焼土



- 1 黒褐色土 しまりなし、粘性なし。
2 黒土、暗赤褐色土、炭化物散じる。

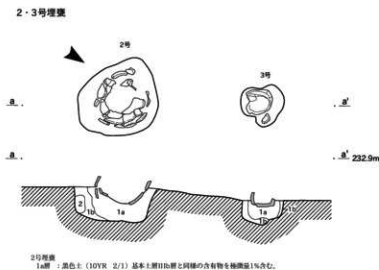
0 (1:40) 2m

1号埋裏



- 1層 : 黒褐色土 (7.5YR 3/1) 径1mmの白色・黄褐色土砂粒2%, 径1~2mmの炭化粒1%を含む。しまり強く、粘性強い。
- 2a層 : 黒色土 (10YR 1.7/1) 1層と同様の含有物4%, 炭化粒1%を含む。しまりあり、粘性強い。崩り易。
- 2b層 : 黒色土 (10YR 2/1) 2a層より炭粒がやや多い。含有物は2a層に同じ。しまり強く、粘性強い。
- 3層 : 黒色土 (10YR 2/1)
- 3a層 : 1層と同様の含有物が2%, 炭化粒はなし。しまり弱く、粘性弱。
- 3b層 : 1層と同様の含有物が1%, 炭化粒はなし。しまり中より弱く、粘性弱い。
- 3c層 : 径1の土砂粒2%, 径2~5mmの白色・黄褐色・赤褐色土砂粒2%, 径1cmの砂粒1%を含む。しまり弱く、粘性弱い。
- IIIa : 黒褐色土 (10YR 2/1) しまりなし、粘性なし。(基本土層)
- IIIb : 黒褐色土 (10YR 2/1) しまりなし、粘性なし。(基本土層)

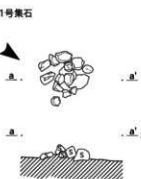
2・3号埋裏



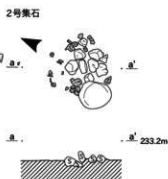
- 2号埋裏
1a層 : 黒色土 (10YR 2/1) 基本土層IIb層と同様の含有物を極微量1%含む。しまり弱く、粘性弱い。
1b層 : 黒色土 (10YR 2/1) 1a層と土質同じであるが、含有物は1a層より少ない。しまり弱く、粘性弱い。が1a層よりは中程度。
- 3号埋裏
1層 : 1層の上に5YR 6/6程度の焼土が混合する(50%)。この焼土は厚さ不定で、横断されたもので、上面の高さ約1/4程取り囲むようにはいる。しまりあり、粘性強い。
- 3号埋裏
1a層 : 黒色土 (10YR 2/1) 白色・黄褐色・赤褐色の砂粒及び土粒を10%含む。しまりとても強く、粘性あり。
1b層 : 黒色土 (10YR 2/1) 1aと同様の含有物を1%含む。砕り強い、しまり弱く、粘性強い。

土層 0 (1:20) 1m

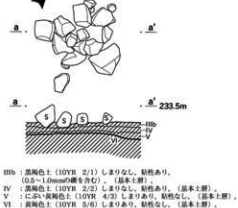
1号集石



2号集石



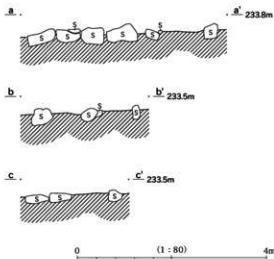
3号集石



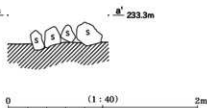
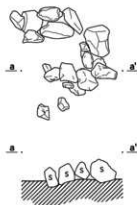
- IIIb : 黒褐色土 (10YR 2/1) しまりなし、粘性あり。
(0.5~1.0mmの塊を含む)。(基本土層)
IV : 黒褐色土 (10YR 2/2) しまりなし、粘性あり。(基本土層)
V : 濃い黄褐色土 (10YR 4/3) しまりあり、粘性なし。(基本土層)
VI : 黄褐色土 (10YR 5/6) しまりあり、粘性なし。(基本土層)。

0 (1:40) 2m

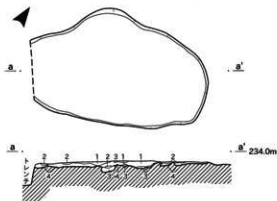
4号集石



5号集石

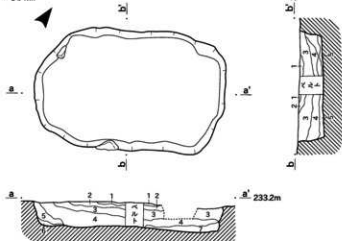


1号炭窯



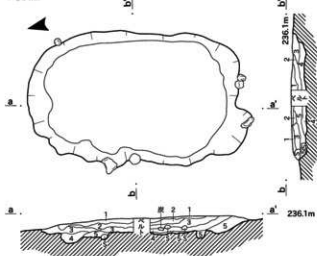
- 1 暗褐色土 しまり肌、筋状中やあり、灰混じり。
- 2 黒褐色土 しまり中肌、筋状あり。
- 3 灰白色土 しまり肌、筋状なし、砂質。
- 4 炭化物

2号炭窯



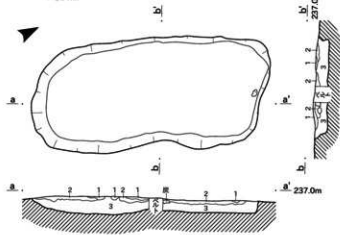
- 1 暗褐色土 (10YR 3/4) しまりあり、筋状なし、直径5cm程度の炭化物をわずかに含む。
- 2 におい黄褐色土 (10YR 7/2) しまりあり、筋状なし、火山灰層。
- 3 黒褐色土 (10YR 3/1) しまりあり、筋状なし、直径1cm程度の炭化物を点々と含む。
- 4 黒色土 (10YR 1.7/1) しまりあり、筋状なし、大小さまざまな炭化物をまだら状に含む、炭化物層。
- 5 黒色土 (10YR 4/0) しまりあり、筋状なし、大小さまざまな炭化物を点々と含む。
- 6 黄褐色土 (10YR 7/8) しまりあり、筋状なし。
- 7 黒褐色土 (10YR 2/3) しまりあり、筋状なし。

3号炭室



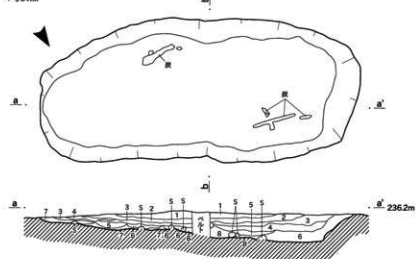
- 1 灰褐色土 (10YR 4/7) しまりあり、粘粉なし。直径1mmの炭化物をわずかに含む。
- 2 におい-黄褐色土 (10YR 7/2) しまりあり、粘粉なし。直径0.5-2cmの炭化物を点つち含む。火山灰層。
- 3 黒褐色土 (10YR 3/2) しまりあり、粘粉なし。直径0.2-1.0cmの炭化物を少量含む。
- 4 黒色土 (10YR 1.7/1) しまりあり、粘粉なし。直径0.5-1.5cmの炭化物をまだら状に含む。炭層。
- 5 黒色土 (10YR 2/1) しまりあり、粘粉なし。地山同様にまだら状に含む。

5号炭室



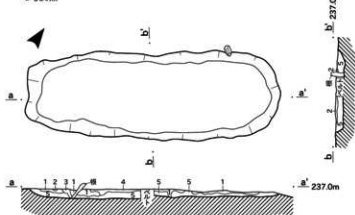
- 1 黒褐色土 (10YR 3/4) しまりあり、粘粉なし。直径2-5mmの炭化物をわずかに含む。
- 2 黒色土 (10YR 1.7/1) しまりあり、粘粉なし。直径0.5cmの炭化物を多く含む。炭化物層。
- 3 黒褐色土 (10YR 2/3) しまりあり、粘粉なし。直径2cmの炭化物をこくわずかに含む。

4号炭室



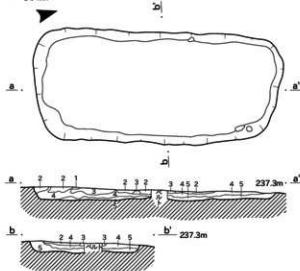
- 1 黒褐色土 (10YR 3/1) しまりあり、粘粉なし。直径1mmの炭化物を点々と含む。
- 2 におい-黄褐色土 (10YR 7/2) しまりあり、粘粉なし。直径1mmの炭化物を点々と含む。火山灰層。
- 3 黒褐色土 (10YR 3/2) しまりあり、粘粉なし。直径1mmの炭化物をわずかに含む。
- 4 黒色土 (10YR 1.7/1) しまりあり、粘粉なし。直径1mmの炭化物を点々と含む。炭層。
- 5 黒褐色土 (10YR 2/2) しまりあり、粘粉なし。部分的に粘土層あり。
- 6 黒褐色土 (10YR 2/3) しまりあり、粘粉なし。地山同様に点々と含む。
- 7 黒褐色土 (10YR 3/3) しまりあり、粘粉なし。粘土粒を点々と含む。
- 8 明黄褐色土 (10YR 7/6) しまりあり、粘粉なし。粘土粒を点々と含む。

6号炭室



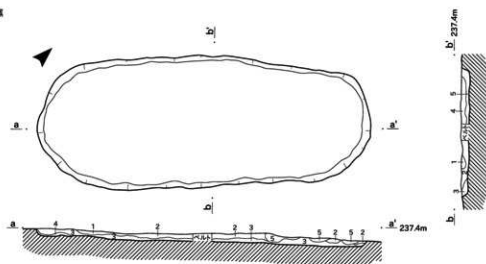
- 1 におい-黄褐色土 (10YR 7/6) しまりあり、粘粉なし。
- 2 黒色土 (10YR 1.7/1) しまりあり、粘粉なし。
- 炭化層 (0.1-1cm) を多量に含む。炭化物層。
- 3 黄褐色土 (10YR 3/4) しまりあり、粘粉なし。
- 4 黒褐色土 (10YR 3/2) しまりあり、粘粉なし。
- 5 黒褐色土 (10YR 2/2) しまりあり、粘粉なし。

7号炭室



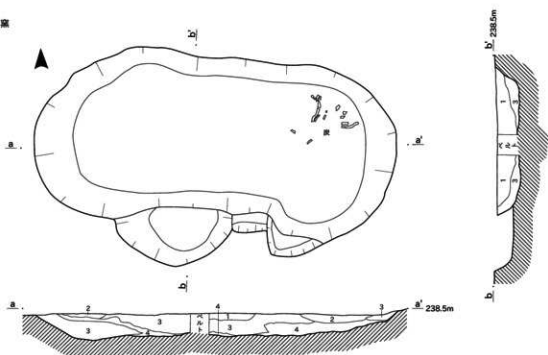
- 1 黒色土 (10YR 2/1) しまりあり、粘粉なし。
- 2 灰黄褐色土 (10YR 4/2) しまりあり、粘粉なし。直径2mm前後の炭化物をわずかに含む。
- 3 におい-黄褐色土 (10YR 7/2) しまりあり、粘粉なし。直径2cm前後の炭化物をわずかに含む。火山灰層。
- 4 黒色土 (10YR 3.7/1) しまりあり、粘粉なし。炭化物を濃疎に含む。
- 5 黒褐色土 (10YR 2/2) しまりあり、粘粉なし。4層をわずかに含む。

8号炭窯



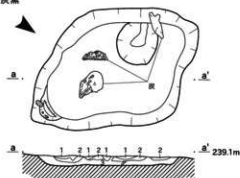
- 1 におい黄褐色土 (10YR 7/2) しまりあり、粘性强し、炭化灰をわずかに含む、火山灰層。
- 2 黒色土 (10YR 1/7/1) しまりあり、粘性强し、炭化灰を多量に含む、炭層。
- 3 黒褐色土 (10YR 2/3) しまりあり、粘性强し、1cm程度の炭化層をわずかに含む。
- 4 黒色土 (10YR 2/1) しまり中、粘性强し、サラサラしている。
- 5 黒褐色土 (10YR 3/2) しまりあり、粘性强し。

9号炭窯



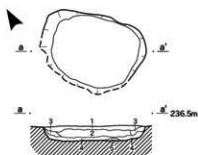
- 1 暗褐色土 (10YR 3/3) しまりなし、粘性强し。
- 2 灰白色土 (10YR 8/2) しまりあり、粘性强し、火山灰層。
- 3 暗褐色土 (10YR 3/3) しまりなし、粘性强し。
- 4 黒色土 (10YR 2/1) 多量に灰を含む。

10号炭窯

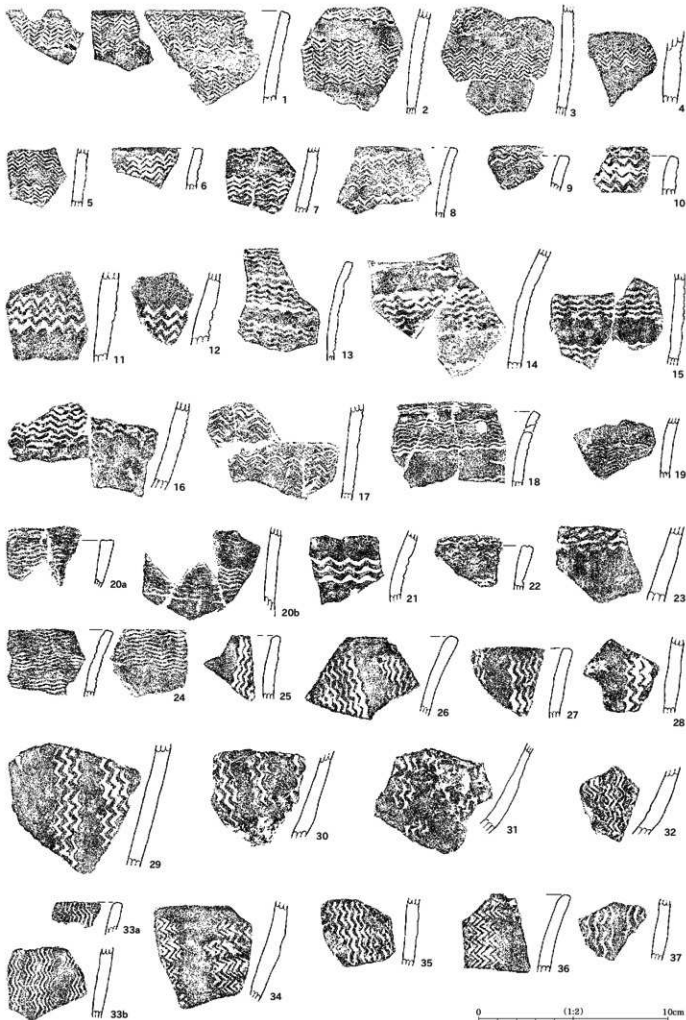


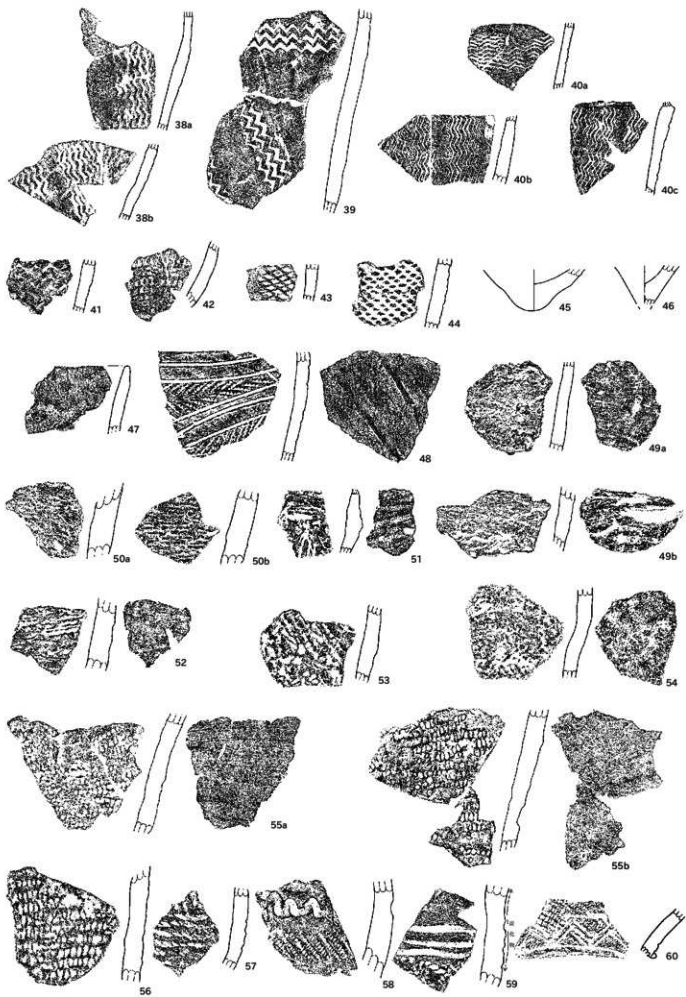
- 1 暗褐色土 (10YR 3/3) しまりなし、粘性强し。
- 2 黒褐色土 (10YR 2/2) しまりなし、粘性强し、炭を多量に含む。
- 3 黒褐色土 (10YR 2/2) しまりなし、粘性强し。

11号炭窯

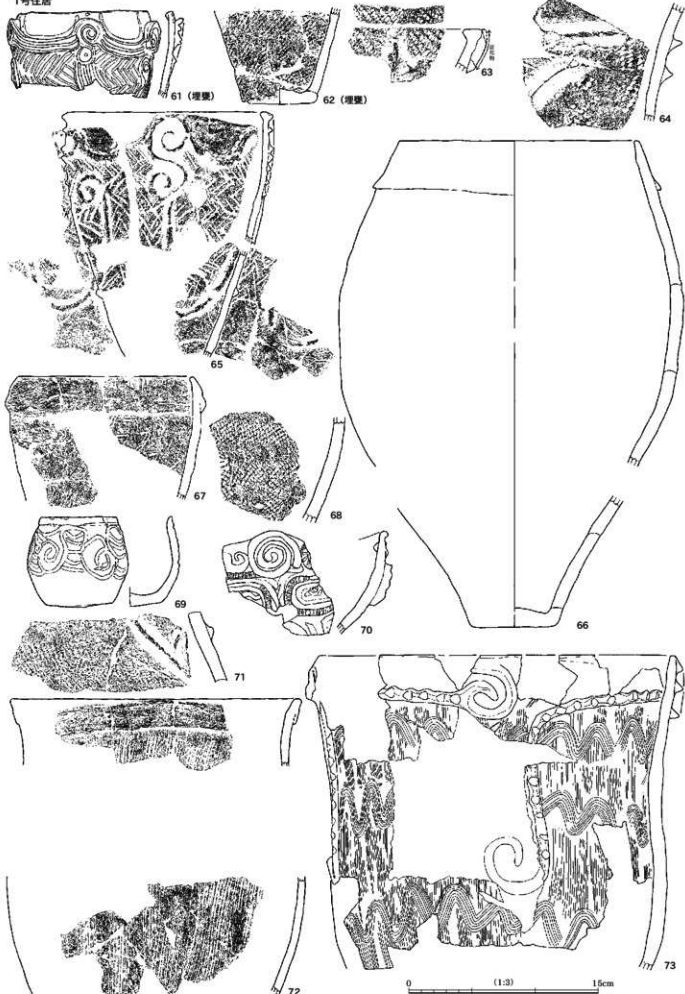


- 1 暗褐色土 (10YR 3/4) しまりなし、粘性强し。
- 2 黒色土 (10YR 2/1) 多量の炭を含む。
- 3 暗褐色土 (10YR 3/3) 黄褐色の機土を含む。
- 4 暗褐色土 (10YR 3/3) しまりなし、粘性强し。
- 5 黄褐色土 (10YR 7/8) 堆土上、しまりあり、粘性强し。

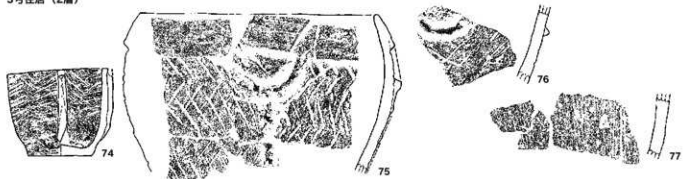




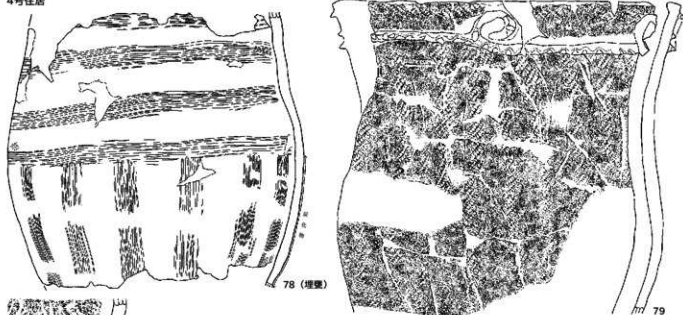
1号住居



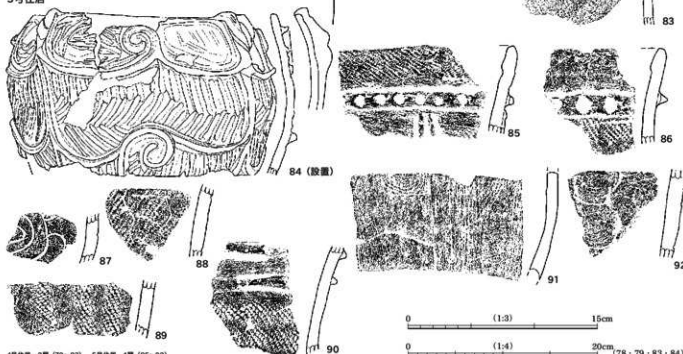
3号住居 (2層)



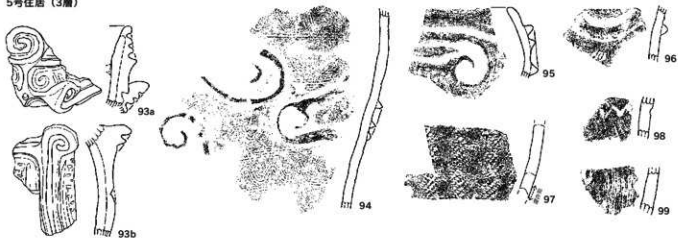
4号住居



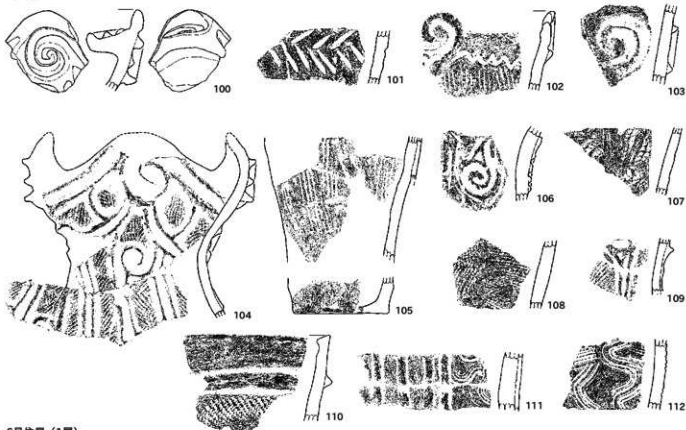
5号住居



5号住居 (3層)



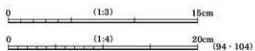
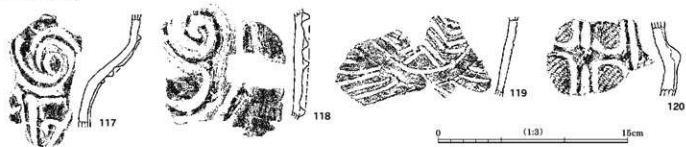
(1層)



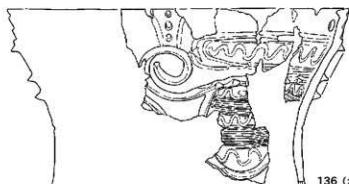
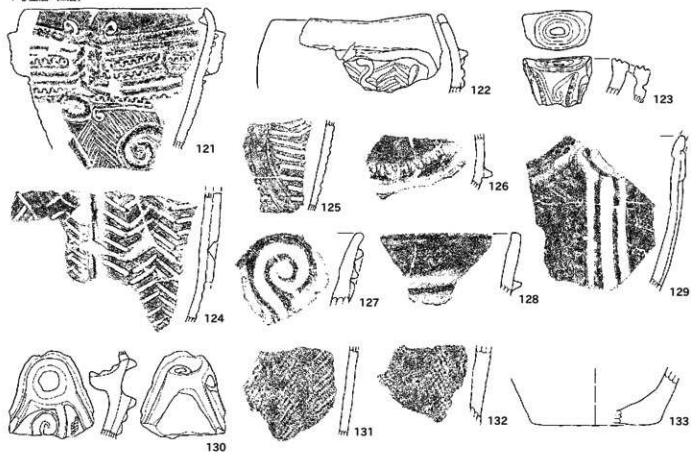
6号住居 (1層)



7号住居 (3層)



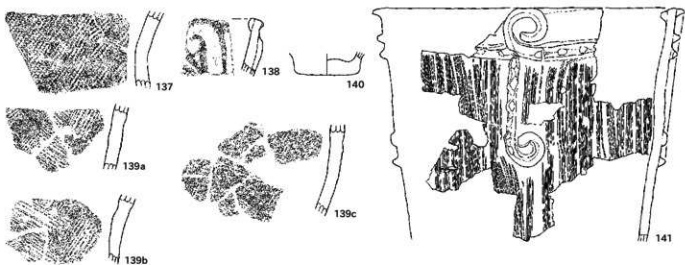
7号住居 (2層)



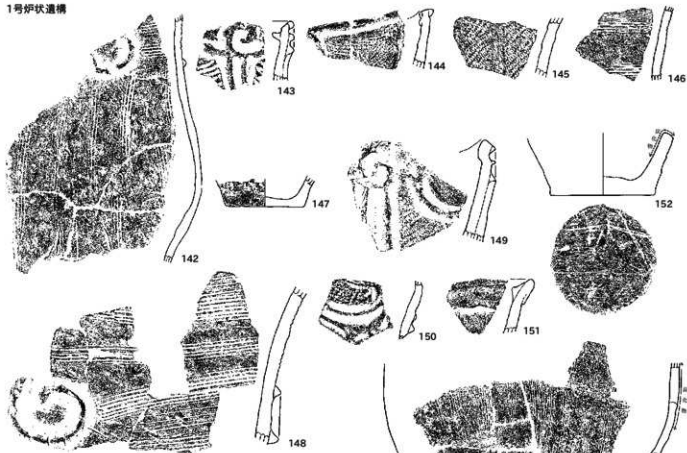
0 (1:3) 15cm

0 (1:4) 20cm (135・136)

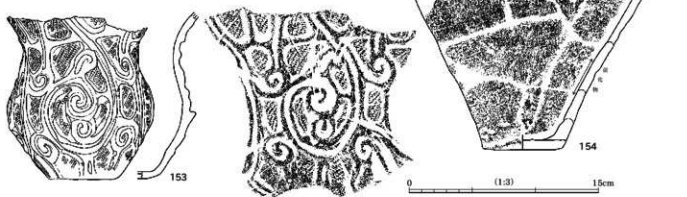
8号住居



1号炉状遺構



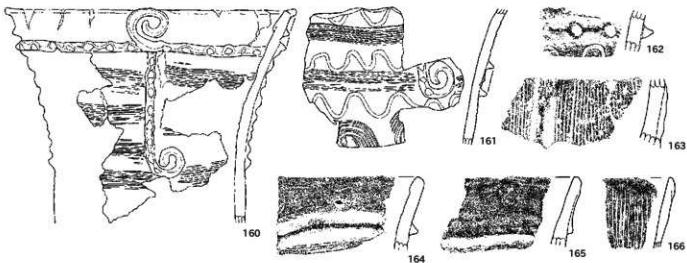
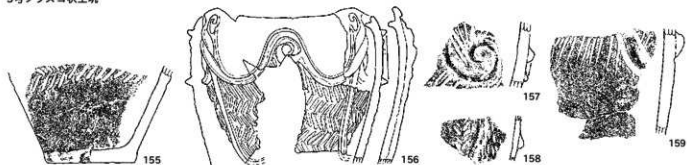
5号フラスコ状土坑



8号住居 室内 (137) 1層 (138) 0層 (140-141) 1号炉状遺構 0層 (142) 1層 (140-152)
5号フラスコ状土坑 2層 (153-154)

0 (1:3) 15cm
0 (1:4) 20cm (141・153・154)

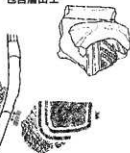
5号フラスコ状土坑



2号埋壺



包含層出土



3号埋壺

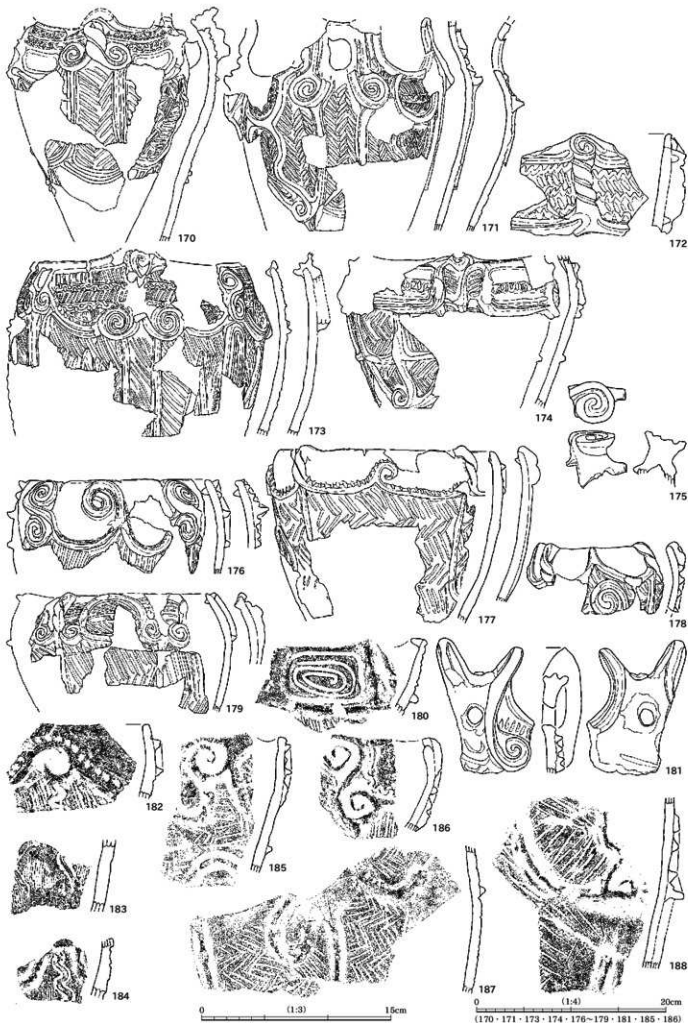


5号フラスコ状土坑 2層 (155) H-Ha層 (160)

0 (1:3) 15cm

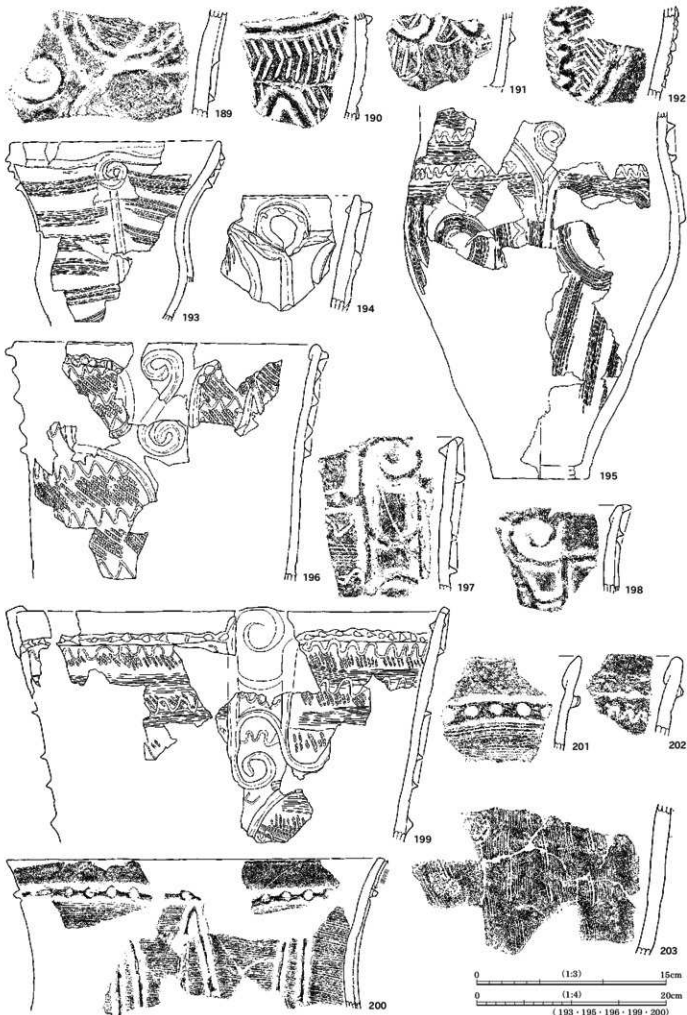
0 (1:4) 20cm (156・160・161・167・169)

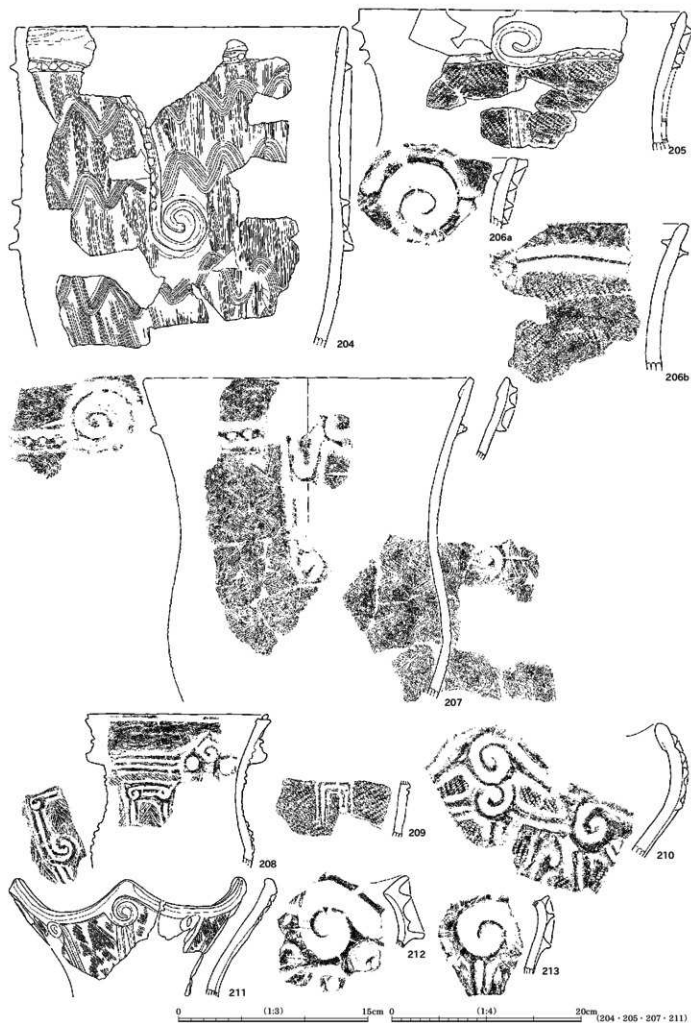
169 内外面全面赤漆塗り



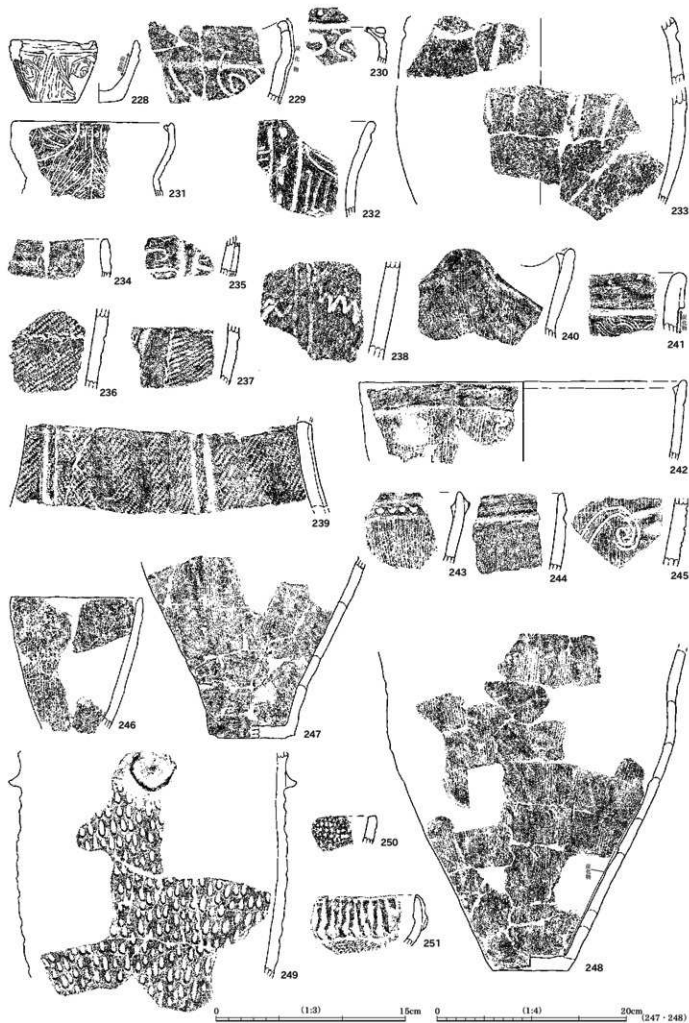
0 (1:3) 15cm

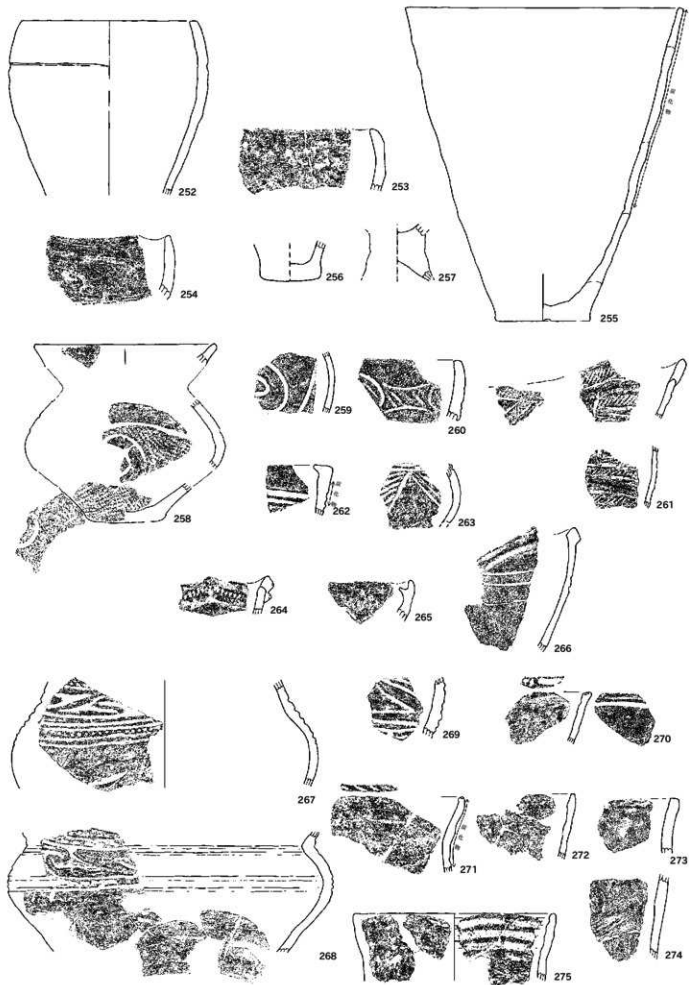
0 (1:4) 20cm
(170・171・173・174・176~179・181・185・186)



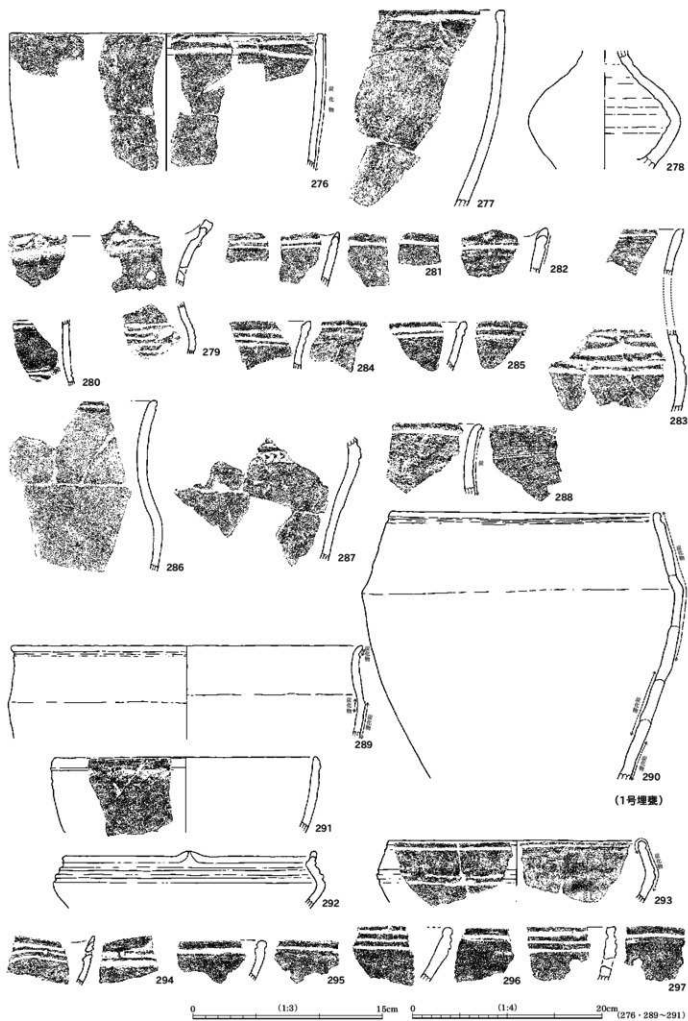


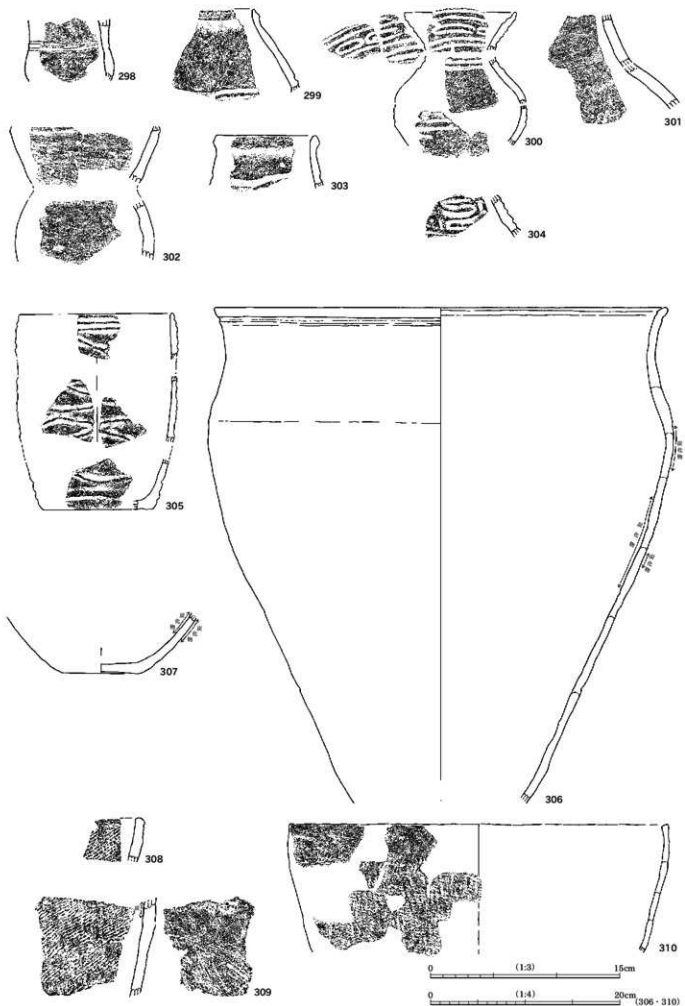


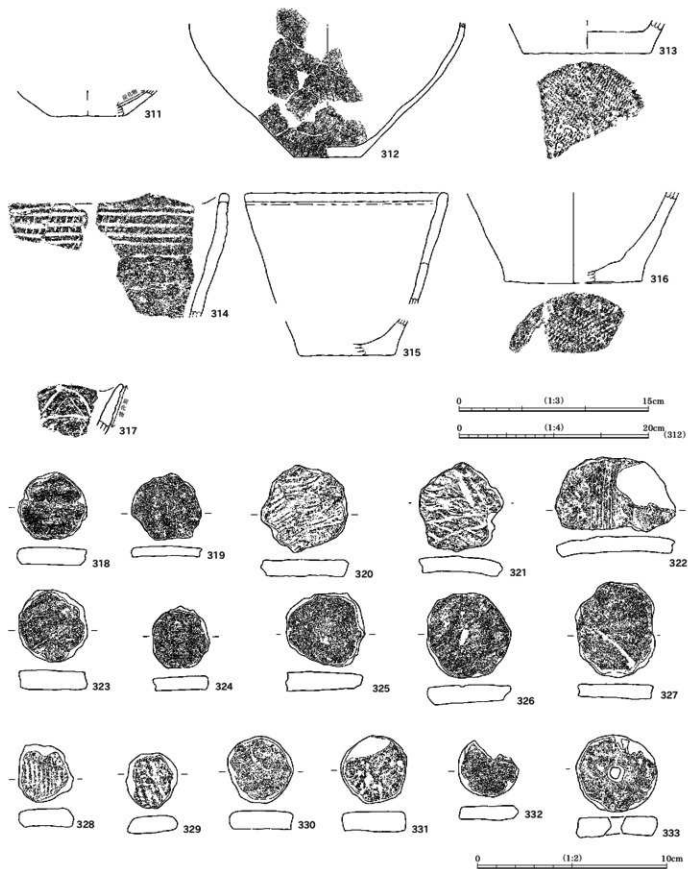


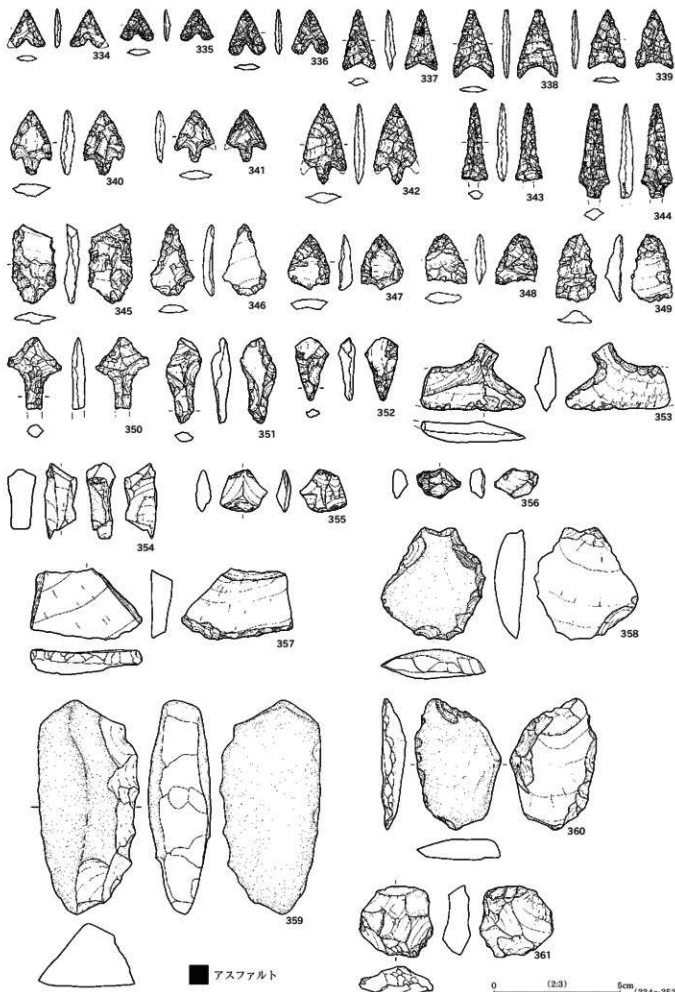


0 (1:3) 15cm 0 (1:4) 20cm (252・255・268)







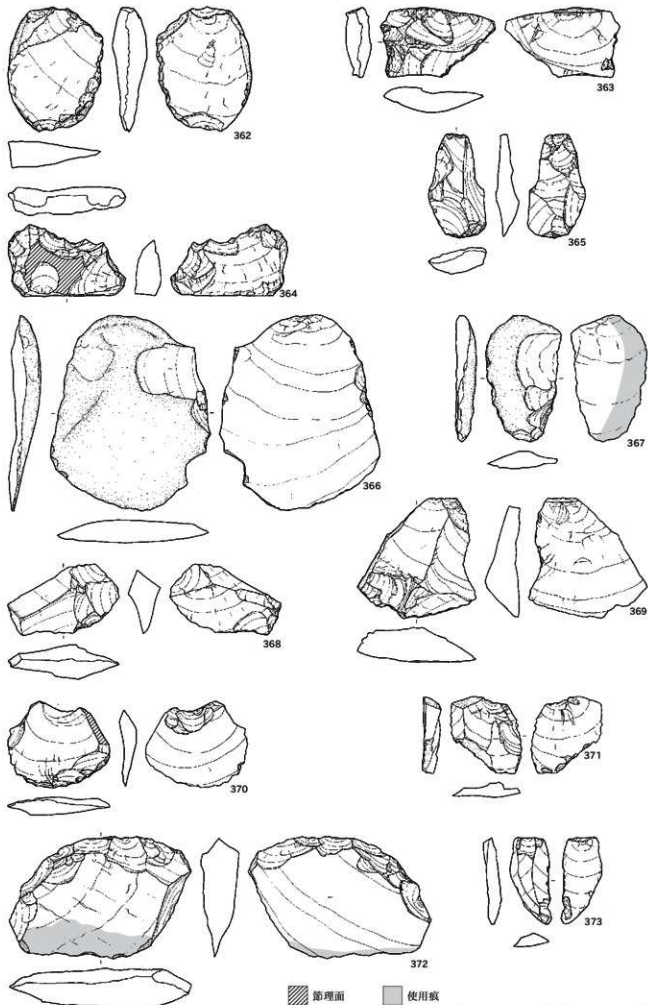


石鏃A類 (334~336) B類 (337~339) C類 (340~342) D類 (343~344) 石鏃A類高 (345~349)

石鏃 (350~352) 石匙 (353) 両端削られたる石鏃 (354~356) 不定形石鏃A類 (357) B類 (358~359) C類 (360~361)

0 (2:3) 5cm (334~352)

0 (1:2) 10cm (353~361)



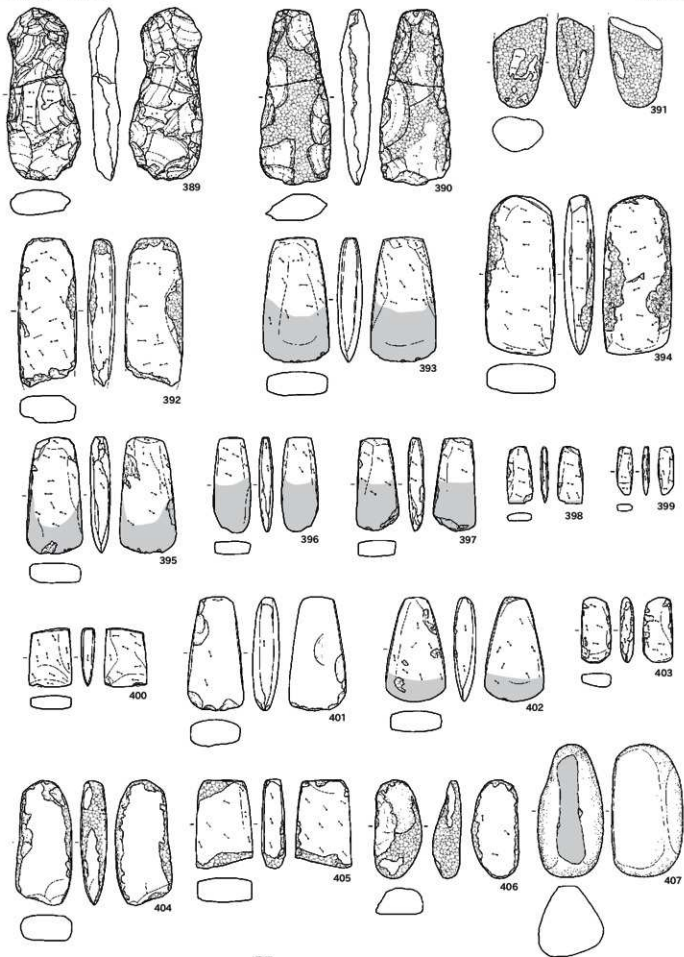
不定形石錐C類 (362) D類 (363・364) E類 (365) F類 (366~371) G類 (372・373)

0 (1:2) 10cm



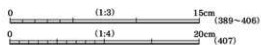
▨ 節理面 ▩ 敲打痕・つぶし (打製石斧)

■ 使用痕 0 (1.2) 10cm (374・375)
0 (1.3) 1.5cm (376~388)

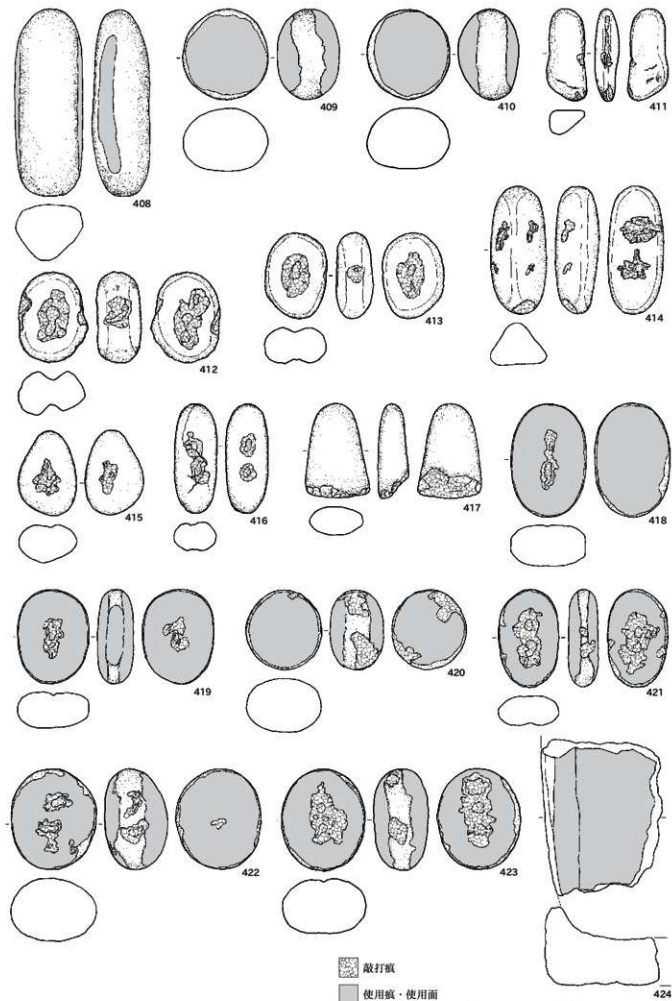


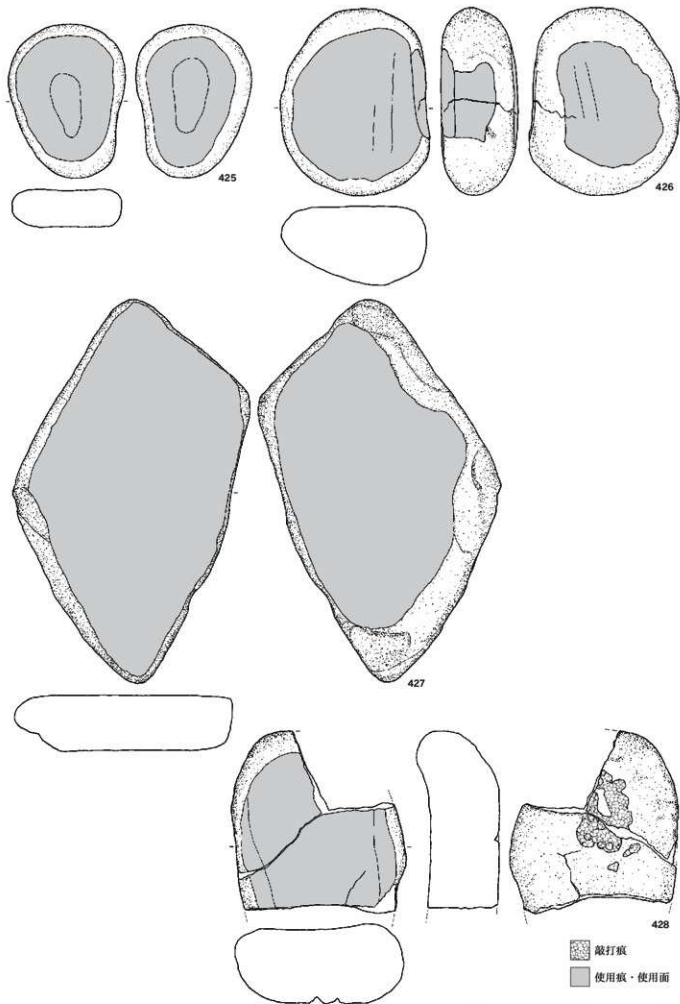
■ 敲打痕・つぶし (打製石斧)

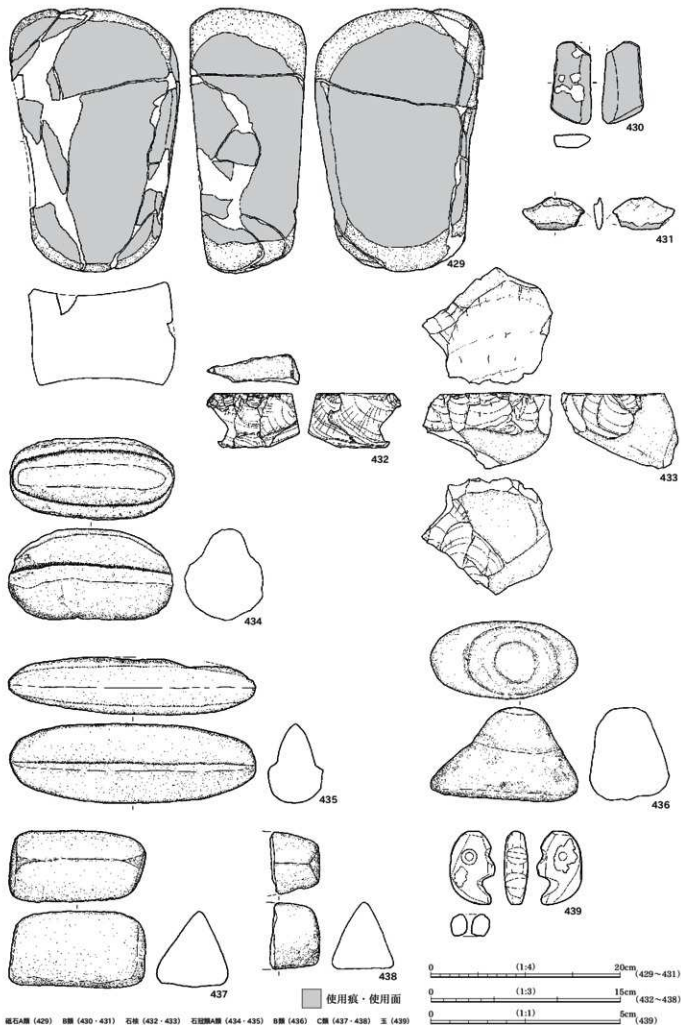
■ 使用痕



打製石斧類 (389) C類 (390) 角部磨製石斧 (391) 磨製石斧A1類 (392~394) A2類 (395~397) A3類 (398~399)
A4類 (400) B類 (401・402) C類 (403・404) D類 (405・406) 磨製石斧A類 (407)







底石磨 (429) 磨 (430-431) 石核 (432-433) 石刃磨 (434-435) 磨 (436) C磨 (437-438) 玉 (439)



遺跡位置と周辺の景観（建設省国土地理院 1976年 11月 3日撮影空中写真（上方 妙高山方向））



遺跡完掘状況（北西から）



基本土層断面 (3Dグリッド①)



5号住居覆土 火山灰層



1号住居 完掘 (北から)



1号住居炉 完掘 (南から)



1号住居 炭化材検出状況 (東から)



1号住居 作業風景 (北東から)



1号炉状遺構 (南東から)



5号フラスコ状土坑 (東から)



縄文時代集落 完掘（西から）



遺跡北西部分 完掘（北西から）



遺跡南東部分 完掘（北西から）



1号住居 検出状況（南東から）



1号住居 焼土面検出状況（南から）



1号住居 炭化材検出状況（西から）



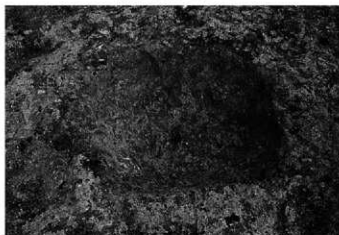
1号住居 土層断面（東から）



1号住居 炭化材 (南東から)



1号住居 炭化材 (南東から)



1号住居 炉形 (北から)



1号住居 埋築 (南から)



1号住居 埋築 (北から)



1号住居 埋築 断面 (北から)



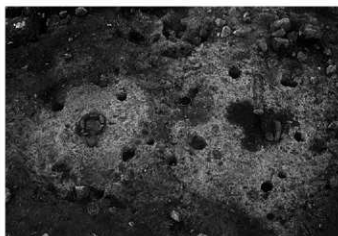
1号住居 基礎 (北東から)



6号 集石 (南西から)



3・4号住居 検出状況 (南東から)



3・4号住居 完掘 (南東から)



3号住居 土層断面 (南東から)



3号住居 土器検出状況 (北西から)



3号住居 炉 完掘 (南東から)



3号住居 完掘 (南東から)



4号住居 土層断面 (南西から)



4号住居 炉 検出状況 (北西から)



4号住居 炉 完掘 (南西から)



4号住居 埋室 (西から)



4号住居 埋室 (東から)



4号住居 遺物出土状況 (北から)



4号住居 完掘 (南東から)



5号住居 検出状況 (北東から)



5号住居 検出状況 (南東から)



5号住居 土層断面 (南東から)



5号住居 焼土



5号住居 周溝



5号住居 遺物出土状況 (西から)



5号住居 炉 完掘 (北東から)



5号住居 設置土器 (東から)



5号住居 設置土器 (西から)



5号住居 設置土器 (西から)



5号住居、11号土坑 完掘 (北東から)



6号住居 検出状況 (南東から)



6号住居 土層断面 (南西から)



6号住居 炉 完掘 (北から)



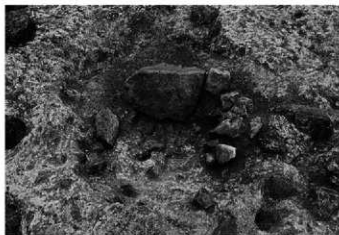
6号住居 完掘 (南から)



7号住居 土層断面 (北東から)



7号住居、13号土坑 (南から)



7号住居 炉 完掘 (北西から)



7号住居、13号土坑 完掘 (南から)



8号住居 土層断面 (北東から)



8号住居 炉 完掘 (南西から)



8号住居 完掘 (南から)



1号炉状遺構 検出状況 (西から)



1号炉状遺構 土層断面 (南東から)



1号炉状遺構 炉 完掘 (南東から)



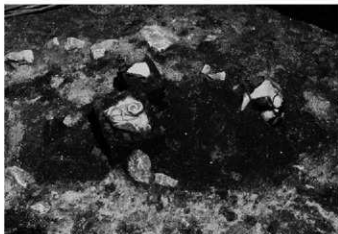
1号炉状遺構 炉 完掘 (南東から)



1号炉状遺構 土器出土状況 (南から)



1号炉状遺構 完掘（南から）



2号炉状遺構 検出状況（西から）



2号炉状遺構 土層断面（西から）



2号炉状遺構 完掘（西から）



1号フラスコ状土坑 土層断面（西から）



1号フラスコ状土坑 完掘（東から）



2号フラスコ状土坑 礫検出状況（東から）



2号フラスコ状土坑 完掘（南東から）



3号フラスコ状土坑 検出状況 (南東から)



3号フラスコ状土坑 再検出状況 (東から)



3号フラスコ状土坑 完掘 (南東から)



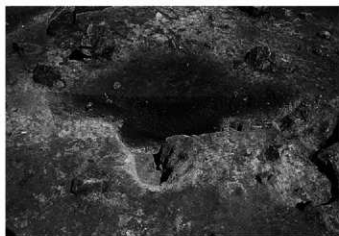
4号フラスコ状土坑 土層断面 (南東から)



4号フラスコ状土坑 完掘 (南東から)



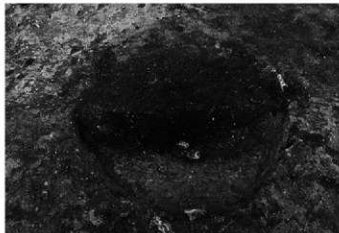
5号フラスコ状土坑 完掘及び遺物出土状況 (東から)



6号フラスコ状土坑、14・15号土坑 土層断面 (南から)



6号フラスコ状土坑、14・15号土坑 完掘 (南東から)



1号土坑 土層断面 (南東から)



2号土坑 土層断面 (南東から)



3号土坑 完掘 (南から)



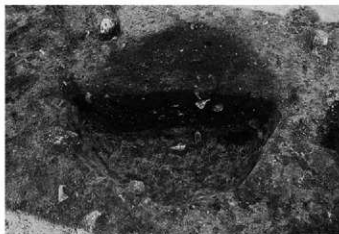
4号土坑 完掘 (南から)



5号土坑 土層断面 (南から)



6号土坑 土層断面 (北から)



7号土坑 土層断面 (南から)



8号土坑 完掘 (北西から)



9号土坑 土層断面 (南東から)



10号土坑 完掘 (南から)



12号土坑 検出状況 (南から)



12号土坑 完掘 (南から)



1号焼土 (南東から)



2号焼土 (東から)



1号埋壘 (南東から)



1号埋壘 土層断面 (南東から)



2号・3号埋壘 (北東から)



2号埋壘 検出状況 (北東から)



1号集石 検出状況 (南西から)



2号集石 検出状況 (北東から)



3号集石 (南から)



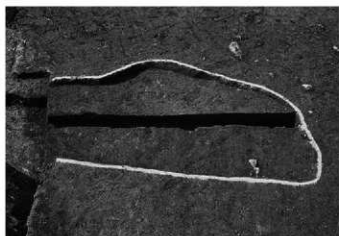
4号集石 (南東から)



5号集石 (北西から)



1号炭窯 土層断面 (南東から)



1号炭窯 完掘 (南東から)



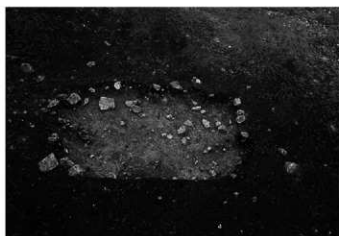
2号炭窯 検出状況 (北西から)



2号炭窯 (南東から)



3号炭窯 土層断面 (北西から)



3号炭窯 完掘 (東から)



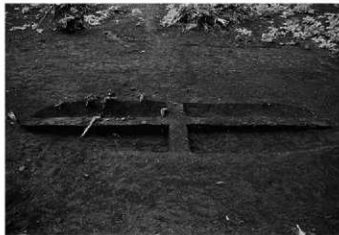
4号炭窯 (北東から)



5号炭窯 土層断面 (南東から)



5号炭窯 完掘 (東から)



6号炭窯 完掘 (南東から)



7号炭窯 土層断面 (東から)



7号炭窯 完掘 (東から)



8号炭窯 (南東から)



9号炭窯 土層断面 (南から)



9号炭窯 完掘 (北から)



10号炭窯 完掘 (北東から)



11号炭窯 完掘 (南西から)



縄文中期中葉～後葉の土器



唐草文系土器



庄原隆帯文系土器



石冠類



打製石斧(上)・磨製石斧(下)



早期押型文 沢式(31)表



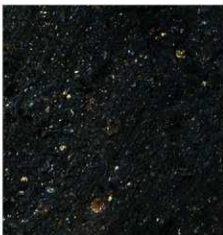
早期押型文 沢式(31)裏



早期押型文土器 胎土①(2)



早期条痕文土器 胎土⑦(50b)



早期条痕文土器 胎土⑨(49a)



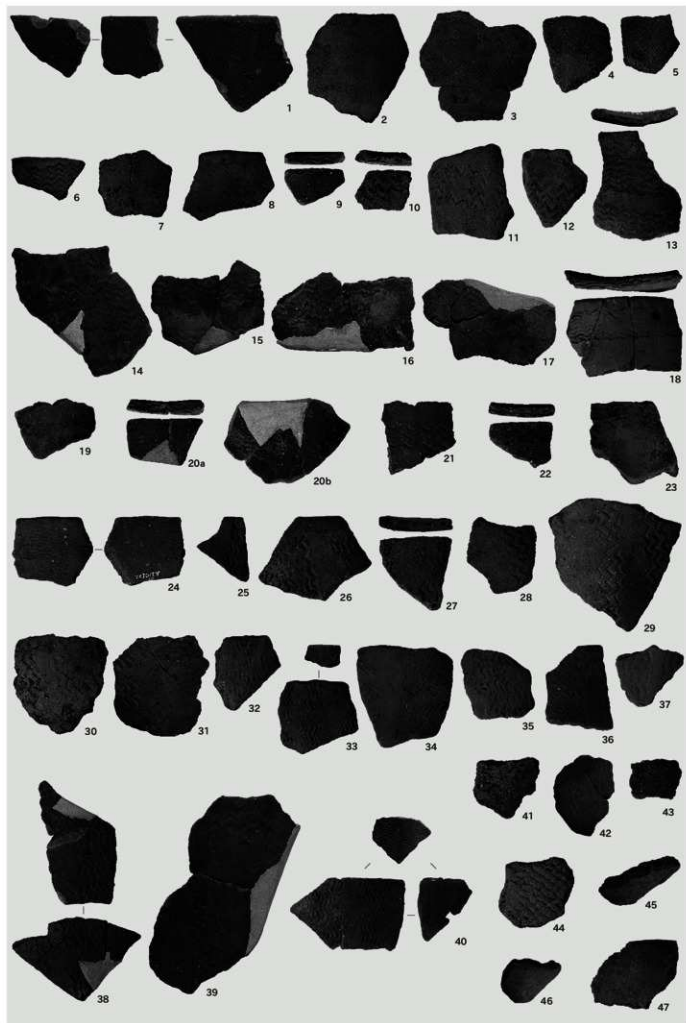
中期 胎土②(197)

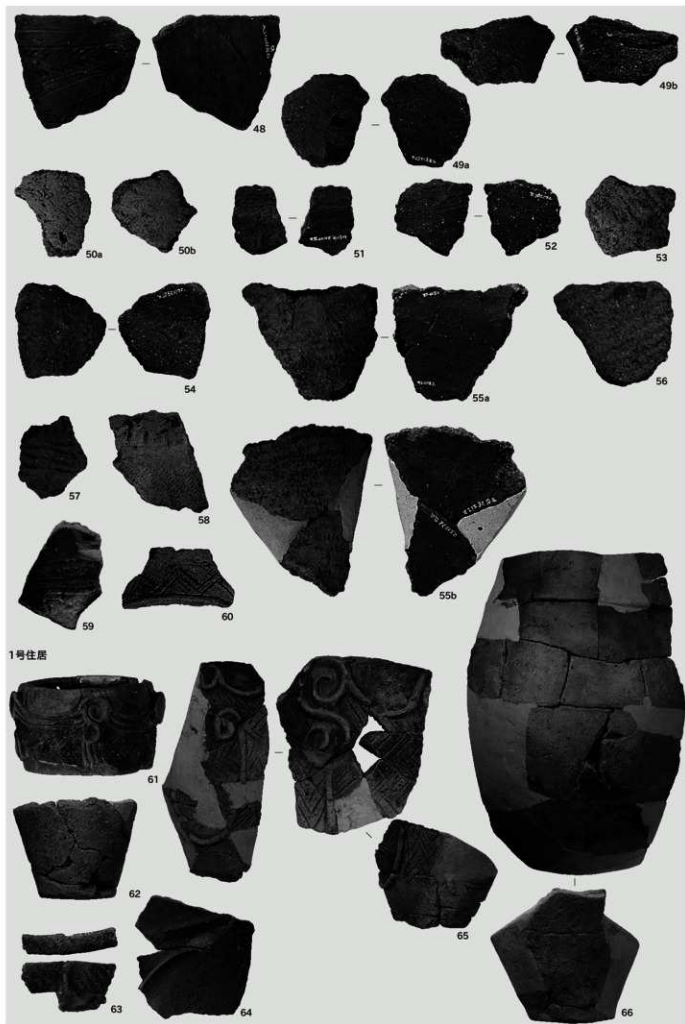


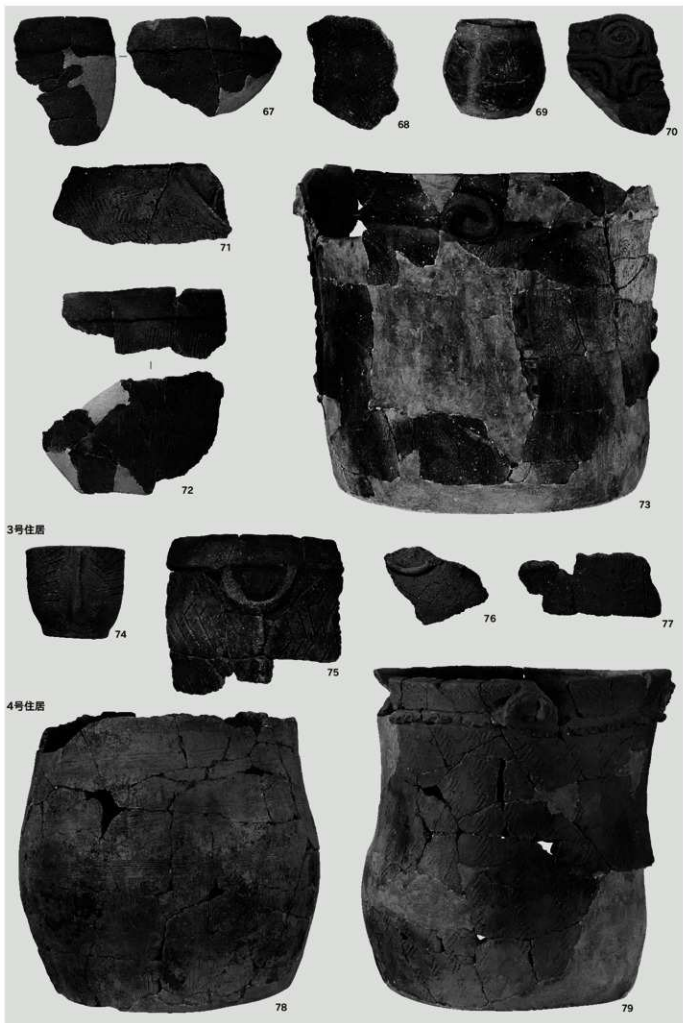
中期 胎土⑤(207)

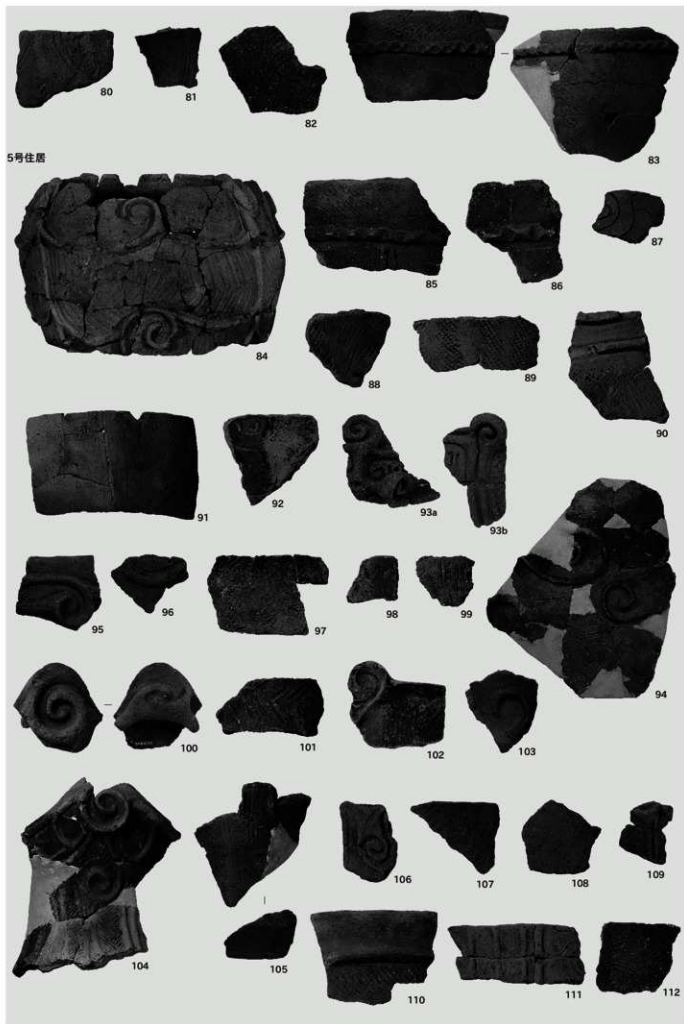


中期 胎土⑨(105)





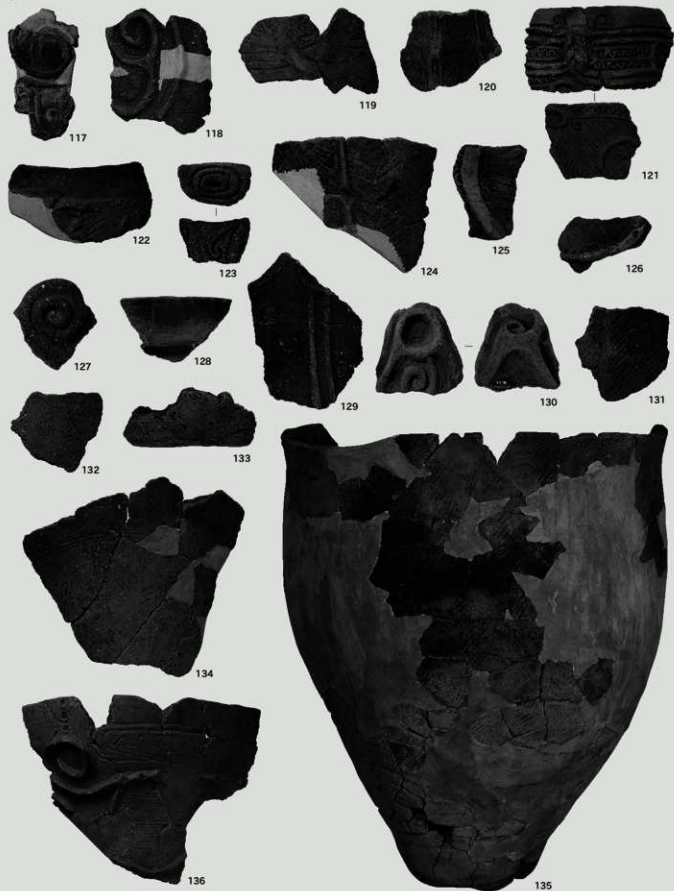




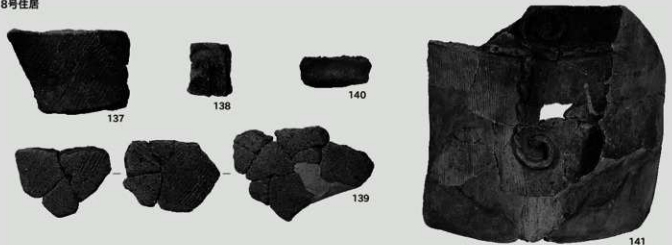
6号住居



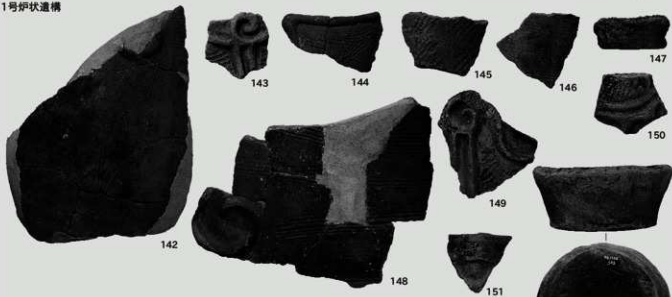
7号住居



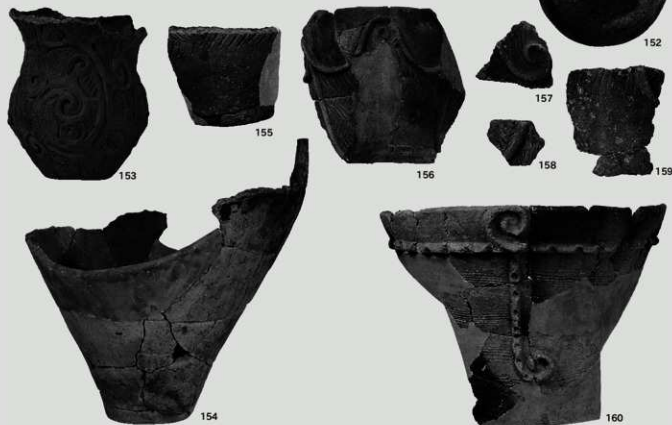
8号住居

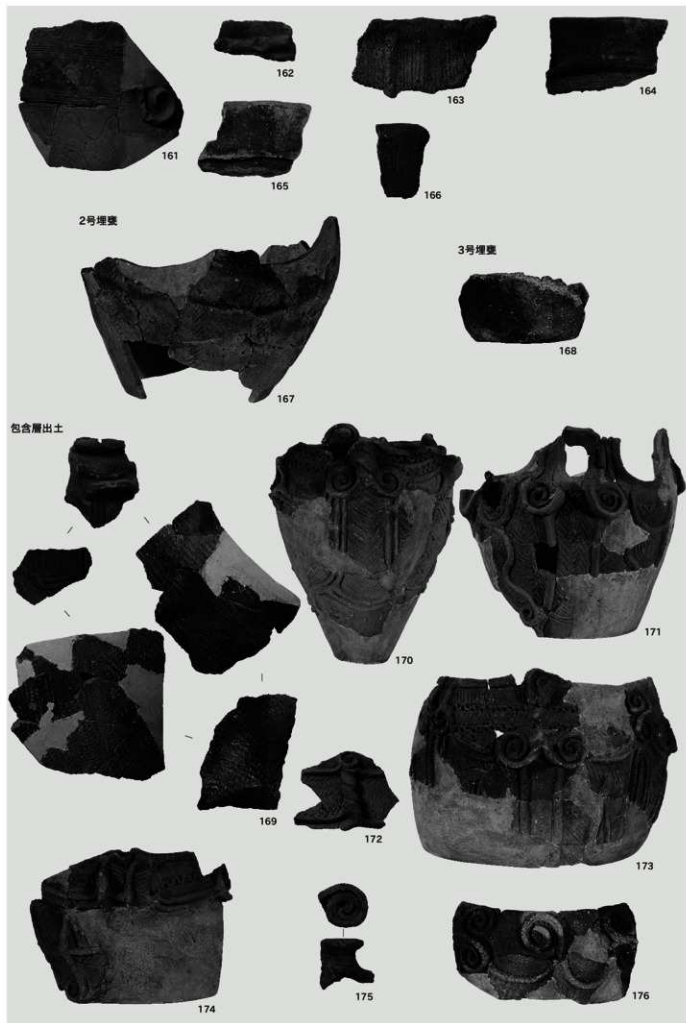


1号炉状遺構

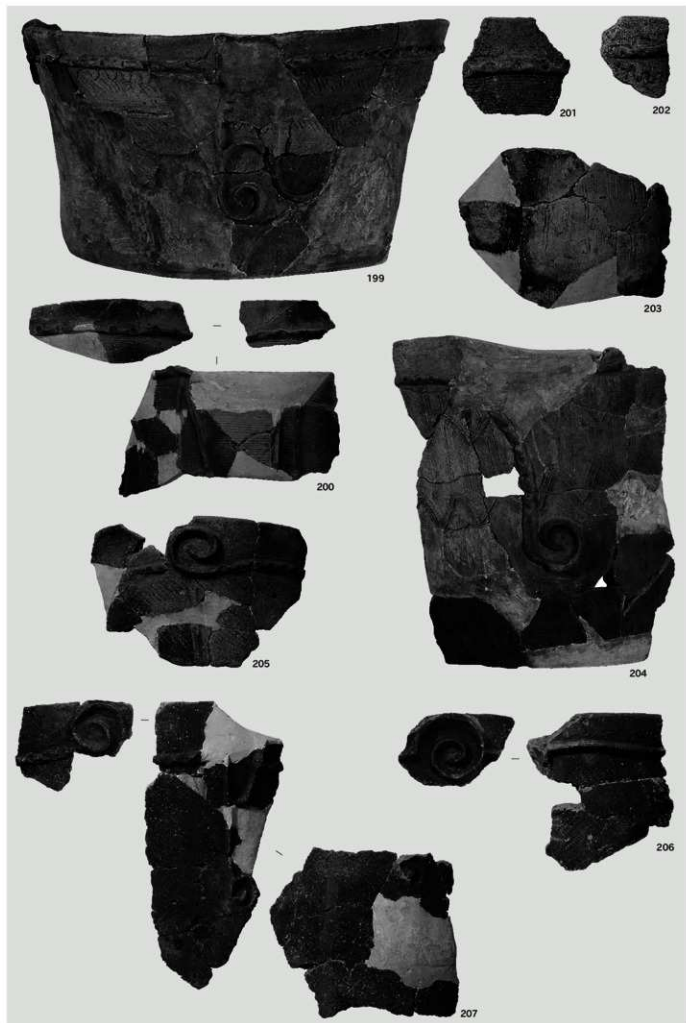


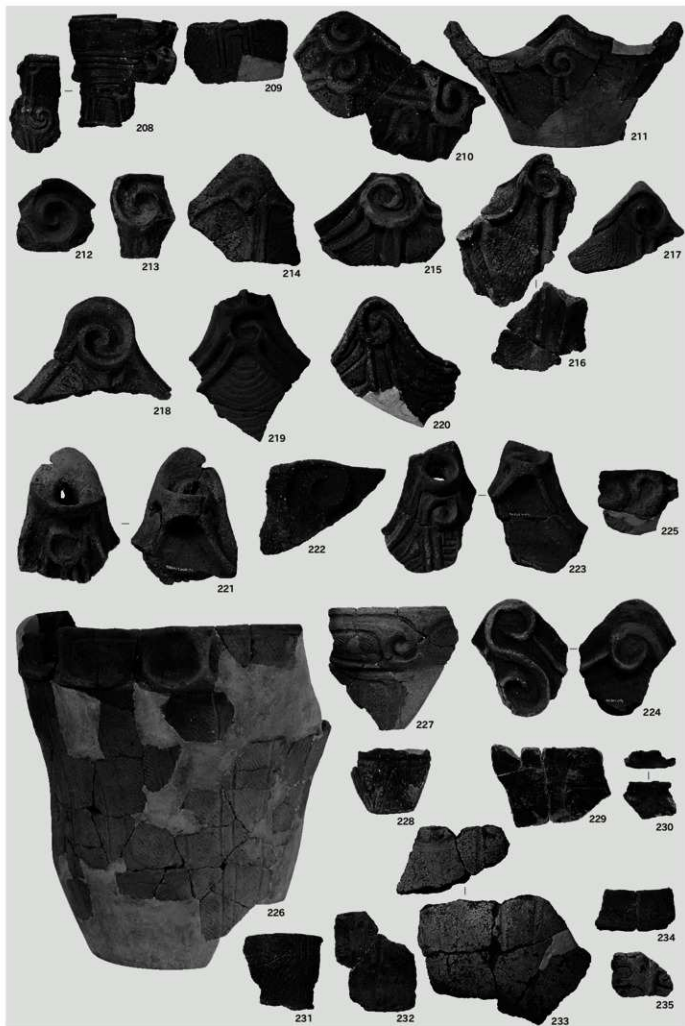
5号フラスコ状土坑

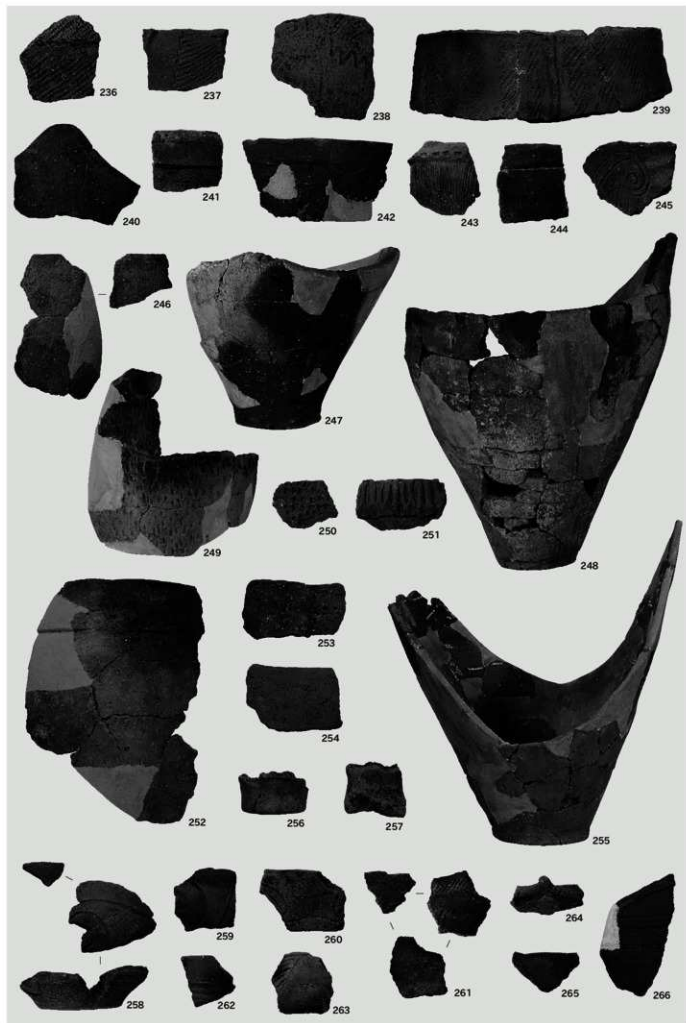


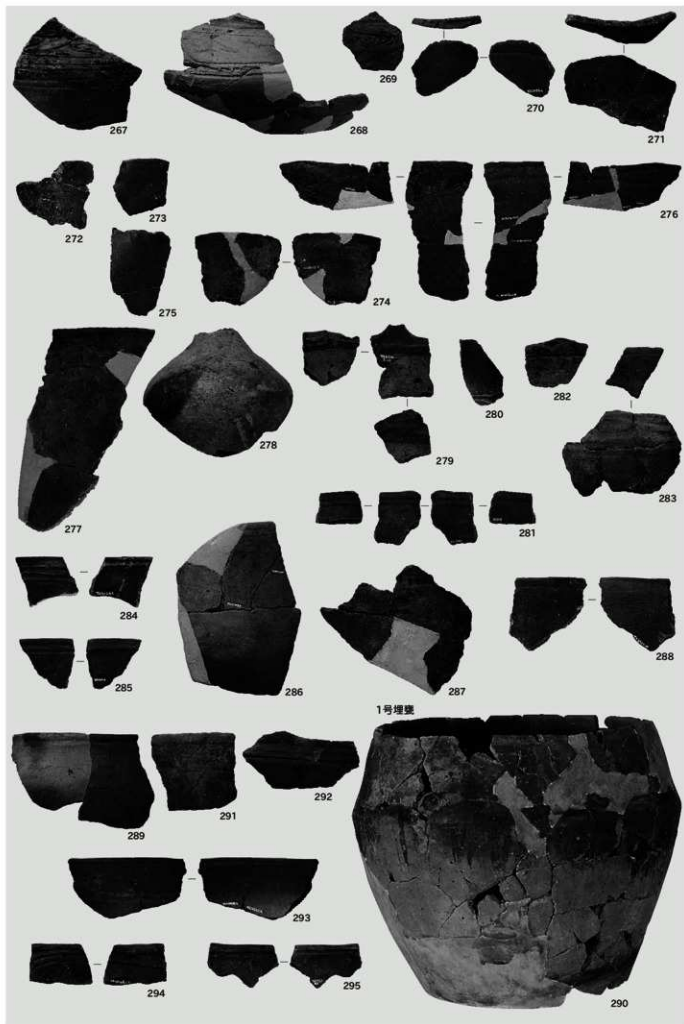


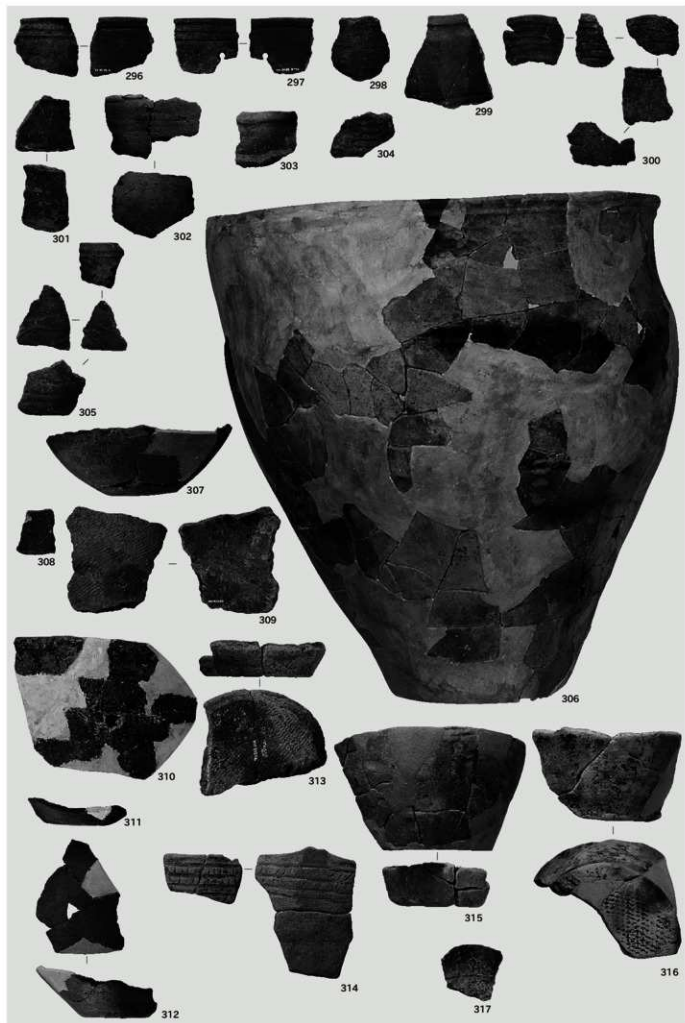


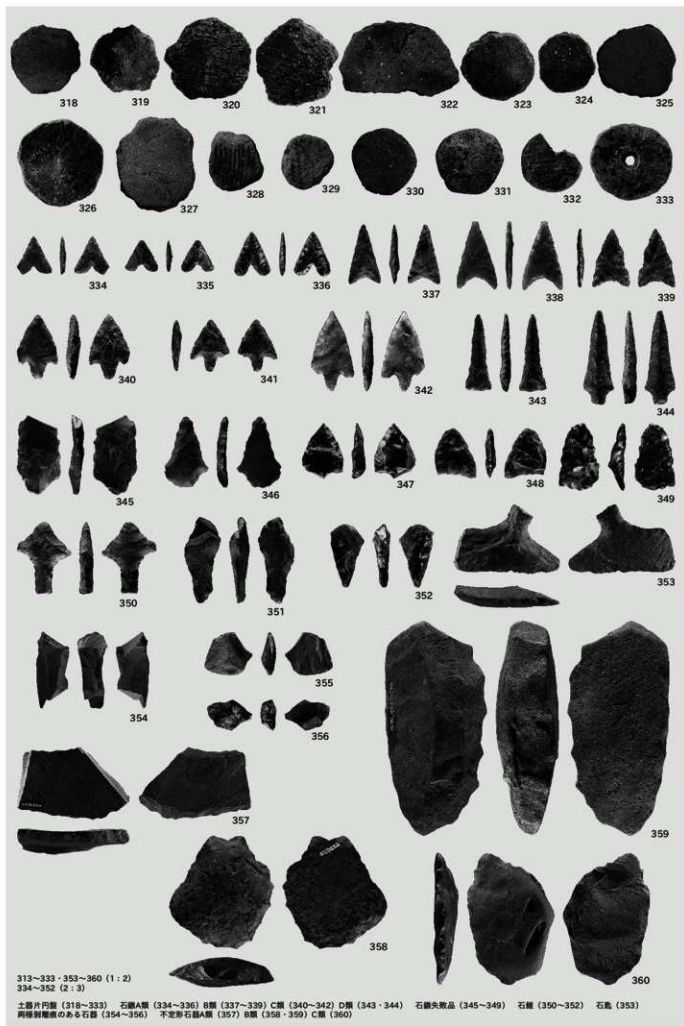


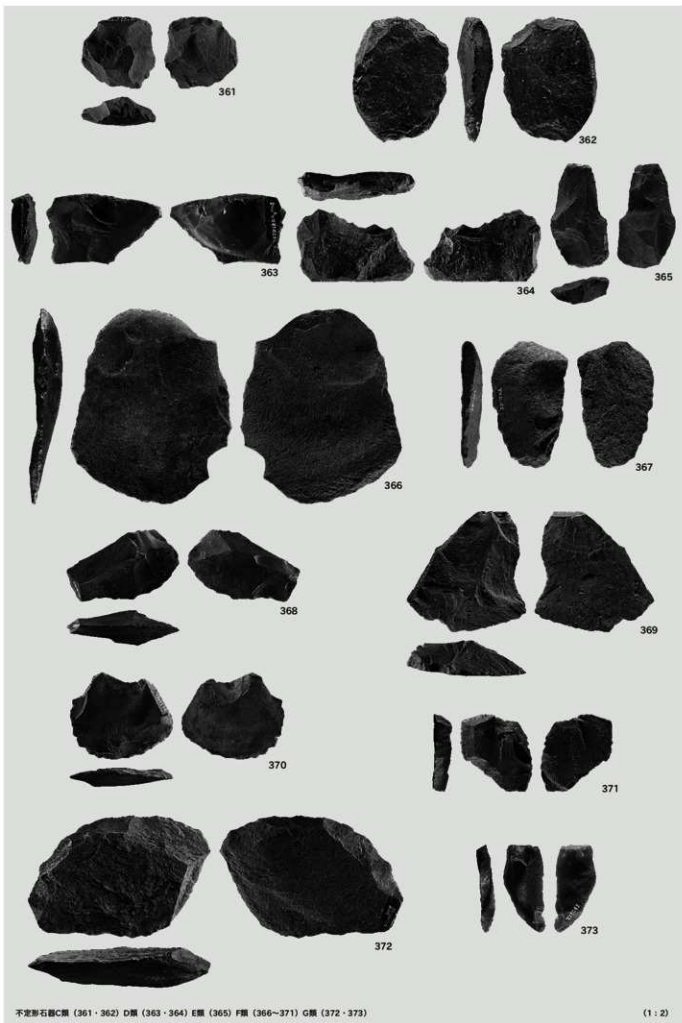




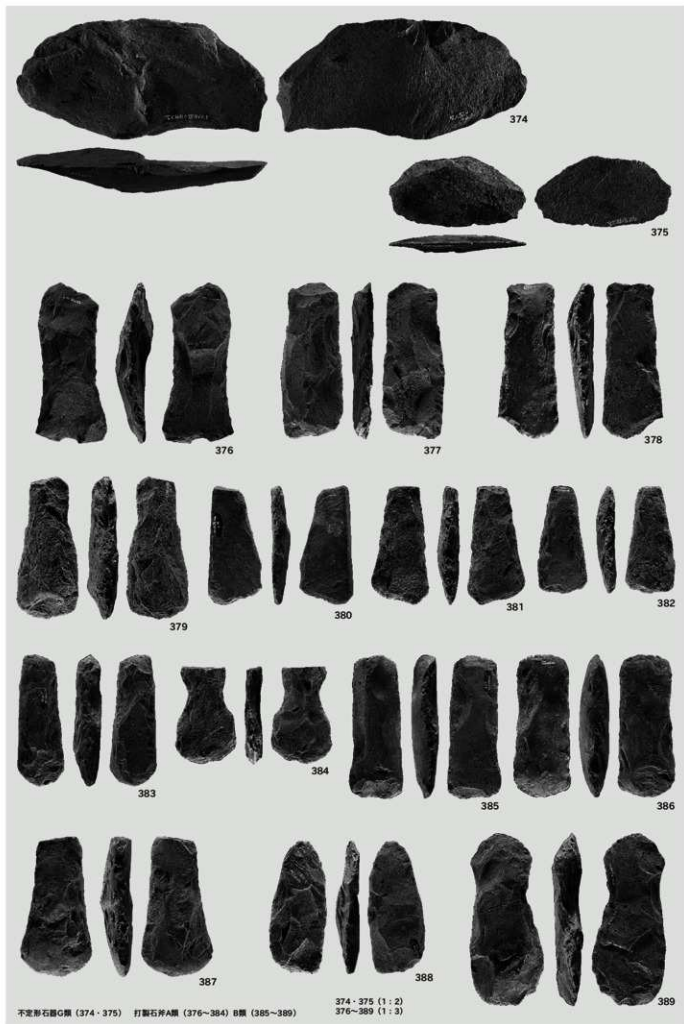






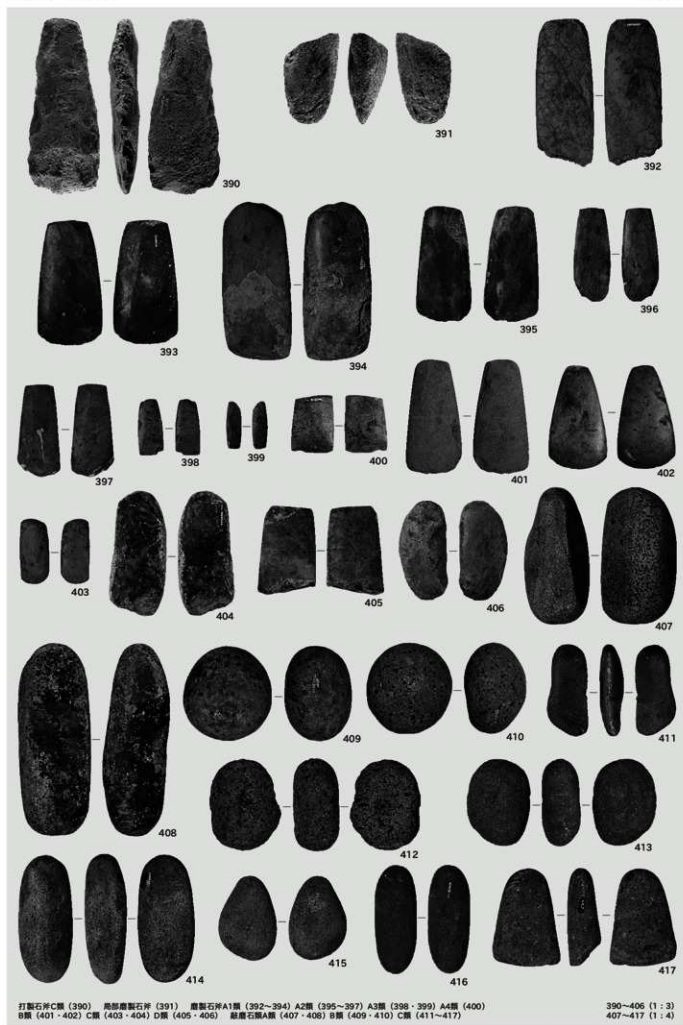


不定形石器C類 (361・362) D類 (363・364) E類 (365) F類 (366~371) G類 (372・373)



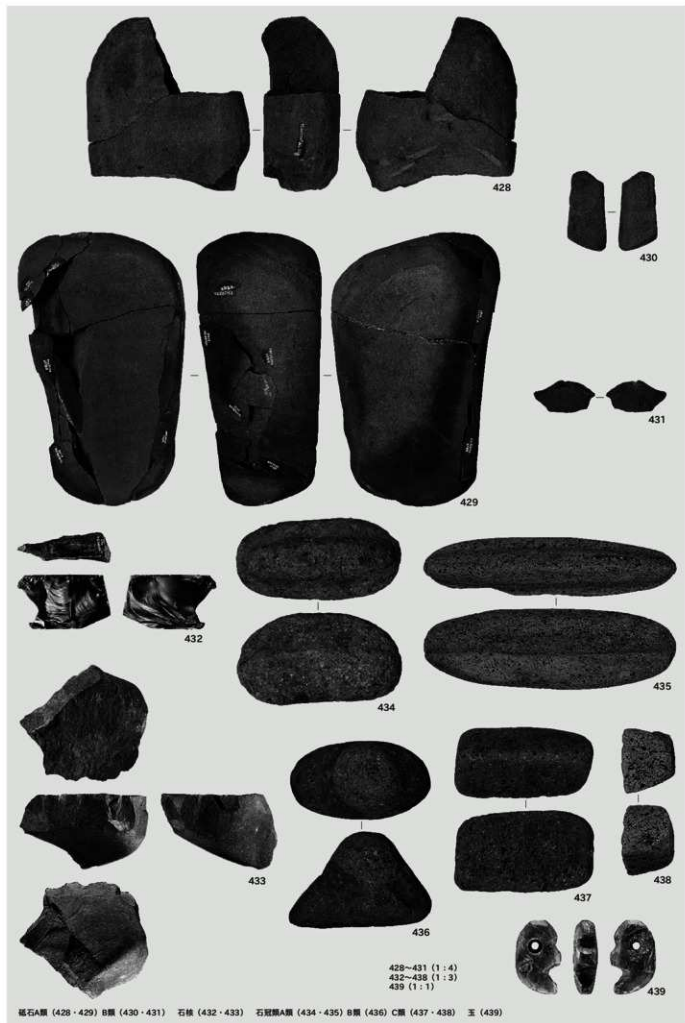
不定形石器G類 (374・375) 打製石片A類 (376～384) B類 (385～389)

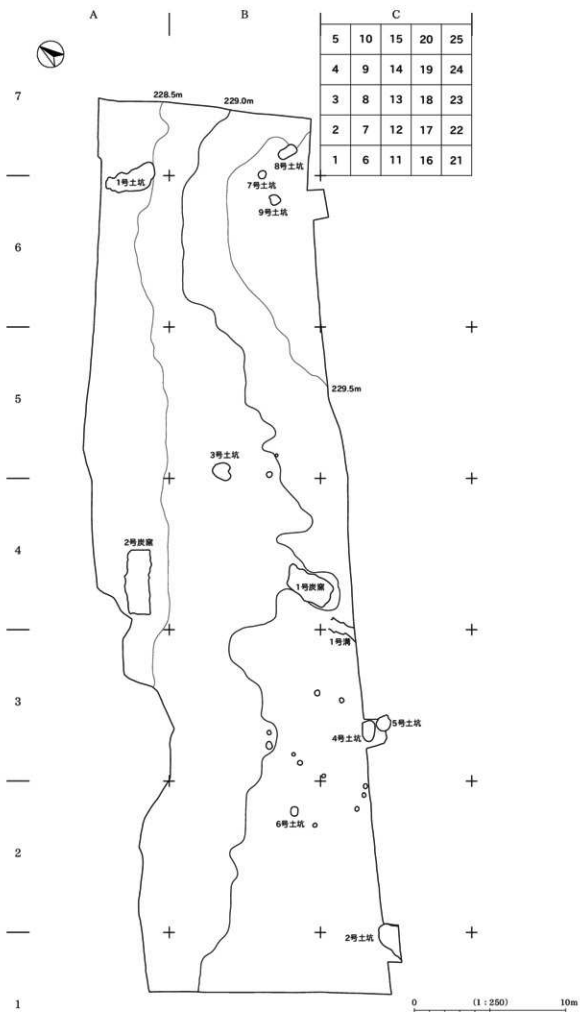
374・375 (1:2)
376～389 (1:3)



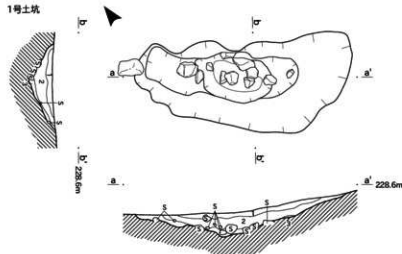


磨石D類 (418~423) 石面A類 (424) B類 (425) 砥石A類 (426・427)



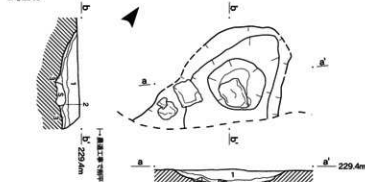


1号土坑



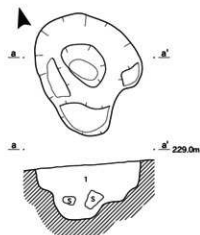
- 1 黒褐色土 (7.5YR 3/2) 粘質なし。しまり中やあり。火山灰含む。炭化物少量含む。
 - 2 黒色土 (7.5YR 2/1) 粘質なし。しまりあり。火山灰含む。炭化物少量含む。幅1~2mmの礫が多い。土器→多大の礫多し入る。
 - 3 暗褐色土 (7.5YR 3/3) →褐色土 (7.5YR 4/6) のブロック土。炭化物少量含む。
- ※火山灰 (灰白色 10YR 7/1) は1層と2層の境目にかけて多く分佈する。粘質なし。しまりはあり。サラツとした感じ。

2号土坑



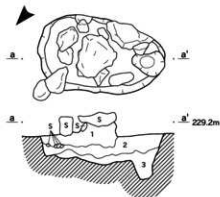
- 1 明赤褐色土 (5YR 5/6) 粘質なし。しまり強。火山灰のブロックをまだら状に含む。礫含む。下部は灰色がかって。こみ赤褐色 (5YR 5/3) となる。
- 2 黒色土 (7.5YR 2/1) 粘質なし。しまりあり。幅1mm位の炭粒を多く含む。手入の礫含む。火山灰のブロックを上部に含む。
- 3 褐色土→黒色土 (7.5YR 4/4) 粘質なし。しまりあり。2層と地山 (田層) が混じった感じ。※火山灰 (灰白色 10YR 7/1) は1層と2層の境目にかけて多く分佈する。粘質なし。しまりはあり。サラツとした感じ。

3号土坑



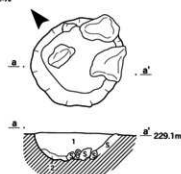
- 1 褐色土 (7.5YR 4/3) 粘質なし。しまりあり。炭化物なし。黄褐色粒少量含む。底面付近に集中し手入→多大の礫を含む。

4号土坑



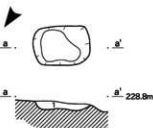
- 1 褐色土 (7.5YR 4/3) しまりあり。粘質なし。
- 2 暗赤褐色土 (7.5YR 5/6) しまりあり。粘質なし。地山同粒を含む。(わずか)
- 3 明黄褐色土 (10YR 7/6) しまりあり。粘質なし。底面に若干炭化物を含む。

5号土坑



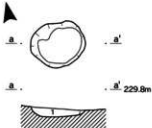
- 1 褐色土 (7.5YR 5/6) しまりあり。粘質なし。
- 2 明黄褐色土 (10YR 6/6) しまりあり。粘質なし。地山同粒を含む。

6号土坑

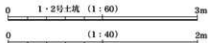


- 1 灰褐色土 粘質あり。しまりあり。炭粒。砂礫少量含む。

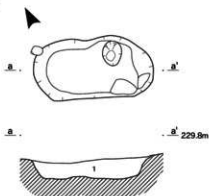
7号土坑



- 1 暗褐色土 (10YR 3/4) 粘質なし。しまり強。炭化物ブロック状に多く含む。幅0~5mmの礫含む。

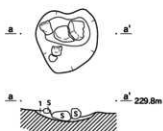


8号土坑



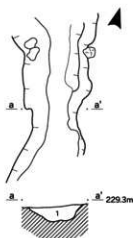
1 褐色土 (10YR 4/6) 粘粒なし。しまりあり。幅1~2mmの粒を含む。炭化物少量含む。

9号土坑



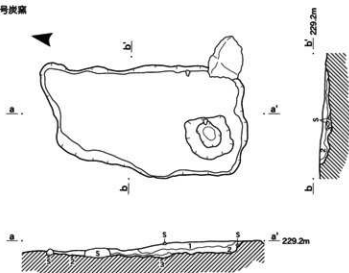
1 暗褐色土 (7.5YR 3/3) 粘粒なし。しまり強。炭化物少量含む。幅10~20mm位の塊が含まれる。

1号溝



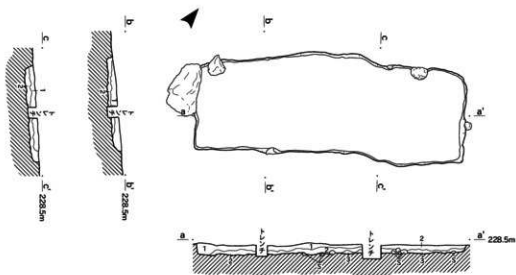
1 暗褐色土 しまりあり。粘粒なし。地山同質を若干含む。

1号炭窯

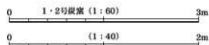


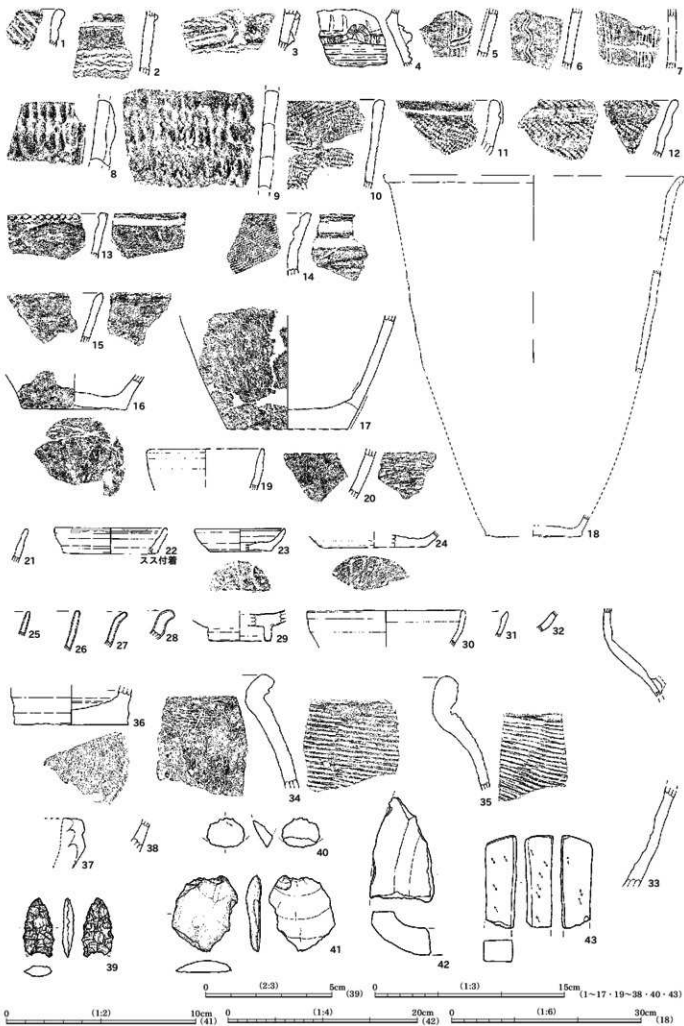
1 暗褐色土 (7.5YR 3/3) ~ 黒褐色土 (10YR 3/2) 粘粒なし。しまり強。炭粒、碎粒の塊を含む。
2 黒色土 (7.5YR 1.2/1) ~ 黒褐色土 (10YR 2/2) 粘粒なし。しまりあり。炭土を多数に含む。炭を多数に含むが、特に南縁の方に炭粒が集中している。
3 暗褐色土 (10YR 3/4) + 暗褐色土 (7.5YR 3/3) 粘粒なし。しまりあり。炭を含む。地山に近い色調。(まだら状の濃縁)

2号炭窯



1 暗黒褐色土 黒褐色土が混じる。
2 黒褐色土 粘粒なし。炭を多数に含む。
3 暗褐色土 粘粒なし。







調査前の状況



遺跡近景



遺跡完掘全景



1号土坑 土層断面（北西から）



1号土坑 土層断面（東から）



1号土坑 完掘（北西から）



2号土坑 土層断面（南から）



2号土坑 完掘（北東から）



3号土坑 土層断面 (南西から)



3号土坑 底部礫出土状況 (西から)



3号土坑 完掘 (南から)



4号・5号土坑 検出状況 (北から)



4号・5号土坑 完掘 (北から)



6号土坑 土層断面 (南東から)



7号土坑 土層断面 (南西から)



8号土坑 土層断面 (西から)



9号土坑 検出状況(南から)



1号溝 土層断面(北から)



1号溝 完掘(北から)



1号炭窯 土層断面(西から)



1号炭窯 完掘(東から)



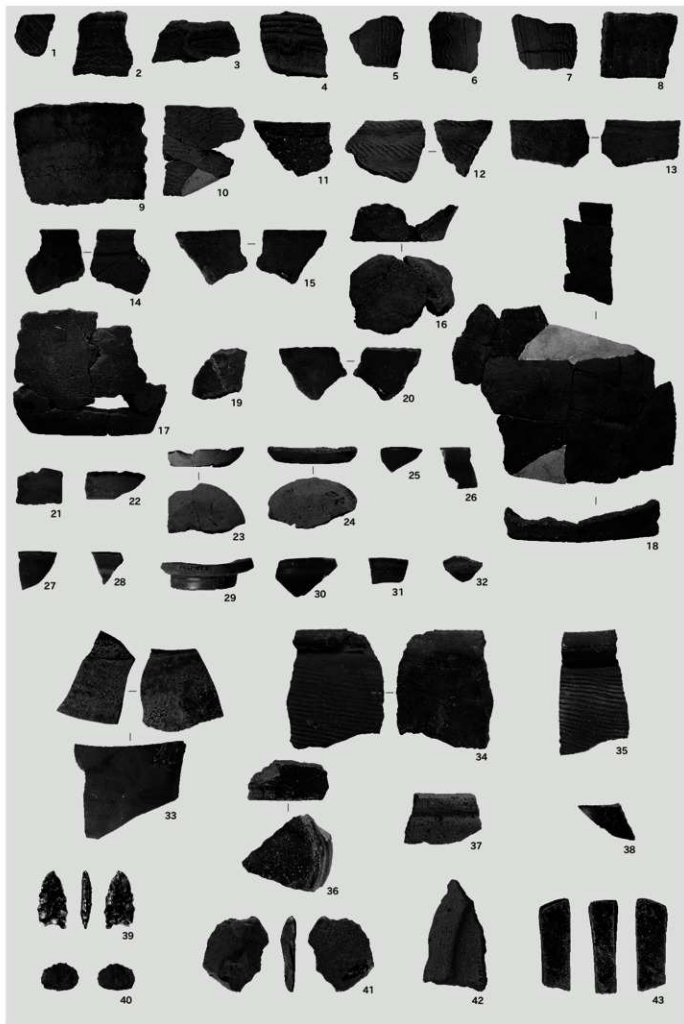
1号炭窯 炭検出状況(北西から)



2号炭窯 土層断面(北から)



2号炭窯 完掘(南から)



報告書抄録

ふりがな	まえはらいせき・まるやまいせき							
書名	前原遺跡・丸山遺跡							
副書名	上信越自動車道関係発掘調査報告書							
巻次	Ⅺ							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第130集							
編著者名	小田由美子・高橋保雄							
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市大字金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981							
発行年月日	2004 (平成16) 年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′	東経 ° ′	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
前原遺跡	新潟県中頸城郡 中郷村大字西福田 新田字新原1362番 地ほか	15546	90	36° 59' 15"	138° 12' 44"	1次調査 19940509～ 19940510 (新座標) 19940822～ 19940831 2次調査 19960415～ 19961025	10,200 m ²	道路(上信越自動車道)建設
丸山遺跡	新潟県中頸城郡 中郷村大字西福田 新田字下359番地ほか	15546	8	36° 59' 23"	138° 12' 38"	1次調査 19940513～ 19940516 2次調査 19960415～ 19960614	950 m ²	道路(上信越自動車道)建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
前原遺跡	散布地	縄文時代早期				押型土器(縄沢式)、石器		
	集落	縄文時代中期中葉～ 後葉		惣穴住居跡7・印 状遺構2・フラス コ状土坑6・土坑 12・埋蔵2ほか		縄文土器(唐草文系土器・圧痕 陸帯文系土器ほか)、石器		小規模な沢に 沿った弧状を 描く集落
	散布地	縄文時代晚期		埋蔵1		縄文土器(佐野式・女島羽川式 ・巖山式)、石器・石製品(石 冠・玉)		
	生産遺跡	平安時代		炭窯11				
丸山遺跡	散布地	縄文時代中期・後期 ～晩期				縄文土器・石器		
	散布地	古墳時代?				土師器?		
	散布地	中世(15c)				土師器皿・青磁・天目茶碗・瀬 戸美濃焼・茶臼		付近に集落が 存在したと考 えられる

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第130集
上信越自動車道関係発掘調査報告書 Ⅺ
前原遺跡・丸山遺跡

平成16年3月30日印刷
平成16年3月31日発行

編集・発行 新潟県教育委員会
〒950-8570 新潟市新光町4番地1
電話 025 (285) 5511
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市大字金津93番地1
電話 0250 (25) 3981
FAX 0250 (25) 3986

印刷・製本 北越印刷株式会社
〒940-0034 新潟県長岡市福住1丁目6番27号
電話 0258 (33) 0306